

平成28年3月NHK中部地方放送番組審議会

3月のNHK中部地方放送番組審議会は、17日(木)、NHK名古屋放送局において、11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、前回の審議会での答申を受け「平成28年度中部地方向け地域放送番組編集計画」を決定したこと、およびこれに基づいて策定した「平成28年度中部地方向け地域放送番組編成計画」について報告があった。続いて、「中部ジモ女(ジョ)の選択『激論! 幸せのかたちとは?』」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、4月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	森棟 公夫	(学校法人椋山女学園理事長、椋山女学園大学学長)
副委員長	松本 耕作	(加賀味噌食品工業協業組合理事長)
委員	小澤 正俊	(大同特殊鋼(株)相談役)
	加藤 勇二	(愛知県農業協同組合中央会常務理事)
	小寺 功子	(三重県漁協女性部連合会会長理事)
	佐野 俊和	(コマツサービスエース(株)代表取締役社長)
	田中 章義	(歌人・作家)
	中村 智景	(四季料亭「助六」女将)
	野田 雄一	(富山ガラス工房館長、富山ガラス造形研究所教授)
	長谷川明子	(日本ビオトープ管理士会中部支部会長)
	真能 秀久	(中日新聞社取締役管理局長)

(主な発言)

<「中部ジモ女(ジョ)の選択『激論! 幸せのかたちとは?』

(総合 2月26日(金))について>

- 中部7県の20・30代の女性の転入―転出の数や女性管理職の割合など数値をテロップで提示していたので、なぜこのような番組が生まれたか小さな企画書のように感じ、番組の企画意図を理解することができた。テロップの使い方が非常によかったと思う。ドラマや紙芝居の演出は好き嫌いがあると思うが、討論だけで終わらせるのではなく、演出にアクセントをつけながら見やすくし、話を深めていこうとする試みはよい設定だと思った。ゲストは自身の立ち位置をよく理解していた。意見

を赤裸々に述べたり、また、相手の意見を引き出す時は引き出したりという姿勢は、生放送の中で安心感のあるキャスティングだったと思う。共感し、感情移入しながら見た人も少なくないと思う。気になった点は、番組タイトルだ。「激論」という言葉がそぐわないように思った。今回は激論で答えを導き出そうというよりは、「ホンネ」がキーワードだと思うので、例えば「ホンネ討論」といった言葉をタイトルに入れ、「激論」という言葉でどんなディベート合戦が始まるのだろうかという視聴者に思わせるよりは、「ホンネ」を引き出す、ホンネベースの番組だと示した方が、より見やすかったのではないだろうか。他に気になった点は、出演していた学生のみなさんのネームプレートが手書きだった点だ。読みづらかった。他の一般の出演者と統一した方がよいと思った。また、紙芝居のストーリーのモデルになった女性について、発言では19名の部下がいると述べていたが、本人紹介のテロップでは20名になっていた。生放送なのでいろいろな事が起こりやむをえない部分はあると思うが、数値をはじめ細かい部分には丁寧に配慮してほしいと思った。今回のような番組は数値の誤差が気になる種の番組だと思うので、事前に態勢を整え、どのような数値でいくのか統一してほしい。家庭内でさまざまな意見が出る番組だったと思う。問題提起の意識はよく伝わったのではないかと思った。

- 出演した一般のみなさん同士で、番組が終わったあともう一度集まろうと話が出たというのは、番組に出演したことが、人間関係が広がるきっかけになっており、よかったと思う。「中部ジモ女(ジョ)の選択」というシリーズのまとめの番組として、全体の状況を見ることができた番組だった。番組タイトルの「激論」というのは、私も気になった。「幸せのかたちとは？」というのも、また難しいタイトルだと思う。それぞれの置かれている状況や考え方が、番組の中で言いやすい環境にはなっていたと思う。ただ、学生の立場で出演していた人は、発言する機会は何人くらいあったのか気になった。なぜいるのか疑問に思った。あのような場にいるのであれば、先輩たちの意見を聞きながら自分たちの意見も言えるような状況を作った方がよいと思う。もう一つ気になった点は、地元という概念を前面に出すのであれば、東海・北陸の地域色を生かした独自の問題なども絡めて欲しかった。地域色をあまり感じることができなかった。世間では、待機児童の問題が国会でも取り上げられているような状況であり、実際にはもっと厳しく深刻な人が多くいるのではないだろうかと思う。また、ジモ女に選ばれて取材を受けている人たちは、元気づけるという意味ではよいが、もっと深刻な状況で問題点を掘り下げるきっかけになるような人物であれば、次への番組づくりの参考になるし、そのようなことを実際は解決していくべきだと感じた。ただ、ジモ女ということを中心にしながら、地域の中でどうあるべきかを考えるきっかけとしては、よい番組だったと思う。今回のシリーズで問題がある程度見えてきたと思うので、どうするべきなのかということ盛り込み、

今後の番組制作に生かしてほしい。

- よかった点は3つ。まず、1つ目はドラマや紙芝居で演出に工夫がされていたところだ。ジモ女のみなさんの揺れる気持ちが伝わってきた。2つ目は、ドラマの中で、家族の間でも「ありがとう」という言葉が大切だと伝えていたところだ。改めて「ありがとう」という言葉の大切さを感じることができた。3つ目は、コメンテーターの立場で登場されていたゲストだ。アンケート結果を踏まえながら、的を射た発言で、一般女性の出演者が多い中、うまくコメントしていたと思う。ただ、地元の女性に対するアンケートの中で、地元では理想の結婚相手が見つからないと言っていたが、本当かなと思った。地元でずっと暮らしてきた人間からすると、残念な思いになるのではないだろうかと思った。課題だと思った点は、今回の番組は激論ではなく、放談会のように感じた。ひとつの方向性や課題を見出し、次につながるような話し合いができるとよかったのではないかと思う。2つ目は、「男社会だと思えますか？」というアンケートを取った際に、男社会とは何かを質問の後に解説をしていたが、事前に男社会の定義をはっきりと示してアンケートを取った方がより精度の高い結果が出たのではないかと思った。3つ目は、現在国会でも議論されている待機児童の問題など、深刻な課題を捉えながら学校や企業の工夫も紹介し、今回の番組の中で取り入れるとよりよい番組になったと思う。「幸せのかたちとは？」という問いに対しては、人それぞれだろうと思った。パートナーとの関係や価値観により、幸せの受け止め方は違う。地元だろうと東京だろうと、自ら幸せをどこに見いだすかだと思った。

- 番組のオープニングで、男性ゲストが歯を出すものまねをしながら話す演出は受け入れがたかった。違和感があり、この人は何を番組の中で話すのかと思ったが、番組が始まると自分の実生活や女性の立場も考えながら話をしていたので、よかった。女性ゲストは非常によかった。自分の経験を生かし、結婚、子育て、すべての経験を話しており、大変歯切れもよく、わかりやすかった。コメンテーターの立場の方が、男性は入った会社で命令された場所で働き、稼ぐために働くが、女性は居心地がよいか、やりがいがあるかで決めるということをおっしゃっていたが、その発言がまさに男社会だと思い、嫌悪感を覚えた。女性も真剣に働いているので、やりがいのためや居心地がよいという理由だけで働いているわけではないと思う。ドラマ仕立てはよかったが、長女編・次女編・三女編について、何について物語るドラマなのかということ、例えば、長女はキャリアと結婚、次女は子育て、三女は職業の選択というように、サブタイトルがついていると、より分かりやすかったと思う。ジモ女として女性のみなさんが発言するときに、どのような人なのかテロップが出ていたのはよかった。また、街の男性の意見は率直で、大変よかった。出演者に関

して、学生の方がジモ女より多かったのは、アンバランスだった。手書きのネームプレートも気に入った。「激論」と銘打つのであれば、出演者は対面していたほうがよいと思った。製造業で管理職になっている女性が、子育ては人育てのノウハウだと言っていたが、よいことを言っていると思った。最後に、女性の問題を考えるといつも子どもを作る・作らない、子どもができる・できないということばづかいになる。子どもは授かるものだと思う。作る・作らない、できる・できないという言葉の使い方はやめてほしい。報道番組においても気をつけてほしい。この番組でさまざまな女性の問題を見ながら、改めて感じた。73分間はすぐにたったように感じる参考になる内容だった。

- 冒頭でドラマから入っており、非常に肩の力が抜けて見やすかった。3姉妹それぞれのストーリーがリアルでよかったが、パン屋さんのお父さんから送られてくるパンを食べてフードコーディネーターをめざそうと思ったというのは、話が飛躍していて、きっかけをもう少し丁寧に描いてほしかった。紙芝居での説明は、ドラマとはまたひと味違い、リアル感が非常によかった。ジモ女として選ばれた女性たちは、どのように選ばれたのか気に入った。東京が地元で中部地区に住んでいる人がいたが、あの人にとっては、中部は地元ではない。地元は東京になる。そのあたりを、司会者が最初にフォローはしていたが、のちにゲストの方からその部分を再度指摘されていて、どのような立場で発言をしているのか、わかりづらかったように思う。それから、コメンテーターの立場の方が、男性はずっと同じ会社で働くが、女性はリスクが取りやすいと言ったが、リスクが取りやすいのではなく、リスクを取らざるを得ないのだと思う。子どもを育てるためには、会社を続けられない、辞めてもしょうがないと男性も女性も刷り込まれてきた。しかし、今は時代が変わろうとしているなか、スタジオに招いた学識者の古典的な発言に失望したと同時に、これがいわゆる男性社会で現実なのだ実感した。番組の意図が地元で頑張る女性を応援するというのであれば、彼女たちを後押しするような発言をする学識者を招いたほうがよいと思った。ただ、番組では司会のアナウンサーからフォローのひとつも入っており、その点はよかった。ゲストのコメントの中で、「仕事はどこでもできる」という発言があったが、それは男性も女性も同じだと思う。番組では、仕事はどこでもできるので、女性は仕事を辞めて男性について行けばいいのではないかとゲストの発言に押された所があった。現実には、その地域でしかできない仕事があり、そのような人にとっては、自らの仕事を辞めて男性の仕事についていくというのは、ハードルが高い。つまり、ケースバイケースだと思う。非常に熱弁を振るっていたので、それに対して反論できるような人をキャスティングできていれば、激論になり深掘りできたのではないかと思った。

(NHK側)

激論を交わせるようなキャスティングが必要だったというのは、そのとおりだと思う。地域色を出すことについては、私たちもこのシリーズを放送していく中で、最大の課題だった。ジモ女という言葉には、地元という要素と女性の2つがある。つまり、地域創生という話と女性の活躍という2つのテーマがあり、この2つのテーマをどう組み合わせ、連立方程式を解いていくかということが課題で、今回だけでなく1年間課題だった。女性が抱える問題ではあるが、地域特有の問題ではなく、東京の女性も同じ問題を抱えているということがよくあった。そこを厳密にしようとする、テーマとして取り上げられる幅が非常に狭くなってしまったため、その加減が難しかった。「女性はリスクが取れる」という発言については、発言者もリスクが取れることを肯定しているわけではなく、現状がそうだという意味で発言している。視聴者にどのように受け取られるか、発言に対してもう少しフォローするやり方はなかったかと反省する。今回は、予定調和な番組にしたくなかった。ただ、結論は何かと問われた時にもう少し 答えられるように、話を深掘りしたほうがよかったかもしれない。若い世代の意見も取り入れたかったので、学生のみなさんに出演してもらった。事前にひとりひとりにどのような考えかを取材し、依頼をしたが、発言がない場合もあるという前提で出演していただいた。全体では4～5回発言があったと思う。発言のバランスについては今後の課題としたい。ネームプレートについては、ミスを防ぐために手書きにした。ドラマについては、番組では1本あたり3分程度だったが、今後5分にしたりリメイク版を放送する予定。

- 生放送だったが、とてもうまく構成されおり、内容に破綻がなかった。女性の幸せをテーマにした番組だったが、女性論というよりは、中部地方や地元といった地域色がおのずと出ている番組だと思った。たとえば、番組内で実施した双方向アンケートでは、仕事をするなら女性の87%が地元がよいと答え、子育てをする場合も97%が地元がよいという結果だった。「男社会だと思いませんか？」というアンケートについても7、8割が、そう思うと答えていた。中部地方は、戦前から働き場所が多くあり、子育てをしやすい地域だと言われている。なぜなら、3世代同居率がほかの都市圏と比べて圧倒的に高く、長男が残っており、保守的な土地柄だからだ。みなさんの発言やアンケートから、そのような特徴がよく浮かび上がっていたと思う。明治に行われた廃藩置県のあと、一時的に新潟県の人口がトップになったことがあ

る。当時愛知県は3位で東京を上回る時期もあった。現在は東京が最も多く、神奈川・大阪・愛知と続いていく。つまり、愛知県は他県と比較し人の動きが緩やかで、ものづくりといった産業も目立つが農林水産業もしっかりしており、第3次産業も盤石だ。働きやすい場所と言える。総務省の調査では、持ち家率も高く床面積も広いという調査結果も出ている。子育て中に多くの人が手を貸してくれたという発言にもあるように、中部地域の特徴をデータで示し、なぜこのような数値が出るのかというところをもう少し深掘りし、紹介するとよかった。ひとつ違和感を覚えた点は、地元対東京という対立軸の置き方だった。日本は一極集中で中央集権の色合いが強いが、そのような中でも中部地方のもうひとつの特徴に、あまり首都東京を意識していないということがあると思う。産業を見ても、現在も本社を東京に置いていない企業が多い。この地方の企業は東京を見ずに、世界と直結しているとも言える。だから、地元対東京という図式がしっくりこなかった。それぞれの事象を取り上げていけば、おのずと地域性が出てくると思うので、いろいろな人を取り上げ制作していくことが大切だと思う。ただ、作る側として、一本筋の通った、あるいは独自のデータを作ってみるといいことがあればよいと思った。

- ドラマは秀逸だった。この番組に対するメッセージ性が非常に高く出ており、短い時間の中で起承転結もしっかりしていた。大変明快で気の利いた内容だった。特に、高台から海を眺め夕陽の旅情を誘うような映像は3分のドラマにしては充実した内容だった。番組全体としては、単なるジモ女の問題提起の座談会ではなく、女性の人生を問うているのではないかと思った。会話の進行についても冗漫さを感じない、飽きさせない番組だった。希望する就業の環境の問題、結婚や子育ての問題、さまざまあるが、女性の人生のあり方についてジモ女というテーマで問題提起したことはよかったと思った。一般のジモ女として参加した7人の女性についても、さまざまな立場の女性が出演しており、よい人選だった。構成もよかった。また、それぞれしっかりと意見を言っていた点もよかった。女性も人生は本当にさまざま、こうだと断定し結論づけるようなものではないと思った。番組では、先輩女性の経験談にうなづく出演者の様子が映し出されていたが、効果的な描写だったと思う。専門家の人を出演させることに異議はないが、もう少し深く切り込んだ分析や解析を聞きたかった。海外と比較し、女性も男性も幼い時から自ら選択し人生を決めていくという視点の教育が足りないと思う。もう一歩進み、自分の人生、仕事、職業とはいったい何かということを書いてみてもよいと思った。海外の事例紹介や外国人コメンテーターを招いてもよいと思う。女性も仕事の幅や役割、諸問題をどのように解決していくのかといった一歩踏み込んだ視点で今後も番組を続けてほしい。
- ドラマや討論、街のインタビューなど盛りだくさんの内容で、少し最後は慌ただし

く終わったように思ったが、全体的にはよかったと思う。「仕事をするならジモト？東京？」というアンケートでは、会場にいる出演者も、データ放送で参加している視聴者も、ジモトが多い結果になった点は意外だった。しかし、結局現実には、地元にはやりがいのある仕事がないから東京へ行く、街を離れるということはある現象だと思っている。コメンテーターの方が、子育ての前に地元で結婚相手がいなくて、自分に合った男性がいなくて女性が思っていると言っていたが、私の周囲にもそのような女性は多いと実感している。一般のジモ女代表の7人の女性をどのように選んでいるのかは、私も疑問に思った。その中である女性が、「男性もぜひ育児に参加してほしい」としっかりと主張していたことがよかった。ゲストのコメントは、番組の内容に非常に合っておりよかったが、後ろで座っている学生の話も全員からひと言ずつでもよいので聞きたかった。出演していた7人の女性は、結婚されている方は地元に住み、若い人は東京に住んでいると分かっているような印象を受けた。

- 番組が視聴者に提示しようとしているテーマ、人口減少の最大要因である女性の地方からの流出という課題をいかに捉え、解決を模索、明示していこうという姿勢が足りないように感じた。番組全体に、この議論を通じて何かを生み出そうという熱意や気迫が感じられなかった。テーマを決めてあとは流れに任せるという構成にも受けとれた点は残念だった。個々の経験や見識を述べることは当然だと思うが、それらに対して共通あるいは内在する課題を普遍化し、顕在化することが、司会であるアナウンサーに課せられた役割であり、招かれたゲストはそれらをより一層デフォルメして分かりやすく議論のテーマにすることが役割だったと思う。しかし、いずれも不十分に感じた。司会のアナウンサーは、ひとりひとりの発言の意図や背景に潜む課題を斟酌、あるいは整理・要約してほしいと思った。また、ゲストは個人の見解を語り過ぎており、一般参加者の発言時間を奪っているように見えた点も残念だった。ドラマはよくある風景を切り取ったもので、その背景にある課題を顕在化するような演出や切り口、視点が伝わってきにくかった。よい話に見せようとしている点も番組の趣旨からずれているように思った。人材育成と子育てを同列に語り、女性だから人材育成がうまくできるという解釈を示していたが、人材育成と子育てに共通しているのは相手を育てようとする愛情の有無であり、おおむね女性の多くは我が子に無償の愛を覚えるが故に子育てが機能しているので、女性だから人を育てるのが上手なわけではないと思う。安易な発想で女性の優位性を語っているように感じ、課題に真剣に向き合っているのか疑問に思った。名札が統一されていなかった点は私も気になった。小道具等細部への品質配慮がなされていないとも映るので、きちんと整えたほうがよいと思う。また、アンケートデータを指数化し使用する場合は、サンプル数も明示するべきだと思う。また、東京 v s ジモ女ではなく、名古屋 v s 他府県という構図なのではないかとも思った。

- 今までのシリーズの総括として、アンケートでの集計発表、パネルなどさまざまな演出でうまく活かされていたと思う。仕事・結婚・子育てと、そのシーンを振り返り関連づけることに、非常に工夫していると思った。ゲストの人選に対し疑問が残る点があった。対照的な人物を招いてもよかったのではないかと思った。仕事に関しては、女性の選択肢の基準がやりがいと居心地に集約されていることは、個人的には妙に納得した。仕事をしている女性が多くても管理職は少ないという現実があり、これを製造業の割合が多いという理由で結論づけていたが、中小零細企業の割合が理由なのではないかという見解を私は持っている。たとえば、特に零細企業の場合、女性の産休は大企業と異なり、雇用者側からすると1年間だけ不足する従業員をどう確保するのかということは非常に大きな課題だ。そういった意味で、そこで辞めてしまうケースが比較的多いのではないかと考えている。つまり、仕事が継続しないから、管理職が少ないのは当然のことではないかと思う。番組では、地元と東京の選択を強調していたが、これは究極の結論としてはいかななものかと思う。雇用機会や結婚対象の人数、子育て環境など、東京と地方の差は歴然としており、地方創生など大きな国の流れを考えた場合には、地方のよい点に注目し魅力を発信していくことも必要だと思う。地方は、通勤時間が短く、家賃も安い。その分、賃金も安いが、そのような中で、自分の性格に合った選択をすればよいと思う。すべてOKという甘い環境で生活することは難しい。どこかの部分は我慢し、どこかの部分で頑張るということが必要だと思う。子育てについては、番組タイトルの「激論」という言葉がマッチしていない。子育てについては、もう少し柔らかく、お互いの多様性を認めることに重点を置いてもよかったのではないかと思う。個人的な見解になるが、出産をハンディーキャップと捉えるか、すばらしいことと捉えるかで幸せの形は大きく変わると思う。周囲には、女性が仕事をし、男性が退職し家事をしているという家庭もある。幸せの形はそれぞれの家庭の中にあり、典型的なものはない。お互いの関係の中で、役割を決めていけばよいと思う。何かを結論づけるとすれば、このような形以外ありえないのではないかと思った。
- コメンテーターの方に関しては、言葉が不注意な面はいろいろあったが、前に出すぎないというよい面もあった。ゲストの中には、発言の機会が多すぎた人もいたように思う。今回の番組は、幸せの形を求めるよりも、7人の方に自由に発言していただくということが番組の趣旨だったように思う。それは非常によく理解できた。ジモ女とひと言で言っても、そのくくりはさまざまだと思う。たとえば、子育てを地元でしたいという女性もいれば、子育ては親元でしたいという女性もいると思う。そうすると、中部地方としての地元と親から近い地元、2種類出てくる。この2つをどのように区別しているのかわかりづらかった。また違う番組で比較する必要が

あると思った。仕事に関しても、育った地域で仕事を探したいと思っている人が多いのではないかと思った。管理職の割合については、職種の問題もあると思う。職種で管理職比率もおおいに変わってくるだろう。番組全体の内容については、非常に満足している。7人の方の意見や考えをしっかりと聞くことができた。ドラマもよくまとまっていた。特に次女編の夫の無理解については、ある意味でひとつの局面を捉えており、よかったと思う。この種の番組は、結論は出てこないと思うので、繰り返し制作することが重要だと思う。時代として、女性の立場が変わってきたということが、非常によく分かる内容だった。一昔前の「早くお嫁に行きなさい」から、あのようになっていることが話題に上がるということで、時代が変わったと思う。スタジオは、テレビの視聴者を意識するとあのような配置になるのかもしれないが、せめてジモ女として出演していた一般の7人の女性とほかの出演者が対面式にならないかと思った。もう少し工夫できないかと思うが、今回のように対面せずに話している番組がNHKには多いように思う。

(NHK側)

各人をとりあげることで、おのずと地域が見えてきたというのは、そう感じていただけたら嬉しい。説明不足、分析不足のところは今後に生かしたい。人選については、基本的にできるだけいろいろな類型・属性の方、バリエーションを重視した。臆せず意見を述べることができるかという点も重要視した。名古屋をどのように扱うかというのは、東京と地方という二項対立にしている中で、今回の番組だけではなく、これまでも課題だった。指摘を受け、曖昧にしてきた面があると感じた。

タイトルの重要性を感じた。ジモ女として登場した7人の女性がどのように頑張ってきたかをご自身の口で語ってもらい、視聴者に伝えたということに大きな意味があったと考えている。子育てをするから女性は人材育成が巧みだというのは、ある意味一部に真実があるかもしれないと個人的には初めて気がつく面もあり、発見がある番組になっていたのではないだろうか。学生に話をさせるのであれば、今回の場合であれば、ジモ女として出演している7人の女性が話す前に、話を聞く必要がある。たとえば、学生の疑問を最初に全て聞き出し、7人の話を聞いている間に疑問が解けていくという演出はあると思う。貴重な意見を多くいただいたので、次回討論番組を制作する際に参考にさせていただきたいと思う。

<放送番組一般について>

- 2月19日(金)ナビゲーション「“最期の瞬間”をどう迎えますか？」を見た。モニターの評価も高く、よい番組だったと思うが、もし本当に在宅医療を選択するのであれば、どの程度医療費がかかるのかも伝えてほしかった。ケースバイケースだとは思いますが、おおよその費用が知りたかった。在宅医療を選択することは、家族にとって勇気がある決断だと思う一方、それを選択する人が全国的に増えているのも事実だと思う。今回のように、医者状況を淡々と描くやり方もひとつの方法だと思うが、実際に在宅医療を利用しようとする視聴者も少なくないと思うので、費用の面もしっかりと伝えてほしかった。

- 2月19日(金)ナビゲーション「“最期の瞬間”をどう迎えますか？」を見た。心肺停止状態で救急センターに運ばれる人の5割が80歳以上であり、その中には終末期を迎えている人も含まれていると番組で紹介していた。本当に大変な人が治療を受けられないという状態が起きているということ、この番組を通じて初めて知った。終末期に在宅医療を選択した家族が紹介されていたが、この家族はよく取材を受けたと思う。在宅医の取り組みは本当に大変だと思うが、畳の上で死にたいと希望する人はたくさんいると思うし、家族と一緒に人生を終えることができる素晴らしい取り組みだと思った。一方で、核家族化が進む今、このようなことを実現するには課題もたくさんあるだろうと思った。

- 2月19日(金)ナビゲーション「“最期の瞬間”をどう迎えますか？」を見た。何かあっても、救急車を呼ぶことしか知らない家庭が多いと思う。そのような中、この番組では、在宅医療やドクターカーといった取り組みを紹介しており、大変参考になった。医療費がどの程度かかるか知りたかった。また、在宅医療に携わっている人がどの地域にどの程度いるのかという情報も知りたかった。今回の番組では、みとることが家族にとってどれほど大変なことなのか、みとった後はいつまでたってもこれでよかったのかと後悔するものだと思う。さまざまなことを考えるきっかけになった番組だった。次回は、家族が死をどう受け入れたかという視点でも番組を制作してほしい。

- 2月19日(金)ナビゲーション「“最期の瞬間”をどう迎えますか？」を見た。正面から死を捉えており、貴重な番組だったと思う。死がどういうものなのかということは、恐怖でもあり、しかし、死を考えることが生でもあると思う。核家族化が進む今、家で人が死ぬということは減ってきていると思う。死というものがどういう段階を踏んでいくのか、文字と映像で表現されていた。ストレートに死を報道する

番組が少ないなか、しっかりとこのような番組を放送することは、生を考えるよいきっかけになると思う。ただ、この時間帯は子どもも目にする可能性があり、子どもにとっては恐怖だったのではないかと思う。もっと遅い時間、あるいは昼間の明るい時間帯の方が、死をポジティブに受け止められるのではないかと思った。

- 2月1日(月)クローズアップ現代「捨てた食品が食卓に～大量廃棄の裏で～」を見た。1月22日(金)に放送した「ナビゲーション」に続くテーマで非常にしっかりと制作していたと思う。番組で、コンビニチェーンが廃棄物を減らす取り組みを今後行おうとしていると言っていたが、具体的にどのようにしていくのかぜひ深掘りしてほしい。
- 2月20日(土)E TV特集「書家・金澤翔子30歳～娘と母 新たな旅立ち～」を見た。書のすさまじい筆致に圧倒された。書の力が強いため、どうしてもそこに關心や興味が寄ってしまい、番組が描こうとしていた親子関係の描写が、余分なものに見えてしまうほどだった。書家が障害者であることや、親子のストーリーということで、室井滋のナレーションや語り口も平易で親しみやすいものに演出していたと思うが、30歳にして自身の美術館を持つ人物に対し、子どもを呼ぶかのように「翔子さん」と呼称し続けるところに、違和感を覚えた。ダウン症障害児の自立と天才書家という2つのテーマの整理がうまくついていないようにも見えた。番組素材としては十分魅力的だっただけに残念だった。
- 2月20日(土) につぼんカメラアイ「お月さまの里～静岡」を見た。15分の短い番組だったが、「月」という名前の集落を訪ねるおもしろさがあり、今回は静岡県浜松市天竜川地区を訪ねていた。撮影者がディレクターも務めており、詩心のある映像でよい意味で変な番組だった。月という世界を描きながら、おとぎ話のようにも見える一方、実在する村で子どもたち全員をお月様の使者と見立てるお祭りもあり、現代のぐう話と呼べる作品だった。小さな町の土着の文化を描き出していたと思う。「月」というキーワードもうまく盛り込まれており、妙に楽しい番組だった。ナレーションは全くなく、テロップのみの番組だったが、ディレクターのセンスを感じた。短い番組だが、非常に印象に残る番組だった。
- 2月21日(日) うまいッ！選「甘く果肉みっちりイチゴ～岐阜・本巣市～」を見た。岐阜県のイチゴの生産量は、全国で12番目だと初めて知った。「美濃娘」という品種のイチゴを作ることがどれほど大変かということがよく分かる番組だった。また、岐阜のイチゴが銀座のお店でパフェに使われていたり、海外にも出回っていたりする様子を知り、大変嬉しく思った。ただ、イチゴ農家がだんだんと高齢化しており、

全国的に減ってきていると取り上げられていた。イチゴのパック詰めにロボットを活用する実情も紹介されており、早くこの仕組みが浸透し、生産者が減らないように、ロボット化を進めてほしいと思った。地域の商品を全国で放送すると、消費にもつながり、生産者も喜びが大きいと思う。農産物の広がりを今後も全国放送で取り上げてほしい。

- 2月21日(日)「NHKのだ自慢」を見た。久しぶりに視聴し、懐かしさもあったが、やはり歌というのは人間の原点だと改めて思い、感動した。NHKの良さは、変わらないものや変えてはいけないものがしっかり受け継がれていることにあると思う。編集方針については、敬意を表したい。ゲストの由紀さおりさんと一般の出演者のみなさんとのスキンシップや心温まる触れ合いは、番組を見ている人も、歌っている人も、心いやされるものだったと思う。鐘の鳴らし方も、昔と変わらず非常に気を遣いながら鳴らしており、よい印象を受けた。今後も、優しい日本人の心が通じ合う歌をぜひ伝えてほしい。
- 2月23日(火)クローズアップ現代「原油安が止まらない！？～世界を揺るがすリスク～」を見た。世界経済の最大の関心事は、原油の先物価格のリスクだという話で、専門家のコメントも大変適切でしっかりした内容だった。特に、メカニズムの説明が素人にも大変分かりやすく、説明がクリアだった。放送のタイミングもよかった。世界不況の兆しが深刻化するのではないかという予測もあり、世界経済の今後の動向をしっかりと現状から深読みしていたと思う。しかも、このダメージの規模は30兆円ほどにもなるそうで、一般の視聴者にも分かりやすい内容だった。アメリカでシェールガスが発掘されるようになった時は世界経済の安定を推測したが、その後40社以上の会社が破産し、この3月の決算期には相当の会社の破綻も予測されているそうで、経済という硬い内容だったが、ドキドキしながら見た。世界経済が激変し、またその変わるスピードも速いということがきちんと説明された番組だった。また、リスクについての対応策もしっかりと説明されており、放送するタイミング、またその解説も非常によかった。大変よく理解できた。視聴者にも影響を与える番組だったと思う。専門家の方が解決策などを示すと、安心することもできたと思うが、内容は満足のいくものだった。
- 2月27日(土)、3月5日(土)超絶 凄(すご)ワザ！「最強の帽子対決」(前編)(後編)を見た。総合化学メーカーと折り紙工学の研究者、2チームの対決だった。段ボールを折り紙にするとここまで強度が増すのかと驚いた。総合化学メーカーは実用性を鑑みていたと思う。女性が手編みで防災ヘルメットのカバーを作っていたが、個人的にはあのようなものが現実にあるとよいなと思った。過去に番組で制作してき

たもので商品化したものはあるのか、あるいは、する予定があるのか気になった。

- 3月1日(火)ドラマ10 愛(いと)おしくて(8)「ふたりの舟」を見た。主人公の小夏が、子どもの頃の自分と対峙し、ほほえむシーンがあったが、小夏に当てられたライティングが非常によかった。NHKらしいよい映像だった。また、ラストシーンがすばらしかった。船で向かった神社はどこにあるのかと気になった。非常によいロケーションだった。平田満さんもいい役を演じていた。定番なストーリーだったが、たまにはこのようなストーリーもよいのではないかと思った。
- ドラマ10「愛おしくて」を全話見た。シリーズの後半は、小夏が自分の心の殻を破っていく経過が如実に現われており、シリーズ序盤の後ろ向きな性格から転換し前向きに進行していくところは、前半と違い安心して番組を見ることができた。最終的には父と娘の和解でハッピーエンドというストーリーだったが、不器用な辰造の演技と、最後までミステリアスな怜子の演技に感心した。小夏の部屋のセットは、光の差し加減が本物の情景と見間違ふほどの映像で、撮影技術に感心した。一方で、船の製作費が300万円で300万円の札束をぽんと渡していたが、あの船が300万円するのかと思った。船は、番組制作のために作ったのか、もしくは借りてきたのか気になった。
- 3月5日(土)NHKスペシャル「“原発避難”7日間の記録～福島で何が起きていたのか～」を見た。本来、想定されていたはずの出来事とは違うことが起こり、時間を追うごとに混乱を極めていく様子が、インタビューと視覚化されたデータにより克明に映し出されていた。想定外だったでは済まない、責任の所在を明確にすべき国や組織の問題も多々散見されたが、番組では一切責任の追及はせず、「原発事故は人をどこまで追い詰めるのか、この記録がその現実を私たちに突きつけています」という終わり方は、問題は人ではなく原発そのものの存在であるかのような印象を与えるもので、反原発の姿勢を感じた。一方で、リーダー不在、情報皆無の中、未曾有の危機に際してもパニックや暴動を起こさない住民や、残された当日の行政記録からも伺えたように、最後まで行政責任を全うしようとする地方自治体の職員の姿勢など、改めて日本人の民度の高さも感じた。感情的あるいは随想的な総括ではなく、改めて何が課題であったかを冷静に整理し、次に備えるという総括をすれば、極めて有意義な番組になったのではないかと思う。
- 3月5日(土)NHKスペシャル「“原発避難”7日間の記録～福島で何が起きていたのか～」を見た。当時の記録や報告書を収集し、分析・検証した結果、コンピュータを使って、人々の移動の様子を映像化している技術の進歩に驚愕した。当時の様

子を証言する方々の勇気にも敬服するが、これらの事実を番組で確認し、被曝した可能性のある人々のやるせない気持ちにも十分配慮が必要ではないかとも思った。

- 3月8日(火)NHKスペシャル「ゼロから町をつくる～陸前高田・空前の巨大プロジェクト～」を見た。5年間で何も進んでいないのではないかと考えていたが、5年がかりでゼロから積み上げ、清水の舞台ほどの高さまで土を積み上げ、そこに町を作るという立派な計画をしていることがよく分かった。土地を土でかさあげするまでに5年かかり、これからも都市計画を策定し何年もかかるということで、非常に大変なことだということがよく分かる番組だった。
- 3月8日(火)NHKスペシャル「ゼロから町をつくる～陸前高田・空前の巨大プロジェクト～」を見た。市原悦子さんのナレーションが番組にうまくフィットしているように感じた。なかなか我々では実態を見ることができない巨大復興事業と、それに挑む行政の担当者や地元の人々、そこに直面する課題について、強要したり、付和雷同するというのではなく、それぞれのお店や個人の置かれている環境や違いなど、多様性を尊重しながら、復興事業を進めている事がうまく表現されていたと思う。
- 3月9日(水)NHKスペシャル「被曝（ひばく）の森～原発事故 5年目の記録～」を見た。野生動物から見た福島県浪江町の様子を捉えていたが、野生動物が発している現状を今後ももう少ししっかりと追いかけてほしい。研究者によっては、アカネズミの染色体異常が放射能に汚染されている地域とされていない地域で、統計上はあまり差がないと紹介されていたが、では、たとえばホットスポットであっても人間に関係ないというデータが出てくるようなことになると、非常に危険だと思った。チェルノブイリ原子力発電所の映像と合わせ、放射能の危険性を軽視せずに、しっかりと検証する番組を放送してほしい。現実には、キツネなどの動物が街にいるという、まるでアニメのようなことが起こっており、事故以前の状態に戻すことが非常に大変だということをしつかりと理解するにはよい番組だった。
- 3月11日(金)前後のNHKスペシャルは特筆すべき番組が多かったように思う。まず、3月13日(日)NHKスペシャル「原発メルトダウン 危機の88時間」(総合 後9:00～10:29)は、72や24という数字ではなく、科学的な根拠をもとにした88という数字をテーマに描いていたが、どのようなことが起こっていたか実態をそのまま残しておくことは必要だと思う。1時間30分で描いていたこの番組は、すばらしいと思った。3月10日(木)NHKスペシャル「風の電話～残された人々の声～」は、一連の震災関連のNHKスペシャルの中で、一番感じ入った番組だった。

さまざまなドラマがあったが、話しかけている様子を撮影させてくださっている人たちにも感謝したい内容だった。事実を検証する番組もあれば、今回のように「風の電話」というコンセプトで実際に存在しているものを描きながら、さまざまな世代の人たちの感情が表現されていく番組もあり、いろいろな種類の番組があってよいと思った。

- 3月13日(日)NHKスペシャル「原発メルトダウン 危機の88時間」を見た。力作だった。いつ水素爆発が起きたのか、炉心がどうなったのか、メルトダウンがいつだったのかということが、非常に整理されていた。時系列でまとめた表が何度も示され、資料価値が高く参考になった。吉田昌郎所長の「天の助けがないと、もっとひどいことになっていた」というひと言は非常に印象的だった。当時の状況を改めて思い出す番組だった。3月6日(日)NHKスペシャル「被曝(ひばく)の森～原発事故 5年目の記録～」を見た。動植物は目を引き、視聴者も興味があると思う。野生動物が異常なスピードで増えているということと、放射線による異常が出ているかという2つの視点で番組が構成されていたが、どちらか一方でいいようにも思えた。しかし、ひとつの視点に絞ると内容が薄くなった恐れもあるので、結果的には2つでよかったと思う。長く続けていくべきテーマだと思うので、慎重に事実と分析を積み重ねてほしい。
- 3月13日(日)NHKスペシャル「原発メルトダウン 危機の88時間」を見た。これまでに明らかになった事実を基に、これが本当にすべてなのかどうか若干疑問が残る面もあるが、貴重な証言を加えドラマ化されていたと思う。内容の検証には、ずいぶん苦労したのではないかと推察する。ドラマ化するに当たっての脚本も難しかっただろうと思う。時間を追って、詳細に状況を紹介し、また途中で時系列の流れを再確認しながら詳細を紹介していく点は緊迫感が増幅され、興味深かった。震災関連のNHKスペシャルはほかにも何本かあったが、あまり知らなかった驚きの事実など、内容は衝撃的だった。今後のさまざまな事象の原因究明や危機対応の例として、さらなる解明と今後の活用を望みたい。
- 3月10日(木)英雄たちの選択「大津波から村を守れ!～三陸海岸の村長の決断～」を見た。歴史番組だと思っていたが、今回は最近の事例を扱っており、意欲を感じた。単純に英雄視はしておらず、冷静な視点ながらも行政、地方政治のあり方に、よい角度で一石を投じていたと思う。震災関連の番組は他にも見たが、この時期に震災関連の特集が集中してしまい、視聴者に満腹感が出て見飽きられてしまうのではないだろうかと危惧した。切り口がしっかりした番組は、いつ放送してもよいと思う。あえてこの時期を外して放送するのもよいのではないだろうかと思った。

- 3月13日(日) サキどり↑「震災から5年 走り続ける被災地の改革者たち」を見た。震災以後に新たな漁業の形を模索し続けてきた、大船渡の水産加工販売会社を営む八木健一郎さんを5年間追いつけており、興味深く見た。震災以後、市場も流されて流通システムが崩壊した時に、インターネットで捕れた魚を販売するという取り組みを行っていた。さまざまな取り組みをしてきた中で、地元の素材を磨き、付加価値を徹底的に追求することで、儲かる漁業にするために新たな挑戦をし、食材を大量に使うホテルの産地キッチンを目指し奮闘する様子が描かれていた。今回のホテルとの交渉では、結果的に産地キッチンになることはできなかったが、「追い詰められると燃える」と力強く言っていたことが印象的だった。今後も彼を取材し、産地キッチンにしてもらえるところまで放送してほしい。また、三陸地域がブランド化を目指しているカキや今注目しているアカモクなども取り上げており、本当に漁業を応援している番組だと感じた。

- 3月7日(月) 人生デザイン U-29「自動車免許サポートサービス」を見た。自分のやりたいテーマがあり、それを実現するために、縁もゆかりもない福井に移住をし、自分の目標に取り組む続けるという女性の奮闘ぶりが、大変いきいきと取材されていた。特に、仕事は食べるためだけのものではなく、人の役に立ったり、自分の人生を豊かにしたりするためのものであるという、職業観の基本をなすことが、彼女の日常の仕事ぶりや生徒や夫との触れ合いを通してうまく凝縮されていたと思う。「人生デザイン」という番組タイトルにふさわしい内容だった。

- 3月14日(月)あさいち「このままでいいの？食品ロス」を見た。まだ食べられるのに捨てられている食品が、年間642万トンにもなり、コメの全国の生産量の約8割に相当するそうで、非常にもったいないと思い、興味深く見た。今、日本では、加工食品は賞味期限を3等分しており、納品する期間、小売業者が店頭で販売できる期間、家庭で食べられる期間に分ける、3分の1ルールというものがあるそうだ。店頭で販売できる期間を過ぎたら破棄するということを知り、驚いた。食品ロスが増えるのは当然だという意見が出るなか、専門家の方から賞味期限が過ぎても捨てなくてもよいという話を聞き、賞味期限に対する考えが変わった。他の食品も含め、今後も賞味期限の考え方については、続けて番組で取り上げてほしいと思った。また、あるゲストの賞味期限に対する考えがとてもユニークだった。砂糖と塩は永遠、缶詰は10年食べているという話は本当におもしろく、今後も今回のような内容の番組を放送する際は、ゲストとして呼んでほしいと思った。

- 3月14日(月)『精霊の守り人』のナゾをとけ！食わず嫌いのための大河ファンタ

ジー入門」(総合 後 8:00~8:43)を見た。全体的に少しふざけすぎているように思う。「精霊の守り人」については、NHKウイークリーステラの特集を読んだほうが分かりやすかった。上橋菜穂子さんのことを伝えるためにさまざまな演出をこらしていたが、愛読者からすると失礼な演出であったように思う。ファンタジーを多くの人に見てもらうためにあのような番組づくりをしたのかもしれないが、制作者や出演者が「精霊の守り人」シリーズを本当に読んだことがあるのか、また番組本編を内部で見た上で今回のような番組を制作したのか気になった。ステラのほうが、ドラマの魅力がよく伝わってきた。3年かけて放送する上に、実写版のドラマということで、非常に重要な取り組みだと思うし、日本の中で今までに見たことがないほどよい番組になるのではないかと期待している。また、音楽に携わった人や脚本家の話も聞きたかった。原作からどのような思いで脚本を制作しているかも興味がある。衣装も考証を含め、架空の国をいかにも現実であるかのように作り上げ、現実以上にリアルを感じることができると思う。ファンタジーの魅力にはミステリーやマジックなどいろいろあると思うので、アクションシーンばかりを表に出すのではなく、その背景にあるものも見たいと思った。今後、他にも関連番組があるようなので、それも見たいと思う。

- 3月16日(水)ためしてガッテン「2015年度みなさんが選ぶガッテン感動ワザ大賞」を見た。今まで見ていない回もあったので、あのよう振り返り、まとめの放送をするのはよいと思う。番組のホームページはそのまま残してほしい。司会の2人は変わらないということで、今後も応援したい。楽しみにしている。
- 3月16日(水)「『爆買い』したのワタシです」(BSP 後 9:00~9:59)を見た。去年だけで中国から観光客が500万人に来ているそうで、春節休みに日本に来て爆買いした人のその後について、中国の家まで行き取材するという内容だった。最近、買う物も高級指向から安全・安心・健康の日用品に変わってきているそうで、中国の薬に対する不信感や、中国は偽物が多いから安すぎる物は買わないといった心理を聞き、中国人の本音が見えた番組だった。おもしろい内容だった。
- 偶然、海外にいたときにNHKの番組を視聴したが、海外の番組はさまざまな番組の組み合わせにより成立しているようだが、我々のような番組審議委員はいるのだろうか。

(NHK側)

国際放送については、東京に国際放送の番組審議会がある。国内放送

の番組審議会と同様に月1回実施している。

- それは国内で番組を見ているということか。

(NHK側)

一般にも公開されているPC用の「視聴アプリ」を使って、放送とほぼ同時にオンエア・ストリーミングで見たり、放送後も番組が見られるVODサービスを利用するなど、委員のみなさんの都合に合わせた方法でご覧いただいている。もちろん事務局から送付したDVDで視聴することもある。

- 「特集ドラマ・クロスロード」(BSプレミアム 2月25日(木) 後9:00~9:51、3月3日(木)、10日(木) 後9:00~9:49)を見た。大変おもしろい。舘ひろし演じる元本庁のエリート刑事と神田正輝演じる元大手新聞社の敏腕記者。2人ともびったりの役柄だったと思う。この2人を軸とし、25年前の殺人事件が絡んでくるが、さらに警察幹部なども絡み、込み入ったストーリーで非常に楽しんで見ている。3人の脚本家がいるようだが、よくあることなのかもしれないが、3人でどのように制作しているのだろうかと思になった。不思議に思った。

NHK名古屋放送局
番組審議会事務局

平成28年2月NHK中部地方放送番組審議会

2月のNHK中部地方放送番組審議会は、18日(木)、NHK名古屋放送局において、11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「平成28年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」について説明があった。引き続き、「平成28年度中部地方向け地域放送番組編集計画(案)」の諮問にあたって、説明があり、審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。

続いて、放送番組一般について活発に意見交換を行った。

最後に、業務報告および3月の番組編成、放送番組モニター報告、視聴者意向について説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	森棟 公夫	(学校法人椋山女学園理事長、椋山女学園大学学長)
副委員長	松本 耕作	(加賀味噌食品工業協業組合理事長)
委員	小澤 正俊	(大同特殊鋼(株)相談役)
	加藤 勇二	(愛知県農業協同組合中央会常務理事)
	小寺 功子	(三重県漁協女性部連合会会長理事)
	佐野 俊和	(コマツサービスエース(株)代表取締役社長)
	田中 章義	(歌人・作家)
	中村 智景	(四季料亭「助六」女将)
	野田 雄一	(富山ガラス工房館長、富山ガラス造形研究所教授)
	長谷川明子	(日本ビオトップ管理士会中部支部会長)
	真能 秀久	(中日新聞社取締役管理局長)

(主な発言)

<「平成28年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」について>

- ここ数年間で最も興味深いラインナップだと思う。報道番組の比率を変更するなど、新しい試みを行っているからだと思う。「編集の重点事項」7項目めで「日本を世界に、発信を強化」とあり、国際共同制作を促すとあるが、どのようなエリアでどのような戦略をもって行おうとしているのか。また、現状を視聴者が知りたいと思った時に、どのようなアクセスのしかたがあるのか。

(NHK側)

NHKはアジアの放送局ということもあり、アジアの各局とコラボレーションするような番組制作などを計画している。また、BBCをはじめとした世界の名だたる放送局とのコラボレーションも考えていると聞いている。視聴者が知る方法は、具体的には、インターネットや毎月放送総局長が定例の記者会見を実施しているのも、そのような中で新しい取り組みについては紹介していきたい。さまざまな放送局とコラボレーションして制作すると、全く違った視点で番組が作り上げられるということもあり、非常にクオリティーが高いものができていくと思っている。しっかりと挑戦していきたい。

- 例えば、イスラム教圏の国とコラボレーションをして、政治的ではない生活文化に密着していくような番組や、2020年以降も見据え、アフリカ諸国の放送局とコラボレーションした番組を制作すると、視聴者にもNHKがさまざまなことに挑戦しているという躍動感が伝わると思う。さまざまな試みが視聴者にもわかるように取り組んでほしい。
- 7月の第24回参議院議員通常選挙から18歳以上の人が投票することになるが、「編集の基本方針」にある「不偏不党を貫き」というのは非常に重要で、かつ難しいことだと思う。模索しながらも不偏不党を貫き通してほしいと思う。2月16日(火)に放送されていた「ほっとイブニング」で高校の先生が生徒にどう選挙について教えるかという題材を扱っていた。先生たちの悩む姿をしっかりと描けており、非常によい番組だった。
- Eテレの番組について、子ども向けの番組は午前中と夕方を中心に放送がある。お昼の時間帯も家で子育てをしている時間帯であるから、30分でもよいので、子ども向けの番組を放送してほしい。

(NHK側)

午前中と夕方に子ども向けの番組を集中的に編成している。日中帯は、それ以外の世代に向けたコンテンツを放送しているというのが現状だ。ご意見は今後の参考にしたい。

- 今回の話を聞くと、よい番組が多く楽しみだ。海外のドラマによって海外の習慣を知ること多い。例えば、韓流ドラマが流行した時は、韓国の文化や韓国のよい部

分をドラマを通してしっかりと知ることができた。子どもの頃は、アメリカのアニメを通して笑いや外国の人がどのように思っているかを学んできたように思う。30分程度の子どもの向けアニメでもよいので、世界中の楽しく、おもしろい番組を放送してほしい。海外に行くと、笑いのツボが違うということをよく感じるが、笑いはコミュニケーションとして重要な部分だ。テレビの魅力は、そういったことを伝えること、行けない国のおもしろさを知ることにもあると思う。全く知らない国というよりは、少し知っている国の番組の方がおもしろいと思う。Eテレに語学番組はあるが、もう少し肩の力を抜いて見られる番組として、放送してほしい。

- 選挙権が18歳以上に引き下げられることもあり、18歳時点での職業観や将来をどう捉えるかという番組をよく見かける。今回もラジオ第2で「仕事の現場real」という番組が新設されており、こういった情報がどんどん発信されることはよいことだと思う。ただ、本屋でも職業選択に関する書物のコーナーに行くと、自営業に関する書物が多い。実際の社会の大半を占めている、組織人や行政を支えている人の情報が出てこない。手に職をつけることや資格を持つことも大切だが、それが全てではなく、さまざまな生き方がある中で、やりがいや誇りを持って働くといった職業観を育むような番組を制作してほしいと思う。また、Eテレの編集ポイントで“やる気スイッチ”という言葉を使用しているが、商標登録されている言葉でもあるので、こういった文書では使用しない方がよいのではないかと思った。

<「平成28年度中部地方向け地域放送番組編集計画（案）」について>

- TPP（環太平洋パートナーシップ協定）に関して触れている局が多いが、編集計画ではTPPを経済という局面で捉えているように感じた。TPPでは、多様なテーマについて言及しており、人々の命、暮らし、医療、さまざまな面で影響がある。番組では、ぜひ多様な影響があることを伝えていただき、命や暮らしといった側面にも焦点を当てて、取り組んでほしい。
- 中部全体の重点事項では6つの項目があり、各局の編集計画になると項目の数がそれぞれ違う。どう分け方が違うのか比較したくなるが、地域により優先順位があり、それぞれの局が独自性を発信しているのだろうと思う。中部の重点事項4項目めに「多彩な番組で地域を盛り上げ、視聴者との結び付きを強めます」という項目があるが、データ放送やインターネットの活用について詳しく聞きたい。

(NHK側)

データ放送については、現状の番組でいわゆる“dボタン”を押すと、

さまざまなコンテンツが見られるという取り組みを行っている。インターネットに関しては、各局はホームページを持っている。また、現在、インターネットでテレビ放送番組の同時配信の試験的な取り組みも行っている段階だ。また、通常の放送はハイビジョンだが、次の段階として4K放送がある。4Kに対応した番組はこれまでも中部で何本が制作してきたが、さらに精度が高い8Kでの番組制作というものがある。2020年の東京オリンピックの時には視聴者が8Kや4Kで数多くの競技を楽しめるようにしようという目標をかかげているが、地方局では今後そのような放送が始まる時に備えて、どんどんソフトを充実させていこうというのが現状だ。

NHKのコンテンツはソフトが命だと思っている。よい番組を制作するということがベースにあり、その上で4Kや8Kに対応した番組や、インターネットやデータ放送の活用といったことがある。今は、よいソフトを生かすために、どのような手段があるのか検討している段階。視聴者が何を求めているのかということも、地方ごとに調査をしている。

4Kや8Kでの試験放送が開始されるにあたり、我々の地方局にもそれを受信する設備が整備されることになる。それをできる限り活用し、4Kや8Kの普及に貢献していきたい。

- 昔のテレビと比較すると、今のテレビは非常にすばらしく満足している。データ放送はよく活用している。交通情報や天気予報は出かける前などに見ることが多い。ニュースもどんどん更新されるので、新しい情報を得ることができる。今後も充実させてほしい。
- 地域の課題と地域の魅力に関連して、ぜひ女性に焦点を当てた番組を制作してほしい。子育てしながら働くということは、これからの女性にとって一番難しいことだと思う。ぜひそのような働き方で成功している人を紹介したり、若い女性は東京へ行ってしまふことが多いので、地方にこんなにすばらしい女性がいるといったことを紹介したりしてほしい。地方に女性が帰ってきたくなる番組作りを期待している。

(NHK側)

「中部ジモ女(ジョ)の選択」はまさにそういったことをテーマに取り組んでいる。今年度で「中部ジモ女(ジョ)の選択」は終了するが、来年度から一切やらないということではない。各地域の取り組みや地方に残った人たちの話を聞くといったことはしていきたい。人口減少は、すべての

地方の課題だと思う。そういったことをテーマにした番組は今後も制作していきたい。

- 番組全般的な要望として。「にっぽん百名山」という番組をよく見るが、百名山は標高が高すぎて挑戦できない。もっと、我々でも挑戦できるような山、例えば、中部地区のローカル三十名山のような番組を制作してほしい。
- 諮問された「平成28年度中部地方向け地域放送番組編集計画（案）」については、委員から出された意見の趣旨が具体的な番組編成のうえで生かされることを前提に、番組審議会として原案を可とする答申をしたい。
- 異議なし。

（NHK側）

答申を受け、このあと具体的な地域放送番組編成計画について決定し、3月の審議会では編成計画についてご説明したい。

<放送番組一般について>

- 1月22日(金)ナビゲーション「追跡 “廃棄ビーフカツ”」を見た。安い物には理由があるわけで、消費者はなぜ安いのか、なぜ腐らないのか、それをしっかりと理解する必要があると思う。加工品は非常に分かりづらいが、表示制度の問題や輸入品の検疫の実態という切り口の番組も制作し、視聴者に実情を伝えてほしい。
- 1月22日(金)ナビゲーション「追跡 “廃棄ビーフカツ”」を見た。企業が産業廃棄物処理業者に処理を依頼したときの金額が明確でなく、気になった。明示しないと、そのまま横流し前提で廃棄しているのかと想像してしまう恐れもある。企業の名誉のためにも、きちんと提示してほしい。また、異物混入と表示する際の、異物とは何なのかが全く分からなかった。つまり、食べて悪いものなのか、ただ違和感を覚えるだけなのかが知りたい。全く違う問題だと思う。番組で食べ物の処理のしかたを説明する際に、異物の混入と賞味期限が近づいていることとは全く話が違ふと思った。2つに分けて処理を行うことも考えてほしいと思った。
- 1月22日(金)ナビゲーション「追跡 “廃棄ビーフカツ”」を見た。人々の関心度の高い内容を、マグネットのパネルを貼りながら説明していてとても分かりやす

かった。映像で見せがちなことをあえて手を使い説明していた所も非常によかった。ただ、どうして安いかという理由をお店の人に聞くことがひとつの抑止力になると伝えていたが、現実的ではないように感じた。最初の一步としてはよいかもしれないが、本質は変わらないような提示だったと思う。また、最後のまとめ方が「みんな考えましょう」という点に落ち着いていたところも、もの足りなさを感じた。みんな意識を高めることは重要だが、漠然と考えましょうと言っても、変わるようなことではない。今現在立ち上がっている委員会を紹介したり、そこに意見を言う手段を伝えたりするなど、マスコミが視聴者の意識を高めるような放送をしてほしい。廃棄ビーフカツの問題は、もともと人々の関心が高い問題ただけに、残念なまとめ方だったように思う。

(NHK側)

「ナビゲーション」について、予定調和の結論に落ち着きがちな点は反省し、今後の参考にしたい。「追跡 “廃棄ビーフカツ”」の回については、発覚から間がない時点での放送だったため、事件の構図をしっかりと伝える点に注力した。どうすればよいかという対策のところまで、時間的にも取材が届かなかった。その後、「クローズアップ現代」で同じスタッフ、同じテーマで放送し、その際は対策編のところも織り交ぜようということで、追加取材をした。専門家の見解を聞くと、排出者責任を全うすることが重要だということが分かり、先進的な取り組みを行っている企業を2つほど取材した。

- 1月29日(金)ナビゲーション「“一人暮らし”をどう支えるか ～富山・認知症支援の現場から～」を見た。声優として活躍した大山のぶ代さんが認知症になられたということで、夫で俳優の砂川啓介さんがゲストだったが、大変苦勞されていて、その話に胸が痛んだ。超高齢化社会と言われる中、2025年には65歳以上の3割の人が独り暮らしになる。そのうち5人に1人は残念ながら認知症になってしまうとのこと。やはり介護の問題だけではなく、介護と医療の連携が本当に重要なのだということに気づいた。たとえ高齢になっても高齢者自身の生きがいとか役割、これを奪ってはいけないと思った。また、近所仲間の集まりや場づくり、声かけが重要だと思うので、地域をテーマにそのような活動をする様子を番組でも取り上げてほしい。番組の最後に、オランダでは家庭医制度の紹介があったが、日本で導入する際の課題も今後追究して行ってほしい。
- 1月29日(金)ナビゲーション「“一人暮らし”をどう支えるか～富山・認知症支援の現場から～」を見た。2025年には5人に1人が認知症という数字には驚いた。認

知症は、ひと事ではなく、突然自分の身に関係することだと思うので、このような番組が制作されていくことはよいことだと思う。この種のテーマはきれいごとにとまどめず、ひたすらリアルに描ききってほしい。今回取り上げていた富山のケースもよいケースだったと思うが、各地域で医療と相互関係がしっかりとできたよい事例をひとつでも多く紹介し、番組で情報提供してほしい。そのような役割がこのような番組にはあると思う。NHK全体でも認知症に関する取り組みは行われていると聞いているが、10年以内に5人に1人が認知症という現実があるので、ぜひそこに対するアプローチをNHKとしても行ってほしい。

○ 2月12日(金)ナビゲーション「急増！シカ被害 拡大を食い止めろ」を見た。福井県との県境に柵を設置することでもめているということは、かねてより報道で知っていたが、一つの行政単位で対応を考えることがいかに難しいか、きちんと取材できていたと思う。他の地域の被害、東京や岩手での森林崩壊や土砂流出などをゲストのコメントだけで済ませていたが、写真を準備した方が具体的に視覚に訴えることができ、被害の実態を理解しやすかったのではないかと思う。一方、静岡県と山梨県で連携している、GPSを使った先進的な取り組みは、地図にプロットされていたので非常に分かりやすかった。食肉処理施設を民間の活動として紹介していたが、実態は大半が補助金をもらい運営しているのではないだろうか。また、処理に対する課題や他地域で捕獲されたシカなどは持ち込むことができるのかできないのかなど、法律的な規制もあると思うので、そのような実態を深掘りした取材と報道もしていただけるとさらによかった。番組終了の際、先生のコメントが途中で切れたように感じた。生放送であればしかたないが、編集し形に残るようなものであれば、番組中盤でもう少し省略できる映像があったように思う。

○ 2月12日(金)金とく シリーズ・サミットがやってくる「ブレイクを目指す！伊勢志摩のアレコレ大紹介」を見た。エグスプロージョンの歌と踊りは、最初は奇をてらったもので理解し難い印象を受けたが、歌詞を聞いているとサミットに関連した内容をひとつひとつ説明しており、妙に納得感があった。普通に説明するよりも、こちらのほうが印象に残ったと思う。「あのりふぐ」や「パールポーク」といった食材の紹介は、エピソードを含めて楽しかったが、三重県立相可高等学校の高校生が調理している場面にもう少し時間を取ってほしかった。時間内に作ったのか、それとも事前に準備をしていたのか、結果的に分かりづらくなってしまったように思う。スーパーアコヤガイや金色の真珠は、サミットまでの量産は間に合わないとしても、今後、発信していく材料としては納得いくものだった。観光バリアフリーの先進地であることについては、具体的な例示があり分かりやすかった。観光地を抱える他県も見習うべきだと思った。「東海北陸フレッシュ便 さらさらサラダ」がみえ

ウィークということだが、このように地域を盛り上げていくことは非常に大事だと思う。

- 2月12日(金)金とく シリーズ サミットがやってくる「ブレイクを目指す！伊勢志摩のアレコレ大紹介」を見た。伊勢志摩の食や真珠、観光がうまく取り上げられていた。伊勢エビ、アワビだけではなく、地元でしか知られていないような「ありのりふぐ」や「パールポーク」を三重県立相可高等学校の高校生シェフが番組内で調理するという、おもしろい企画だった。また、伊勢志摩がバリアフリー観光発祥の地と言われるきっかけになった話も、伊勢志摩という町の優しさを感じさせるストーリーだった。求めていることは、一般の人と変わらない、さまざまな人たちの願いをかなえるようにしたいと言われたことがすごく印象的だった。最初に出てきたダンスユニットの踊りは、踊りが目立ち内容がよく分からなかった。ところどころお笑いタレントが登場しものまねする演出も意味がよく分からなかった。もう少しきちんとした番組にしてほしいと思った。
- 1月23日(土)週刊ニュース深読み「損得だけじゃない！？ 電力自由化で何が変わる？」を見た。4月からの電力の自由化に向けて、その仕組みがよく分からなかったが、番組ではパネルを使って解説しており、よく理解できた。電力会社を変更することで本当に安くなるのか、どこを選べば得なのか、3人の専門家が答えていたが、少し話が複雑すぎたように思う。ただ、その中で「まず住む地域に供給している会社の中から電気の使い方に応じて選ぶことが大事だ」という話は一番分かりやすく、納得できた。
- 1月25日(月)小さな旅「織りなす宝～福島県 川俣町～」を見た。大河ドラマやスポーツ中継など費用をかけて制作する大型番組は、さすがと評価するものが多いが、小さな番組も予想以上にすばらしく、手抜きのない構成企画で、心に訴える作品が多いように思う。今回も、表題からはどこか景色のよい、すばらしい所の旅の物語と想像したが、それを上回る歴史観や地方の取り組み、地方の優れた技術などを視聴者に強く訴える内容で、大変驚いた。川俣ブランドと呼ばれる極薄の絹織物を使って、これを使いまちおこしをするという物語だったが、大変興味深かった。カメラの撮影も阿武隈の緑深い山々に囲まれた川俣の町の映写から始まり、小さな町の蔵など見事だった。また、背景に流れる旅情のある音楽もすばらしく、機織り機のガチャンガチャンという音での番組の出だしも大変感動的だった。厳しい時代の流れに翻弄されながらも、こうした機織りの技術が日本に残っていることが分かり、単なる旅ものの番組に終わっていない点もよかった。また、映写技術という点では、極薄の絹織物の光沢が見事に表現されていて、厚みは0.04ミリという厚さだっ

たが、しっかりと撮影されていたことに感動した。

- 1月25日(月)プロフェッショナル 仕事の流儀「京都の冬、もてなしを究める～日本料理人・石原仁司～」を見た。世界に誇る日本料理人の石原仁司さんの心づくしの料理やおもてなしの心に、しっかりと密着していて、魅力をよく引き出した番組だった。半年先まで予約が埋まっている中、楽しみに訪れる人たちの期待に応える料理を作らなければいけないという葛藤もよくわかった。お客様のことを一日中考えている姿勢がよく分かる番組だった。非常に感動したのは、手を抜かないのは、人が見ているからとか見ていないとかではなく、自分自身のためだとおっしゃっていたところだ。すぐに何のために努力するのと言ってしまうような時代の中で、印象に残る言葉だった。全身全霊、お客様のために喜んでいただける料理を作ることだけを考えているとおっしゃっていたところもよかったと思う。このような番組を見ていると、料理の価格設定が気になるが、今回は値段もきちんと伝えていた上に、お店の看板も映していた。疑問の少ない番組で、とてもよかった。ただ、石原さんを始め、手袋をしている人がいたが、なぜ手袋をしているのか気になった。その辺りも、番組で聞いてほしかった。
- 1月30日(土)プロフェッショナル 仕事の流儀「京都の冬、もてなしを究める～日本料理人・石原仁司～」(総合 前2:55～3:42:30)を見た。よく取材を受けられたと思う。取材が店の宣伝広告になるという考え方もあるが、かえって動きが取りづらくなるという懸念はなかったのか気になった。かたくなに1日14人限定とする一座建立を目指し続ける姿勢は、まさにプロフェッショナルだと思った。旬の中の旬にこだわり、自分が納得できる食材を自分の目で購入する姿勢、当たり前のことを当たり前のように手抜きをせず、目指すべきあり方を考えながら愚直にやるという生き方に感心した。師匠とのエピソードも楽しく拝見した。番組全体の映像がとてもきれいだった。店を訪れた日が4日あったが、たまたまこの日だったのか、あるいは、他の日も取材しており、その中から選んだのか気になった。お客が途中で1人替わったように見え、テレビに映りたくなかったのだろうかと推測した。
- 1月26日(火)クローズアップ現代「“廃炉時代”到来 積み残された課題」を見た。NHKが本当に国民に信頼されるためには、社会の状況に対して不十分な部分や都合の悪い部分、課題をしっかりとあぶり出し、きちんと問題提起することを恐れないう姿勢を示すことだと思う。そういう意味で、この番組は、課題を明示し、しっかりと取り上げようとしていたので意義があったと思う。ぜひ今後も、この種のテーマに関しては何度も繰り返し、多様な角度で検証してほしい。

- 1月28日(木)覆面リサーチ ボス潜入「ブライダル会社」を見た。非常に感動的だった。ボス潜入後の面接のあと、週末はいつも忙しい従業員の方が自分の結婚式を挙げていられないので、神奈川の本社で結婚式を挙げる準備をしているというシーン。非常によかった。しかし、皮肉をもって見ると、なぜこの人が選ばれたのかという気持ちになった。しかし、番組としては非常におもしろかった。

- 1月30日(土) 超絶 凄(すご)ワザ!「ゆっくりでも倒れずまっすぐ進む自転車対決」(後編)を見た。最先端ロボットと職人技による手作りという模範的な対決内容だったので、大いに興味を持ち視聴した。対決に至るまでのそれぞれの人間模様や取り組み姿勢もよく取材されていて、勝ち負けの想像がつかない展開や、双方ともに勝たせたいと思わせる構成もよくできていた。しかし、肝心の対決シーンのクライマックスで、優位に立った職人技の手作りフレームを先に走らせるという突然のルール変更があり、一気に真剣勝負の緊迫感が失せてしまった。以前も、対決シーンの一番大切なところで番組の中心価値が変更になるような演出があったが、今回も同じようなことがなされており、不快感を覚えた。番組に「対決」とうたっている以上、視聴者の関心の優先順位は、まずは公正な基準によりはっきりと白黒がつくことだと思う。その結果生じる悲喜こもごもに、作り物にはない感動を覚えるので我々は番組を見ている。対決に少しでも演出を加えることは、せっかくの真剣勝負が恣意的な作りごとに見えてしまうため、絶対にするべきではないと思う。この番組にはぴったりのテーマで、凄ワザを実感できる内容であっただけに、残念だった。

- 1月30日(土) データなび 世界の明日を読む「そうだったのか!日本の冬~データで探る“冬の未来”」を見た。日本の冬というテーマで統一されていて、見やすかった。冬に本当にネコはこたつで丸くなるのかというお題の際、5匹のネコを雄と雌、3匹と2匹に分け観察をしていたが、5匹のネコの行動だけで言い切ることができるのか疑問に思った。データで作る未来鍋というお題の時は、将来は輸入野菜が増えたり、日本独特のうま味成分が多く入ってくるだろうと言っていたが、データでやる必要があったのか疑問に思った。データで示さなくても、一般的に想像できることではないかと思った。未来鍋ということでカードに野菜や具材の名前を記入し、これが美味しい将来の「未来鍋」だと言っていたが、全くおいしそうに見えなかった。必要のない演出に感じた。

- 1月30日(土) ころの時代~宗教・人生~「“自分”を超えて」を見た。養老孟司さんとの対談だった。非常に幅広いテーマをお持ちの方だが、今回は番組のテーマに沿って大変教育的な内容だったと思う。NHKらしい番組だった。最後に道を選

ぶのはやはり自分だという言葉が大変印象的だった。ただ、番組は話だけで進んでいったので、聞き手の方が要領よくコメントをしたり、随所で要約し紙に文字化して伝えたりすると、視聴者にもっと分かりやすく伝えることができたと思う。

- 1月30日(土) SWITCHインタビュー 達人達(たち)「厚切りジェイソン×金田一秀穂」を見た。お笑い芸人厚切りジェイソンさんと金田一先生との対談は、言葉を仕事にしている2人の日本語と英語の言葉の対決ともいえ、日本人とアメリカ人の考え方の違いなどが分かり、大変おもしろい対談だった。金田一先生が大学の講義の中で、日本語は曖昧な言語なのかというテーマで話していたが、日本人は熱いや痛いといった気持ちを瞬時に判断し言葉を使い分けているので、日本語は実は曖昧とは言えないと唱えていたり、存在するという意味の「いる」「ある」という言葉を英語や中国語は区別しないが、日本語はそのものに気持ちがあるかないかで区別して使用しているという話は興味深かった。親しみやすい先生の人柄にひかれた。また、厚切りジェイソンさんがラジオで人生相談の番組を持っており、若者にとっても人気があるということも初めて知り、興味深かった。最後に2人に短歌を詠んでもらうシーンがあったが、それよりももっと2人の対談が聞きたいと思った。
- 2月1日(月)人生デザイン U-29「お笑い芸人 兼 経営者」を見た。プロフェッショナルとしてのこだわりの描き方が足りなかったように思う。生きることや働くことへの志や哲学が見えてこなかったことが残念だった。さまざまな人を取り上げていくことは重要だと思うが、職業として成り立っているかどうかということの一つの基準にし、番組を制作するべきではないかと思った。
- 2月4日(木)覆面リサーチ ボス潜入「食品会社」を見た。今回は食品業界での競争が厳しい中、自社工場の強化を図るために番組に出演することを決めたとのこと。潜入したのは、研究一筋で歩んできた常務の方で、再就職先を探すために1日体験に訪れる様子をテレビが密着するという設定だったが、あまりにも密着しているので、会社の人は気づかなかったのか疑問に思った。北海道、神戸、岐阜と3箇所の工場に潜入していた。ふだん慣れていない仕事を行うことの大変さが、番組からよく伝わった。潜入終了後、常務が正体を告白し、各部署の担当を個別に呼んで、潜入で感じたことや改善点を伝えていたが、その姿に感動した。従業員の方が非常にまじめに会社のことを考え、会社を愛して働いている姿や温厚な常務さんが自らの体験を基に、現場を知らずに申し訳なかったとひとりひとりに頭を下げる姿が印象的で、筋書きのないドラマがとてもよかった。大企業になればなるほど、現場が重要とはいえながらも、実際に現場に触れる機会は少ないのだなということもわかった。気になった点は、番組冒頭で社長が登場していたので、やはり締めくくりも社

長に登場してほしかった。

- 2月6日(土)助けて！きわめびと「叱り上手」になりたい 前編」2月13日(土)助けて！きわめびと「叱り上手」になりたい 後編」を見た。関心の高いテーマだった。振り付け師の夏まゆみさんが課題解決の指導をしていたが、怒ると叱るというのは全く意味が違うということは理解していたが、叱る力をつけるには相手をよく知り、よく観察することが重要だと言っており、参考になった。1週間後に、叱り上手にうまくならなかった親子の追跡をしていたが、もう少し長い期間で見た方が、うまくいった、いかないが分かりやすいのではないかと思った。
- 超絶 凄(すご)ワザ！2月6日(土)「ど真ん中を射ぬけ！究極の噴射対決」(前編)2月13日(土)「ど真ん中を射ぬけ！究極の噴射対決」(後編)を見た。水と空気の対決には違和感を覚えた。真面目に見てしまうと、かなり水の方が有利なのではないかと思った。固体のほうが当てやすく、次が液体、気体は難しいだろうというのが一般の見解だと思う。ただ、番組では、空気が結果を出していたので、このおかげで番組が盛り上がったと思う。番組の見せ所は、日本の会社や研究室が持っている技術をベースに、アイデアをどうやって出すのか、実証実験をどう行うのかというところで、それを支える周囲の人間模様もスパイスになっている。対決のしかた、何をどうテーマにするのかという点は最大のポイントで難しいところだと推察する。毎週このレベルのものを放送することは難しいと思うが、見ていて前編は見る必要がないと感じた。視聴者からすると後編だけでよい。1話完結は難しいと思うが、今後もレベルの高い対決やテーマを探し、放送してほしい。
- 超絶 凄(すご)ワザ！2月6日(土)「ど真ん中を射ぬけ！究極の噴射対決」(前編)2月13日(土)「ど真ん中を射ぬけ！究極の噴射対決」(後編)を見た。なぜ空気のほうに色を付けなかったのかが分からなかった。水のほうは、どこに水が飛んでいくか見えているが、空気のほうは、どのろうそくが消えたか分からなくて、煙などでもよいので色をつけると見えやすくなり、よかったのではないかと思う。内容はおもしろかった。
- 2月7日(日)の「北朝鮮ミサイル発射」関連ニュースを見た。久しぶりに実況中継で、リアルタイムで世界を走り回るような報道に目を奪われた。NHKらしいしっかりしたニュースで、申し分のない内容や構成、適切なコメンテーターの配置などは、若干出来すぎているようにも思えた。特に、ミサイル発射の映像が、朝方の曇り空にもかかわらず、50キロ離れた対岸の中国から望遠レンズで撮影できたというのには大変驚いた。これは事前に現場での周到な準備や緻密な段取りの結果だろ

うと思った。改めて、放送や報道が現場の努力やスタッフの企画力によって成り立つものであると感じた。全国瞬時警報システムや緊急情報ネットワークシステムについて本当に問題ないかという検証は、今後も深めてほしい。対話だけでは問題解決が難しい状況があるということ、メディアを通じてしっかりと視聴者にも伝えてほしい。また、コメンテーターの解説も分かりやすく、事件の大筋を知ることができた。発射間もない間によく人材を集められたと思う。また、今回のニュースに限らず、ニュース全般的に生中継も含めて、動向分析、解説、政府の対応など旬の報道企画に関して起承転結がしっかりとしていると思う。高く評価したい。

- 2月7日(日)「完全版 明治神宮 不思議の森」(BSP 後1:30~2:59)を見た。驚くようなことがたくさんあった。2020年で明治神宮が100年になり、世界的にも貴重な森林生態学の実験場ということで、今回初めてさまざまなエキスパートが調査を行うという内容だったが、映像のきれいさに加えて、各界の専門家が子どものように目を輝かせながら、外来種がこんなにもいない場所が日本にもあるのかと驚いていた姿が印象的だった。100年前の東京にいた絶滅危惧種のオンパレードのような状況で非常に貴重なものが現実にあるということが映像とともに表現されていた。「完全版」というタイトルには最初懐疑的だったが、見事な内容だった。3年がかりで、50名を超える研究者からなる特別チームの学術調査が行われたが、その詳細な調査結果とともに専門家の知見も合わせて伝えていく、すばらしい番組だった。中部地区にも完全版で見たい森が多くある。多角的に検証することで発見がありそうな森もある。中部域内の貴重な自然を、地域の人々や国民全体に伝えていくような番組を今後も制作してほしい。
- 2月9日(火)先人たちの底力 知恵泉(ちえいず)「みんなの心をつかむ突破力〜龍馬がほれた経済の達人・由利公正〜」を見た。由利公正について、彼の残した業績が再現ドラマや歴史的遺品、写真等を交え、網羅的に分かりやすく紹介されており、大いに楽しむことができた。ゲストの産業廃棄物会社の女性社長とパトリック・ハーランさんとの対話も、見事にかみ合い、それぞれの発言も的を射ており、充実した時間だった。大変楽しく視聴した。
- 2月11日(木)「人生は18歳で決まる!？」(総合 後10:00~10:48)を見た。出演者がセーラー服で登場するという演出は、人生を考えることをテーマにした番組には合わず、制作姿勢に疑問を感じた。取材したのは、天才と呼ばれるような18歳、スペシャルな技能者ばかりで、番組アンケートの対象も医者限定と、絵に描いたお手本のような理想像ばかりだった。それに対して、スタジオトークで登場していたゲストはミスマッチだったように思う。番組を通して、世の中の18歳の人た

ちに何を伝えようとしたのか、わからなかった。18歳の人たちの未来を真剣に一緒に考えようという真摯（しんし）さが足りなかったように思う。

- 2月13日(土)NHKスペシャル 司馬遼太郎思索紀行 この国のかたち「第1集 “島国” ニッポンの叡智（えいち）」2月14日(日)NHKスペシャル 司馬遼太郎思索紀行 この国のかたち「第2集 “武士” 700年の遺産」を見た。制作者の方は司馬さんの作品をずいぶん読み込み、そこから島国、辺境の国ということと、武士という2つのテーマで整理し、データを再構成して取材に入られたことが推察できる内容だった。改めて日本、日本人を考えるきっかけになり、良質な番組だった。それを前提に気になった点が2つある。1つは、データや事実を詰め込みすぎている点。第1集の放送は、国際宇宙ステーションから始まり、鹿児島県の集成館、それから長崎大学の書物、壱岐の祭り、出島、奈良の東大寺に行ったかと思うと、三輪山、京都へ行く、古市公威まで登場するといった具合で、頭に残る知識や心に残る感情がかえって薄れてしまうように感じた。テレビという媒体は、視聴を決めると送り手が時間をコントロールするため、視聴者はついていくことが精いっぱいになり、場合によっては思考が止まってしまう。古くから言われている問題だと思うが、テレビを見て知見を深めることができるのかというテーマを意識しつつ、今後も番組を見ていきたいと思う。2つ目に気になった点は、司馬さん独特の歴史観は司馬史観と言われ、さまざまな評価が既に出ているが、今回は、司馬さんを振り返るという趣旨もあると思うが、司馬史観にどっぷり浸かりすぎているように思う。司馬さんを偉大な歴史家と捉えるのもよいが、彼はあくまで歴史小説家だと思う。彼の業績や見方を客観的に見るような視点が必要だったのではないかと思った。
- 2月13日(土)NHKスペシャル 司馬遼太郎思索紀行 この国のかたち「第1集 “島国” ニッポンの叡智（えいち）」2月14日(日)NHKスペシャル 司馬遼太郎思索紀行 この国のかたち「第2集 “武士” 700年の遺産」を見た。盛りだくさんの内容だったが、司馬遼太郎さんに関して深く研究し調査した人が番組を制作したということを感じた。彼の歴史随想「この国のかたち」に関して、司馬が亡くなられてからの20年間、「坂の上の雲」をはじめとするさまざまな番組を通じて、司馬をどう認識するかということも含め、時代背景の中での取り組みも映像を通して見ることができた。1986年から1996年間に書きためた月刊のエッセイが「この国のかたち」というエッセイになっているそうで、当時は読んでいなかった。1986年から1996年はバブル経済の崩壊や、阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件など、時代背景が大きく変わった時だったと思う。そのような時代に感じていたこと、ひとつひとつ書き留めたエッセイを2回の番組に分けて紹介するというのは、非常に大変なことだろうと思った。録画をしていたので、2回見たが、本当に丁寧に作ら

れているということと、従来の作り方ではない表現方法を取っていることもよくわかった。司馬の思想をそのまま受け入れるわけではなく、自分ならこの時代をどのように見たのか、今後どのように見るべきなのかということが重要だと思う。最も気になるのは、戦争への懸念、繰り返してはいけないという思想が根底にあり、日本人とは一体何なのか、島国である日本に生まれた固有の文化とは何なのか、基本的なことを考える糸口を、番組を繰り返し見たことで自分なりに捉えることができた。「第1集 “島国” ニッポンの叡智（えいち）」については、神仏習合のきっかけが室町時代にあったことを初めて知り、室町時代を新たな一面で捉えることができた。無思想という思想が日本人の底の底にあるのではないかという問いかけに関しても、ある種そのような捉え方もできるのかと納得できる部分があった。今後、戦争が起こるかもしれないという懸念もある中で、個人個人の考え方を世の中に伝えることにはばかる風潮があるように感じる。そのようなことに対し、この番組は警鐘を鳴らすきっかけを与えてくれていた。この番組や司馬さんの書籍を読みながら、じっくり考えを深めたい心境になった。

- 2月14日(日) ダーウィンが来た！生きもの新伝説「超スロー！超危険！ 謎だらけのサル」を見た。インドネシアに生息している原始的なサルの仲間スローロリスを取り上げていた。非常にゆっくり動く、かわいい動物だが、毒を持っている。その毒の臭いだけで動物が逃げる様子を実験できちんと映像で見せていた点がよかった。内容的にも興味深い実験だった。また、これに加えて、インドネシアの森林の伐採や密猟といった問題を取り上げ、密猟されたこのような生き物たちがペットとして日本に入ってきている実情を伝えていた点も評価できた。最近では漢方にもさまざまな動物のものが混ざっていることがあり、このようなことを監視している機関や財団の紹介があると、人々の意識も高まり、さらによかったと思う。最後に、スローロリスがどこに行くと見ることができるのかという説明も欲しかった。遠い外国の生き物が日本にもいて、その動物がどういう状況なのかということまで伝えらると、番組をさらに楽しく見ることができ、人々の生活ともつながっていくと思う。

- 2月18日(木)クローズアップ現代「黒字企業が消えていく～自主廃業3万社の衝撃～」を見た。中小企業が廃業したという話だったが、以前、所さん！大変ですよ「文房具“爆買い”騒動の謎」(2015年4月30日(木))を見て、その後がどうなったのか気になっていたもので、違う番組でもう一度取り上げていただき、よかった。中小企業が実は自分の魅力に気づいていないというのは、日本人の典型だとも思った。日本人は自分のよいところをあまり言わず、マイナスばかり見るようなところもあるので、その点を見せていた点もよかったと思う。最後、時間がタイトだったせいか、ゲストの「学生がもっと中小企業に目を向けていきましょう」という答え

に対し、キャスターが苦笑いだったように見えた点が本当に引き出したかった答えと違ったのか気になった。いずれにせよ、中小企業やさまざまな所で働く人を、もっと紹介してほしい。中小企業を舞台にした民放のドラマも流行したが、細かな部品を製作している中小企業を、番組を通じて取り上げ、またはモデルにすることで、学生も興味を持つと思う。「クローズアップ現代」の再放送枠の時間帯は、非常に見やすい時間帯になっているので、今後も続けてほしい。

- 大河ドラマ「真田丸」は、三谷幸喜さんの台本が非常におもしろく、楽しく見ている。ただ、時代劇とは思えないような言葉遣いをしているところが気になる。
- 土曜ドラマ 逃げる女（6）「滅びぬ愛」を見た。6回シリーズで先週終わったが、非常におもしろかった。特に興味を持ったのは、仲里依紗さんの演技だった。金髪の女性役で、ふらつきながら歩く姿に、なぜこのような人が出ているのだろうと疑問に思ったが、その役柄にひかれ結局最後まで見てしまった。非常によい演技をしていた。怒り方も非常によかった。ストーリーも興味深かった。最後、何も触れずに終わる部分も多く、その余韻を楽しむことができた。すばらしいドラマだった。

NHK名古屋放送局
番組審議会事務局

平成28年1月NHK中部地方放送番組審議会

1月のNHK中部地方放送番組審議会は、21日(木)、NHK名古屋放送局において、10人の委員が出席して開かれた。

会議では、「年末年始心に残った番組」というテーマで、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、2月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	森棟 公夫	(学校法人椋山女学園理事長、椋山女学園大学学長)
副委員長	松本 耕作	(加賀味噌食品工業協業組合理事長)
委員	小澤 正俊	(大同特殊鋼(株)相談役)
	加藤 勇二	(愛知県農業協同組合中央会常務理事)
	小寺 功子	(三重県漁協女性部連合会会長理事)
	佐野 俊和	(コマツサービスエース(株)代表取締役社長)
	田中 章義	(歌人・作家)
	中村 智景	(四季料亭「助六」女将)
	野田 雄一	(富山ガラス工房館長、富山ガラス造形研究所教授)
	長谷川明子	(日本ビオトップ管理士会中部支部会長)

(主な発言)

<放送番組一般について>

- 「ほっとイブニングみえ」を見ている。サミットの情報を毎日放送している。三重県の人たちにとってありがたい情報だ。今後も番組で取り上げてほしい。
- 1月8日(金)「NHKナゴヤニューイヤーコンサート2016」(総合 後7:30~8:43 中部ブロック向け)を見た。キャスティングがよかった。有名な方々がたくさん出演していたが、その中でも、中学生だという愛知県出身の佐藤桂菜さんは、はつらつとしていてすてきだった。そのような人をキャスティングできるのは、NHKならではだと思う。会場で聞いた時は、ソプラノ歌手の声で聞きづらい部分があったが、番組ではよく聞こえており、テレビで見る良さにも気づけた。当日の演奏順とテレビの構成は違ったが、違和感のないきれいな流れになっており、非常によかった。

- 「NHKナゴヤニューイヤーコンサート2016」を見た。司会もしていたピアニストの方は、本業のパフォーマンスも非常に迫力があり、この方が今後どのような活躍をされていくのか楽しみだと思いながら見た。15歳のチェロ奏者のキャスティングにも驚いた。地域の新たなスター候補、ホープをきちんとキャスティングしているのはよいと思う。番組では楽曲の解説も付き、歌詞を見ながら歌を聴ける至福感を味わうことができるので、よかった。我が家では家族で繰り返し見ているが、子どもが見ても感情移入できるよい番組だったと思う。毎年の恒例行事ではあるが、多少新たなことを取り入れ人々を驚かせながら、回を重ねて行ってほしいと思った。
- 1月9日(土)「ウイークエンド中部」を見た。梶田隆章さんがノーベル賞を受賞し、次なる挑戦は何かというテーマだった。高岡線で神岡地区を列車で通った時は、「この地下でいろいろな実験が行われて、今後も挑戦されていくのだな」と不思議な気持ちになった。今回は次なる挑戦として、重力波に関する話が出てきた。基本的に重力波は目に見えず、重力波がどう影響するのかということに関しては具体的に日々の生活では感じないが、目に見えないものを数値化することに関して、光では解決できないものを解決させていこうというのが今回の大きなテーマだった。
- 1月15日(金)ナビゲーション「現場報告 “軍事研究”に揺れる大学」を見た。昨今、大学の研究費は削減されているが、防衛省からの助成制度や研究の推進制度は新たに設けられるような実情があり、揺れる大学の様子を追っていた。予算の額も昨年から倍増しているようで、防衛費として大学の研究者や学生にこういった形で資金が投じられていることに驚いた。東海・北陸地方でも、こういった制度を使い研究に取り組んでいる大学もあるようだ。このような研究は、知らない間に戦争に加担してしまうのではないかと研究者の方も悩みながらも取り組んでおり、どうするべきか、本当に難しい問題だと思った。解説者の方が、国民・市民の声をしっかりと聞いて、判断するべきだと言っていたが、安保法制で世論が分かれている中、こうしたことが一方的に進められることに対して一石を投じる意味でよい番組だったと思う。
- ナビゲーション「現場報告 “軍事研究”に揺れる大学」を見た。十分な取材だった。しかし、そもそも科学は軍事とどういう姿勢で関わるのかという問題と、研究者の財源が削られているという問題は別として捉えたほうが、今回のテーマの本質追究には向いていたように思った。財源がないため、軍事研究に手を挙げるという大学を事例の中心に置いてしまうと、本質テーマである科学者や研究者は今の時代環境の下で軍事研究にどのように対峙するのかという論点がぼけてしまったように

思う。昨今の時流に合ったテーマなだけに、資金がないから志を曲げるというステレオタイプの課題の捉え方に縛られているような構成は残念だった。

- 1月15日(金)金とく『時代』と闘った男～脚本家・佐々木守のメッセージ～を見た。「アルプスの少女ハイジ」でクララが立ったという伝説のような場面を書いていた脚本家が「ウルトラマン」の脚本家だったということは知らなかった。それだけでなく、「赤い運命」や「おくさまは18歳」といったドラマも手がけていたようで、さまざまな作品がひとりの脚本家によって描かれていたということに衝撃を受けた。教育現場で「ウルトラマン」のある場面を活用している学校が紹介されており、金沢局が制作した番組だと思うが、地域にこのような人がいたということをきちんと紹介しているのはよいと思う。中部地区や全国で放送されても、驚く人も多いのではないだろうか。地域で佐々木守賞のようなものができ、地域興しにつながってもよいのではと思った。一人の脚本家の人生にスポットを当てながら、その多様性を番組から感じた。

- 12月19日(土)SONGSスペシャル 松任谷由実「見えない大切なものを探して」を見た。映画「星の王子さまと私」の主題歌をユーミンが歌っており、そのことを番組で取り上げていた。原作「星の王子さま」では、「大切なものは目に見えないよ」ということが語られている。かつてのユーミンの歌「やさしさに包まれたなら」の歌詞「目にうつる全てのことはメッセージ」と相反する言葉のように見えるが、魂は同じとユーミンが語っていた点が印象的だった。今回テロップで流れる歌詞を見ながら、改めて歌詞の意味を感じ取ることができた。長崎県奈留島の県立奈留高等学校の校歌を作ったというエピソードで、新日本紀行「歌が生まれて そして～長崎県奈留島～」(1976年4月12日)に出演していたユーミンの若い頃の映像も知ることができ、昔の映像と合わせながら町に根ざすユーミンの姿に感動した。また校歌として捧げた「瞳を閉じて」という歌の歌詞のすばらしさと、普遍性を感じ、年末にいい番組を放送していたと思う。

- 年末年始の番組は、1年の総決算や区切り、新たな出発点という時期で、大変関心を持って見た。相対的には大変ぴりっとした内容が多かった。1年の総決算という意味で、12月20日(日)「女子第27回全国高校駅伝」「男子第66回全国高校駅伝」(総合 前10:05～11:54、後0:15～15:00)を見た。初冬の京都の北大路を快走する若き高校生たちの姿を実況放送する様子は、大変心揺さぶれ感動した。NHKならではの見せ場だと思ったのが、例えば空中から銀閣寺や金閣寺を撮影したり、あるいは京都の地形のアップダウンがわかり想起できるほどの撮影ぶりなど、大変楽しめる要素があった。また、北山や東山のすばらしさが遺憾なく画面に描き

出されており、京都をよく知っている方が撮影していると思った。選手の動きだけでなく、時間が全く気にならない、大変深い感動を覚えた番組だった。撮影の画角や画面の切り替えなど制限の多い実況放送だが、NHKの撮影技術は相当高いものがあると思う。1点気になったのは、最後、西京極競技場に優勝ランナーが入ってくる時の臨場感が足りなかった。遠くの方から上がってくる姿だけでなく、望遠レンズなどでランナーの正面からの表情の撮影にも工夫してほしいと思った。優勝した高校の主将の言葉も大変強い意志を感じさせるもので、たくましい行動や仲間との強い信頼関係に感動した。日本の将来も期待できると感じた。ぜひ今後もさまざまな切り口で、若者の挑戦意欲を描く番組を放送してほしい。

- 12月25日(金)「魅惑のソノタ」(総合 後7:30~8:40)を見た。どんな番組なのか興味があり見た。世の中のさまざまな物について、「ソノタ」に分類される物の意外性に迫る番組だった。二宮金次郎像や自動販売機、校歌、虹の形などを取り上げており、おもしろかった。18番まであり歌い終わるまでに10分以上かかる校歌や、月の光で輝く白い虹があるという話には驚き、興味深く見た。一方、タブレットを持った二宮金次郎像があるという話やポッチャリ体型の人はししゃもが好きなど、こんなことを「ソノタ」に分類し、番組で取り上げてどうするのだろうと思う話もあった。ゲストが「ソノタ性」に順番をつけている演出もよくわからなかった。世界中にはさまざまな物があり、その意外性にきちんと迫る番組であれば、取り上げる意味もあると思うが、今回は中途半端だったように思う。
- 12月25日(金)BS1スペシャル「天才 ボビー・フィッシャーの闘い〜チェス盤上の米ソ冷戦〜」(BS1 前9:00~9:50、10:00~10:49)を見た。再放送だったが、大変感激した。アメリカのチェスチャンピオン、ボビー・フィッシャーは貧しい中、チェスが唯一の楽しみでよく遊んでおり、子どもの時から天才だったという。チェスはソビエト連邦において、知識の高さを示す手段のひとつであり、ソビエト中心ですべてが動いていた時、ボビー・フィッシャーがひとりで挑戦するという話だったが、世界の歴史の流れに翻弄されながらも生きる姿を追っていた。興味深い内容だった。「完全なるチェックメイト」という映画も上映されているが、今回の番組は細かいところまでよくわかる内容だった。海外ドキュメンタリーは内容が充実しておりよく見るが、それをはるかに越える内容だったと思う。
- 12月26日(土)「こんにちは! 動物の赤ちゃん2015」(総合 前8:45~9:58)を見た。生き物のすばらしさがよくわかる番組だった。長期にわたり、日本全国の動物園の赤ちゃんにまつわるトピックスについて、じっくりと取材していた。生命の不思議さやすばらしさ、なぜ存在するかということをしっかり教示できていた

と思う。教育的な価値ある番組だった。意識のない赤ちゃんがみんなの支えで大きくなっていく過程が見事に描き出されており、生きるというテーマの切り口から見てもよい番組だった。東山動物園のイケメンゴリラが今はイクメンにもなっている話は興味深かった。ゴリラとサルの生態の違いについて、解説的なコメントや専門家のコメントがあると、なおよかった。じっくりと長期にわたり取材し熟成された大変香り高い番組だった。

- 12月27日(日)「教科書が変わる！？日本人のルーツをさぐる旅」(総合 後7:30~8:43)を見た。考古学に関する最近の発見を紹介した番組で、非常に内容がよかった。旧石器時代の人骨が石垣島の飛行場を拡張している際にたくさん見つかり、もうひとつは富山で北陸新幹線の工事の時にたくさん見つかったとのこと。その見つかった人骨を基にDNAの分析を行っていた。ミトコンドリアDNAの分析ができたのは13体だけだったが、そこから5つのタイプのミトコンドリアDNAが発見された。縄文人と弥生人のDNAを分析するとあまり変わらず、大きく変化していないことも分かった。番組では、弥生人が渡来した際も、先にいた縄文人と大きな対立をせず、皆殺しなどをしないで進んできたとまとめられており、それが日本人の今の多様性につながるのではないか、というコメントがあり興味深かった。「教科書が変わる」とタイトルでうたっていたが、昔の教科書はどうで、この発見を基にするとどう新しく変わるのか、対比をもう少し明確にしてほしかった。
- 「教科書が変わる！？日本人のルーツをさぐる旅」を見た。DNAの分析は科学的に分かりやすく好感を持った。出演者全員がD4というDNAタイプだったが、さらに縄文時代に渡来したグループと弥生時代に渡来したグループという分け方で分析をしていた。もし出演者で違うDNAタイプがいたら、どんな番組になっていただろうと思う。分析技術の進化、科学の進歩を再確認した番組だった。当時の暮らしぶりを科学的に推測していた点は、特に興味深かった。出土した骨格から顔の様子を復元し、それに似た出演者を探してきたり、縄文土器で鍋を再現し食べたり、出土したイヌの治療痕からイヌが7,000年前からの狩りのパートナーとして一緒に活動していた事実を知ったり、ヒスイの飾りの位置づけなどおもしろい内容が多かった。また、圧巻だったのが、こぶし大ほどの大きさがある土偶の耳のピアスを復元し、実際につけてもらう人を探していたところだ。科学では補えない部分を実証実験で挑戦している姿に感動を覚えた。教科書を丸暗記し事柄だけを覚えていくような現在の教育に対するプラスアルファとして、学問の奥深さを示し論理的に推測していく方法を詳しく、わかりやすく例示していたことにこの番組の価値があるように思った。「教科書が変わる」というのは新しい事実の発見だけでなく、生徒が今まで接することがなかった高度な手法による学問の探究に意味があるのではない

かと感じた。番組の最後に、台湾から与那国島の海を渡る人類学的実証実験の話が続いていたが、これもうまくいけばよいと思った。

- 「教科書が変わる！？日本人のルーツをさぐる旅」(総合 後7:30~8:43)を見た。内容は十分に期待に応える情報だった。難しい内容をわかりやすく伝えるために出演者がバラエティー色豊かだったが、多少個性が強すぎたようにも思う。研究者が解説する際に、想像上の説も断定的に述べることに疑問を感じた。最後に土偶の首を折りみんなで笑って終わるという演出は、後味が悪かった。情報の質が高いだけに、全体の演出が残念だった。
- 12月27日(日)NHKスペシャル 証言ドキュメント「永田町・権力の興亡 “安倍一強” 実像に迫る」を見た。タイトルどおり、安倍一強の実像とも言える政治家の様子が浮かび上がっていた。政治の惨状を明確に映し出していたが、価値ある情報は少なかったように思う。現在、与党の中心を担う人物や政策の中心にいる人物が登場すれば興味本位であっても見る価値があったと思う。今回登場した政治家らの志は十分に感じとることができなかった。
- 12月28日(月)「石原さとみ アフリカへの旅 “いのち” に魅せられた9日間」(総合 後10:00~10:54)を見た。石原さとみさんは笑顔で癒やしていく力があり、感受性の豊かな方だと思った。彼女は、手と動きを合わせながら言葉を覚えてもらい、異国の人と交流し、ともに歌うところまでひきつけていく力がすばらしかった。石原さんと同世代の若い人たちも日本から海外に出向く視点も持つことができたのではないだろうかと思った。番組では、過去に拉致されて心を失っていた女性と石原さんとの交流が描かれていたが、たとえ一瞬であっても人との結びつきがあり、その後生まれてきた子どもに「SATOMI (さとみ)」と名付けたというのは小説に書けないドラマがあると思った。すばらしかった。石原さんの「その国を思い出すときに国旗ではなく、その国ひとりひとりの顔を思い出すことが一番平和につながる」という言葉はとても重く、平和について考えさせられるキーワードを番組の中で伝えている点がよかった。キャスティングもよかった。日本の裏で起こっている現状について考えさせられる番組だった。
- 12月29日(火)「朝までドキュメント72時間」(総合 前0:20~前4:55)を見た。吹石一恵さん、山田五郎さん、鈴木おさむさんというキャスティングに意外性があった。会話もおもしろく、この3人が朝まで放送しているというライブ感が年末に合っていたと思う。ランキング6位、名古屋局制作の「名古屋 地下街・聖なる夜の忘れ物」では、前回の放送の時に忘れ物の指輪がどうなったのか気になっていたので、

その後がわかり、よかった。今回のような振り返りをやると、1年間を思い起こすと同時に、いろいろな人とのつながりを考えられるのでよいと思う。

- 12月29日(火)「教えて！お天気キャスター 地球温暖化でどうなる異常気象」(総合 後0:15~0:58)を見た。NHKに出演している井田寛子気象予報士のほかに、民放に出演している気象予報士も、一堂に会し、地球温暖化で異常気象が頻発すると述べていた。さまざまな小道具を使いながら解説がされていて、お天気番組としては、とてもわかりやすく、よい番組だと思った。50年後の日本についてどうなるか述べていたが、年末の一番組ではなく、継続的にNHKとしても発信してほしいと思った。四季があるのが日本の特徴だが、温暖化のために、今感じる四季とは違う風景が広がる日本になると述べており、私自身も今のような生活をしてはいけなと反省した。昨年パリで、COP21が開かれていたが、世界では温暖化に関する番組を制作し国民に発信しているというのを聞いた。日本でも今回の番組のように、環境をよくするための運動の一環で、国民により身近な気象番組として、おもしろみのある番組作りをするとよいと思った。
- 12月29日(火)紅白直前！特別アンコール 放送90年ドラマ「紅白が生まれた日」(総合 後9:00~10:13)を見た。「史実を基にして」と最後にテロップが出たので史実でない部分もあるかもしれないが、広島出身のディレクターがどのような思いで「NHK紅白歌合戦」を立ち上げたか、それを検閲する側だった日系人の思いなどドラマの描き方は胸にぐっと来るものがあった。賛否がありつつも、66年間日本人の大みそかを飾る代表的な番組になっている「NHK紅白歌合戦」。この番組を立ち上げたディレクターの思いが「放送90年ドラマ」として描かれていたことに意義を感じた。この時期に再放送したこともよかったと思う。
- 12月30日(水)「科学アドベンチャー西之島へ〜エンジニア達(たち)の熱き挑戦〜」(総合 後10:00~10:59)を見た。過去に放送した西之島関連番組に続くシリーズなので、大変楽しみに視聴したが、映画で言うとディレクターズカットのようなもので、期待に添う内容ではなかった。エンジニアに焦点を当て再構成はしていたが、一番よいシーンは既に放送しているためか、寄せ集めのように感じた。改めて一番組として構成するのであれば、半分以上は新たな情報を追加するべきだと思った。
- 12月31日(木)第66回NHK紅白歌合戦「ザッツ、日本！ザッツ、紅白！」(総合 後7:15~8:55、後9:00~11:45)を見た。懐かしいメロディーが多かったように思った。66年前は歌手も少なく、「この年にはこの曲」というヒット曲が紅白

で流れていたと思うが、今年の紅白はそれがなかったように感じた。近頃は歌手も多く年代により好みも違うなか、歌手や選曲の選定は大変だと思うが、どの世代をターゲットにしているのか曖昧な紅白だった。ゴールデンボンバーが同じ歌で出場しているそうだが、「今度違う歌も歌いたい」と歌う前に言ったのを聞き、もう少し選曲も考えてほしいと思った。今後の紅白にも期待したいが、何のための紅白かを考えるとよいと思う。

- 第66回NHK紅白歌合戦「ザッツ、日本！ザッツ、紅白！」を見た。29日(火)に放送された放送90年ドラマ「紅白が生まれた日」を見て、大変な制約の中この番組が生まれたことを知り、見ようと思った。小さい頃は大みそかに「紅白」を見るのが当たり前だったが、最近は「紅白離れ」とも言われているので、その視点でも見てみた。歌手の方々の「紅白」に対する思いが十分に伝わり、華やかな舞台に十分満足した。特に、毎日楽しみに見ている連続テレビ小説「あさが来た」の加野屋の皆さんが登場し主題歌の「365日の紙飛行機」を歌うところは、私にとって一番の見どころだった。他にPerfumeやEXILEのパフォーマンスも、大変よかったと思う。ただ、出場される歌手の方があまりにも昔の曲を歌っていたり、他の歌手の持ち歌を歌っていたりすることがあったので、どのように選曲しているのか気になった。新しい曲を歌ってみるとまた新しい発見があるのではないか思った。
- 1月1日(金)Great Earth バヌアツ「体感！激烈火山」(総合 後7:20～8:43)を見た。18年ほど前に訪問したことがあり、懐かしく思いながら見た。火山の仕組みなどを寺田心さんのイラストで親しみやすく、分かりやすく表現できていたと思う。ブルーホールや、ヤケル族のダンスなども紹介されたが、火山ばかりでなくもう少しきれいなバヌアツの風景も織り込むとよかったのではないか。「激烈火山」というキーワードで、火山のエネルギーを受け、田中泯さんがその場でアドリブで踊る際、背景に流れる音楽はどのように選択されているのかと思った。個人的には、原住民のダンスの際に流れていた鼓動のようなものを合わせた方がよかったのではないかと思った。田中泯さんの出演に関連してかナレーターは連続テレビ小説「まれ」でおかあさん役の常盤貴子さんだったが、主役の土屋太鳳さんのダンスやナレーションも見てみたかった。
- 1月1日(金)NHKスペシャル「大予測！2016世界はどうなる？」(総合 後9:00～9:58)を見た。世界が揺れている現状を踏まえ、2016年はどうなるのか、専門家の方とともに番組が構成されていた。番組を進行するに当たり、進行役の図解を交えた解説が、非常にわかりやすかった。大越健介さんが2か月半にわたり海外で

取材を重ねたそうだが、わかりやすい内容だった。年初めとしてよい番組だったと思う。驚いたのが、ロシアはEUからの経済制裁の影響もあり国民生活が非常に厳しい状況にあるが、プーチン大統領の支持率は9割を超えているという点だ。反政府にならない理由について、具体的な取材に基づく解説があり、よく理解できた。アメリカ側の立場で物事を見ていることに気づいたというゲストの発言や、世界地図の見方について中国大陸側から太平洋を見ると、日本列島や台湾、フィリピンが蓋のようになっており、そこを突破したいと解説していた点は、そういう見方もあるのかと新たな気づきを得た。このような番組は難しいことを易しく理解でき、よいと思う。また、ゲストの発言も難しいことを楽しく理解するために一役買っていたように思う。

- 1月1日(金)ザ・プレミアム「いのちよみがえるとき 完全密着 瀬戸内寂聴」を見た。寂聴さんの生き方には、女性として共感できない部分もあったため、彼女が小説家として成功し、なぜこんなにもファンが多く、法話を聞きに来る人がいるのか興味があり番組を見た。番組を見て、彼女は自分にとっても正直で、すぐ行動に移す人なのだとということがよくわかった。安全保障関連法案の反対運動をするために、手術後の病み上がりでも京都から東京へ行くという姿勢は彼女の生き方を表わし、気持ちと行動が同時の人なのだった。「人が何を言おうがいいのよ」という93歳。とてもすてきな女性に見えた。また、10年間よく密着していたと思う。病床の姿もすべてカメラに見せ、天真らんまんな素顔がよくわかった。番組では過去の映像も交えていたが、見ていると彼女が何歳の時の映像かわからなくなるので、過去の映像を出す時は、何歳の時か示すテロップがあると10年の変化がよくわかり、さらによかったと思う。
- 1月2日(土)新春スペシャルドラマ「富士ファミリー」(総合 後9:00~10:28)を見た。あっという間の1時間半だった。家族の絆もよく描かれており、おもしろい内容だった。特に片桐はいりさんのおばあちゃん役の絶妙な演技とメイクがすばらしかった。「富士ファミリー」というコンビニの後ろに見える富士山が絶景で、どのように映像を作り出しているのか不思議だった。ドラマをよく見るが、NHKのドラマは配役において、新人とベテランをいい形で組み合わせていると思う。
- 1月2日(土)ブラタモリ「#15 出雲」(総合 前10:15~10:59:30)を見た。タモリさんが巡る様子を通じて、出雲大社が大変歴史があり、十分な物語をもった神社であることがよくわかった。まちおこしの過程も、全体のストーリーをよく築きあげたと思った。意外性もあった。またタモリさんが発するひと言ひと言が何とも絶妙だった。その土地の人々とも率直な交流をしており、語り口に共感が持てた。

なかなかの才人であると改めて感服した。まちおこしについては、さまざまな貴重な話が紹介され、改めて昔の人の知恵と実行力に感じ入るとともに、我々現代人は知恵と工夫が足りないのではないかと考えるきっかけにもなった

- 1月2日(土)ブラタモリ「#21 富士山頂」(総合 前11:04~11:48:30)を見た。なぜ富士山信仰があるのかということもよく理解できた。納得できるテーマだった。この番組は、自分たちのまちや歴史、土地について知らないことを知り、当たり前だと思っていることを深く考えるきっかけを得られるという意味で、大変よい番組だと思う。視聴者にもわかりやすく伝えられている。また、タモリさんの人柄もにじみ出ており、好感が持てる番組に仕上がっていると思う。
- 1月6日(水)「フェアブルもびっくり! ぞくぞく発見! 夢のムシ技術」(総合 後8:00~8:43)を見た。近年話題になっている生物模倣技術について、高精度映像、CG、研究の様子、実際の応用例の取材映像を、フェアブルを狂言回しに使い、極めて分かりやすく、かつ興味深く取りまとめていた番組だった。NHKらしい秀作ドキュメンタリーだった。
- 1月6日(水)歴史秘話ヒストリア「徹底解明! これが真田丸だ~地中に残された幻の城~」を見た。前評判のよい大河ドラマ「真田丸」が始まるに当たり、この番組は押さえておきたいと思い見た。真田丸に関する新たな情報が多く、興味深い内容だった。また戦で何十万という徳川軍に5,000の兵で勝利した真田丸の強さの秘密や大坂夏の陣の様子について、映像やアニメで詳しく紹介されていたので、よく理解できた。
- 1月9日(土)「もうすぐ真田丸スペシャル~キャストが旅する! ゆかりの地~」(総合 前8:45~9:18)を見た。出演者がゆかりの土地を訪ね、真田幸村の考え方や行動力に思いをはせる番組だったが、大河ドラマを見たいと思わせる仕掛けに感心した。NHKの予告番組は内容が充実していると思った。ドラマの構成や訴えたいことについて、あらかじめ視聴者に伝えるため工夫は重要だと思う。また出演者が役の人物になっていく役作りの過程のようなものをこの番組からは感じる事ができ、役者としての努力に感服した。また、大河ドラマでは3D画面の活用等の新しい手法も取り入れたと紹介されており、期待を持たせる内容だった。音楽についても、作曲家・服部隆之さんから、さまざまな才能が作り上げる臨場感を最大限に活用してやりたいという心意気の話があり、期待を持つことができた。
- 1月9日(土)NHK杯フィギュア「スペシャルエキシビジョン」(総合 後7:30~8:

55)を見た。浅田真央さんが大変なシーズンであったかもしれない中で子どもたちと一緒に踊っていたり、羽生結弦さんが被災地を訪ねる様子も描かれていた。荒川静香さんは、金メダルを獲得した時の演技に負けないくらいのすばらしい演技を披露しており、祈り歌のように演じていた点が印象に残った。荒川さんが金メダルを獲得したあと、どのような思いでスケートに携わり、年を重ねていったのか、金メダルのその後というテーマは今まであまり見なかったように思うので、そういう視点の番組もぜひ見てみたいと思った。司会の浅田舞さんが真央さんにインタビューをしていたが、男性のアナウンサーもいたので、真央さんへのインタビューは舞さん以外の方が行うといった配慮が必要だったのではないかと思った。スケート自体の内容はすばらしかった。

- 1月10日(日)「京都の食 8つの秘密」(BSP 後1:30~2:59)を見た。生粋の京都人の作家、柏井壽さんと、女優の忽那汐里さんが、「おもたせ」「お番菜」「豆腐」「お茶」「仕出し」「和菓子」「京弁当」「漬物」という8つのキーワードを頼りに京都の食の魅力を訪ねる番組だった。通常ならクローズアップされないような所を掘り下げており、ひとつずつがよくわかった。京都の人々の何百年もの歴史を守り続けていくというこだわりが、多くの人々から愛される京都の食を作っているのだと思った。
- 1月10日(日)プレミアムドラマ鴨川食堂(1)「母の肉じゃが」を見た。京都の食堂を舞台にしたドラマだった。萩原健一さんが出演するドラマは久しぶりでこれからも楽しみに見ていきたいと思う。ドラマの中で、岩下志麻さんが着物を着て、冷酒を飲みながら京都の味を批評していく姿が、とってもすてきだった。お勘定をする姿もかっこよく、同性でもほれほれするシーンだった。
- プレミアムドラマ鴨川食堂(1)「母の肉じゃが」を見た。岩下志麻さんの登場は意外だった。内容がとてもアットホームで、よかったと思う。ひとつだけリクエストしたいと思った点は、冒頭のエキストラが登場する場面と桜吹雪を描く場面だ。まず、エキストラが登場する場面は、彼らの動きがいかにもという感じがした。エキストラは違う意味で目立ちすぎていたように思う。全体がよいドラマであっただけに残念だった。地域発ドラマの場合は、地域の方が出演していることが微笑ましさにつながることもあると思うが、プレミアムドラマとして内容で勝負しようという時には、エキストラがあまりにも目立ちすぎてしまうのはよくないと思う。また、桜の花びらの描き方も、京都の桜という、いろいろな意味で季節感を大切に、旬の食材も描かれていくドラマではないかと思うので、そこがうそっぽい導入から入ってしまうともったいなかった。全体がとてもよかったですだけに、冒頭の部分だけが気

になった。

- 1月11日(月)プロフェッショナル仕事の流儀 放送10周年スペシャル「岡村隆史×プロフェッショナル Part 2」を見た。岡村さんが一番衝撃を受け、この番組を好きになるきっかけになったという坂東玉三郎さん、岐阜県高山市のカリスマ左官職人の挟土秀平さん、青森で無農薬でリンゴを育てる木村秋則さんと対談する内容だった。岡村さんの人柄もあり、その道のプロとしての信念やこだわりを楽しく話されていて、3人の方を取り上げた回は見えていなかったが、そのときの映像も盛り込んで放送されていたために、対談の内容がよく分かる番組になっていた。岡村さんが最も緊張して対談に臨んだ坂東さんから、自らの過去の過酷な体験を話した際に、「気楽にしたらいい」というひと言が返ってきたことは意外だった。また、歌舞伎に人生をささげてストイックな生活を送る坂東さんが、本当はお笑いが好きでひょうきんな部分がある方だと知り、とても親しみを覚えた。また、大河ドラマを見た際に挟土秀平さんが題字を書いていることを知って驚いたが、活躍されていることをうれしく思った。
- 1月12日(火)クローズアップ現代「“未来の紙”が世界を変える！？～日本発・新素材の可能性～」を見た。夢のマテリアルと言われるセルロースナノファイバーという素材の開発を追った番組だった。石油に頼らない社会を実現するため、草や木の繊維を用いながら次の新しい可能性を探るという点に驚いた。鉄の5倍の強さでありながら、曲げることもでき、飛行機、車、医療機器などさまざまなものに使える可能性があり、この素材を商品化するにあたっての課題も的確に取り上げていたと思う。自国の資源で高性能な材料を作り、産業を発展させていくという、循環型社会を考えるにあたりとても重要な発見だったと思う。ガラスに代わる新しい素材になるという話は夢物語ではないかとも思ったが、数年後には商品化が実現しそうだという話もあり、番組を見ながら現状も確認することができた点がよかった。特に医療機器に関しては、この素材を活用することに大きな可能性を感じた。「クローズアップ現代」は番組の看板である顔が変わる可能性があるということだが、個人的には残してほしいというか、彼女の下で「クローズアップ現代」を見たいと思った。
- 1月12日(火)イッピン「モダンで精緻！ “文様の美” 写す紙～三重 伊勢型紙～」を見た。20年ほど前は、女性の集まりには伊勢型紙のしおりなどを制作するという体験をよくしたが、最近はそのような機会も少なく、あまり見かけなくなっていた伊勢型紙が、職人の方の繊細な技と努力でおしゃれなライトスタンドやアクセサリに形を変えて評判を得ていた。1,000年も前から三重に伝わる伊勢型紙の魅力に

改めて気づかされた。これから自分たちの集まりには積極的に伊勢型紙を取り入れていこうと思った。

- 1月12日(火)ドラマ10 愛(いと)おしくて(1)「めぐりあい」を見た。韓流ドラマを連想させる内容だと思う。最初、お母さんのお墓に行くシーンは特に近いものを感じた。また、捕獲されたイヌが殺されてしまうという現状をドラマで描くのは、動物保護を伝える一つの方法でもありよいと思う。内容は40代以上の女性に好まれそうだった。NHKにしては、大胆なラブシーンを映像化していると思ったが、全体的に少し暗い感じがし、陰気な雰囲気漂っている点もつらいと思った。暗いことが悪いわけではないが、暗さの中にも明るい部分が見えると思う。役者はよい。今後の展開に期待したい。
- 1月12日(火)、19日(火)ドラマ10 愛(いと)おしくてを見た。出演者の迫真の演技に脱帽した。第1話の放送の後半で田中麗奈さんが演じる小夏を取り巻く状況がめまぐるしく変わり、多くの出演者が登場し、混乱した。具体的には、小夏を捨てた父親が現れたり、昔の恋人と出会ってしまったりするシーンだ。パンフレットを見ると「父に捨てられ、恋人にも裏切られ、愛をなくしてしまった小夏」という表現があったので納得できたが、番組を最初にぱっと見た視聴者にとっては、わかりづらかったのではなかろうか。ミステリーという意味で多様なシーンを集中させ期待させる手法はよいと思うが、それがあまりにも集中しすぎると視聴者も困惑してしまうと思う。それを回避する方法として、テロップを加えたり、例えば連続テレビ小説のようにナレーションで解説を加えてもよいのではないかと思った。第2話の放送の際は、第1話の振り返りがあったので、スムーズに番組に入っていくことができた。また、イヌが逃げ出すシーン、片隅の記憶に残る父親の愛情がよみがえるシーンなどで、背景に流れる音楽が場面とうまくマッチしていたと思う。何より嫉妬深い深浦怜子を演じる秋吉久美子さんの演技がすばらしかった。どこか愛情が不足し、いびつな状況になっている様子を感じた。
- 1月12日(火)、19日(火)ドラマ10「愛(いと)おしくて」を見た。小夏と光太郎がどのように出会っていくのか、2話でもひかれ合う2人の変化を感じた。今後、師匠の怜子の厳しい試練や妬みの中、どのように話が展開していくのか楽しみだ。父親役の小林稔侍さんはせりふが少ない中、見事な演技で、心に残った。一方、主人公の小夏が突然父親と出会ったり、昔の恋人と出会ったりという展開が白々しくも思えた。
- 1月16日(土)超絶凄(すご)ワザ!「夢をかなえますSP 折れない赤鉛筆作っ

て！」を見た。慣れすぎていて大人は疑問に感じない問題だが、子どもはそれを直してほしいとNHKにメールを送り、それに対して挑戦しようという今回の番組。楽しく見る事ができた。最後に完成した折れない赤鉛筆は、市販されればよいと思った。

- 1月1日(金)NHKスペシャル「大予測！ 2016年世界はどうか？」(総合 後9:00~9:58)、9日(土)NHKスペシャル シリーズ激動の世界 第1回「テロと難民~EU共同体の分断~」(総合 後9:10~9:59)、10日(日)NHKスペシャル シリーズ激動の世界 第2回「大国復活の野望~ロシア・プーチンの賭け~」(総合 後9:15~10:04)、16日(土)NHKスペシャル シリーズ 激動の世界 第3回「揺れる“超大国”~アメリカはどこへ~」を見た。1日に放送された「大予測！」は、タイトルにひかれて見たが、まとまりがなく、希薄な内容だったと思う。コメンテーターも大予測をしていないように感じた。今年から始まる「シリーズ激動の世界」の宣伝番組であるような位置づけも残念だった。コメンテーターの3名は、それぞれに視点や論点に違いがあり、発言も興味深かった。ただ、司会者からの質問にうまく答えられず、困惑の度を深めていく出演者もあり、その姿は痛々しかった。一方、シリーズで放送した3作品は質量ともに良く、情報満載の見応えのある内容だった。いずれも現場の映像にわかりやすい解説が端的に加えられており、各シーンの課題を象徴的に明示する世界的リーダーの発言が、いずれも章立てのように印象深く引用されていたと思う。また、構成は、視聴者の興味を喚起し、継続的に促すよいテンポで、ときにドラマチックにまとめられており、現在世界が抱える課題について、歴史、経済、政治模様を含めて鳥瞰(かん)するには大変便利な内容だった。いずれも新聞やニュースなどで報じられている内容ではあるものの、取材映像から与えられる課題のリアリティーとインパクトは絶大なものがあつた。映像と取材の力を改めて痛感した。一方で、日本との関係についての言及がほとんどなかったため、全体的に対岸の火事といった観が強く、視聴者に自分との関係性を感じさせ、課題意識を与える内容には至らなかったように思う。また、取材した人間が原稿を読み上げる様子もひと事感を強めていたのではないか。

- 歴史秘話ヒストリア 1月4日(水)「名作選 出雲 縁結びの旅へ！~いにしへの神話の里物語~」、12月30日(水)「あの名言にはウラがある！？~ヒストリア書房の迷える人々~」、1月6日(水)「徹底解明！これが真田丸だ~地中に残された幻の城~」、1月13日(水)「戦のない世を目指して~戦国スーパードクター 曲直瀬道三~」、1月20日(水)「新常識！歴史NEWS~目からウロコの大発見2015-2016」を連続して全て見た。それぞれおもしろく、改めて「歴史秘話ヒストリア」の役割を考えさせられた。20日(水)の放送では、1年間に起こったさまざまな発見

や発掘等に関してベスト10を選びそれを取り上げていたが、身近に感じる内容ができる内容だった。ニュースでも情報として得てきたものもあったが、認識を新たにすることができた。この番組は演出が過剰であったり、検証が足りないと感じることもあったが、歴史は今も変わり続けているということに関し、本当にそのとおりだと思った。興味深い表現だった。歴史教育は受験も関係しているのかもしれないが、いつも明治くらいで終わり、年号を覚えていくだけの印象がある。このような歴史教育でよいのかと、番組を見ながら考えた。例えば日本人がノーベル賞を取ると科学に関心を持つように、身近に起きた歴史を背景にしながら、その歴史をひもとき、歴史を認識させていくようなやり方の番組作りも必要なのではないかと思った。世界で起こっているような問題でも、歴史は繰り返すということもありえるので、なぜ繰り返すのかということも含めながら考えていく必要があると思う。

- 大河ドラマ「真田丸」は、物語を展開するテンポがよく、歴史上の意外性も十分盛り込まれていた。また、危険に見舞われた時、人間の行動はどうかということについて、現代のさまざまな問題を考慮しても、教育的な要素も入っていたと思う。初回としては、大変満足のいく内容だった。また、映写技術については、画角や色彩、逆光で人物を撮影する技術などがよかった。特に、黒色のグラデーションが美しく高い映像技術を感じた。昔の大河ドラマには、画面が暗すぎたものもあったが、今回はそのようなこともなく、満足できる映像だった。山の彩色などにもう少し工夫がされていると、さらによかった。物語としては、意外性という意味で、敗軍の武将である武田勝頼に焦点を当て、部下にどんどん裏切られ苦悩する様子が描かれていた点もよかった。1582年に浅間山が噴火したとか、木曾家が裏切って織田信長についていくなど、史実についても新たに得る知識があり、参考になった。
- 第66回NHK紅白歌合戦「ザッツ、日本！ザッツ、紅白！」について、採点方法がよく分からなかった。視聴者参加が出来たので、参加してみたが、「投票が認識されました」というメッセージは画面に出たが、後の採点方法がよく分からなかった。集計方法が知りたい。

(NHK側)

視聴者の方がデジタルTV、ワンセグ、アプリなどで参加してくださった投票は全て集計される仕組みになっている。会場でゲスト審査員を含む客席の皆さんが紅白のウチワを挙げて投票していただいているものは、麻布大学野鳥研究部の皆さんが実際に数えて集計している。それらすべてを合算したものが点数になっている。

NHK名古屋放送局
番組審議会事務局

平成27年12月NHK中部地方放送番組審議会

12月のNHK中部地方放送番組審議会は、17日(木)、NHK名古屋放送局において、10人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「クローズアップ現代」に関するBPO勧告について報告があった。続いて、ナビゲーション「サミットがやってくる～伊勢志摩 世界へのPR戦略～」について小沢津放送局放送部副部長から説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、1月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	森棟 公夫	(学校法人椋山女学園理事長、椋山女学園大学学長)
副委員長	松本 耕作	(加賀味噌食品工業協業組合理事長)
委員	小澤 正俊	(大同特殊鋼(株)相談役)
	加藤 勇二	(愛知県農業協同組合中央会常務理事)
	小寺 功子	(三重県漁協女性部連合会会長理事)
	佐野 俊和	(コマツサービスエース(株)代表取締役社長)
	田中 章義	(歌人・作家)
	野田 雄一	(富山ガラス工房館長、富山ガラス造形研究所教授)
	長谷川明子	(日本ビオトープ管理士会中部支部会長)
	真能 秀久	(中日新聞社取締役管理局長)

(主な発言)

<ナビゲーション「サミットがやってくる～伊勢志摩 世界へのPR戦略～」の編成について>

- 「何をもたらすのか」という問いかけ方で、番組意図が推測できてしまうのが残念だった。パリで起きたテロのこともあり、警備上の問題に対する不安は十分理解できる。ただ、60億円という税金を使うことについて、その使い道を保育所の問題と同列に扱うのは短絡的だと感じた。350億円の経済効果やPR効果、二次効果、経済波及効果を考えると、60億という金額は大きいですが、投資と考えれば極めて妥当だと思う。街頭インタビューを一つ一つ紹介するよりも、街の意見を集約し、ボードなどを使って地域住民の不安を一覧にし、それについてコメントしていくというやり方もあったのではないかと。開催まで6か月であり、番組でも言及していたが、

できることは限られており、夢を語る段階ではない。各国首脳の警備や事故防止の観点から、いかに地域発信の企画の必要性を説き実現していくか、また、メディアの先にいる世界中の視聴者を意識できるか、この2点が大きなポイントのように感じた。前回の北海道洞爺湖サミットの事例紹介はこれらの課題を抽出するために、極めて有効な事例紹介だったと思う。

- 取材映像による現状の把握と課題提起、適切なQ&Aとコメンテーターによる解説。いずれも、番組タイトルによく合致し、訴求テーマを十分に満たす質の高い内容だった。構成も、直近の関心事であるテロの脅威について、過剰に振り回されることなく、適量の扱いであったように思う。サミット効果についても、千載一遇の好機といった視点の前のめりの紹介にとどまらず前回の北海道洞爺湖サミットの事例をあげながら、波及効果を生み出した点と成果を生み出さなかった点を紹介し、何が課題か整理されていた点がよかった。コメンテーターは、専門的な知見を端的に述べており、現状の課題整理と解決策、今後の課題を端的に示していた点がよかった。また、担当取材記者の課題認識や説明も、簡潔明瞭でよかった。唯一の問題点は放送のタイミングだ。60億円もの費用を投下するサミットのPR効果について、どのような取り組みかを示したこの番組の放送により、図らずも開催まで半年を切ったこのタイミングではすでに、番組が示した課題の解決には間に合わないことがわかってしまうように感じた。視聴者に60億円の投資が地元負担の費用にしかならない印象を与え、マイナス視点のウエイトが高まったように思う。サミットに向けてPR活動に奔走している県や地域にとって、この番組が追い風になるとは思えなかった。
- サミットの開催が決定して以降、三重県の知名度は急に上がったと思う。番組を視聴した周辺からは、番組からは得るものが少なかったという厳しい意見が多かったが、個人的には北海道洞爺湖の温泉街の寂しい風景が一番印象に残った。地元で商売をしている人とそうでない一般の人とで、サミットに対しての温度差があるように思う。伊勢エビやアワビなど最高の食材に加えて、黒ニンニクなど新しい食品開発に取り組んでいるという声がある一方、サミットの開催時期が真珠養殖の核入れ時期と重なっていると不安視する声もあり、警備の強化で日常生活にどのような影響が出るのか不安に思っている人もいる。報道関係者や警備関係者も含めると、地元住民の人口より多い人数の人々が集まることになる。旅館はサミットのために、例年受け入れている修学旅行生をキャンセルしているところもあり、サミット翌年以降どうなるのか不安だという声もある。番組で述べられていたような経済効果があることを期待しながら、三重県には“食材の豊富な三重”“美しい三重”をPRしてほしいと思う。また地域密着のNHKには、小さなことにも目を向けて、発信し

て行ってほしい。

- 報道のタイミングはよかった。しかし、取材内容については不満が残った。サミットとは、8年ぶりに日本で開催される世界的に重要な会議で、大きな曲がり角に来ている世界の難問題を、いかに対処するのかを議論することが本来の役割だと思う。今回の番組は、伊勢志摩にあまりに焦点を絞り過ぎたために、本来の意義について関心や理解を深めさせる番組としては力不足だったと思う。また、直前にパリでテロが発生したことで、テロに対する不安が色濃く出過ぎ、どっちつかずの内容になっていたことが残念だった。制作者間で趣旨と構成をどのように変更していくか、議論が不足していたのではないだろうか。「ナビゲーション」は時間的な制約もあるので、総花的にならざるを得なくなる点で、惜しい番組だ。鋭く深く、時代の潮流を読み解くという「ナビゲーション」本来の目的が不明確になってしまったと思う。内容ある取材を生かし切れていないようにもとれ、今後工夫が必要な点だ。一方、世界の要人が集まり今後の方向性を決定するという会議を、三重県伊勢志摩で開催するということは絶好の機会であり、これに関する取材は時間をかけていることがよくわかり、好ましく思った。地元の食材を世界ブランドにしたいという意気込みは、三重県の熱い思いがにじみ出ており、評価したい。ただ、市民も工夫しPRしていく必要があるという切り口は、伝えるタイミングとしては遅かった。目先の効果ではなく先行投資だというコンサルタントの発言は大変印象的だった。行政も含めて将来に残る事業をいかに行うかという点で、意味のある発言だと思う。多大な費用を使うことについて、他のことに使ったほうがよいという街頭インタビューを番組内で取り上げていたが、ひと事には立ち入らず自分がよければよいという国際感覚を欠いた日本人の悪い面が出たように思った。

- 「世界へのPR戦略」というサブタイトルで、サミットを情報発信のチャンスという基本的な捉え方をしていると思った。「地元の魅力をPRする絶好の舞台」「知名度を上げる絶好のチャンス」「特産の高級食材を世界に売り込める」「三重の食材を全世界にPRするチャンス」などさまざまな言葉を使い、番組の最後でもキャスターが「どれだけ海外にいろいろな人たちに向けて情報発信していくのか」と締めくくっていたが、個人的には、本当にサミットは伊勢志摩の名を世界に発信するのか疑問に思う。例えば、昨年サミットの開催地を覚えているか、一昨年はどこだったかと問うと覚えていない人も多い。サミットは少なくとも地元の食材や知名度を情報発信するというイベントに捉えないほうがよいのではないか。サミットを地元として意義あるものにするためには、情報を受信するチャンスと捉えたほうがよいと思う。各国首脳がこの地で何を議論するのか、今の世界情勢はどうなっているのか、このようなことを議論することで、地域が世界に一步近づくのではないかと思う。

警備や通訳も、世界一級の体制が敷かれるだろう。そうしたノウハウを吸収し体験する機会として、地域で何を受け止め、何を残していくのか、世界基準を伊勢志摩地区にどう根づかせるのかが重要だと思う。また、他の委員も指摘していたが、会議の本質に迫ることを日本全体で取り組むべきだ。内容やその結論が歴史に残る会議は多くない。サミットのホスト国として、あるいは会議を迎え入れる地元として、日本人が世界情勢に対して考えていることを各国の首脳陣にメッセージを送るくらいのことをしてほしいと思う。

(NHK側)

今回の取材は、「ナビゲーション」のためだけではない。「ほっとイブニングみえ」という三重県向けの番組では、ほぼ毎日、何らかの形でサミットに関するニュースを放送している。そのため、記者やディレクターが地域で日々さまざまな取材をすることができており、住民の気持ちや不安を聞いている状況だ。今後はさらに、地元の人々への取材を深めていく必要があると感じた。

(NHK側)

サミットへの関わり方の違いから人によって意見が違うというのはご指摘のとおり。三重県内でもいろいろな考えをお持ちの方がいらっしゃる。地域内でもそれぞれ違う意見がある中で、どのようにまとめ伝えるかという点で、結果的にどっちつかずという部分があった可能性はあると思う。市民の声は、実際にそのような声があるのであれば、取り上げないという選択肢はないと考え、番組で紹介した。地元を発信していくべきという切り口は、もともと今回のサミットは三重県の誘致活動が実現した結果でもあるという点を踏まえれば重要な視点と考えた。その上で、洞爺湖サミットの例をとり、その時実際どうだったのか、課題をどのように乗り越えたのかを紹介することは、この地域に役立つのではないかという意識があり番組でも紹介した。首脳会議の本質的な部分は私たちも取り扱いたいと思っている。今後、東京とも連携しながら他番組も含め検討していきたい。

- 非常にタイムリーな番組だった。ただ、サミットを開催すれば人が来るというのは幻想ではないかと思う。2010年に名古屋でCOP10を開催し、世界に名古屋を発信するべくさまざまなPRを行っていたが、名古屋がどこか分からない外国人はいまだに多い。三重県は昔から「うまし国」ということでPRしており、おいしいも

のもある。和食が世界無形文化遺産になり、先日のミラノ万国博覧会もテーマが「食」だった。日本の食は、海外の人にはここまで伝わっており、サミットではこうするべきだというPR戦略の話を期待したが、そうではなかったので、少し物足りなく感じた。一方、日本の前回の開催地であった北海道洞爺湖の温泉街の影の部分をしつかりと伝えていた点はよかった。洞爺湖の事例は、サミットはお祭りではなく、きちんと警備をするべき会議だということ認識させてくれた。ただ、そういった対策や戦略の先に何があり、その効果はどうだったのかを番組内でも検証してほしいかった。サミットは投資であり、PR効果があるとコメンテーターの方が説明していたが、それは本当にごく一部の人にとってだけなのではないかと感じた。日本では、洞爺湖サミットの他にも過去に国際会議を実施してきており、その警備体制の振り返りなどもあると、もう少し番組としてわかりやすくなったと思う。「市民が発信していくことが必要」というまとめだったが、違和感を覚えた。サミットと個人は全く次元が違う。関連したワークショップなどを通じ、それに参加し発信することは個人でもできると思うが、個人がサミット自体のPRを行うことは難しい、容易に関われるものでもない。「市民が」という落とし込みをしたことにより、焦点がぼやけてしまい残念だった。

- 番組タイトルで言われている「PR作戦」というよりは、サミット開催による不安がクローズアップされた内容に感じた。特に、洞爺湖サミットの警備体制に関する事例は驚くものも多く、そこまでしなければいけないのかと思った。世界情勢を考えると、テロに対する対策などに視点がいくことはしかたがないと思うが、番組タイトルとは合っていないように思った。また、サミット開催前には大臣級の会議も開かれるので、そのあたりにも触れてもよかったと思う。このような大きなイベントを実施する時は、行政も重要だと思うが、地元がいかに前向きに参加していくかが重要だと思う。また、サミットをチャンスと捉えられるか、単に費用がかかったイベントに終わるかはそれぞれの取り組み方により大きな違いが出てくると思う。あと6か月しかないが、可能な限り準備をし、安全な伊勢志摩をPRできるとよいと思った。
- 一番気になった点は、他の委員も指摘していたが、恐らく地域のことは考えていないだろうという点だ。フードイノベーション課が地域の食材を売り込む様子が番組で紹介されていたが、それを今やっているのかという印象を受けた。本来取り上げるべき課題は、世界情勢が変化する重要な時期に開催される今回のサミットとは、どのような意味があるのかということだと思うし、そのようなことを知りたかった。もし、今回の番組のように「食」を切り口に、地域の食材をPRすることに焦点を当てるのであれば、サミットに関わる人たちの食事メニューはどのようなものが

あるのか、それに伴いどのような器を使用するのかなどを紹介した方が、地域の食材について、何をどのように使えばよいか、誰がどう関わるのかということも見えてきたと思う。サミットに関して伝えるべき本来の重要な課題はたくさんあると思うが、それとは別に今回のような「食」をテーマにするならば、切り口を工夫することで、何がどのような進捗状況になっているのかを、わかりやすく伝えることができたのではないかと思う。

- 視聴者のサミットへの関心は高いと思うが、やはり、そもそものサミットの大テーマや開催の歴史、サミットが果たしてきた役割など、少しでもよいので紹介してほしい。導入の意味でも、サミットはこんなにも重要なものだという部分が触れられているかいないかの違いは大きい。番組ではそこが説明されないまま、サミットでのPR戦略から入ったので、もの足りなさを感じる内容になってしまったように思う。ただ、北海道洞爺湖サミットの際に、シェフの中道博さんが国と2か月交渉したという話は、通常なら大手広告代理店や政府が仕切って進めることに、個人でも地域のためを思い、動いていた人がいたという事実を東海北陸地方の人々に発信する意義は大いにある。しかし、現実的には、洞爺湖サミットの際は乾杯には静岡のお酒が使われており、地域の地産地消ももちろん大切な概念だが、恐らく今回の食材も日本政府のレベルで考えていくと、日本全体としての「おもてなし」という発想になるのではないか。「食」が全て地元の食材が使われるということであれば、今回の番組のような切り口もあったかもしれないが、実際に出される食事に関しては全国各地からさまざまなものが届けられるのがサミットだと思う。今までのサミットにはないような地域での盛り上がりが起こり、次につながるようなものが見いだせれば、それはすばらしいことだと思う。サミットに関しては、今回で終わりでなく、開催直前になれば他の切り口の番組もできると思う。人に寄り添った番組や世界全体をふかんして問題を考える番組など、いろいろな番組を丁寧に見ていきたいと思った。
- 番組の内容がフードイノベーション課および三重の食材中心だったが、本来の三重の観光とズレているように思った。本来は、伊勢神宮にまつわる歴史や自然、志摩のきれいな海などが注目すべき点であると思う。「うまし国」という言葉は知らなかったが、少しバランスを欠いた内容だった。食材に関しても、外国人向けの食材と日本人向けの食材は違うだろう。頭の付いた伊勢エビの刺身が映されていたが、外国人によっては、残酷な料理だと思う人は大勢いるのではないだろうか。日本人の感覚と外国人の感覚は違うと思う。また、番組を通じて三重の人々の気持ちの熱さが見えてこなかった。その部分をもう少し知りたかった。コメンテーターの方は洞爺湖サミットのクルーズについて、報道陣を乗せればよかったと述べていたが、

仮に伊勢志摩もクルーズを行うことになった場合、洞爺湖サミットの教訓を生かして県側は報道陣を本当に乗せることができるのだろうかと疑問に思った。コメンテーターの言葉も意味はあるが、それを実現することでどのような効果があるのか、コスト面も合わせた分析も今後必要だと番組を見ていて思った。

- 番組を視聴する前は、サミットで利用する伊勢の食材や各国の首脳が泊まるホテルのことを紹介する番組だと想像していた。しかし、まったく思い描いていた内容とは違い、サミットが来ることによって、伊勢志摩がどう変わり、その後どうならねばいけないかという問題提起があり、よかったと思う。洞爺湖町の現在を通して、その反省を見聞きできた良い番組だった。いつもイベントを行う時には、そのPR効果や経済効果という試算がされるが、今回のサミットに関わらず、本当に国民や県民が恩恵を受けるのか、一過性に終わらせないように考えていかなければいけない問題だと思った。内容として良かった点は、伊勢志摩の地図を最初に見せ、景観がよくわかった点。2つ目は、サミットを機会に、伊勢海老やアワビ、かき以外の食材を売り込むチャンスと捉え、三重県庁にはフードイノベーション課なるものがあり、三重県庁のサミットにかける思いが伝わってきた点。3つ目は、洞爺湖の事例を挙げていた点だ。一方、サミットのテロ対策に使われる金額は、県支出金額で60億円になり、県民にとっては有意義に使ってほしいと思うお金だと思うが、それをコメンテーターの方が「費用ではなく投資とってください」と言った点は、県民の気持ちを思うと軽率のように感じた。

(NHK側)

食材以外にもいろいろと取り上げたいものはあった。例えば三重県鳥羽市はバリアフリー観光を日本で初めて実施しており、サミットを機に外国人にもバリアフリー観光を体験してもらおうという動きもある。今回フードイノベーション課に絞って番組を制作したのは、三重県は、食材はよいものがあるがPRがうまくいっていないという実情があるからだ。このフードイノベーション課は4年前にできたばかりの課だが、我々としてはサミットを機にフードイノベーション課の取り組みが実を結び、三重ブランドが世界に知れ渡るとよいという思いで制作した。また、この番組を制作する際は、地元の人にとって何が利益なのか伝えたいという意図があった。サミット自体がどういうもので何が話されるのかというよりは、地元の人たちにどのようなメリットがあり、何をすれば不安が解消されるのかを取り上げていきたいと思ったため、今回のような内容になった。タイトルについては、地元のPR活動を応援したいという思いがあり、今回

のようになった。今後も地域の盛り上がりに着目し、よい取り組みは取材していきたい。

(NHK側)

サミットの食事メニューの紹介は、今後の取材課題としたい。ただ、情報管理が厳しく、どこまで取材できるかは難しい面もある。伝えるべきことを伝えていきたいと考えている。洞爺湖サミットの際に、個人が国と折衝しながら進めたという事例は、事実としてあったことで、今回の参考になればという意味で紹介した。それが市民に責任を押しつけるような印象を与えたのであれば、それは我々の本意ではないので、今後気をつけていきたい。冒頭でサミットの概要を取り上げるVTR等があってもよかったのではという点に関しては、その時の方針にもよるが、今後の番組制作に生かしていきたいと思う。さまざまな切り口でというご意見は、まさにそのとおりだと我々も思っている。しっかりと取材をしていきたい。

<放送番組一般について>

- 12月4日(金)静岡スペシャル「ふたりの“約束” ～車いす卓球 土井健太郎選手～」(総合 後7:30~7:55 静岡県域)を見た。全国の方に見てほしいと思う内容だった。12月20日(日)に中部ブロックで放送されるそうだが、よく連携できていると思う。主人公の19歳の青年は日本代表選手として、身内を亡くしたひとりの選手として、いろいろな表情を番組内で見せてくれていた。丁寧に追跡取材しているからこそ得られる表情があると思うので、2020年パラリンピックまで追いかけ続け、彼の姿を見たいと思った。

- 12月4日(金)ナビゲーション「スーパー激変 変わる消費の現場」を見た。大量生産、大量消費を背景に、大量仕入れによるコスト削減、販売増加、こういったビジネスモデルの限界があることはよく知られていると思う。そのような状況下で、ショッピングモールやレジャー施設を併設することで集客をはかる、あるいは食品に特化するなどの具体的な事例をあげており、わかりやすく説明されていた。一方、激安指向のスーパーは、いくら競争とはいえ、価格を下げていくと本来の商品価値がどの辺りが適正なのか、消費者は分からなくなってしまうのではないだろうか。メーカーに決定権がなくなり、消費者に価格のみが強調され、目玉商品として商品価値が低下させられているケースもある。メーカーの苦悩もスーパーの激変の背景としてあると思うので、スーパーの現状分析と紹介で終わっていた点は物足りなかった。「おはよう石川」の時間帯に同じ内容のものが一部編集し放送されていたが、

どのような基準・放送範囲で行われているのか気になった。地元のニュースが取り上げられる時間帯なので、少し違和感があった。特に今回の場合、スーパーの競争は地域によって異なるので、この時間帯に他県のスーパーの話題を放送することは不要に思えた。

(NHK側)

12月4日(金)ナビゲーション「スーパー 激変 変わる消費の現場」について、メーカーの苦悩が描かれていないという点は、全くご指摘のとおりで、今回に関しては、いわゆる総合スーパーというビジネスモデルが曲がり角にさしかかっており、スーパーのほうに焦点を絞り制作をしたが、流通との関係の中でメーカーに苦悩があるという点も事実だと思う。今後の取材の課題にしたい。また、「おはよう日本」の時間帯に「ナビゲーション」の一部が放送されたことについては、午前7時45分から8時の部分は各局から電波を出し放送しているが、そのうち5分程度の企画については東海・北陸7県で共通のものを放送している。総合スーパーが頭打ちの中で、食品に特化したスーパーが好調というのは、他地域にも共通することではないかと思い、放送した。「ナビゲーション」に限らないが、一つの番組で放送した内容の一部を別途取り上げて他の番組で放送するというのは、少しでも多くの視聴者に見ていただくために時々行っている。

- 12月4日(金)ナビゲーション「スーパー 激変 変わる消費の現場」はコメンテーターの方がいろいろな組み合わせが無限にあり、その中でどうするかと説明していたが、いろいろな組み合わせというのは実は個性化の話だと思う。個性をどう出すかという点で、番組としては非常にいい内容だったと思う。
- 12月4日(金)金とく「春風亭昇太の 家康に学ぶ！人生を成功させる哲学」を見た。演出は、他番組でもよく目にするバスで各地をクイズ形式で回るという内容で、オリジナリティーを感じられなかった点が残念だった。また、アナウンサーにバスガイドの格好をさせる必要があったのかも疑問に思った。一方、訪れた場所の紹介や徳川家康が何を学び何を考えたかという紹介は大変わかりやすく、家康の人柄を理解する上で、興味深い内容だった。なお、番組にバラエティ感を出すために若い女性タレントを入れることに異論はないが、今回の出演者のキャラクターは個性が際立ちすぎていたように思う。番組全体の雰囲気が出演者に引っ張られている印象を受けた。

- 12月4日(金)金とく「春風亭昇太の 家康に学ぶ！人生を成功させる哲学」を見た。内容はよかったと思うが、コメントから事前にあまり調べていないような印象を受け、なぜNHKが出演を依頼したのか疑問が残る出演者もいた。家康は久能山東照宮にお墓があり、死んだあとも平和を願い西の方を向いてにらみをきかしているというエピソードは興味深かった。

- 12月4日(金)金とく「春風亭昇太の 家康に学ぶ！人生を成功させる哲学」を見た。ストーリーは非常によかった。訪れた場所も非常に要を得ていて、内容も豊かだった。出演者の中で番組の雰囲気合わない人がいたという意見もあったが、私は「金とく」は視聴者の幅が広い時間帯なので、意図的に出演させているのだろうと理解している。深く掘り下げてはいなかったが、内容はしっかりした番組だった。

- 12月11日(金)金とく「切手のないおくりもの ～A SONG FOR YOU～ 五木ひろし・木山裕策がつづる歌だより」を見た。テレビはプロフェッショナルの方が出演する機会が多いが、個人的には市井の人々が画面に出てくると安心するし、テレビの役割の一つなのではないかと思う。これを強く感じたのは、東日本大震災のあとだ。民放も含め、被災地の方々がたくさん出演した時期がある。その頃のテレビは本当に新鮮に感じた。被災者の方たちの言葉はこんなにもストレートに人に伝わるものなのかと思った。今回の番組では3組の家族が取り上げられていたが、どんな家庭にもそれぞれの事情あるいは苦労があり、さまざまな思いを抱えながら日常を生きている。そのようなことを踏まえながら、歌手と当事者の思い出の曲をスパイスに、人情ドキュメンタリーとしてうまく構成されていた。あまり作りすぎずに、そのまま映像になっている点が番組の力になっているのではないだろうか。歌手の何気ないふるまいで、その人の人柄がわかったり、飾らない家族の様子によい家族だなと思わせる一面があったりした。このような生ものの強さを大事にしてほしいと思う。ただ、歌謡曲は大勢の前で歌う、あるいはメディアを通してひとりに伝えるという前提で作られている。今回の出演者の方はそのことも考慮し、場の雰囲気をうまく作り出して、場合によっては視聴者が引いてしまう雰囲気が生まれてしまうのではないだろうかと懸念した。無理に作らず、よい題材が見つかった時には、市井の人をうまく取り上げて心温まる番組を放送してほしい。

- 11月21日(土)NHKスペシャル 東日本大震災「追跡 原発事故のゴミ」を見た。NHKが自治体に対し大規模アンケートを実施し、初めて全体像が浮かび上がっていた。以前、認知症の患者数についてもNHKが調査を行い、社会問題化した事例があったが、今回の原発事故のゴミについても920万立方メートルという量が明

らかになり、また、仮置き場は復興支援を目的に農家が農地を提供している事例もあるということ。これは全く知らなかったが、このように成り立っていることに疑問も覚えた。また被災地ではないが、横浜市の学校には 830 キロの原発のゴミが保管されているようで、衝撃的だった。追跡取材をしてほしい。解決策がすぐに出る問題ではないが、今回のような自治体への大規模アンケートにより、農家や学校の状況が明らかになり有意義な内容であったと思うので、ぜひ第 2 弾、第 3 弾の番組を期待したい。

- 11月22日(日)NHKスペシャル「いのち 瀬戸内寂聴 密着500日」を見た。瀬戸内寂聴さんが2006年に制作者の方に「私が死ぬまでカメラを回しなさい」と伝え、実際に病気になって歩けなくなった際の、病床での姿、93歳の一人の老人としての表情まで撮影していた点は驚いた。よほどの信頼関係がないと難しいと思う。この番組を見て元気になったという声も聞く。寂聴さんの姿を見て、自分も頑張りたいというエールになる番組だったのではないだろうか。東日本大震災のあとや安全保障関連法案の問題の際など、自分がどのような状況であっても現地に行かされている。戦争に結びつくような現在の空気感には身をもって変えなければいけないという思いを番組からも感じることができ、今回の「密着500日」という番組に結実しよかったと思った。
- 11月23日(月)「ここにある幸せ ～福岡発地域ドラマ～」(総合 前9:05～10:04)を見た。地域発ドラマはとても好きでよく見ている。今まで見た地域発ドラマの中でこのドラマが一番よかった。地域の名産品も嫌らしくなく紹介されていた。主人公2人の内面を描いた作品だったが、地域の食べ物や名産が上手に生かされていた。映像、脚本ともにすばらしかったと思う。地域発ドラマは今後も増えていくと思うが、手本になるようなドラマだった。
- 11月23日(月)「新天地に挑んだ日本人～日本・ブラジル120年～」(総合 前10:10～10:59)を見た。今の日本人の生き方を問う、よき教育番組になっていたと思う。番組はブラジルの開拓民としての事例ではあるが、日本人として尊敬されるためにはどうすべきかと問いかけており、大変大きな警鐘を鳴らしていると思う。この番組の制作者は、人間とは何か、日本人とは何か、世界とは何なのかを非常によく考えている人だと思う。高く評価したい。
- 11月23日(月)解説スタジオ「テロとの戦い “憎悪の連鎖”は断ち切れるか」(総合 前11:00～11:54)を見た。テーマ設定が非常にタイムリーだったと思った。解説委員の皆さんの考え方や現状の分析、今後の指針は大変価値ある内容だったと思う。

全体をふかんした議論の進め方もわかりやすかった。また、ロシア・ヨーロッパの専門家がアメリカの専門家に直接意見や疑問を投げかける場面もあり、司会を通さずに進行している点も興味深かった。鋭い指摘や解説が多く、最も納得できたのが、テロとの戦いで格差是正など根源的な問題もあるが、まずやるべきは現状の熱を冷まし対処療法を行うことだと説いていた点だ。アメリカ・ヨーロッパ流の民主主義で世界を統一しようとするやり方は、イラクの失敗例から見てもわかるとおりイスラム社会では難しいというコンセンサスが出たが、このような問題についてこれまでしっかりとした指摘がなかったのが、貴重な番組だったと思う。最後に印象に残ったのは、日本は、島国の中で静かに平和に暮らせばよいという考えではやはり問題があるのではないか、そろそろ修正する時代になったのではないかという点だ。国連の安全保障理事会の一員にもなり、中国など大国に対して忌憚なき意見を述べた方がよいという指摘があったが、同感だ。いよいよ日本も世界に参画していくという意味で大変共感できる内容だった。

- 11月23日(月) プロフェッショナル 仕事の流儀・選「開拓せよ、最強の一本釣り カツオ漁師・明神学武」を見た。自然と闘う漁師の大変さとかっこよさが見られた番組だった。また、明神さんの船に乗り込み、夜中の1時から起きて取材をするなど、取材する側の大変さも感じた。また、300日も漁に出る船の中はどうなっているのか、お風呂や乗組員の部屋の様子、食事などが紹介されており、わかりやすい内容だった。ハイテクの機材を駆使し、独自の分析力でカツオの群れを読み当てる様子は、ほかの船と違う漁場を見つけるという強いこだわりと、日々の努力があったこと。見応えのある内容だった。最後に、「仕事が好きで好きでたまらんからこれだけのめり込める」という言葉を、久しぶりに漁師の口から聞いたと嬉しく思った。また、近年、若い漁師が減ってきているが、乗組員の中に若い漁師の方が何人もいたことがうれしかった。
- 11月24日(火) 世界ふれあい街歩き「大阪スペシャル」を見た。大阪出身の落語家の桂文枝さんが、道頓堀から法善寺、黒門市場へと歩いていたが、大阪の人たちとの会話は楽しく、見ていておもしろかった。文枝さんの人柄と心地よい関西弁は、この番組にぴったりだと思った。また、地名の由来や名所の歴史など、知らないことも多く、興味深く見た。芸能のまちと言われる大阪と、別の顔の大阪について、文枝さんの落語家としての思い出も合わせながら聞くことができ、肩肘張らずに見られる、あっという間に時間が過ぎた温かい内容の番組だった。
- 11月25日(水) ためしてガッテン「酒かすパワー大全開！」を見た。この3日後にバーベキューで「マシュマロは焼くとおいしいよね」と言ったところ、ほとんど

の人が「違うよ。酒かすを入れるとおいしいんだよ」と言っており、番組の効果を実感した。酒かすが自分で作れるとは思っていなかったが、ホームページの掲載のされ方も非常にわかりやすかった。この番組は、ホームページとのリンクがとてもよい。番組で使われるB級なギャグが何とも言えないが、NHKらしくてよいと思う。

- 11月28日(土) 金曜e y e 「幻の名作 発掘大作戦」(総合 前10:05~11:18)は、幼い頃に見た番組もあり、大変懐かしく見た。いずれの番組も、テレビが娯楽の中心であった時代の番組のようで、コンテンツのクオリティーが極めて高いことに感心した。特に、大江健三郎やつかこうへいなどが17歳の斉藤とも子に愛読書を通して人生観や読書観を語る「マイブック」という番組から感じる、テレビ番組を作る使命感や責任といったもの、「ビッグショー」で石原裕次郎に急にデュエットを求められ、戸惑いながらも歌う奈良岡朋子の姿から感じるライブ感など、テレビの本質的な存在意義を十分に感じさせるものが多かった。制作者の質の高さも感じさせられた。一方、番組紹介とともに、その番組にゆかりのある人々を登場させていたが、内容が希薄だった。発掘された番組に合っていないように思った。
- 11月28日(土) データなび 世界の明日を読む 「そうだったのか!日本人の名前~データで探る名前の未来」を見た。ゲストの騒々しい雰囲気は気になったが、内容はとてもおもしろかった。「佐藤」率が一番高い山梨県道志村では、見分けるために屋号を付けていたが、とてもユニークな屋号で、その屋号がお墓にも書かれていた点には驚いた。また、「田中宏和の会」というのも、おもしろかった。同姓同名の人として、アメリカで164人がギネス登録されているそうだが、それに挑戦しているとのこと。現在は、108人会員がいるそうで、番組の途中でツイッター上に「友達に“田中宏和さん”がいる」と書かれていたので、この番組をきっかけに増えることを期待したい。また、名字で対戦するバトルゲームや100年前からの名前ランキングなど、よく調べていることがわかり感心した。全体的に中味の濃い番組だったが、突然、紅葉ランキングや海外から検索される“JAPAN”ランキングなどが入り、あまりにも違う内容に違和感を覚えた。最後まで番組タイトルにあった内容の番組にしてほしいと思った。
- 11月28日(土) データなび 世界の明日を読む 「そうだったのか!日本人の名前~データで探る名前の未来」を見た。電話帳のデータベースでどの名字が多いか調べていたことに驚いた。それが名字の数を調べる唯一の方法だということは初めて知った。他の委員からも指摘があったが、私も出演者が騒々しかったように思った。また、ゲームもおもしろいのか疑問に思い、どのくらい利用者がいたのか知りたかつ

た。この番組は主要テーマのほかに2つ、3つ全く別の内容について触れているが、区切りがはっきりせず、そのまま流れていくので、見ているとなぜこのようなことを突然取り上げ始めるのかと思う。せつかくこのように取り上げるのであれば、出演者がうまくコメントするなどすれば、よい番組になると思う。

- 11月29日(日)NHKスペシャル 新・映像の世紀 「第2集 グレートファミリー 新たな支配者」を見た。テレビを見ることの醍醐味のひとつは、過去の映像をまとめて歴史の流れを表現し、それが理解できることだと思う。想像する部分を実際の映像で身近に見ることができることが興味を増進させるのではないか。そのような意味もあり、この種の番組を見ることが多い。今回は、1920年代の資本主義の拡大から1930年代の大恐慌による資本主義の挫折、あるいはファシズムに転換していく状況を、ロックフェラー、モルガン、デュポンなどのファミリーを通じてうまく表現していた。ナレーションや音楽も映像にマッチしていた。導入部分でニューヨークのロックフェラーセンターのクリスマスツリーの映像を入れて内容転換をはかるなど、現代の映像の取り混ぜ方がうまく、知らなかった事実も含め、興味深く見た。我々は2度の資本主義の危機を乗り越えてきたわけで、同じような過ちは繰り返してはいけないと番組を見て思った。
- 11月30日(月)プロフェッショナル 仕事の流儀「誰かが行かねば、道は拓けない～土木エンジニア・阿部玲子～」を見た。男女雇用機会均等法以前は、就職時に本当に男女差別があった。この方は幼い頃に関門トンネルを見て土木の世界に行くことを決意され、そのような時代も乗り越え、第一線で現在も働いている。男性社会の中で女性目線ではかできないことをひとつの仕事とし、地位を確立されていて、現役で社会に出ている女性にとって大変励みになる内容だったと思う。英語が全く話せずに海外で1から奮闘したというエピソードなども、これから自分も何か頑張ろうと思える勇気が湧く内容だった。
- 12月2日(水)あさイチ「今が大事!“老後破産”を防ぐには？」を見た。驚いたのは、年収1,200万円もあったような人や海外30か国でホテルマンとして活躍していた人が、貧困になっているという事実だ。長生きするよりも、健康寿命の方が重要で細々生きても貧困になるのではと思わされる番組だった。老後対策をしなくてははいけないと考えさせられる番組だった。
- 12月5日(土)「若き音楽家たちの挑戦 ～ドキュメント第84回日本音楽コンクール～」(Eテレ 後4:00～5:00)を見た。番組紹介に「彼らの素顔や練習風景、インタビューなど、2か月にわたる闘いに密着し、若き音楽家たちが音楽と向き合

う日々を描く」とあったので、楽しみにして視聴したが、期待していたような内容ではなかった。取材部分は“音楽と向き合う日々”というレベルの濃密さも、音楽家の個性を引き出すような工夫もなかったように思う。インタビューも核心を突くような問いも答えもなく、凡庸だった。全体の構成も、部門ごとに取り上げ方・演出が違い、「若き音楽家たちの挑戦」と真剣に向き合い番組を制作しようとしているのか疑問に思う内容だった。

- 12月6日(日)日曜美術館「アートの旅 みつけよう、美 秋編」を見た。大変すばらしい番組で、感動した。女優の小西真奈美さんは京都の大山崎山荘美術館へ、ミュージシャンの佐野元春さんは鳥取の植田正治の写真美術館に行くという内容で、2人のアーティストのすばらしい訪問記になっていたと思う。彼らの芸術観や、作者の生きざま・人生観、また作品に対する感想など、大変充実した内容だった。特に最初に女優の小西さんに初めての土地の感想を問うた時の答えが、大変気の利いたもので旅人の心で答えていた。秀逸な出だしだった。また、佐野さんは訪れた鳥取の美術館で、超現実主義いわゆるシュールリアリズムについて触れていたが、こちらが初心者でも興味を湧かせる内容だった。創作の過程もすばらしく、日本にもこのようなアーティストがいることに驚いた。
- 12月9日(水)NHKスペシャル 調査報告 介護危機「急増“無届け介護ハウス”」を見た。特別養護老人ホームに入りたくとも入れない人は全国で52万人もいるそうで、入れない人は民間の養護老人ホームに入るが、金銭的に難しい場合は無届けの介護ハウスに入るしかない。無届け介護ハウスの中には、環境が良くないものもあり、行政は規制を強めようとしているそうだが、番組を見ながら入居費用を低く保つためには現状のままの方がよく、また、一部の無届け介護ハウスは介護の面も非常に努力しているというメッセージを番組からくみ取ることができた。一方、環境が劣悪な介護ハウスもあるようで、そういったところは排除していく必要があるという主張も感じた。行政が指導し、無届け介護ハウスでなくなると、入居費用もあがる。そうするとその介護ハウスにいられなくなる人がいるわけで、そのような人たちに対し行政はどう対応していくのか考えさせられる番組だった。我々に対し十分なメッセージを伝える内容の番組だった。介護ハウスの実情について、新しい知識を得ることができた。
- 12月10日(木)あさイチ「JAPANAVI 愛知・三河湾の2つの島」を見た。ゲストに光浦靖子さんとダイヤモンド☆ユカイさんが出演していた。ダイヤモンド☆ユカイさんが愛知県のイクメンPR大使を務めているのは初めて知り、新鮮な目で見ることができた。残念だったのは、アナウンサーが船に乗り波をかぶった

シーンで意図が伝わりきらなかったところだ。タコの扱い方や説明のしかたはもう少しやりようがあったと思うが、「ためしてガッテン」で放送していたタコをやわらかくする方法を紹介する構成になっていた点は、番組が連携できておりよかった。日間賀島はフグが有名だというのは、愛知県民でも知らない人が多いので、フグをブランド化しようとする動きも取り上げてもらえると更によいと思った。また、味噌（みそ）玉を取り上げていたが、味噌があんなにおしゃれになるとは思わなかった。まん丸の味噌がトリュフのようにカラフルに並んでいて、これぞ世界に発信する文化としてのおもしろみだと思った。

- 12月14日(月)オイコノミア「ほんとに喜ばれるプレゼントの選び方」を見た。今の時期はクリスマスやお歳暮の時期で、何が喜ばれるのかということに関心があり見た。又吉直樹と経済学ということで、何がどう結び付いているのか、今年芥川賞で話題になったので、どのようなコメントや番組構成になっているのか興味があった。プレゼントは渡す側は渡したことによってうれしく、もらう側はプレゼントを選ぶために費やされた時間と物の背景にあるものに喜びを感じるということだった。自分でデザインした手作りのものを渡すことが一番よいだろうと思った。テレビ誌を見たらEテレの番組タイトルでカタカナが多い点が気になる。Eテレでは、この日だけを見ても、朝からカタカナの番組タイトルが続いていた。BS放送も含め、なぜカタカナのタイトルが多いのだろうかと思った。番組はおもしろかった。ただ、番組タイトルがカタカナの言葉が続いており、最後にこの「オイコノミア」というタイトルがあったので、気になった。カタカナで書かれるとこれを漢字に置き換えようと思っても置き換えられないので、その意味をどう理解しようか悩んでいた。

(NHK側)

子ども番組のタイトルでカタカナを使う場合が多い。意味というより音。聞いたときの音を意識している。子どもでも非常に下の年代の子どもたち。「オイコノミア」というのは、古代ギリシア語に由来しエコノミクスの語源。いろいろな経済の話、身近な社会のことを経済学で考えるというコンセプトのもと、このようなタイトルをつけている。子どもたちは、ぼんと言われたときの音感で受け入れやすいようなところがある。

- 12月15日(火)時論公論「パリ協定を採択」を見た。珍しく3人の解説委員が話をしており、時間帯も夜中だったので「解説スタジオ」よりも落ち着いて見るこ

とができた。今回のCOP21では、議定書が協定に変わっているので、なぜ協定になったのか、協定のメリット、デメリットのような説明が最初にあるとよかった。日本国内の二酸化炭素だけを減らしても地球に対してあまり大きな効果がないということが分かっているだけに、持続可能な開発とは何をすべきか、期待される技術革新の紹介はわかりやすくよかった。最後に委員が「国民ひとりひとりの危機意識の共有と具体的行動が必要」とまとめていたが、国民ひとりひとりが情報を共有しようとする、マスコミの力が不可欠だと思う。NHKの放送にも期待し、より一層注視したい。

NHK名古屋放送局
番組審議会事務局

平成27年11月NHK中部地方放送番組審議会

11月のNHK中部放送番組審議会は、19日(木)、NHK名古屋放送局において、10人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「クローズアップ現代」などに関するBPO意見について報告があった。続いて、ナビゲーション「どうなる未来の車～自動運転 最前線～」について、加藤報道部チーフ・プロデューサーから説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、12月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	森棟 公夫	(学校法人椋山女学園理事長、椋山女学園大学学長)
委員	小澤 正俊	(大同特殊鋼(株)相談役)
	加藤 勇二	(愛知県農業協同組合中央会常務理事)
	小寺 功子	(三重県漁協女性部連合会会長理事)
	佐野 俊和	(コマツサービスエース(株)代表取締役社長)
	田中 章義	(歌人・作家)
	中村 智景	(四季料亭「助六」女将)
	野田 雄一	(富山ガラス工房館長、富山ガラス造形研究所教授)
	長谷川明子	(日本ビオトープ管理士会中部支部会長)
	真能 秀久	(中日新聞社取締役管理局長)

(主な発言)

<ナビゲーション「どうなる未来の車～自動運転 最前線～」の編成について>

- 「ナビゲーション」は、1月16日(金)「水素がエネルギーを変える ～燃料電池車が切り開く未来～」や5月22日(金)「“究極のエコ”水素社会実現のカギは」など、車関係がテーマのときは情報量、情報精度、取材内容いずれを取っても充実しているため、今回も大変楽しみにし、視聴した。期待どおり、東京モーターショー2015での自動車メーカーの最新の動向からIT企業カーといったIT企業の参入まで、自動運転市場の登場プレイヤーを網羅しており、大変充実していた。また、自動運転社会の実現に向けた急速な動きの背景についても、社会的意義や、石川県珠

洲市の実証実験の取材による課題の明示などを用いて説明しており、大変分かりやすかった。さらに、自動運転というとメーカーの技術競争に焦点が行きがちなか中、その実現のカギを握るのは地図データであるという本質課題の掘り下げも十分だった。また、メーカーと地図データ作成企業の連携のみならず国を挙げての競争という展開もドラマチックで、見応えがあった。しかし、番組最後の総括で、ゲストコメンテーターが、地図情報は大した問題ではなく自動車メーカーの自動運転技術の良し悪しが雌雄を決するという、これまでの取材映像やテーマ訴求とは違うまとめ方をし、それを受けて司会のアナウンサーが「まず形を作ってみせることが大事ですね」と、見当外れのコメントで締めたことは、画竜点睛（がりょうてんせい）を欠き、残念なこと極まりなかった。生放送でない時は、筋違いなコメントやわかりづらい専門用語、聞き取りにくい発言などがあった場合は、軌道修正し収録し直すよう検討してほしい。今回の番組は、一見自動車の機能性能のハードウェア競争に見えていたことが、実は自動車メーカーのみならず国家を挙げて取り組まなければ勝てないデータ化とデータの標準化競争であるという点で、まさに人工知能やIoTの飛躍的進化という転換期における現在の競争環境の変化を、極めて如実に描き出した取材内容と構成だった。

- 夢のような時代が目の前に来ているのだと実感する番組だった。高速道路での実験で、的確な追い越しや車線変更が行われていたシーンは、人工知能のすばらしさを感じる反面、自分の運転とは違うという葛藤や自動運転ではない車とのトラブルが発生するのではないかと心配になった。番組で紹介していた金沢大学の菅沼直樹准教授の地域をサポートするための自動運転の取り組みは、よい取り組みで早く実現すればよいと思った。一方、市街地での自動運転には難しい問題が多数生じ、自動運転実現に向けての課題が多く残されているということがよくわかった。公共交通に自動運転が取り入れられればよいと思うが、例えば自動運転のバスが走った場合、バスの中で病人が出たときにはどうするのかと心配になった。やはり、人工知能と人間の共存が最大の課題になると思った。今後、地図データの開発が進み、すべての車が自動運転で動くようになれば、交通違反や交通事故がなくなり、安全なクルマ社会が来るのではないだろうかと期待しながら見た。また、家族と一緒に番組を見ていたが、呼べば車が人の手を借りずに自動で迎えにくるような時代が来るのではないかと想像を膨らまし、いろいろなことを話し合いながら興味深く見ることができた。
- テーマの意義やタイミングという意味で、切り口が大変よかった。時代が大きく変わろうとしているなかで、社会や時代が何を求めているのか、それぞれのニーズを先取りしており、大変意義のある取材だった。見応えがあった。将来的に実現の

可能性が高いという点も非常によかったが、他の委員からも指摘があったように、金沢大学が珠洲市で高齢者のために行っている取り組みについても、よく情報をつかみ取材したと思う。あの内容には大変感服した。大学らしいアプローチをしており、エールを送りたい。また、技術の核になるセンサーやレーザーは、かなりのレベルで信頼性が高くなっていると思う。数十年前の安全性とは桁違いで、性能が大変よくなっている。自動運転の頭脳を支えるソフト開発をあそこまでやっているという切り口も大変よかった。国際的な技術開発競争が進む中、官民一体で開発しているという点には、大変驚かされ、ニュースとしても非常にパンチ力のある内容だったと思う。人間の英知、工夫の可能性は、無限にあると感じた。ただ、分かりやすさという点では、もう少し図表などを用い、技術の進展具合や残された問題は何か、安全性その他はどうか、本当に2020年に出来るのかなど、もう少しうまく表現すると視聴者は理解を深めることができたのではないかと思う。

- クルマ社会には大きな2つの負の側面があると思い、クルマ社会に対して懐疑的な考えを持っている。ひとつは交通事故の問題。戦後から今日まで、多くの犠牲者が出ており、近年、交通事故による死者は減る傾向にあるが、それでも年間に約4,000人が亡くなっている。もうひとつの負の側面は、大気汚染、騒音、振動といった公害だ。窒素酸化物、二酸化炭素の排出が地球環境の大きな問題となっており、クルマ社会である限り逃れられないと思い見てきた。しかし、最近の技術革新で車はこの2つの負の側面を解決しようとしている。ハイブリッド車、電気自動車、水素を使った燃料電池車などが登場し、高齢化社会においても車は必需品になってきており、行政も車に対する考え方を変えてきている。それに加え、この番組で取り上げられたような自動運転の技術が登場し、交通事故死ゼロが実現するかもしれないと思い、興味深く見た。今回、高精度地図の開発競争にやや比重がかけられ過ぎたように思ったが、技術革新の現状を視聴者にしっかりと伝えることができたと思う。一方、交通事故死の原因を考えると今回の自動運転の技術も、実現させるまでに解決しなくてはいけない課題もあると思う。ひとつは、道路構造、施設、標識などの交通インフラの問題だ。技術革新に伴い、どのように変えていくべきかという問題がある。次に、法律の問題だ。法律の整備はこれまでも進められてきたが、自動運転で走る車が出てくると大幅に変えなくてはいけないと思う。3つ目は、車の性能の問題で、自動運転の技術の進歩に伴い、ブレーキ、シートベルト、エアバッグ、チャイルドシートといったものも変わってくるだろう。最後は、運転者の技能やマナーの問題だ。首都圏や関西圏と比較し、中部圏は車の比重が高い。社会の大きな変化はこの地方から始まるかもしれないという期待を抱かせてくれる番組だった。都市のありようや人々の暮らしも変わると思うので、技術革新だけではなく広い視野で追いかけてほしいと思う。

(NHK側)

自動運転の技術を取り上げる際、高精度地図の開発がどこまで進んでいるのかが焦点だった。東京モーターショー2015で各国の専門家が東京に集まり地図に関するシンポジウムも始まっていたので、国家間の競争なのか、各メーカーで情報交換しながら歩調を合わせ進めようとしているのか、最先端の取材ができたと思う。ただ、そのどちらなのかをはっきりと明示することはできず、あのような落としどころになった。さまざまな状況を注視しながらも最先端の情報を得ていきたいと考えている。

- 番組を見る前は夢のような自動車だと思い、期待しながら見たが、ハンドルを持たずに運転することが事故のない安全運転につながるのかと疑問に思い、自動運転に対して不安を持った。地図のシステム作りを本当に100パーセント信じてよいのか、ハンドルを持たずに運転し人間はこんなに楽をしてよいのか、何もしなくてもいいようになれば人間は退化していくのではないかと、といったことを考えながら見た。高速道路では、渋滞時に疲れずに前車との車間距離が取れるので便利だと思う。一方、追い越しや車線変更を自分がハンドルを持たずにできるのかと考えた時に、とても怖くなり、この車には乗れないと思った。自動運転の必要性については、交通事故の防止やドライバーの高齢化の問題、出合い頭の事故の減少のためといった事例を紹介していたが、番組の途中ではなく冒頭で紹介すると、そのあとの人工知能や地図作成のシステムの話などにスムーズに入ることができ、素人でも納得して視聴することができたと思う。金沢大学の菅沼准教授の「実際に困っている場所で使えるものを作る」という事例は、夢のツールとしての役割を果たしており、とてもよかった。高齢化社会の中で、自動運転バスがあればコストを抑えて高齢者の足となるだろうし、とても便利だと思う。早く実現してほしい。次に、世界の車メーカーとの闘いを日本のチームとして闘っていくオールジャパンの姿勢は、官民一緒になり動き出しているのを感じ、エールを送りたくなかったが、男性ばかりが登場し、まだまだ男性社会なのだと実感させられた。最後にアナウンサーとゲストの方が、とにかく早く商品化をし、世界で優位に立つ自動運転技術をとというまとめ方をし、国民の安全性を後回しにするような終わり方をしたことが残念だった。交通事故は人々の人生を変えてしまう。慎重に進めてほしいと思った。

- 自動運転の技術がここまで進んでいることに驚いた。自動運転には目指す姿が2つあり、ひとつはドライバーを支援し運転への負担を減らすことだと思う。もうひ

とつは、自動車メーカーではないIT企業などの企業が、新しいモビリティを作り、人間や物を運ぶということだと思う。いずれも初めて知ることが多く、興味深かった。また、自動運転の技術を持った車は、東京オリンピックでの実用化をめざしているという点に驚いた。また、地図データの技術が肝心で、その地図データが今後の自動運転の技術を進歩させていく重要な要素であることもよくわかった。欧米の企業が一体となり取り組む中、日本企業も鋭意開発に取り組んでいるという話だったが、自動車業界は世界の中で生きていくということがよく理解できた。この競争に負けると、日本の自動車産業は大きな影響を受けるだろうと思った。また、番組では自動運転がもたらすよい影響だけでなく、課題を明示していた点もよかった。自動運転の車とそうでない車が混在する状態はある程度続くと思うので、事故が起こった時にどうするのか、法的整備は苦労することが想像できる。地図データの開発については、工事をしている場所や障害物が出現した時はどのように回避をするのか疑問に残った。また、2020年の東京オリンピックをめざした日本の開発状況はよくわかったが、番組の中で少し紹介されたハンドルのない車、これについての開発状況がどのようになっているのかが気になった。課題を掘り下げて、「ナビゲーション」や他の番組で展開し、さらに深い番組作りをしてほしい。

- 市街を走る路面電車といった公共交通機関を使いながら、脱クルマ社会、いわゆるコンパクトシティをめざしている都市もある。この取り組みは全国でさまざまな形で広まりつつあるが、自動運転の技術により車を運転することが便利になり、事故も少なくなると、クルマ社会のままでもいろいろとよい面が出てくると思う。しかし、交通事故の懸念や駐車場の問題、高齢になり車を運転する人自体がいなくなるなども含めて考えると、まちなかにできるだけ車を入れずにコンパクトなまちづくりをめざしていく方向性は変わらないのではないかと思った。「鉄腕アトム」の世界が現実化し、車が空を飛び始めるのだろうかという想像もしたが、便利になると同時に、先ほど他の委員からも指摘があったように、課題は多くあると思う。当然、ビジネスに結びつく課題も多くあると思うが、生きていく上で便利なツールである車という捉え方すれば、もっと違う番組構成もできたのではないか。自動車業界は日本の経済の中心になっており、その関連企業も含めると計り知れない。番組で紹介されていた地図データの研究も含め、次世代の新しい分野の開拓につながる大きなビジネスチャンスがあると思った。自分の家族に置き換えて自動運転の車を使った生活を想像してみたが、高齢になり車を運転せずとも乗っているだけで行きたい場所に行ける車は非常に便利だろうと思った。いろいろと考えさせられる番組だった。
- テーマ設定が大変よかった。好むと好まざるとにかかわらず、このような問題は

数年後、明らかにこういう方向になっていくのだということ私たちに国民に伝えようとしているという意味でとてもわかりやすかった。番組では、自動運転技術の実用化をめざす企業名とその年度が具体的に挙がっており、実現が近いことを感じさせられた。他の委員のみなさんも指摘されているとおり、免許制度を始めとした法的整備はどうなるのか、自動車保険の問題はどうなるのかなど、企業が実用化に向けて動いているが、それにあわせて社会全体のシステムは適応していくのか、その根拠はどこにあるのか、疑問に思った。新しい時代の一端をしっかりと取材しており、最前線からの報告という意味ではとてもよかった。スタジオのゲストは専門用語を駆使しながら解説をしていたが、地上波で金曜夜に幅広い世代の人が視聴していることを考えると、適任ではなかったように思う。このようなテーマの時は、小学生・中学生が聞いても納得し理解できるくらいかみ砕いた解説が必要だと思った。たとえ生放送であっても、難しい専門用語が出そうな場合は用語解説の準備をしておく必要もあるのではないだろうか。今回は、番組冒頭の金沢大学の取り組みを紹介する部分は、感情移入して見ることができたが、スタジオで難しい用語が飛び交った時点で一気に感情が冷めてしまい残念だった。司会のアナウンサーが用語のフォローを随所でしていた点はよかったものの、このような番組の時はできるだけ解説がわかりやすい方で万人にわかる言葉で語ることをゲストにリクエストしたい。

- ゲストの方が使っていた専門用語がわかりづらく、スタジオ部分が理解しづらかった。司会のアナウンサーのフォローにより理解できたが、わかりづらい用語はテロップで補うなどしてほしい。高齢者の方々の事故が多いなか、今でも自動でストップするという機能を搭載した車があるが、そのような機能の延長線上に今回のような車があるのだろうかと思った。安全な社会を作るためのひとつと言えらると思った。自動運転の車が早くて3年後には登場するということだったが、きっと携帯電話が登場し今では当たり前になったように、自動運転の車が一般的になるような社会が目の前に来ているのだと思う。時代の転換を見ることができ、大変NHKらしい番組だった。東京モーターショー2015の様子は他局も含め他の番組でもよく取り上げられているが、今回は実情的な部分を取り上げている点がよかった。自動運転の実験施設が意外と身近な場所にあるので、東海地方の人に向けてそうした場所を紹介するような別の切り口の番組もあってもよいと思った。番組を見ていて、企業名がためらうことなく出てくるNHKの番組は珍しいと感じた。このような情報は知りたいので企業名を出していくことはよいと思うが、NHKとしては、よい悪いといった判断はできないが、気になった点ではあった。ただ、隠すよりは説明した方がよいと思う。内閣府の会議が紹介されていたシーンは、官民合わせて取り組んでいる様子が伝わりよかった。ただ、コンパクトに社会を作っていこうという

動きもある中、本当にこのような方向で行くことがよいのか、疑問を呈する人が出演し議論してもおもしろかったのではないだろうか。海外の動向で、ドイツの企業数社が協力し、地図メーカーを買収したという事例には驚いた。国として世界の動きを捉えきれず戦略で負けてしまうことがないように、日本側の戦略も見えてくると安心することができたのではないか。未来の車はこうなる、未来には今以上にまた違う未来があるというのを見せていただいたという意味ではおもしろい番組だった。

- 自動運転に関して1つ目のポイントは事故防止にどれくらい利用できるのか。それが近い未来に関しては最大の問題になると思う。自動ブレーキは一部では実現されているようだが、やはり事故防止から始まるのではないか。2つ目は、過疎地の問題だ。石川県珠洲市のような地域でバスを走らせるというのは重要だと思う。人件費がこれまで一番の課題だったと思うし、公共交通をどのように自動化していくのかが、次の問題だと思った。3つ目は、地図の問題だ。日本のカーナビの技術は素晴らしいと思う。ヨーロッパの現状がどのようになっているのか、そういった情報ももう少し欲しかった。そうすれば、カーナビの技術のみを考えれば、今の日本のほうが上ではないかと思うので、それを越えて地図で勝負するのかということになると、これは新しい問題として理解できたと思う。もうひとつ気になった点は、IT企業が開発した車。どういう仕組みで走っているのかが気になった。番組の中に出てきた自動車は全て自分で情報を集めていると思うが、IT企業が開発した車はインターネットで誘導しているのではないか、誘導ルートを作っているのではないかと思い、これまでの車の仕組みと違うように思い気になった。

(NHK側)

「ナビゲーション」はほぼ毎週生放送で放送しており、生で出すことにこだわっている。放送日にあたる10月30日(金)も、東京モーターショー2015が始まった日で、生放送だからこそ結実した番組だった。スタジオ部分はゲストの方ともしっかりと打ち合わせをし、今後もできるだけわかりやすい解説に努めていきたいと思う。日本の製造業において、特に愛知県は自動車産業で成り立っている一方、技術革新がとても早い勢いで進んでいる。一步誤るとIT企業が自動車の頭脳部分を作り、自動車メーカーが主体的に車を作るのではなく、むしろ組み立てに回ってしまうといった、産業構造が大きく変わってしまう可能性も秘めていると感じた。今後も世界情勢や国家間の競争、世界のスタンダードを日本企業がどう取っていくのかという部分を幅広く取材し、充実した番組を放送していきたい。

<放送番組一般について>

- 11月6日(金)静岡スペシャル「私は何が残せるか ～宮城まり子 88歳のメッセージ～」(総合 静岡単 後7:30～7:55)を見た。ねむの木学園理事長の宮城まり子さんの半生と今の姿を描いた番組だったが、とてもよかった。中部ブロックや全国で放送してほしいと思う内容だった。ネムノキの花言葉の紹介から始まり、88歳の宮城さんが最後の1日、1秒まで悔いなくやり遂げ、子どもたちのために寄り添いたいという生涯現役であろうとする姿が、とてもリアルに描かれていた。淡々としている部分もあったが、ドキュメンタリーとしてよかったと思う。マザー・テレサのような人は各地にいると感じさせてくれる番組だった。ぜひ全国放送をしてほしい。

- 10月16日(金)金とく 中部ネイチャーシリーズ「日本最後の秘境・黒部源流～清流の最初の一滴を求めて～」を見た。昔、行ったことがある場所で、大変関心を持って見た。黒部は、神秘性の高い印象を持っている。1週間かけて探索していくという今回の企画は、視聴者に対しても十分に企画者の目的が示されたと思う。評価できる点は3つあり、1つ目はジオラマで説明された登山ルートがわかりやすかったということ。実際に、自分が登山するような気持ちになり、大変よい印象を受けた。ガイドの赤沼千史さんの非常にさりげない話や黒部の語源の話などは、大変印象がよかった。2つ目は、これは企画者の意図的なものかどうかわからないが、山荘内で登山者に会うと大体ゲストが会話をするが、今回はほとんど会話がなく、ベタベタしない手法に好印象を持った。今回のテーマは水と生命の関わり合いが大きな主題だったと思うので、その意味からも大変評価したい。ゲストの金子貴俊さんのホンシメジに顔をつけにおいを嗅ぐ様子や、父親が伝えたかったことを思い起こすシーンは、人間味があふれており共感が持てた。今回の登山シーンは、雨の中で、安全なルートをどのように探索しルート変更をするのか、ガイドの方も含めみなさんでしっかりと検討して決断する様子が描かれており、登山の厳しさを視聴者に伝えることができていた点がよかった。このように天候の悪い状態で、水と生命の関わり合いを示したことはNHKらしい番組だと思い見た。また、映写技術も大変よかった。

- 10月16日(金)金とく 中部ネイチャーシリーズ 「日本最後の秘境・黒部源流～清流の最初の一滴を求めて～」を見た。6日間という限られた期間で、しかも自然を相手に天候にも左右される撮影を経て、感動する番組を制作されたことに感謝したくなるような番組だった。感動の要因は単なる自然を描写した映像ではなく、金子さんをはじめスタッフが困難を乗り越え目的を達成するような構成で、番組を見ている方もドキドキしながら一緒に行動しているような雰囲気であったからでは

ないかと思う。天候が悪く行けなかった目的地は、過去に撮影した映像で紹介されており、上空からの迫力ある映像と今回撮影した映像をうまく編集することでカバーしていたと思う。また、今回撮影した映像もある時は後ろから、ある時は前から、ある時は少し離れた場所からと、その時その時の判断で撮影した映像をうまく編集していたと思う。スタッフロールには撮影スタッフ2名の名前が記載されていたが、重い機材を運びながらの撮影に敬意を表したい。

- 10月23日(金)ナビゲーション 中部ジモ女の選択「製造業にジモ女を！」を見た。解決策を探るというより、始めから存在するストーリーに取材映像と解説を加えただけの印象を受けた。冒頭の産業別就労人口の説明は、あたかも中部特有であるかのような強引な課題形成をしているように見えた。テーマに合った成功事例のみを紹介しているだけで、新たに生じた課題や、いまだに残っている課題についての言及が乏しかったように思う。出てきたいずれの企業も、男女差のない能力主義を標ぼうしているのであって、中部のジモ女のために何かしているわけではない。全体的に、「中部ジモ女の選択」というテーマ内で何かしなければならないことが目的化しているような気がした。また、コメンテーターが手元の台本を読むシーンが多く見受けられたが、司会者ともっと効果的なやりとりができるような台本を組み立てるのも一つの方法ではないかと思った。
- 10月23日(金)金とく 中部ネイチャーシリーズ「福井の海の絶景をいく 東尋坊・玄達瀬」を見た。東尋坊はあまり目にすることのない低空からの全体像や、ぎりぎりまで迫った岩肌を、また玄達瀬は地元の漁師でさえ初見だという海中の様子などを見ることができ、大変楽しむことができた。また、東尋坊の成り立ちや玄達瀬の地形に関する分かりやすい説明も加わっており、一層関心を持って視聴することができた。このシリーズは「絶景」と銘打っているだけに映像が美しいことは期待どおりだったが、今回のように福井県人も知らないような視点による美しい映像が加わると、観光名所への誇りの醸成はもちろん、改めて観光資源としての活用のしかたなどの啓蒙につながり、NHK地方局の存在感も高まるのではないかと思った。
- 10月30日(金)金とく 中部ネイチャーシリーズ「能登の里山里海 命をつないできた日本の原風景」を見た。番組全体としての作りはよかったが、何か物足りない感覚が残った。地元だからこそ知っていることも多く、感動が少なかったのだろうか、あるいは番組全体が能登の里山里海の紹介といった傾向が強かったからだろうかと考えた。10月16日(金)に放送した「日本最後の秘境・黒部源流～清流の最初の一滴を求めて～」と比較しインパクトが少なかったように思う。もしかす

ると番組の趣旨とは異なるかもしれないが、一年を通じて取材した映像を番組に取り入れ構成した方が「日本の原風景」を表現するにはよかったのではないかと思う。

- 11月6日(金)ナビゲーション「シリーズがんと向き合う① “女性活躍”のなかで」を見た。親の介護などで家族のことを優先する中、検診を受ける時間を取ることができなかった女性と、仕事を優先してしまい治療が遅れてしまった女性が紹介されていた。自分のためではなく他人のために動いている時間が多い女性の現状が十分に伝わってくる番組だった。ゲストの中山富雄先生の話の中で、検診は重要だが、職場検診は非正規雇用の女性は受けられない会社が多いので、どうしても女性の検診率が低くなるという話が印象的だった。20代から50代の乳がんの発症率がここ30年で4倍にもなり、その原因として女性の晩婚化も一つの原因として考えられていて、働き盛りのときに女性はがんのリスクを抱えているという事実を知った。番組では、介護、育児、仕事と多忙な女性のために、強制的に予約を取って検診を受けてもらう会社が紹介されていた。働き盛りの女性に検診を受けることが当たり前だと思ってもらえるように、今後もこのような番組を発信してほしい。
- 11月13日(金)金とく「日本最古の地質帯に行く ～スギちゃんの温泉大発見～」を見た。ひきつけられた番組だった。まず、ヘンマ岩がどう出来てきたかについて、日本列島の成り立ちの歴史を地球規模で見せていたのは、わかりやすくよかった。スーパーカミオカンデの研究施設が、なぜ岐阜県にあるのかということも番組を見てよく理解できた。黒部の水平歩道がある場所はとても危険な場所で、よく歩いたと思う。行くことが難しいので、ドキドキ感も味わうことができた。季節も天気もよく、映像が映えたと思う。古い地層と一番新しい地層が見える場所も初めて知った。地球が生きていることを実感でき、わくわくする番組だった。また、立山カルデラの池で、夏に池が干からびたがまた水が湧いて出てきているという事実には驚いた。自然のすばらしさを享受しているからこそ温泉があるという見せ方は興味深かった。ふだん行けない場所を見せてくれる番組はよいと思う。ゲストのスギちゃんは愛知県出身なこともあり身近に感じる人物だが、温泉ソムリエとしてのコメントがいまひとつ物足りなかった。
- 11月13日(金)金とく「日本最古の地質帯に行く ～スギちゃんの温泉大発見～」を見た。今回のノーベル賞受賞以前からの企画であったとは思いますが、うまくタイミングが一致し、岐阜県神岡町をはじめとする周辺地域の興味深い番組になっていたと思う。2億5千万年前の太古の地層といってもあまりピンとはこないが、日本列島が出来る前からの地層であり、その後の地殻変動と新しい花崗岩の生成、黒部峡谷の成り立ち（隆起のスピードと浸食の関係）などイラストをうまく使い説明

していたと思う。黒部の高熱隧道や立山カルデラへの入山など一般の人が簡単に入れない場所の映像もあり興味深かった。いつもながら黒崎めぐみアナウンサーの体を張った取材や行動力に敬服した。

- 10月22日(木) 趣味どきっ！女と男の素顔の書～石川九楊の臨書入門 第3回「戦国の貴婦人 愛と意志の手紙 細川ガラシャ×忠興」を見た。テーマが細川ガラシャの文章を写し取るという内容で短時間の番組だったが、講師の石川九楊先生の「人生は書から分かる、日本の文化も分かる」という説得力のある出だしには大変感動した。以前、岐阜県恵那市明智町を訪れた際、龍護寺の門前に家系図があった。そこに細川ガラシャの名前があり、その際は光秀の三女かという程度にしか気にとめなかったのだが、この番組ではガラシャ夫人の苦勞された人生そのものを解説しており、非常に理解が深まった。放送翌日、テキストを買ったが、テレビの番組以上に充実した内容だった。

- 10月24日(土)NHKスペシャル 私たちのこれから「#雇用激変 ～あなたの暮らしを守るには～」を見た。司会の三宅民夫アナウンサーのアニメを使った解説部分は分かりやすかった。しかし、討論部分は、当事者が個人的信条を述べるのみで、いずれの発言もテーマに合致した普遍的な課題を明示するものではなかったように思う。集まった人たちもおおよそ今回取り上げる雇用問題とは縁のなさそうな人が多く、適切とは思えなかった。また、SNSの投稿の画面表示は目障りだった。フレームで民放の番組をほうふつとさせるようなMCも不要に感じた。視聴者によるライブ投票の結果がすべてある会社の社長の発言の時だったことに対して、ゲストの南海キャンディーズ山里亮太さんが「自分の所の会社の人がたくさんボタンを押したのではないか」と総括したのには失笑したが、そのフォローで三宅アナウンサーが「気になるボタンは社長の哲学と現実とのかい離が気になりだという意味で押したのではないか」と続けたことにはさらに笑えた。このような演出が番組全体に軽ちょう浮薄感を漂わせ、雇用問題は国家的な課題であるにも関わらず肝心の危機感が伝わってこなかったことが残念だった。

- 10月24日(土)NHKスペシャル 私たちのこれから「#雇用激変 ～あなたの暮らしを守るには～」を見た。雇用問題は今後の日本にとって重要な課題だと思っている。特に、非正規雇用で働く人が4割に近づいていることは、今後の社会が不安定になる、一つの要因だと思った。番組の冒頭で、ノーベル賞を受賞した山中伸弥教授が所長をしているiPS細胞研究所が映し出され、9割を超える研究所の職員が非正規雇用だと紹介されていたが、あのように高度な仕事をしている人たちが非正規なことに驚いた。討論中、気になる発言に視聴者がボタンを押すという企画

はよかったが、集計した際に、3回ともある会社の社長の発言が一番良い数値となったことには違和感を覚えた。経営者として、理想的な発言をしているし、実際に実践されていると思うが、3回とも一つの会社の社長の発言が選ばれるのは疑問に感じた。限定正社員制度や社会保障の一つとして住宅補助や子育て支援などの提案があったが、制度の運用がどのようになされるべきか、もっと議論すべきだったと思う。オランダで子育て支援策を実施し、その翌年、経済成長率が僅かに上がったと言っていたが、どのような実践がなされた結果成功したかを、もう少し詳しく説明すると参考になったのではないか。スタジオで、もう少し深みのある議論ができたと思う。番組全体を通じて、正規・非正規の問題について結論を出さずに議論しただけで終わってしまったように思う。会社の社長が、お金の豊かさだけでなく、時間が自由に使える時間的な豊かさ、社会的な豊かさ、そういったことも含めて雇用を考えるべきと発言したことは一つのヒントだと思うが、いずれにせよ番組での議論を通じて、ひとつの方向性が出るような結論に至らなかった点は残念だった。

- 10月24日(土)、31日(土)超絶 凄(すご)ワザ!「究極のロープ対決」(前編)、(後編)については、昨年の放送時はワイヤーロープが勝利したが、今回は繊維ロープがどのようなロープを制作してくるのかを楽しみにしながら見た。24日(土)に前編を見たときは、早く対決をしてほしいとじれったく思いながらも、最後の対決時の感動が大きいのだからと自分に言い聞かせながら、両者のロープ完成に向けて努力する姿を見た。31日(土)の対決は、本当に息を飲む対決だった。惜しくも、今回もワイヤーロープが勝利したが、組紐にあれだけの強度があるとは知らなかった。ぜひ、もう一度、組紐で挑戦する対決を見たいと思った。
- 10月25日(日)第35回「全国豊かな海づくり大会 富山大会」(総合 後2:25~3:06)を録画し見た。前日までの天候が悪かったので心配していたが、当日は立山連峰がくっきりと見える秋晴れだった。この映像を見た人たちは、富山に一度行ってみたいと思えるような美しい海と山の中で大会が行われていたと思う。放流行事の会場もテロップで補完されてわかるようになっていた点がよかった。放流行事を始める前に事前に取材した森を育てる人たちや、海・山に関わりながら生きる人たちの様子を映像で紹介していた。富山湾が天然の生けすとなり、500種類もの魚介類と海の幸に恵まれているのは、このような人たちの関わり合いのおかげだということがよく伝わりよかった。よい天気の中、10艘(そう)の船が海上をパレードする様子は壮観だった。また、この10艘の役割が全く違い、船によって魚の釣り方がいろいろあることがよく分かった。天皇皇后両陛下によるメインの放流行事は、大会の現場の司会者の音声をうまく生かしつつ、富山放送局の大野済也アナウンサーが落ち着いた実況を行っており、大会の厳かさが伝わった。番組を見た知人か

ら富山に行きたいという連絡もあり、全国中継の力を改めて感じた。

- 10月28日(水)歴史秘話ヒストリア「スゴいぞ! 国宝 松江城」を見た。松江城に行ったことがないので、関心を持って見ることができた。もともと松江城は昭和10年に国宝に指定されたが、建立年がはっきりせず歴史的な事実が十分でないという理由で重要文化財に格下げになっている。今回国宝に指定された最大の理由が、祈とう札が見つかりその釘穴が一致したことで建立年も判明し、再度国宝に指定できたということだと思うが、そこに至るまでの過程が描かれていなかったことは残念だった。松平直政が城主の時、人柱にされた小鶴という女性の霊がお城に出るようになった際に「コノシロ」という魚を供えたら霊が出なくなったという話は本当の話なのかと少し不思議に思った。また、松江には盆踊りという文化がないことや、今の松江城が残っているのは、明治時代に城の払い下げが行われようとした際に、地元の人が募金をし、払い下げを阻止したことなど、初めて知ることが多く興味深かった。

- 10月28日(水)「ガッタンガッタンそれでもゴー ～岐阜発地域ドラマ～」(BSプレミアム 後10:00～10:59)を見た。町田啓太さんは、ドラマ10「美女と男子」出演時とはまた違う味を出した演技をしており、よかった。成長を見守りたい。奥飛騨や下呂の町を撮影場所にし、アットホームに撮影を進めたことがよくわかる番組だった。廃線になった場所を自転車で走るシーンは、本当の話がベースになっているのか、フィクションなのかが気になった。町の様子を撮影するのであれば、町の人たちの表情をもう少し見たかった。エキストラとして、町の人に多く出演してもらえば、出演した人は放送される番組を見ようとするだろう。演出面のさじ加減は難しいと思うが、ローカル色を出すのもNHKならではの特色だと思う。知っている人が出ていないのではないかと思いながら見てしまうほのぼのしたドラマだった。一方、別の見方をすると、町があんなにも閑散としているという寂しさも感じた。化粧品屋の雰囲気も町の雰囲気と合わず、妙に都会化しているところに寒々しさが出ており、まちづくりとは何かという視点でも考えさせられるドラマだった。なかなか行くことができない奥飛騨という場所を舞台にしていたことはよかったと思う。またドラマの放送がある週は、他の番組でもドラマで取り上げていた廃線を自転車で走る様子をよく見た。

- 10月28日(水)「ガッタンガッタンそれでもゴー ～岐阜発地域ドラマ～」を見た。1時間のドラマにしては内容が濃く、セリフが少なかったように感じた。雰囲気でもドラマの内容をくみ取らなければいけないシーンが多かった。もう少しセリフを多くし、言おうとすることははっきりと表現してほしかった。特に主人公の心

情は、見直さないとかみ取れない部分が多すぎた。余韻が残りよいドラマだったと思うが、録画して何度も見ないと理解できないドラマよりは、一度見てすべてを把握できるようすっと心に残るドラマがよい。奥飛驒の廃線を使った自転車は乗ってみたいと思った。帰りはどうやって帰ってくるのかを知りたくなった。

- 10月28日(水)「ガッタンガッタンそれでもゴー ～岐阜発地域ドラマ～」を見た。番組としては楽しかった。しかし、物語の中で突拍子もない場面がときどき出てきた。それが多すぎたように思う。主人公が故郷に帰った際、橋の所で水槽をライトアップしている人に出くわすのだが、物語とどう関係があるのかよく意味がわからないと思う。また、松尾スズキさん演じる小谷良夫という変わり者の技術者が、会議の場所に出てきて、ふすまにぶつかったりするシーンなども、どのようにその後の展開につながっていくのか、よくわからなかった。また、最後に町田啓太さん演じる森田信一がガッタン号に乗る際に、父親が急に派手なテンガロンハットを持ってきたが、あれもなぜかぶるのか、その時はわからなかった。2回見るとよくわかった。また、フラッシュバックを頻繁に使っていた。意図する所はわかるが、若干使いすぎだったように思った。
- 10月28日(水)NHKスペシャル 新・映像の世紀「第1集 百年の悲劇はここから始まった」を見た。新たな映像が集められ、昔のフィルムを編集し直したと理解したが、すばらしい内容だったと思う。第1次世界大戦は終結したが、その後の100年の争いの始まりだったということが映像とともによく表現されていた。
- 10月31日(土)、11月7日(土)助けて！きわめびと「実家が片づかない」「実家がまだまだ片づかない」を見た。母親が亡くなり、父親が一人で暮らす家を娘と一緒にプロの手を借りながら片づけるという話だった。母親の思い出を話しながら片づけていく様子はほのぼのとしていた。最後にとてもきれいになった家で、みんなで一緒にご飯を食べ、父親の「片づけてよかったな」という感想が印象に残る番組だった。
- 10月31日(土)ETV特集「FOUJITAと日本」を見た。藤田嗣治はいろいろな捉え方がされており、戦前・戦中・戦後の中で、戦争画を描いたということで日本の評論家から非常に非難されたという状況が一般的には伝わっている。しかし、本当はそうではないことが、番組を通してよく伝わったと思う。この番組で興味深いのは、現在、東京国立近代美術館で藤田の戦争画14点が展示されていること、小栗康平監督の映画「FOUJITA-フジター」の11月中旬からの全国公開、未公開のデッサン200点をフランスのランス市へ寄贈、この3つの状況が重なって

いる点だった。番組では、小栗康平さんの映画や近代美術館での戦争画を紹介しながら、藤田を今までとは別の視点で捉えていたと思う。かつ藤田が日本の戦前・戦中・戦後をどのように捉えていたかをうまく伝えていたと思う。番組を見て、実際に自分の目で藤田の絵を見たいと思ったし、映画も見たくなった。実際に現場に足を運びたくなる番組内容だった。

- 11月2日(月)課外授業ようこそ先輩「歴史は、過去と今のキャッチボール～歴史家 磯田道史～」を見た。古文書の世界は子どもたちにとって縁遠いものだと思うが、そのおもしろさに子どもたちを引き込んでおり、最後の子どもたちの表情が非常によかった。磯田さんはとてもわかりやすい言葉で古文書や歴史の魅力を語っていた。「課外授業ようこそ先輩」はタレントの方が出演する回もあるが、今回の古文書と子どもたちのように全く結びつきがないようなジャンルの人をキャスティングすることで、その世界に子どもたちがひきこまれた時は、めったに見ることができない豊かな表情を見ることができるのだと感じた。とてもよい回だった。
- 11月4日(水)NHKスペシャル「盗まれた最高機密 ～原爆・スパイ戦の真実～」を見た。ひとりのスパイの行動により機密事項であったアメリカの原爆に関する研究成果がロシアに渡り、ロシアの最初の原爆はアメリカの技術を模倣したという話だった。戦後のアメリカとソビエトの核バランスがひとりの人間によって揺れ動いたことに驚いた。
- 11月6日(金)BS1スペシャル 伝説の晩餐会(ディナー)へようこそ「ゴルバチョフ・冷戦終結をめぐる秘話」(BS1 後11:00～11:50、7日(土)前0:00～0:49)を見た。ゴルバチョフのインタビューも盛り込まれており、どのように冷戦が終結に向かっていったのかがよく理解できた。
- 11月8日(日)「ドキュメント 生命大躍進」(Eテレ(東海3県ブロック)前1:17～4:00)を「第1集 そして“目”が生まれた」から「第3集 ついに“知性”が生まれた」まで3本録画して見た。名古屋市科学館の「特別展生命大躍進」を見てから見直すと番組の説明がすばらしく、映像もすばらしかった。知識も得ることができ、よい番組だったと思う。番組では、生命が進化していくのは生物と生物のDNAが混ざり新たな生物ができ、躍進のきっかけになると説明されており驚いた。一例は、第1集で特集されていた我々の目の出発の一部は植物の葉緑体のDNAと一緒にだという話だが、学ぶことが多かった。すばらしい番組だった。
- テレビを見ていると、はるな愛さん、マツコ・デラックスさん、ミッツ・マンゲ

ローブさんなど個性的なビジュアルの方の出演が目立つ。古くは、美輪明宏さんなどもそうかもしれない。一見テレビ局側が性的マイノリティーに寛容な姿勢を見せているように思えるが、タレントとして注目を浴びているのは派手な装いをした方が多いように思う。外見を強調し人々の好奇心をかきたてることは、ある意味差別意識がゆがんだ形で表れているのではないかと懸念する。出演されている方は、それも含め承知の上だと思うが、日本のテレビ界の現状について感じることのひとつである。そのような思いを抱くなか、11月11日(水)BS世界のドキュメンタリーシリーズ 知られざる真実 「“提案8号”への挑戦～米・カリフォルニア州 同性婚の認定～」を見た。カリフォルニア州で同性婚を認定したというテーマで、日本のテレビ界の性的マイノリティーに対する捉え方とは全く違った。本当に秀逸な番組だった。差別解消への闘いを描き、誰もが幸福を追求する基本的な権利を持っているという視点が明示されていた。数年間にわたる取材は質の高いドラマを見ているようだった。番組で登場した全米でもトップクラスの2人の弁護士らは、原告の弁護団に入り、同性婚は憲法上の権利であることを極めて論理的に主張しており、その描き方もよかった。アメリカはさまざまな問題を抱えながらもこのように時代を切り開いていくのだと改めて実感することができた。日本のテレビ局もこのような番組作りをめざしてほしいと思う。

- 11月12日(木)「ぜんぶ、温泉。～羽田圭介・秋の北海道を浴びる～」(BSプレミアム 後9:00～9:59)を見た。今年芥川賞を受賞した羽田圭介さんが、北海道の5つの温泉を巡るという番組だったが、とてもよかった。温泉に恥ずかしがらずに潔く入っている姿は、単なるパフォーマンスではなく、全身で温泉を感じようとする姿が伝わり好感が持てた。また、これほど彼が潔く温泉に入ったのはスタッフとの信頼関係もあったのではないか。スタッフと一緒に釣りをする場面が映ったが、彼のよさを引きだそうとしているように見えた。彼を表現者として特化させた周りのスタッフの力がすばらしかったと思うとともに、どのようなスタッフだったのか興味を持った。一方、ナレーションは番組に合っていなかったように思う。「温泉の精」という役柄を与えられていたが、全身で地球の息吹を感じようとしている旅人に対し、「くん」づけで呼ぶナレーションには違和感を持った。このようなナレーションは好みが分かれると思うので、ナレーションだけ消してBGMとコメントのみ聞けるようにするような受信機の機能はないものかと考えてしまう番組だった。
- 11月14日(土)助けて！きわめびと「総点検スペシャル“極意は本当に役に立っているの？”」を見た。一度放送しただけではなく、その後を追い、「現在はどうですか？」と確認するテーマ設定は、番組が役に立っていることがわかりおもしろかった。

- 11月14日(土)SWITCHインタビュー 達人達(たち)「志村けん×Perfume～イツ・ショー・タイム!～」を見た。今回、志村さんが選んだ相手がPerfumeだったが、Perfumeが世界で人気が高いグループだということを知らなかったのが、どんな対談になるのかと思いながら見た。3人グループは難しいと言われる中、デビューから15年、3人でいることが楽しいという仲の良さを番組から感じる事ができ、そこから息の合った歌やダンスが生まれているのだろうと実感した。コンサートの映像が流れたが、すばらしく、これなら人気が出ると思った。お互いの思いを十分に語り合った対談はとても楽しく、あっという間に1時間が過ぎた。志村さんのコントに対するこだわりや思い、お笑いに入ったきっかけなども聞くことができ、よかった。また、「となりのシムラ」という番組で、扮装しないで素でNHKの番組に出る思いや、自分の体験を「となりのシムラ」で表現したかったという話も聞くことができ、とても興味が湧く内容だった。

- 連続テレビ小説「あさが来た」を毎朝とても楽しみに見ている。AKB48の主題歌も大変よい。口ずさみやすく、朝に合った曲だと思う。そして、番組の放送が終わったあと、「あさいち」の司会の方がドラマの感想を言うのだが、有働由美子アナウンサーがあまりにも泣いてしまい、つけまつげが取れてしまった。NHKを見てあんなに笑ったのは初めてなほど印象的な場面だった。その後、「あさいち」でつけまつげの特集が放送されており、すかさずそのような特集を組む姿勢に感心した。BSプレミアムでは、午前7時30分から放送しているが、総合テレビとあまり変わらない時間帯なので、もう少し早く、午前6時30分頃から放送すると、朝早く出かける人も見られるのでよいと思う。

- この1か月を通じ、非常によい番組が多かったと思う。BS1で放送されている「世界のドキュメンタリー」や「NHKスペシャル」で特集されていた認知症関連の番組など、内容が深い番組が多かった。特に認知症関連の番組は、内容も前向きで、新たな認知症対策の発展に向かっていることが理解でき、参考になったと思う。また、京都で開催されている琳派誕生400年記念特別展覧会関連の番組(10月31日(土)ザ・プレミアム「風神雷神図を描いた男 天才絵師・俵屋宗達の正体」、11月18日(水)歴史秘話ヒストリア「天才か?ドラ息子か?～尾形光琳 風神雷神図に挑む～」)も楽しく見た。

NHK名古屋放送局
番組審議会事務局

平成27年10月NHK中部地方放送番組審議会

10月のNHK中部放送番組審議会は、15日(木)、NHK名古屋放送局において、8人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、事前に視聴してもらった、金とく 中部ネイチャーシリーズ「岩と雪の殿堂 劔岳をゆく」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、11月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	森棟 公夫	(学校法人椋山女学園理事長、椋山女学園大学学長)
委員	小澤 正俊	(大同特殊鋼(株)相談役)
	小寺 功子	(三重県漁協女性部連合会会長理事)
	田中 章義	(歌人・作家)
	中村 智景	(四季料亭「助六」女将)
	野田 雄一	(富山ガラス工房館長、富山ガラス造形研究所教授)
	長谷川明子	(日本ビオトープ管理士会中部支部会長)
	真能 秀久	(中日新聞社取締役管理局長)

(主な発言)

<金とく 中部ネイチャーシリーズ「岩と雪の殿堂 劔岳をゆく」の編成について>

- 一般の人はなかなか歩くことができない測量隊のルートを歩いたことは、こんな風景が広がっているということがよく分かり、よかった。ただ、劔岳は多くの人が亡くなっている山でもある。多くの人を命を奪いながらも、りんとして立っているという側面を取り上げると、安易に登る人が減るのではないだろうかと思った。また、馬場島の周辺はとてもきれいな環境が広がっているので、番組の中でももう少し触れると、登山までは行かなくとも山に近づきたいという人も楽しめたのではないだろうか。また、生き物たちをよく捉えていたと思う。ホシガラスのような生き物がいるということを視聴者に伝えることは大切だと思う。山小屋の宿泊費や飲み物の代金、安全を確保するための事前の準備などは、知りたい情報でもあるので、可

能な範囲で紹介してほしい。山好きな人や行きたいと思っている方が見ている番組だと思うので、気温や装備についても触れるとさらに楽しめる番組になったのではないか。最後に振り返りで全体の地図が出てきたが、行きと帰りのそれぞれの所要時間を入れてもよいと思った。また、カメラマンがどのように撮影しているかということも気になった。カメラマンが撮影する様子を番組内で見せると、よりリアル感も出たのではないか。以前馬場島で富山県警山岳警備隊の方に会ったとき、山の上のほうからとても早いスピードで走り、トレーニングをしていた。安易に山に登らず、きちんと装備してから登らなければいけないと伝えるためにも、このようなことを紹介してもよかったのではないか。俳優の石丸謙二郎さんが熊の敷物をおしりに敷く様子を見せていたのは、マタギの人の伝統を伝えることができよかったと思う。

○ 山の美しさと厳しさがよく分かる映像だった。まず番組冒頭の立山博物館のシーンで、いかに劔岳に登ることが厳しく難しいかがよく理解できたので、登頂することのすごさがよく伝わった。今回石丸さんが40年間の思いをこめて厳しい長次郎谷ルートを選んだが、何十年も登山をし、日々の訓練をしている彼だからできた登山だと感じた。珍しい鳥や美しい高山植物が生息しているのは厳しい場所の表れだとも感じた。また、劔沢警備派出所の方々の存在には頭が下がった。石丸さんは何十年も登山をしていらっしゃるのだから、部屋の中にある備品で訓練をしていることがすぐに分かりすぎだと思った。山登りをしない人が見ても、派出所の人たちがしっかりと訓練をしていることがよく分かりよかったと思う。撮影は並々ならぬものだったのではないか。最後の難関に登る様子や隣の山からのアングル、雪の上を歩く足元のアングルなどは、カメラマンが重い機材を背負いよく撮影されたと思うと同時に、どのように撮影していたのかに興味を湧いた。今にも崩れそうな岩がそびえており、心配になるような厳しい状況で、沢の水をくみ作ったコーヒーはとてもおいしかったらと思う。下山の途中で他の登山客を救助している様子は、とてもリアリティーがあり、登山の怖さを改めて知った。番組最後の石丸さんの「何度でも登りたい山ってなかなかなくてね」の一言で、劔岳のよさが伝わったのではないか。一方、山岳ライター小林千穂さんが最初のほうで帽子をかぶっていなかった点が気になった。手袋をしていなかった点も気になった。NHKでは登山の手本となるようゲストの装備にも気をつけてほしいと思った。入山届を出す様子を見せていたところはよかった。

○ 今回の番組や過去に「金とく」で放送した立山の回などを見ていると、山に関する取材は、カメラマンも含めて力量のある人たちなのだろうと思った。立山を紹介したときと同じカメラマンやスタッフが関わったのかどうか気になった。「劔岳

点の記」という映画があり、その映画が公開されて以降、劔岳に登る人がたくさんいると聞いたことがある。そのような山であることを考えると、どのような装備、計画、ルートで行くのか、カメラマンはどうするのかという事前の準備の様子を番組で見たほうがよかったと思う。最終的に出来上がった番組の内容は何も言うことはないが、何度か見ている間に、そこに至った計画のようなものも知りたくなった。劔岳は、ルートが非常に難しく、いろいろな事故がある山でもある。今は高齢者の人たちも含め山に登る人が多いので、事前の打ち合わせの様子を番組で見せることは視点も違いよいと思う。そのようなシーンがあるとさらによかったと思った。また、出演者の選定はよかった。

- この番組を見て悪く言う人はあまりいないのではないと思うくらい、自然もすばらしく、よい番組だと思った。俳優の石丸さんは、山に対する敬意やこれまでの体験が表れており、とてもよかった。山岳ライターの小林さんも、自然に対する愛情がきちんと伝わり、この2人がキャスティングされ登ったからこそ、空気感やそのほかさまざまなものが成立し得たように思った。「金とく 中部ネイチャーシリーズ」の中でも時々、女性アナウンサーが出演することがあるが、今回はナレーションだけにとどめていて、このような形もよいと思った。誰かアナウンサー的なポジションの人が入ると、つい進行していこうとしてしまい、自然さがなくなりがちになるが、今回はそれがなかったからこそ、石丸さんや小林さんの等身大の様子が伝わり、視聴者は感情移入しやすかったのではないと思う。そして、2人を包む自然がきちんと主人公になっている映像は、本当に迫力がありすばらしかった。「金とく 中部ネイチャーシリーズ」に関しては、今回は山だったが、いろいろな日本の自然のよさがあると思うので、海、山、川、いろいろなものをいろいろな角度で取り上げながら、中部地方のよさを発信して行ってほしい。

(NHK側)

我々も安易に登る人が増えないかという危機意識はあり、このルートを紹介してよいかというところから富山県警の方と相談した。番組に関しては非常に情報量が多いので、データ放送を活用し、見どころや所要時間などを紹介している。ホームページでは、プロジェクト日記という形で下見や宿泊した場所なども一部は紹介している。今後は、さらにきちんと多くの情報を盛り込んでいけるようやっていきたい。

- 荘厳な大自然と威風堂々とした劔岳をパノラマで見ているように感じ、とても美しいと思いながら見た。地獄の針山と言われた劔岳。登山歴が長い石丸さんと小林

さんだからこそ成し遂げられたと思うくらい、過酷なルートだと思った。また、剣沢で石丸さんと小林さんが山への思いを話す場面が、話の途中で終わったような気がした。もう少し聞きたい気持ちになった。また、剣岳に200回も登っている山岳ガイドの佐伯岩雄さんの話はほとんど聞くことができなかつたので、この方の話もあればさらによかつたと思う。2日目の朝の石丸さんの表情に、40年間、長次郎谷ルートに憧れていたという思いが伝わってきた。コーヒーを飲むシーンで、何人か人が映っており、たくさんのスタッフが撮影に携わっているということ、想像することができた。今にも崩れそうな岩を一步ずつ進む2人の表情につらさは全く感じられなかつたので、この険しいルートを登る魅力は何だろうかと思いながら見た。剣岳の頂上に立った3人の後ろ姿はとてよかつこよく、目的を達成した人にしか得られないような幸福感が、ひしひしと伝わってきた。番組が進んでいく中で、標高の数値について、登っているのになぜ標高が低くなるのか分かりづらい場面があり、疑問に思った。

- 山の魅力にあふれ、大変魅了された番組だつた。中部の自然を世界に発信するために、美しさや楽しみを視聴者に再発見してほしい番組なのだろうと拝察した。石丸さん、小林さん、佐伯さん、この3人はなかなかよかつた。最難関の長次郎谷ルートを踏破するという設定が大変魅力的な番組を作り上げたのだと思う。剣岳の本来の魅力に迫る番組だつた。石丸さんが頂上で「澄む」という漢字を使い感想を述べたシーンは、なるほどと感じ入つた。また、ナレーションは過剰すぎず、短い言葉で語られており、臨場感も豊かだつた。小林さんは専門家という立場で、もう少し彼女の口から感想や感慨、意義などを聞きたかつた。ただ、長次郎谷ルートを登ったときに述べた「先人の息づかいを感じる」とか、見た景色の迫力についての感想は印象に残つた。景色を描写する際の撮影技術は、うなるものがあつた。また、風の音も大変魅力的で、山にいるという実感を持つことができた。50年の歴史を持つ富山県警山岳警備隊を紹介したことは険しい剣岳の安全を守るという意味で、大変よかつたと思う。ただ、ひとつ疑問に思ったのは、登山の前に博物館で立山曼荼羅の絵を紹介したこと。富山県の人にとって、剣岳と立山は少しイメージが違ふ。見ている人が剣岳と立山を一緒にしてしまい、誤解を与えるのではないかと思つた。また、最初に曼荼羅を紹介すると怖いイメージを与えてしまう。大伴家持などがうたっているようなうたを冒頭で紹介して、例えば、朝焼けの剣岳や立山は大変美しいという描写から入つてもよかつたのではないかと思つた。
- 中部地方は山紫水明の地だつたと思う。「金とく 中部ネイチャーシリーズ」は世界に誇る大自然を扱う視点がよく、ぜひ続けてほしい。「新奇情識」という言葉に照らし合わせ今回の番組を見ると、まず「新しさ」については、去年とは違ふ今年の剣岳

とは何なのか、今の山歩きとはどのようなものかという視点がやや乏しかったと思った。次に「珍しさ」については、ホシガラスや高山植物、今回の登山ルートそのものが珍しいということだろうか。3番目の「情」については、すがすがしさや「澄む」という言葉に表される高い山に対する独特の感情、それに加えて、頂上にたどり着いたときの達成感など山登りに関わる感情がよく伝わった。「知識」という点では、立山曼荼羅や長次郎谷そのものということで、今回の番組を視聴し、視聴者がどれくらい知識を得ることができたのだろうかと考えた。それぞれにもう少し要素が加わっていたら、厚みを出せたのではないか。あれだけの放送時間では難しいかもしれないが、自然を扱うときは、もう少し厚みのあるものをめざしてほしい。山紫水明の地ということは、負の側面として事故がある。石丸さん、小林さんは十分な経験を持ったベテラン登山家だが、視聴者に残るイメージとして気軽に登れるという誤解を与えないか。劔岳というのは、中高年の俳優と若い山岳ライターが登るような山ではないのではとも思う。山岳警備隊の方が50年で4,800人救ったと言っていたが、計算すると毎年100人程度の人があそこで遭難していることになる。絶景をキーワードにすると今回のような番組になると思うが、多くの人遭難する山でもあるということを見ると、登山する人の人選、バックに流れる音楽、構成などもう少しトーンが変わったのではないだろうかと思った。

- 景色がすばらしかった。特に、雪溪から見た岩壁、両側の岩壁などは、信じられないような景色で、非常に感激した。また、登頂後に、別の尾根に上がり、雪溪の所をもう一度撮影していたと思うが、あの景色もすばらしかった。全体として非常にすばらしい番組だったと思う。もうひとつ、山岳ライターの小林さんは、あんなに小柄な女性でよく登ることができるなというところで、日頃、どんな訓練をしているのかが気になった。そのほかの出演者も含めて、人選は非常によかったと思う。そして、佐伯さんはとても有名な方で、確か代々山に登ってきた方ではなかっただろうか。そのような佐伯さんの一面も紹介すると、よりよかったと思う。もうひとつは、やはり、雪溪から最後の岩登りのところの恐怖感がいまひとつ伝わってこなかったことが気になった。通常の人には登ることができない場所ではあるが、だからこそ、そここのところの恐怖感や危険度のようなものが見えてくるとよかったと思う。この番組をきっかけに、劔岳をみんなが登り始めて、事故が増えたら大変だと心の中では少し心配になった。

(NHK側)

今回は11人で登った。長次郎谷ルートは非常に危険で、それぞれ登り手に対してガイドをつけ11人という大所帯になった。先ほど高さの話が出たが、室堂平という所から上がった

下がったりしながら横移動し、剣沢という所まで行った。そのあと、剣沢からずっと下がり長次郎谷へ行き、ずっと上がっていくというルートだった。次回からはより伝わるように気をつけたい。山を好きな人が登る理由は人それぞれだと思いながら番組も制作している。カメラマンの姿を見たいというのは、まさにおっしゃるとおりだと思う。番組の演出でそのようなシーンを入れていくかは悩む。実はこのように撮影していたというのは、「東海北陸フレッシュ便 さらさらサラダ」という番組で紹介する。来年度ももしこのような番組を制作するならば、山小屋の魅力なども入れていってもいいとご意見を聞きながら思った。去年、立山を撮影したときとは違うスタッフが行っている。事前の打ち合わせの様子や装備、ルートに関するご意見は、次回からの参考にさせていただきたい。

- 「東海北陸フレッシュ便 さらさらサラダ」は別として、登るにあたってどうするかというテーマで全く違う番組が制作できるのではないか。映像はよかったが、いかにも気楽に登れそうな雰囲気に見えてしまう。登る人たちのことを考えると、装備や登山計画に焦点を当てた番組は制作できると思う。これから山に関する番組はたくさん制作されると思うので、ぜひ一度制作していただきたい。

(NHK側)

「金とく 中部ネイチャーシリーズ」は、まだあと3回放送が残っている。地図のことも含めてご指摘いただいた点については、できるだけどういう場所にいるのか分かりやすく伝わるように工夫していきたいと思う。

音がよかったというご指摘は非常にうれしい。カメラマンだけでなく、今回の撮影には山の経験が豊かな音声マンが1人行っている。

- 最初と最後、ヘリコプターから撮影した映像は音楽とも重なり幻想的でよかった。画像がきれいで、天候もまずまず、撮影の苦労がしのばれる番組だった。旅のスタートで富山駅から立山信仰の歴史などを知るために立山博物館に寄るのは月並みだったように思う。絶景に感動し、きれいな高山植物に出会い、長次郎谷ルートを登っていくが、石丸さんがこのルートにこだわり登山しようとする動機が今一つはっきりしなかった。番組でももう少しこのあたりに触れてもよかったのではないかと思います。

た。「先人が開いた道をたどり到達した高み」だけでは不十分だと思う。山岳警備隊にもかなりの時間を割いていたが山岳警備隊が50年だからなのか。偶然とは言え、事故の負傷者を救出するシーンは必要だったのか疑問に思った。

- 冒頭、雲海から顔を覗かせる荒々しい剣岳の美しさには息を飲んだ。しかしながら、民放長寿番組をほうふつとさせる耳なじみのあるナレーションが冒頭は続き、番組の鮮度が損なわれたように感じた。登山にあまり興味がないので、山を歩いているゲスト2人の、それぞれならではの感想や、視点でのコメントに期待した。しかしながら、期待に添うほどのコメント力ではなかったように思う。番組でも紹介されていた日本山岳測量史に足跡を残す偉業は、新田次郎の小説や木村大作監督の映画「剣岳 点の記」でも有名であるが、同じ現場を通っているとは思えない軽さがあった。過去に決死の努力で打たれた三角点についても、もう少し言及してもよかつたのではないだろうか。石丸さんから40年来の夢が実現した感動や達成感をいまひとつ感じる事ができなかったように思う。番組趣旨としては、自然の紹介が主で感動ドキュメンタリーを撮ることが目的ではないためこのような形になっているのだと思うが、中途半端に石丸さんの思いを重ねたがために、どっちつかずの内容になってしまったように思う。

- 斜面40度、50度の雪渓を、アイゼンを付けて登る様子や山頂付近では70度の岩山を登っていく様子は、さすが雪と岩の殿堂といわれるだけあり、迫力満点だった。一方、登山は大変危険で、かつ、きついだろうなと思った。石丸さんは60才を過ぎてよく登れるなと思った。立山曼陀羅で地獄の針山といわれるとおり、山の姿が、ギザギザに尖っており、「まるでゴジラの歯みたい」と表現していたが、なるほど見ごたえのある山だと思った。番組の終わりに石丸さんが「またいつか来たいね、来れるかな」とつぶやいた場面が印象的で、剣岳の魅力に取り付かれたかのように見えた。それにしても日本最難関の山のひとつと言われながら、登山の途中に平均年齢70歳のグループの人たちに出会った場面もあったが、年間2万人もの人々が登るとのことで、男女問わず幅広い年齢層の剣岳ファンの多さに驚いた。

<放送番組一般について>

- 9月18日(金)ナビゲーション「人手不足クライシス」を見た。富山県に着目し、人手不足がさまざまな企業にどう影響を与えているかをまとめていた。全体としては非常に興味深い内容だった。しかし、これからどうなるのかという説明や解説があまりなかった。つまり、人手不足になると、また仕事を求めて富山県に人が集まるという流れが起こる可能性があり、一方、もともと人手不足になった要因は

仕事がないから富山から人が流出したと考えられるわけで、そういった人の動きのダイナミクスがあまり説明されていなかったのではないかと思う。しかし、富山の現状については興味深く拝見した。

- 9月18日(金)ナビゲーション「人手不足クライシス」を見た。タイトルにあるように人手不足クライシスは近年国家的課題として表面化してきていたが、近年は地元でも同等の危機感を覚える課題であるため、興味を持って視聴した。景気回復局面での短期的な課題ではなく、人口減少に基づく生産年齢人口減による構造的な課題で、就労現場から新たな就労スタイルを生み出すべきである。サービス供給側だけではなく、やがてはサービス需要側にも大きな影響を及ぼす課題であるというゲスト解説者による論旨は、分かり易く、課題の共有に効果的だった。しかしながら、最後の「身近な生活に直結する問題として取り組まねばならない」という課題提起は一体誰になされたものかが分かりづらかった。そのように取り組むことが難しく、最大の課題であるにも関わらず、キャスターも明るく論を閉じ、最後の最後に他人事で終わってしまった感が出たことが非常に残念であった。
- 10月2日(金)ナビゲーション「追跡 山口組“分裂”」はNHKでないと撮れないだろうという部分があり、若手の記者の2人がよく頑張ったと思う。名古屋は組長のお膝元でもあるので、関心はあり、意識すべき問題だと思う。一般の私たちがどうすべきか、指針があるとさらによかった。
- 10月2日(金)ナビゲーション「追跡 山口組“分裂”」を見た。このテーマでどこまで取材や課題を明らかにできるのかという期待感から視聴したが、期待していたほどの深みのある内容ではなかったように思う。分裂の本質的な理由や背景の深掘りが物足りなかった点や、資金の流れについて断定する証拠が不十分だったように感じた。近隣住民の不安解消や暴力団排除に向けた意識向上につながる内容に、いまひとつ達していないように感じた。
- 10月9日(金)ナビゲーション「食べて元気を取り戻せ」を見た。番組冒頭の食べる喜びから心身が回復して行く姿は印象的であり、番組にひきこまれた。「えん下(げ)食」に関わる現状や、「えん下(げ)食」を支えるメーカー、レシピ提供サイトなど、社会的な動向もよく取材されており、取材部分はテンポも良く見やすく、かつ大変分かりやすかった。一方で、スタジオトークでは、患者を支える家族をはじめ、医者や栄養士等のチーム体制が整わないと、全ての患者や老人がすぐに番組で紹介されたようにはならないという説明が、遠回しで分かりづらい表現だったように思う。

- 「ナビゲーション」全体について感じているのは、スタジオトークで話が煩雑になったり、竜頭蛇尾に終わったりするのは、取り上げるテーマに対して、ファシリテータとしての司会のアナウンサーに一定の立ち位置や定見がないことに原因があるのではないかということだ。質問が、肯定、否定、推進、反対、常識、非常識と、短い時間に様々な観点から投げられるために、番組の方向が定まらず、見ていて落ち着かない印象がある。全てに白黒をつける必要はないが、最後に課題と展望、あるいは今回のテーマのポイントを念頭においた総括をしたほうが視聴感の質が高まるように思えた。
- 10月9日(金)ナビゲーション「食べて元気を取り戻せ」を見た。胃や腸から直接栄養を入れるのではなく、「えん下(げ)食」を作り、口から食べ物を摂取できるようにするという内容で、食べ物のおいしさを感じながら食べることが非常に重要だということ番組の中で説明していた。つまり、物をかむことで、においや味覚を感じ、脳の働きや筋肉の動き、小腸のじゅう毛が活性化するという非常に興味深い内容だった。特に最近、とろみ材のようなものを使って食事を作るそうで、目新しい内容だった。ただ、あのような料理は素人では作ることが難しいわけで、指導者がいると思う。現状、指導者が足りないということも番組の中では伝えており、今後時代とともに変化し改善していけばよいと思った。
- 10月9日(金)金とく 中部ネイチャーシリーズ「奇跡の清流・銚子川～澄み渡る水と生きものの世界」を見た。銚子川は、きれいとはいえず遠いこともあり、縁遠かったが、あまりのきれいさに、こんなすばらしい所がまだあったのかと思い、新鮮だった。ボウズハゼが上っていくシーンやナガレヒキガエルの紹介、なかでもなかなか見ることができない5メートルの卵は、本当にすばらしい映像だったと思う。
- 9月5日(土)SONGS「美輪明宏～戦後70年 今届けたい歌～」を見た。最近までは戦後70年に関して、各所で取り上げていたが、最近ぱたりと取り上げられなくなった。既に、過去のことのように感じている気がする。瀬戸内寂聴さんは昔から寂聴塾で「戦争は絶対しちゃだめ、あなたたちがどういう立場にしようと絶対戦争に反対しなさい」と伝え続けている。今回の番組でも同じようなことを言っていた。物事は忘れかけた時に何かが起こってしまう。このような番組は機会があるごとに放送してほしい。日本人のノーベル賞受賞やラグビー日本代表の活躍など明るい話題もあってもいいが、今年は戦後70年なので、今回の美輪さん、瀬戸内さんのような戦争体験者の生の声を届ける番組も必要だと思う。

- 9月19日(土) 週刊 ニュース深読み「命をかけた大移動 シリア難民400万人はどこへ」を見た。さまざまなニュースの状況を、図表をたくみに使いながら分かりやすく解説しており、単なる状況の説明だけに終わっていない点に感心した。解説者の人選もよく、アナウンサーやそのほかの出演者も、知りたいテーマや疑問に思う点、わからない点をうまく紹介しており、視聴者の素朴な質問も十分にくんで番組で消化している点がよかった。また、ツイッターを通じて集まった意見をテレビ画面下の方で紹介しており、双方向性もうまく取り入れていると思った。このやり方は工夫をしながら、ぜひ続けてほしい。ニュースは深読みしないと先読みもできないと思うので、日本の文化の発展や問題提起をしていく上でも、よい番組だと思う。今回のシリア難民の問題は、問題の複雑さと混乱の大きさを日本の視聴者にもよく理解できる形で説明していた。解説委員の中には自らの駐在経験をもとに説明している者もあり、冷静に深く理解していると思った。このような解説は説得力がある。現地に住んで状況を把握し、宗教や歴史を知った上でないと、このような解説は難しい。ひと事ではない問題だということを我々に提起してくれた番組だった。
- 9月19日(土) 超絶 凄(すご)ワザ!「初公開!凄ワザ対決の舞台裏」を見たが、非常にシンプルなものながらも、すごくよかった。MCの千原ジュニアさんが結婚を発表した際のコメントで、番組名の「凄(すご)ワザ!」という言葉が入っており、千原さん自身もこの番組を大切に思っているということがよく分かりよかった。
- 9月19日(土)放送90年ドラマ経世済民の男(5)「鬼と呼ばれた男～松永安左エ門～」(総合 後9:00～10:00)を見た。このシリーズは、著名な人物に焦点を当てている回もあるなか、名古屋局が決して有名ではないかもしれないが、骨のある人物を取り上げていた点は、とてもよかったと思う。特殊メイクも含めて撮影技術が結集されていたし、吉田鋼太郎さんの演技もすばらしく、とてもよいキャスティングだったと思う。印象的なセリフも随所に入っており、骨太なドラマを見たという感じがした。一方、気になったのは、電力事業を民営化したことは、70年前はすばらしかったと思うが、長い年月を経て現在はさまざまな弊害が発生している面もある。個人的には国にたてついてでも信念を貫き通そうとする人物の気概を描いたドラマとして拝見し楽しんだが、この時期に電力会社を取り上げるというテーマ設定がよかったのか、検証の余地はあると思った。
- 9月19日(土) 放送90年ドラマ経世済民の男(5)「鬼と呼ばれた男～松永安左エ門～」を見た。主役の吉田鋼太郎さんは、「花子とアン」の嘉納伝助のイメージ

が強く、この番組でもピッタリの配役だったと思う。思わず時を忘れて見入ってしまったというのが正直な感想だ。「日本ニュース」の映像の挿入や普通とは少し異なる画像処理を行ったりするなどの技術を使っているようで、戦後のイメージをうまく出していたと思う。しかしながら中盤までに番組に集中していたせいもあると思うが、ドラマの終わり方が何となくあっけなかったように思う。余韻が残ると言うより番組の内容が濃かったという印象を持った。

- 9月21日(月) NHKニュース おはよう日本「ベンチャーズ 日本で響き続けた半世紀」を見た。彼らはアメリカでの活動をやめて、日本で公演活動を行っていた。その活動を通じ、人間の生き方はどうすればよいのかという切り口が非常にすばらしかった。ベンチャーズの懐かしさだけでなく、アメリカ人と日本人や、人間同士の内なるふれあい・優しさなど、ベンチャーズのみなさんが公演を通じて日本人にもそのようなことを伝え、気持ちを醸成しようとしていたことが紹介された番組で、大変感じ入った。メンバーのひとり、ドン・ウィルソンさんは秋田や大阪まで行き人間模様を描いているということで、その様子は納得いくものがあった。音楽は人種が違って魂を揺さぶるものだと思う。大変短い番組だったが、人間の生き方とはどういうものかというのを、音楽を通して問いかけた番組で、非常に心安らぐ時間だった。
- 9月21日(月) 国民アンケートクイズ リアル日本人！(総合 後 10:00~10:48)を見た。全体を通じて、現代の高齢者のおかれた環境を理解するのによい質問だったと思う。「おじいちゃん、おばあちゃんの名前、そして趣味、好物を知っているか」という問いに対して、同居世帯が減り、知っている者の割合が少ないのは分かるが、なぜ年代別に見て若い世代が、男女別に見て女性がよく知っているのか、その理由についてはあいまいなまま終わっていた点が残念だった。また、最後の問いで若いうちにやっておけばよかったことの第1位が、貯金であったことには驚いた。人口減少、長寿化のなかでお金に困っている高齢者が想像され、納得した。一方、クイズごとの参加モニター数が不明のため、割合だけで判断できるかを疑問に思った。クイズごとの参加者数を明示すべきだと感じた。また、放送時間も、もう1時間早めたほうが、より参加者が多かったのではないだろうか。番組の中で、ババア、ジジイと表現する出演者がいたが、NHKとしてこのような表現を放送することは避けたほうがよいと思った。
- 9月22日(火) 先人たちの底力 知恵泉(ちえいず)「組織での生き残り方教えます 外様大名・細川親子の情報活用術」を見た。徳川幕府の外様大名細川忠興、忠利親子の文のやり取りは、いかに情報を活用し生き残るべきかを示唆していたと

思う。大いに勉強になった。ゲストの人事コンサルタント高城孝司さんのコメントも分かりやすかった。ポイントとして挙げられていた3つの点は、さまざまな情報があふれる中で、文からSNSへと形は異なるものの、目的意識を持って情報を活用しなければならない現代に相通ずる知恵であると感じた。再放送は同じEテレで放送されているが、総合テレビで再放送すれば、より多くの視聴が期待できると思う。「Eテレ」の番組を「総合」で再放送しているものもありその基準が何なのかが気になった。

- 9月23日(水)「ザ・プロファイラー SPECIAL～人生にいかしたい夢と野望の名言～」(BSプレミアム 後9:00～9:59)を見た。視聴者1,000人にアンケートを取り、過去に取り上げた51人の名言ベスト10を発表していたが、これまで番組を見ていなかったことを深く後悔するほどおもしろかった。司会の岡田准一さんとゲストの春香クリスティーンさん、箭内道彦さんが番組をととても盛り上げていた。春香クリスティーンさんのしっかりした考えに彼女のイメージも変わったし、箭内さんについては、話すひと言ひと言が心に響き、司会の岡田さんも言っていたが、箭内さんの言葉が名言だと言っても過言ではないくらいだと思った。シーズン4を楽しみにしたい。
- 9月26日(土)「SMAPプレゼンツ NHKのど自慢 in 山田町」(総合 後7:30～8:45)を見た。東日本大震災の被災地である岩手県山田町で、SMAPの5人が町で初めて開催される「のど自慢」を通じて元気になってもらおうとする気持ちが十分に伝わる番組だった。前日の予選会から町の人たちにふれあい、本番を迎えるまで積極的に出場者の方を訪ねる姿は、彼らの気さくな人柄がほほえましく、見ていて気持ちがよかった。出場者の一人である漁師の方の「震災の直後、船を沖に出している間に家族5人を亡くした」という話は胸が痛くなった。漁師は船を守るために、船を沖に出すことが一番重要なわけだが、そうしている間に家族を亡くしたという心境を考えると、どれほどつらかっただろうと思う。番組では元気に出場して歌っておられ、その姿に本当に心が打たれた。今までにない「のど自慢」を見ることができたように思う。
- 9月27日(日)新世代が解く！ニッポンのジレンマ「ダイバーシティの大研究 @名古屋」を見た。番組が始まった頃から時々見ていたが、今回は男性パネリストの方のコメントがとても興味深かった。また、オーディエンスからの声をたくさん番組で活用し、視聴者に番組の意図が伝わりやすかったと思う。こういう要素もダイバーシティなのかという発見もあり楽しく見た。深夜0時からの放送だったが、さまざまな世代、特に退職したあとの世代の人たちも視聴できるように、もっと見

やすい時間帯に放送する回もあってもよいと思う。また、番組の内容とは違うが、今回のような公開シンポジウムというスタイルで、アナウンサーが手をテーブルにつきながら進行している点が気になった。普段のスタジオの時は礼儀正しく見えるふるまいも、放送するスタイルが変われば画面の見え方も違ってくるように思う。そこは、制作サイドで一声かけてもよいと思った。

- 9月27日(日)新世代が解く！ニッポンのジレンマ「ダイバーシティの大研究 @名古屋」を見た。もともとは中部7局が取り組む「中部ジモ女（ジョ）の選択」シリーズに関連して女性の働き方や生き方を中心にする番組かと思っていたが、そのような内容にとどまらず、4人のパネリストのコンビネーションが非常に良かったと思う。各人が非常に深い経験を持っており、その経験を聞くだけでも十分な内容だった。一方、司会の古市憲寿さんの立場がコーディネーターなのかパネリストなのかが分かりづらかった。コーディネーターとしては望ましい姿勢だったと思う。今回番組内容がおもしろかったのは、年齢構成がうまくいっていたからだと思う。また、会場からも留学生や失業中の若者、精神障がい者、普通の会社員などさまざまな立場の人が発言されていて、ダイバーシティを象徴していて興味深かった。1点気になったのは「お年寄りのおじさんたち」という表現だ。過去に嫌な思いをしてこのような発言につながっているのだと思うが、どこでどんな嫌な思いをしたのか、具体的に説明してほしい。言葉だけを聞くと、なぜそのような言い方をするのか、少し不満が残った。
- 10月2日(金)「時代を楽譜に刻んだ男 山田耕筰」(Eテレ 後10:00~10:59)を見た。山田耕筰というと「赤とんぼ」や「この道」の童謡作曲家というイメージがあったが、実は日本で初めて交響曲を作曲したのが山田耕筰だったということは初めて知った。また、実は戦後、戦争に協力したと批判されとても厳しい状況に立たされるという葛藤の中で作曲していたことが描かれていた。番組では、進行役に劇団四季出身の俳優石丸幹二さんを起用して彼の特性である歌や演技をフルに活用した形で、山田耕筰の創作現場が苦悩に満ちたものであったことを描いていたと思う。知っているつもりで実は全く知らない、身近な昭和の歴史上の偉人の人生を学ぶことができ、よい番組だと思った。NHKにはさまざまな歴史番組があり、戦国や幕末を描いていることが多いが、今年は戦後70年なので、昭和前期、戦前・戦中期時代の、名前は知っているが実はよく知らないという人物に焦点を当てた歴史番組というのも、あってもよいと思った。
- 10月2日(金)時代を楽譜に刻んだ男 山田耕筰(Eテレ 後10:00~10:59)を見た。山田耕筰の歩んだ道と功績を、当時の写真や情景、再現ドラマ、取材に併せ

て、耕筈の作った歌の歌唱や楽曲の演奏を交えながら紹介する、大変見応えのある内容だった。ナビゲーターの石丸さんのナレーションは滑舌や響きも心地よく、また山田耕筈を演ずるなど八面六臂（び）の活躍であったが、何より山田耕筈や音楽に対する敬意溢れる姿勢が素晴らしく、この番組のはまり役だったと思う。特に作曲家のドキュメンタリーだけあって、当時流行ったオペラや楽曲、山田耕筈の作った歌や楽曲が、印象的に使用されており、音楽ドキュメンタリーとしても大いに楽しめた。

- 10月3日(土) SWITCHインタビュー 達人達(たち) アンコール「さかなクン×磯田道史」を見た。歴史学者の磯田道史さんとさかなクンの対談は、とてもおもしろく、見入ってしまった。2人のやりとりは本当にテンポがよかった。磯田先生が好きだという金魚に対し、さかなクンの解説も入り、彼の豊富な知識と魚三昧の生活に改めて感心した。磯田先生は江戸時代が専門で、その時代はタイがなかったら政治もできなかったほどで、食料になるだけでなく貴重な魚だったという話に本当に驚いた。歴史と魚が深く関わっているということを知ることができた番組だった。
- 10月8日(木)所さん！大変ですよ「“消えたHB鉛筆の謎” 再び！」を見た。Bか2Bしか使えない筆圧のない子たちばかりという事実には驚いた。ゲーム機やスマートフォンを使うようになったことが原因で、指がうまく使えない子が増えている現状を紹介していた。便利なほうがよいという世の中の流れ、例えば簡単に開けられる物のほうがよいということで、企業側が物を改良していく、よいと思えば便利にすることが結果的には悪影響を及ぼしており、指がうまく使えない子どもが増えているということもひとつの象徴ではないかと思った。和式から洋式トイレに変わったことで、足腰が弱い子どもたちも増えているようだ。番組では事例の紹介だけにとどまっていたが、これからの子どもたちはこうしたほうがよいという問題解決の方法を紹介するところまで番組で伝えてほしかった。
- 10月8日(木)まる得マガジン きょうから飲み方が変わる！日本酒のいろは(4)「悪酔いしない飲み方」を見た。「悪酔いしない飲み方」というタイトルにひかれた。シリーズで放送していることは初めて知ったが、それと同時に、日本酒のいろいろな考え方・知識をもう一度「いろは」という形で放送しているので、とても楽しく見た。番組は5分で、その5分間でさまざまなことが分かる。シリーズの途中から見たのでテキストも買った。番組の仕掛けに便乗させていただいた。番組からは、講師の葉石かおりさんの日本酒好きがよく伝わり、思いを込めながら番組をリードしているのがよいと思った。日本酒の飲み方から造り方まで幅広く学べる

のがよいと思う。11月末まで楽しみながら、番組を視聴したい。

- 10月8日(木) ミュージック・ポートレート「ヒロミ×前園真聖 第2夜」を見た。ヒロミさんと前園真聖さんの対談は、人の優しさや良さのような部分がたっぷりと出ていた。ヒロミさんが人生の最期にかけるとして、松本伊代さんの曲を選ぶとは思わなかったが、そこがヒロミさんらしくもあり、多少笑いの部分も意識されているのかもしれないが、ほっこりとした気持ちになった。番組を通して、失敗が先につながるということが伝わり、音楽と併せてよい番組だったと思う。
- 10月8日(木) 世界入りにくい居酒屋「台湾 台北」を見た。店主の人柄が引き出された番組構成に、とても上手なエンディングで、大変おもしろく見た。いとうあさこさんと篠田麻里子さんのナレーションがとてもよかった。
- 10月9日(金) ファミリーヒストリー「はるな愛 ～母の告白 言えなかった思い～」を見た。本当に過去を暴露してよいのか、本人に内容の了解は取っているのだろうかと内心心配しながら見た。実際に自分の子どもが性同一性障害であったら、なぜこのようになったのか、子育てが間違っていたのかと悩んでしまうと思うが、はるな愛さんの母親は、自分の子どもが性同一性障害であることを乗り越え、受け入れて本当にすばらしい方だと思った。一方、あのようなドラマができるのは、はるな愛さんが成功しているからではないかとも思った。「親子でも本当のことを言い合わないといけない」と言っていたが、自分の家族もやはり話し合っただけの本心は言い合っていないといけないと思ひ、勉強になった。
- 10月9日(金) ドキュメント72時間「老舗ホテル また会う日まで」を見た。大変重厚感があり、すてきなホテルで、番組を見ていると至る所に、日本でしかできない細工や衝立（ついたて）の曲線の美しさがあり、どうして壊すのか建物がなくなることが残念でならない。思い出に浸る人が何人も登場したが、実際はかなり多くの人にインタビューしているだろうとも推測できた。50年靴磨きをしている井上源太郎さんの「ホテルとは全部ができて一流ホテル。ホテルはセカンドハウスだ」という言葉がとても印象的だった。
- 10月10日(土) NHKスペシャル「私が愛する日本人へ～ドナルド・キーン 文豪との70年～」を見た。こんなに日本を見つめていてくださった人がいたのかと思った。ドラマ仕立てで紹介されており、配役もよかった。味のある演技で、言葉の説明だけではなく映像があったことにより、よく理解することができた。ありとあらゆる文学者の方と接点を持たれていて、日本人以上に日本をよく理解し日本文

学を世界につなげたという点で、とても立派な方だと改めて思った。谷崎潤一郎が戦時中に淡々と日常を書き記していたという「疎開日記」もぜひ読んでみたいと思った。

- 10月11日(日)NHKスペシャル「“ジョーズ”の謎に挑む～追跡！巨大ザメ～」を見た。“ジョーズ”という言葉から、映画「ジョーズ」を連想した。映画のタイトルをほうふつとさせる言葉を使う以上、映画や先日のNHKスペシャルで取り上げていたダイオウイカのストーリー以上の内容を期待したが、サメの専門家ではない立場からすると、特段感動するべきところはなかったように思う。ロボットカメラが3回もサメにかまれた点は興味深かったが、その行為の意味するところは分かりづらかった。サメの習性についての想像を語るばかりに終始していた点は残念だった。番組タイトルに「ジョーズ」という言葉がなければ違った感想を持ったかもしれないので、既にイメージがついている言葉を使用するときは、慎重に行ったほうがよいと思った。

- 今、日本ではにわかにはラグビーファンが増えているようで、私もそのひとりだ。生中継のすごさ、テレビの同時性を改めて感じた。そのような中、最終戦のアメリカ戦の生中継前夜に放送された10月11日(日)スポーツ酒場“語り亭”スポーツ・ラボ「ラグビーW杯 歴史をつくった日本代表」(BS1 後7:00～7:49)を見た。今回の日本代表の強さと進化の秘密によく迫っていると感じた。その中で、外国人問題を取り上げたことに興味を持った。外国人問題は、今回のワールドカップが日本社会に与えたインパクトのひとつだと思う。いわゆる外国人選手というのはプロ野球界でもずいぶん長く議論され、出場枠をめぐるはそのほかの様々なスポーツでも議論の焦点になっている。たとえば、駅伝では最近では高校生の大会でも留学生が走っていて、東アフリカの選手などは圧倒的な強さを見せている。もともと民族間には体格だとか運動能力に差があるので、対等な戦いにならないのではないかとということが問題の核心にあり、なかには、外国人選手が競技に加わると試合自体が興奮めになると反発するファンもいる。今回のラグビーは3分の1が外国人選手だったが、多くの日本人がああ試合に感動した。五郎丸歩選手が大会中にツイッターで「日本代表の外国人選手にスポットを。国籍は違うが日本を背負っており、これがラグビーだ。」と発信し反響を呼んだ。2019年のラグビーワールドカップ開催に向けて、ラグビーの国際性を理解してほしいという気持ちからあのような発言をしたと思うが、これは本当にひとつの転機になっていると思う。これから外国人選手に対する見方も変わってくるだろう。スポーツ番組でこのようなことを考えさせてもらえるのは、非常に重要なことだ。これからリオデジャネイロオリンピック、東京でのラグビーワールドカップ、2020年の東京オリンピックと大きな大会が続く。ぜ

ひ、スポーツを社会学や心理学、あるいは医学・生理学の面で切りとり、今から十分な準備をして、もっと私たちを楽しませてほしいと思う。ひとつ気になった点は、アシスタントの発言と字幕の言い回しが違った所があり、分かりづらかった。字幕にもしっかりと注意して放送してほしい。

- 連続テレビ小説「あさが来た」を見た。大変、朝にふさわしい主題歌で、AKB 48の歌が時代劇とマッチしており、さわやかな気持ちで見ている。また、内容も今までの番組は子役の時間が長いものが多かったが、今回は短く、テンポもとてもよいので、ぜひこのテンポで最後まで行ってほしい。特に、最終回が近づくと、急に展開が早くなることが多いので、今のようなテンポで進んで行ってほしい。また、番組の放送が始まる前に、PR番組を見た。PR番組を見ると、本編でその場面を見たときに「あのようになっているんだな」といった舞台裏を感じながら見ることができ、よいと思った。子役のいいなずけが玉木宏だった点は、最初は少し戸惑い違和感があったが、よく考えると10歳ぐらいの年齢差であればあのキャスティングもありかと思え納得することができた。半年間を楽しみに毎朝見ていきたいと思う。

NHK名古屋放送局
番組審議会事務局

平成27年9月NHK中部地方放送番組審議会

9月のNHK中部地方放送番組審議会は、17日(木)、NHK名古屋放送局において、11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「平成27年度後半期の国内放送番組」について説明があり、「平成28年度の番組改定」の意見交換を行った。続いて、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、10月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

- | | | |
|------|-------|--------------------------|
| 委員長 | 森棟 公夫 | (学校法人相山女学園理事長、相山女学園大学学長) |
| 副委員長 | 松本 耕作 | (加賀味噌食品工業協業組合理事長) |
| 委員 | 小澤 正俊 | (大同特殊鋼(株)相談役) |
| | 加藤 勇二 | (愛知県農業協同組合中央会常務理事) |
| | 小寺 功子 | (三重県漁協女性部連合会会長理事) |
| | 佐野 俊和 | (コマツサービスエース(株)代表取締役社長) |
| | 田中 章義 | (歌人・作家) |
| | 中村 智景 | (四季料亭「助六」女将) |
| | 野田 雄一 | (富山ガラス工房館長、富山ガラス造形研究所教授) |
| | 長谷川明子 | (日本ビオトープ管理士会中部支部会長) |
| | 真能 秀久 | (中日新聞社取締役管理局長) |

(主な発言)

<「平成27年度後半期の国内放送番組」

および「平成28年度の番組改定」について>

- 10月9日(金)から始まる「えいごでがんこちゃん」。このような番組は従来からあったのだろうか。

(NHK側)

子ども向けの英語番組は「えいごであそぼ」という番組がある。最近では小学校でも英語を教えるようになり、今回の「えいごでがんこちゃん」を新しく制作した。「ざわざわ森のがんこちゃん」は人気が高く、言ってみれば長寿番組だ。それを生かして、子どもたちを英語の世界に引き込めないだろうかと思いい制作する。

- 5分という放送時間は、いろいろと考えた上で、新しく始めるから5分で様子を見てみようということなのだろう。

(NHK側)

教育の現場でも、15分よりもう少し短いほうが良いという話がある。小学校低学年向けの番組なので、興味をキープするには、短い番組でどれくらい訴求力があるかを見たいという考えもなくはない。放送時間については、今後反響を見ながら検討したい。

- 今、幼稚園の子どもたちでも英語で遊んでいる子はたくさんいる。英語教育に熱心でもあるので、このような番組もビデオで録画し見るというようなことがあるかもしれないと思う。

- B Sプレミアムの「アナザーストーリーズ 運命の分岐点」を毎週楽しみに見ている。定期的に変えるということは決定で、また半年後には始まるものなのだろうか。

(NHK側)

来年の4月から復活させるかどうかということまでは今の段階で決まっていない。この番組は中味についていろいろなご意見をいただいている。皆さんからのご意見を各地で伺っているところなので、そういったことを踏まえて、これから議論したい。

- 中部の後期番組改定の説明部分で双方向の取り組みをやるという説明があった。双方向性というのはトレンドとしてはよく分かるが、その効果測定が気になる。視聴率が単に上がったということで判断するのか、どういった観点で進めているのだろうか。

(NHK側)

どのくらい参加者がいたかというのは厳密に数字になり残る。解析するとすぐに分かるので、過去に実施した双方向の取り組みは集計して記録に残している。

- 9月4日(金)の東海北陸スペシャル「プロ野球『中日』対『阪神』」(総合 後7:30~8:43)でも双方向の取り組みをやっていた。あれはどのように評価されているのか。

(NHK側)

中日の優勝が期待できるかもしれないと思えた最初の頃(6月5日(金)東海北陸スペシャル「プロ野球『中日』対『オリックス』」)は多くの参加者がいたが、その約3分の1程度だった。

- 全般的に大きな変化があるわけではないように感じる。4月はいろいろな劇的に変わる場面も少なからずあるけれど、これだけいろいろな放送波ごとの特性もある中で、10月改編の中でももっと新たなことをはじめても良いと思う。「こんなことをNHKが秋から始めるんだ」という視聴者全体を驚かせるような新しい挑戦をしてほしい。「ザ・プロファイラー ～夢と野望の人生～」はすごく楽しみだし、堅実に、しっかりやっているというイメージはある。しかし春・秋それぞれに、こんなことも番組になるんだという新しい要素が視聴者から見て分かりやすい目玉として意識されても良いと思う。番組を視聴していて、ひとつひとつのクオリティーの高さは実感しているが、新しい表現に対する冒険や開拓をしてほしい。4月のほうがそのような要素は強いかもしれないが、秋にも秋なりのいろいろなチャレンジに期待する。

(NHK側)

基本的には年度当初、春の改定に相当なエネルギーを費やしている。NHKが使命を果たしつつ、やはり新しい視聴者も開拓するということを考えながらやっていこうと思っている。秋から冬の期間は春の改定のための試行期間とも考えている。また、後半期改定は連続テレビ小説や大河ドラマが始まることぐらいに例年とどめているが、新年度に向けても、ゴールデンタイムの番組を中心に各現場で魅力的な演出や出演者など実験的な試みを行う番組もある。ただ、秋にも応分のエネルギーを注いで、秋にも「NHK変わったな」という感じを出していくことは重要だと考えている。現場の中で番組をブラッシュアップするという事はしっかりとやっていきたい。

- BSプレミアムの再放送を総合テレビで見たい。良い番組が多く、総合テレビで再放送し見てもらいたい番組が多くある。団塊の世代は朝が早い。夜中の放送が充実しているのは良いと思うが、午前5時台・6時台などにドラマを持ってくると良いのではないか。70代・80代の人たちは特に

朝が早いので家族的なほのぼのとしたドラマがあると良いと思う。連続テレビ小説も午前7時台・8時台に放送しているが、もう少し早く放送すれば、出勤する方も毎日見られると思う。生活スタイルも時代時代で変化してきているので、時間軸をあげても良いと思う。

(NHK側)

BSプレミアムで放送したものを総合テレビで再放送するというのは、過去には「BS時代劇」で放送した時代劇を「木曜時代劇」で放送することなどはしてきた。一方でBSを受信する方には、衛星付加受信料をいただくという仕組みになっている。BSならではの番組編成を考えると、せめぎ合いでもある。2つ目の時間帯については、いろいろな時間帯において、視聴者層の時間帯ごとの変化についてはさまざまな調査で調べているところ。議論もしている。28年度の改定についても、さまざまなご意見を踏まえて検討していきたい。

改定は3か月前には準備をしている。数年前からは、次の改定を目指して、特集期間を活用して試作の番組を作り視聴者の反応を見るという試みも行っている。NHKはテレビの波が4波あるので、総合テレビでドラマを放送し、その裏でBSプレミアムでもドラマを放送しているというようなことが、再放送も含め、ないようにしている。改定については、同じ番組でも中味をブラッシュアップしていくといった努力はしたい。

- ニュースの質について申し上げたい。最近、非常に痛ましい残酷な事件が続いており、世の中のいろいろな切れ目・変化点だと感じる。そのようなときに、単に事実を丁寧に説明するだけではなく、何が問題かという視点で報道してほしい。例えば、中学1年生が一晩中走り回っていること自体がおかしい。そういうことについて、深くまだ突っ込んでいないと思う。名古屋もそうだと思うが、義務教育も含めて、中学の教育にはいろいろ問

題があると聞いている。「クローズアップ現代」やその他の番組でも取り上げてはいるが、もう少しそのあたりを色濃くしたほうが良い。単なる事実の報道だけでは民放に勝てないと思う。ただ、ニュース、特に台風報道などは、風速を工夫して表現するなどし、異議はないが、もう少し深く掘り下げていただかないと「さすがNHKだな」とは言いにくい。

(NHK側)

「クローズアップ現代」でさきほどご指摘があったような事件を取り上げた際は、なぜ子どもが夜出歩かなければいけないのかということを一一般のニュース番組よりは一步踏み込んで取材している。ただ、NHKは公平公正・不偏不党を守るために、個別の意見を踏み込んで伝えることに対しては慎重に番組を制作することが多い。一方で、「NHKスペシャル」のような番組では、さまざまな課題を描き、その課題をどう解決するのか、その解決のヒントのような部分まで描こうという意識で制作されているものも、昔に比べて増えているのではないかと個人的には思う。

- ラジオに関して、一般的にラジオを聞く人がだんだん少なくなっていると思う。それに関して、ラジオ番組の作り方も含めて、どのような魅力的な番組を作ろうと努力されているのかが気になる。

(NHK側)

数の上では、我々が子どもの頃持っていたようなラジオを聞く人は少なくなっているかもしれないが、NHKのラジオ番組をインターネットで聞ける仕組み「らじる★らじる」でラジオを聞く人は増えている。また、東日本大震災以来、ラジオというメディアが極めて重要なものだということが改めて認識されていて、各種世論調査でも「いざというときに頼りになるのは実はテレビよりもラジオだ」という評価をいただくこともあ

る。極めて身近な情報を聴取者に発信するという点でいえば、命と暮らしを守る放送局として、NHKとしてはラジオの重要性はむしろ高まっていると考えている。

<放送番組一般について>

- 8月28日(金)北陸スペシャル「富山改良計画 ～こんなとやまがいい感じ～」(総合(富山県域)後10:00～10:48)を見た。北陸新幹線の開通、地価の発表時など、さまざまな時に金沢との比較が常にされている中で、なぜ富山に若者たちが帰ってこないのか、住まないのか、富山の魅力を広げることで魅力あるまちづくりを行いたいということをテーマとした番組だと思った。宇奈月のお寺に、県内で働いている人、Uターン・Iターン組、嫁いできた人、東京在住の人などさまざまな人たちが集まり、円座を組みながら語り合うというスタイルで、取り組みとしておもしろかった。番組の途中で、これは今まで“中部ジモ女(ジョ)の選択”シリーズでやっていた内容と基本的に同じだということに気がついた。出てくるデータも基本的には同じところに落ち着いていた。なぜ地方に住まないのかということになると、働く場所がない、自分が働きたい所を選ぶ幅が少ない、キャリアアップにつながらない、遊ぶ場所がないなど、毎回同じような境遇、状況下にいる人たちを集めることで、似たような答えが出てくると思う。では改良点は何なのかと考えたときに、東京との比較が出てくるわけだが、比較はするものの、東京とは違った生き方で富山で暮らしていきたいと思っているわけで、そうすると富山らしいとは何なのか、地方はどうあるべきかという問いにつながってくると思う。富山は、観光地化させなくても地元の中ですべて完結していると思う。番組の中では、私が疑問に思っていることと違った形での捉え方で進めており、改良点は見つけれないが、やや強引にひとつの方向性を番組の中で見出したような気がする。この番組を制作することでふだん出会うことがなかった若者たちが出会い、議論を戦かわすことができたのは、とてもよかったと思うし、多くの人たちがそのように望んでいたと思う。ただ、ゲストのインパルスの板倉俊之さんも言っていたが、「何でお寺でやったの?」ということで、

私も最初からどうしてお寺でやらなければいけなかったのかが気になった。空間づくりに関しては、ミラーボールの演出は若者たちにとっては必要なのかなと思いつつも、最後の終わり方はお寺を引きながらブルーのライトで静かな終わり方をしており、せっかくお寺という空間を使ったのだから、そこの住職も含めながら話したほうが、お寺でやる意味も出てきたのではないかと思う。今回の出演者を追いかけるわけではないと思うが、地方にとって何が一番問題なのか、どうすれば魅力的になるのかということ、ひとりひとりの生きざま等を含めながら、この番組をきっかけに展開することを期待したい。

- 7月17日(金)ナビゲーション「一秒でも早く ～高校生が模索する究極の避難～」を見た。オーダーメイド避難という考え方のもと、高校生が実際現地までおじいちゃん、おばあちゃんたちと一緒に歩いて行くという試みをしていた。そのような高校生がいることを、私は全く知らなかった。南海トラフはいつ何が起こってもおかしくないと言われているエリアであり、その地域での取り組みを番組で紹介することは時節にもかなっており、意義のある番組だったと思う。

- 7月17日(金)金とく「長良川鵜飼 ～1300年の伝統を未来へ～」は、3月の重要無形民俗文化財や世界農業遺産の認定に向けて、鵜飼に関する現状を取りまとめた番組であると拝察した。黒崎めぐみアナウンサーの浴衣姿と近藤正臣さんの和装がとても似合っていた。鵜飼について詳しく知らなかったのも、わかったことがたくさんあった。新しく仲間入りした鵜、“新鳥”の訓練の様子や船頭さんが鵜匠の腰みのやまきを準備するということ、家族が鵜匠の服の修理のみならず、捕獲したアユをすぐさま観光旅館に販売しに行くことなど、鵜匠、船頭、家族の連携プレーによる壮大な仕事であるということを知った。舟のスピードなど、船頭と鵜匠、鵜匠と鵜の関係をイラストで表示していたのが分かりやすく、愛きょうがあり、楽しめた。将来につなげるという点で、中学生の後継者のことを番組で取り上げることは十分理解できたが、環境問題、特に海から遡上（そじょう）

するアユの数が少ないとゲストの近藤さんがコメントしているシーンがあり、これは恐らく長良川河口堰（ぜき）の問題と関係しているとも思うので、踏み込み過ぎではないかと思った。

- 7月17日(金)金とく「長良川鵜飼 ～1300年の伝統を未来へ～」を見た。鵜飼のことをあまりよく知らず観光のためのパフォーマンスくらいの知識しかなかったが、この番組で鵜飼には1,300年の歴史があると知り興味深く見た。鵜をしつける様子や、70すぎの鵜匠が21個もあるカゴを毎日洗うなど、大変手塩にかけ鵜を育てている様子を見て、鵜飼という観光の裏にとっても大変な仕事があるということがよく分かった。鵜匠の「鵜飼とは鵜匠と心を通わせるアユを捕る鵜」という言葉が大変印象的だった。また、鵜飼には必ず裏方に女性がおおり、鵜匠の衣を縫ったり、鵜匠が終わって帰ってくるところを迎えに行ったりという内助の功がよくわかった。近藤正臣さんが鵜飼を残していくためにはやはり地元の人が長良川が好きか、鵜飼が好きか、鵜飼を残したいと思うかという、この3点を今一度みんなが思わなければいけないということをおっしゃっていたことが印象的だった。ただ、近藤さんが環境問題として長良川河口堰のことに触れたところは突っ込み過ぎではないかと感じた。

- 7月31日(金)ナビゲーション「生きて、なお ～F C 岐阜社長 恩田聖敬～」は、番組冒頭の志と責任感にあふれた30代の若者の社長就任会見の映像から、一転し病に冒された変貌ぶりにまず大きな衝撃を受けた。番組は、無用に感傷的になることも大げさな演出もなく、恩田さんの日常に自然に寄り添いながら、彼が振りまいていく人間的な魅力を品よく伝えていたと思う。病気なのに頑張っているということではなく、人間が困難にぶつかったときに、それにどう向き合うかが適切に切り取った取材シーンやインタビューで簡潔に示されていた。このコンテンツが「ナビゲーション」という番組趣旨に合致するかは検討の余地があると思うが、初めて「ナビゲーション」を見て感動した。

- 7月31日(金)ナビゲーション「生きて、なお ～F C岐阜社長 恩田聖敬～」を見た。F C岐阜の恩田さんが、35歳で就任したと記憶しているが、30代でJリーグのひとつのチームを担っていくのは大変なことだと思う。地元の期待を受け、また地元に貢献したいと帰ってきた思いなど、よく伝わった。サポーターとの距離やサポーターからのまなざしなど、まさに現在進行形で進んでいるものを、演出し過ぎていないからこそ伝わってくるものがあり、感動した。今後、F C岐阜がどのような状況になっていくのかを、声援を送りながら見ていきたいと思った。
- 7月31日(金)金とく「さかな紀行 夏の三河湾 ～日本一の味めぐり～」では、釜揚げしらす、しらす干し、ちりめんじゃこの違いを初めて認識した。蒲郡の底引き網によるシャコやトリガイや西尾市一色町のえびせんべいも有名だそうで、紀行番組として楽しく見た。地元で捕れた魚介などの利用のしかたがわかるので、最後に出てきた食事は番組中でもレシピを紹介するとよりおもしろいのではないかと思った。
- 8月28日(金)ナビゲーション「五線譜に綴(つづ)った思い ～戦禍に散った音楽家～」を見た。今年は戦後70年で戦争に関する番組が非常に多かったと思う。70年というと、当時兵隊だった方は90歳代になられていて、ある意味で生存者もこれからどんどん減っていくという状況を見据えているのではないかと思った。私も随分たくさん戦争関連の番組を見た。おおむね、非常に質が高かったと思う。
- 8月28日(金)金とく「世界にはばたけ!“なごやめし”」を見た。前半部分はこの内容で黒崎めぐみアナウンサーがミラノに行く必要があったのかと思う内容だった。フードジャーナリストへの単独インタビューという構成や地産地消を訴えたかと思えば、一転して世界展開の方向性を問うなど、課題意識がはっきりしない番組だったと思う。また、イタリア人に豆味噌(みそ)をそのまま食べさせて味を問うシーンは、取材意図がわかりづらかった。後半の豆味噌づくりや、うどん職人、菓子職人のこだわり

やひたむきさには共感を覚えた。この番組から名古屋めしが世界に羽ばたく可能性を感じづらかったことが残念だった。

- 8月28日(金)金とく「世界にはばたけ!“なごやめし”」を見た。7月17日(金)に「新日本風土記」でも名古屋めしを放送しており、両方見た。内容については、視聴者の対象が違う印象があった。「新日本風土記」のほうはじっくり、ゆっくり見ることができ、「金とく」のほうは賑やかという感じだった。視聴者の対象が違うのであのようなものではないかと思う。「金とく」は手羽先サミットやミラノ万博を取り入れ、お祭り気分を入れているという感じがした。ただ、なぜイタリア人に味噌をなめさせるのかは、全然分からなかった。それと、伝統的な食品とB級グルメがごちゃ混ぜになっている点も気になった。その点がもう少ししっかりと分けられていれば、視聴者も理解しやすく、納得しやすかったのではないかと思った。
- 7月18日(土)・8月1日(土)超絶 凄(すご)ワザ!「激突! 旋盤VSヘラ絞り~究極の精度対決~」(前編)(後編)を見た。見どころがあり良い番組だと思う。ただ、何回見てもこの番組はやっぱり地味だなと思う。技術者が登場するがどうしても地味になってしまう。ただ、地味だが、その人たちが最先端のことをやっているというのはすごくカッコよく見える。もっとあのかっこよさを見せてほしい。そうすれば若い子たちの憧れにもつながるのではないかと思う。
- 7月20日(月)「ミラノ 食の万博“おいしい地球”の英知 第1部」(総合 前8:15~9:00)を見た。食の万博は初めて開かれたということで、世界の食を紹介する食べ歩きの番組かと思ったが、今後の食について考えなければならない課題を提起していた番組だった。今回のミラノ万博は単なる食の祭典ではなく、世界における深刻な食糧問題とその解決策を示す、理念提唱型の万博であるというのはこの番組を見て初めて知った。特に課題提起していた点は3つあった。1つはイタリアのスローフード館

の内容で、そこで「農産物は美味しくて、きれいで、正しいものでなければならぬ」というコメントがあった。「農産物が正しい」とはあまり言わないが、生産者にとって正しい値段でなければならぬということを番組の中では言っていた。遺伝子組み換えで大量に生産をすると、その裏に何か潜んでいるから危険だということもコメントされていた。世界でもそういうことを発信しているのだなと感じた。2つ目は、私も薄々は感じていたが、世界では70億人を超えるような人口がいるが、その中で8億人が餓死している一方、作られた食べ物の3割が捨てられる飽食の時代だということだった。ミスマッチな状態であり、やはり作られたものは時間や物語が背景にあるわけで、そのようなことを理解し食べ物を大切にしなければならぬと課題提起していた。3つ目は、未来のスーパーマーケットが映し出されており、スーパーマーケットでたとえばひとつのエンジンを指さすとCO₂の使用量はこれだけ、もう1個のエンジンだとCO₂は少ないなど、データが出るようなスーパーマーケットで、環境に優しい農産物をもっと作ろうということを出信していた。残念なのは、世界で食の祭典、万博が開かれているが、このテーマをテレビであまり見たことがなく、国民として課題を共有できる場面が少ないということだ。また、日本のパビリオンはイタリア館の次に入場者が多く人気だということだが、その理由が少し分かりづらく、なぜ日本館が世界で受け入れられているのかということをもう少し報道した方が良かったと思った。

- 7月21日(火)歌謡コンサート「手紙で綴(つづ)る 愛の名曲集」を見た。日々、歌謡曲の番組が少なくなっている中で唯一、懐かしい現代の歌謡曲なるものを聞くことができる番組だと思っている。両親はこの時間帯が大好きで毎週見ている。偶然、私も一緒に見て、大変感動した。この回は、大竹しのぶさんが川端康成の作品や戦争で亡くなった夫に宛てたラブレターを朗読したあと、それにちなんだ歌を歌手が歌っていったのだが、その歌の中には私が子どもの頃にはやった歌があり、テロップを見ながら親子3人でとても良い時間を過ごすことができた。

- 7月26日(日)NHKスペシャル「小笠原の海にはばたけ～アホウドリ移住計画～」を見た。大変感服した。8年にわたる佐藤史生先生の研究の成果は大変興味深く、意義のあるレポートだった。ナレーターの声もよく、難しい話の割には最後までチャンネルを変えずに見ることができた。こういう先を見通せない番組を8年という長期にわたり、よくNHKは取材したと思う。しかも内容も非常に素晴らしいということで、これは大変感動した。また、カメラマンの秀逸な撮影技術に感心した。

- 7月26日(日)「BEGINうたの日コンサート～沖縄がうたに感謝する日～」(BSプレミアム 後10:50～27日(月)前0:19)を見た。6月23日の慰霊の日の翌日に沖縄でこのようなコンサートが行われていることを全く知らなかった。戦後、沖縄に何も物がなくなってしまったときに、550頭のブタをハワイの人たちが沖縄まで持ってきてくれて、今のような養豚の状況になったという話も紹介されていた。単にコンサートを伝えようという番組ではなく、沖縄の生活実感というか、そこに根ざしたものをできるだけ丁寧に描こうという制作者の意図のようなものを感じることができた。沖縄で6月24日という日に行われているコンサートをNHKが全国放送でやっているということの意義も感じた。素晴らしい番組だったと思うので、毎年恒例で見たいと思った。

- Eテレの「趣味どきっ！」や「先人たちの底力 知恵泉(ちえいず)」など、なかなかこれは秀作だと思った。特に、7月28日(火)趣味どきっ! 美しい文字で 心をつかめ! 第九回「優木まおみ×川尾朋子 美文字へのステップ～総集編～」は女性の書き手が出演し、力強く大変魅力的な仕事で、黒い筆からくり出され、造形された力はすごいなと感心した。また、作品に対する魅力も十分に示していたと思う。併せて言うと、NHKの撮影技術というか、カメラ技術がかなり高度な技術でさすがプロの集団だと思った。

- 7月28日(火)の先人たちの底力 知恵泉(ちえいず)「借金100億から立ち上がれ!～山田方谷 納得の経営改革～」を見た。話をしている内容は難しい話だったが、場所が小さな居酒屋で話しているという設定で、耳をそばだてたくなるような魅力的な設定になっていた。うまく話を引き出して魅力を示していた。内容的にも、現代の事業に対するいろいろなアドバイスや、中小企業の皆さんにも大変役に立つ内容ではないかと思った。ゲストの大橋洋治さんは落ち着いた語りで、歴史への造詣(ぞうけい)が深いということもあり、大変参考になった。
- 7月31日(金)から始まったBS時代劇「一路」を見た。歴史を理解する意味ですごく良い番組だと思う。また、8月24日(月)・31日(月)に地上波の「鶴瓶の家族に乾杯」に主役の永山絢斗が出演し中山道を旅した回は、リンク性が非常によかったと思う。このようなつながりはこれからも続けていただけると、視聴者の枠も広がるのではないかと思う。
- 8月1日(土)NHKスペシャル「日航ジャンボ機事故 空白の16時間～“墜落の夜”30年目の真実～」を見た。事故現場特定から救出に16時間を要するというあり得ない事件に対して、事故当時から今日に至るまでさまざまな都市伝説めいたものが生まれ、民放でも5年おきに“新事実発見”といった番組が放送されてきた中での「NHKスペシャル」ということで、大変興味深く視聴した。墜落時に4人以外に多くの生存者がいたことや、米軍が墜落直後に場所を特定していたことはすでに過去の報道でも明らかにされており、今回は当然そこを踏まえての真相究明に迫るものと思っていたが、結局、当時発表された事故調査委員会やJAL、ボーイング社の説明や対応はすべて事実であり、いくばくかのミスが重なったということが明らかになったという内容にとどまっていた。今回、救助で位置の特定を間違えたパイロットに直接インタビューしているにもかかわらず、責任追及や原因究明が弱かったように思う。一見まだ課題が潜んでいるかのような体裁でありながら、実際は、とにかくみんながベストを尽くしたものの当時の技術からいってしかたがなかったという理解と認識を強

めるような内容にも見えた。いまだ疑義を呈している遺族会が異様にすら映るような雰囲気もあり、番組が誰のために何を明らかにしたいのか、制作意図が分かりづらかった。

- 8月2日(日)サキどり↑「どうなる? うなぎの未来」を見た。「サキどり↑」は好きな番組のひとつ。土用の丑(うし)の日にはうなぎを食べるといふ食文化が残っている中で、稚魚のうなぎの激減の危機を脱しようと、なまずをうなぎ味にし、餌を改良して、味がそっくりのかば焼を作るという近畿大学の研究が紹介されていた。ただ、これが実際にどれだけの人に納得して食べていただけるのか、難しいなと思いながら見た。稚魚の回復が見込めない現状にゲストのうなぎ博士の塚本勝巳さんは、うなぎを増やすには完全養殖の技術を確立するしかないと言っていた。研究を重ね、5年前に成功しているが量産に至るまでにはまだ10年はかかるということ。手っ取り早い方法は、産卵ができる天然うなぎを1匹でも多く産卵場所のマリアナ諸島に返してあげること。1匹が100万匹産むので、それだけしらすうなぎが日本に帰ってくると言っていた。うなぎを食べるといふ食文化を伝えていくために天然うなぎを守るといふお店や地域が増えているということで、これからは大切にいただかなくてはならないと痛感した番組だった。

- 8月4日(火)・11日(火)ピタゴラ装置 大解説スペシャル「前半戦」「後半戦」(Eテレ 後11:25~11:55)を見た。ピタゴラ装置ではビー玉が転がるが、あれに全部名前が付いているというのは知らなかった。装置の仕組みが、たとえば自動改札機の券売機に生かされているなど、応用につながっているということがわかるともっとおもしろいと思う。それから、ビースケの大冒険というのも好きなコーナーのひとつ。ビー玉に物語があり、物語を加えることで発想が豊かになる。同じ物でも違う見方を意識させてくれるありがたい番組だと思う。

- 8月11日(火)ピタゴラ装置 大解説スペシャル「後半戦」を見た。
「ピタゴラスイッチ」をたまに見て感動していたが、この「スペシャル」はとてもよく、見入ってしまい、くぎづけになった。「失敗しないのかな」とハラハラドキドキしながら成功するのを見ると、努力の大きさを感じる。科学や仕組みの知識をあまり知らなくても、大変おもしろい番組なので、子どもたちにもぜひ見てほしいと思う。時間があっという間に過ぎた番組だった。

- 8月6日(木)NHKスペシャル「きのこ雲の下で何が起きていたのか」(総合 後7:30~8:35)は、タイトルにひきつけられ視聴したが、広島への原爆投下直後に撮影された2枚の写真に焦点を当てた番組構成だったが、原爆や戦争に対する思いを新たにし、知見を深めるような内容ではなかった点が残念だった。特に、2枚の写真を基に再現したモノクロームのCGアニメーションは、あまりにも禍々(まがまが)しくて、ホラー映画を見ているかのような印象を視聴者に与えるのではないかと不安に思った。本来的に訴求すべき恐怖の方向性を著しく誤っていたように感じた。被災直後の惨状の物語は後世に語り継ぐべきものかもしれないが、CGの演出があることにより子どもには視聴させづらい内容になっていたと思う。最新技術の間違った使い方の典型ではないだろうかと感じた。

- 8月6日(木)NHKスペシャル「きのこ雲の下で何が起きていたのか」は、先ほど意見で原子爆弾投下直後の広島の2枚の写真を基に作られた映像に対する批判の声もあったが、ある意味非常にリアルで、時間をかけて制作されていると感じた。

- 8月7日(金)NHKスペシャル「憎しみはこうして激化した～戦争とプロパガンダ～」(総合 後10:00~10:49)を見た。アメリカの映像戦略を取り上げていた。そのときに、相手のことを知り過ぎると好きになってしまい殺せなくなるから、あえて嫌なところをいろいろ見せていくというのはなるほどと思った。沖縄戦で赤ちゃんから岸壁に落としたシーンは、人

間の琴線に触れるというか、アメリカ側もすごくリアルに感じたというところが流されていて、人間同士の戦いであるけれど人間なんだというのを、改めて感じた。たまたま先日、シリア難民の子どもが海に溺れて死んでいる写真が世界で出回った。人が生きていくことと争うということは、どう解決していかなければいけないのかということをも改めて考えさせられる、良い番組だったと思う。

- 8月7日(金)のNHKスペシャル「憎しみはこうして激化した～戦争とプロパガンダ～」で非常によかったと思うのは、アメリカ兵も精神に異常を来す方がたくさんいらっしまったということを伝えていたところ。アメリカ兵のインタビューがあり、その辺りはやはりみんな一緒なのだということを非常に強く感じた。沖縄で兵隊と住民を区別しないで、アメリカ兵が逃げていく人々をどんどん撃っていくシーンは残酷な場面ではあったが、全体として非常に番組のレベルは高かったと思う。そのような戦争関連の番組の中で、まったく違った方面から見たのが、8月28日(金)ナビゲーション「五線譜に綴(つづ)った思い ～戦禍に散った音楽家～」だった。戦争で亡くなった音楽家鬼頭恭一さんの音楽ノートが見つかり、その音楽を若者が歌うまでを追った番組だったが、彼女がどれぐらい理解したかということは全く別にして、若者がこのように努力をして、作家の意図を探り、最後に自分の努力の成果として歌を歌うという点が、戦争を全く違う面からとらえているなと思い、感心して見た。
- 8月8日(土)NHKスペシャル「特攻～なぜ拡大したのか～」(総合後10:00～10:50)を見た。戦後70年がたち、戦争経験者が減り、戦禍の記憶の風化が懸念される一方、当時語られなかった事実の評価が客観的になされるようになってきており、この番組もその成果のひとつであったと思う。存命者のインタビューや、録音された当時の責任者の音声、膨大な書類などから、いかに特攻が保身と責任回避による行為であったかを知らしめる、中身のある内容だった。責任回避を図る、不確実な場合には先送りをする、手続き論に固執する、組織を都合よく操作するなど、集団思

考のマインドセットといわれる意思決定プロセスの問題が当時の日本軍に蔓延（まんえん）していたことがよく分かった。特攻という、戦争における愚行の実態や非を問うのみならず、日本の犯した最大の失敗事例として組織の意思決定者に自制や教訓をもたらす、非常に教訓に満ちたドキュメンタリーであった。

- 8月8日(土)NHKスペシャル「特攻～なぜ拡大したのか～」を見た。最初のイントロ部分で、現在の東京のすばらしい夜景の映像に、70年前にラジオで放送された出撃をひかえた特攻隊員が両親に向けた遺言の音声を重ねるというシーンを流していた。斬新なイントロだと思った。要するに、場所を共有していても、時間が違うとこんなにも置かれている状況や感覚が違うんだということを意識させられた。人間はよく生きても120歳ぐらいで死んでしまうので、過去の歴史を伝えていくことは重要だと感じさせられた。また、日本はアメリカの戦略の中でうまく踊らされていたということも分かった。この事実をNHKが伝えることができたのは、70年経ったからこそ言えたことなのかもしれないし、それを踏まえた上で私たちが未来にどう平和を構築していくのかを改めて考えさせられる良い番組だった。
- 8月8日(土)時論公論「核兵器廃絶」を見た。原爆の写真や映像について取り上げており、ハリウッド映画ではきのこ雲の前でキスをするようで、原爆に対する捉え方が違い、単なる映画だといえばそれまでだが、映画を通して間違った知識やイメージを与えられる、つまりそこには戦略があるというわけで、自分たちがしっかりと考えを持たなければいけないということを強く感じさせられる内容だった。
- 8月8日(土)世界最高峰！究極の動物エンターテインメント～スイスチューリヒ動物園の舞台裏～（BSプレミアム 後8:00～9:29）を見た。10年前にチューリヒ動物園へ行ったことがあるが、それからかなり進ん

でいた。動物園が見世物ではなく、生き物たちが大使として私たちの目の前にいてくれ、どうこの地球上で両立して生きていくのかということ、を見せてくれているんだということがわかった。このような良い事例をもっと多くの人に理解していただき、私たちがどう自然と共生する社会を作りあげていくのか、取り上げるだけでも良い番組だったと思う。

- 8月14日(金)BSコンシェルジュ「“京都人の密(ひそ)かな愉(たの)しみ” & “笑けずり”」を見た。「夏のみどころスペシャル第2編」としてザ・プレミアム「京都人の密(ひそ)かな愉(たの)しみ」を取り上げていた。大変短い番組だったが、キラリと光るものがあり気を抜いていない点に感動した。常盤貴子さんの和服姿がぴたっと合うということもあって、京都の夏の風情が非常にうまく出ていたと思う。京都人のこだわりや貴船神社も含めて、伏流水の問題など、いろいろな意味でキラリと光る番組だった。またこの番組も撮影の技術力が高く、特に少し黒っぽいスカレットの色などはなかなか抜群な色合いで、背景のぼかしや画角もうまく、民放ではなかなか真似できない技術力だと思った。

- 8月15日(土)NHKスペシャル「カラーでみる太平洋戦争 ～3年8か月・日本人の記録～」(総合 後8:00～9:00)を見た。白黒の写真や戦時中の日本ニュースなど白黒のフィルムを上手にカラーで再現していたと思う。これを技術というのか、それとも時代劇の番組の時代考証と同列に考えるのか、このあたりは微妙な部分があるかとは思いますが、ある面では生々しく、ある意味では新鮮で、また、実際のアメリカのカラーフィルムとも異なる感覚に感激した。悲惨な戦争の記録として、非常に重要な取り組みだと思う。実際の戦争経験者がどのような印象を持ったのかも知りたいと思った。まさに未体験の事柄が夢に出てくるような感じで見た。一方で、遺体の映像が映りますという配慮も自然で、私個人としては沖縄戦で白旗を揚げて出てこられた比嘉富子さんの映像がとても印象的だった。

- 8月15日(土)NHKスペシャル「カラーでみる太平洋戦争～3年8か月・日本人の記録～」を見た。白黒の世界で遠い話だったことが、カラーにするだけでこんなにリアルに感じられるのかと思った。また、他の番組で玉音放送は録音したものが2枚あったということを取り上げているものもあり、本当のリアルな声と放送したものが違ったという緊迫感を伝えていた点はすばらしかった。NHKらしいと思った。8月1日(土)ザ・プレミアム「玉音放送を作った男たち」というドラマと合わせて、リアル感がよく伝わってきた。

- 8月15日(土)NHKスペシャル「戦後70年 ニッポンの肖像 ～戦後70年を越えて～ 日本人は何ができるのか」(総合 後9:15～10:44)を見た。戦後70年を迎え、地域紛争が多発する現在、私たちにできることは何か、戦争の現場から考える番組として、世界で起きている現実の取材を切り口とし、番組後半のライブの討論など非常にNHKらしい番組だったと思う。導入部分で、戦争を知らない世代の女優、石原さとみと寺島しのぶという紹介があったが、すでに全国民の約80%は戦争経験がないわけで、そこまで言う必要があるのか疑問に思った。また、現地取材をしていた石原さんの被害者への対応に違和感を覚えた。本人が勉強不足なのか、あるいは本人の想像をはるかに超えているため、どう対応していいのか分からないというのが本音だろうと思う。このような場合、有名人であっても演技ができる人を起用するには疑問を感じる。感情表現が豊かというメリットはあるが、過剰演技ではないかという疑念を生む可能性もあるのではないだろうか。少なくとも私は、後者の過剰演技のようなイメージを持ってしまった。さまざまつながりの中からの起用だとは思いますが、人選は慎重に行うべきだと思う。平和に関しては、島国であるが故に、あるいは周囲の環境に恵まれていたことで70年間、日本人は平和をむさぼっていたような気がする。もっと次世代を担う若い世代に考えてもらいたく、若者をターゲットとした番組の制作を期待したい。

○ 8月22日(土)から始まった放送90年ドラマ「経世済民の男」は、高橋是清から小林一三まですべて見ている。東京制作の回も力作で、高橋是清の知らなかった面も描き出されていたと思う。大阪局制作の小林一三に関しては、だるまの演出は好き嫌いがあるかもしれないが、とてもおもしろい要素もあり、最後は小林一三という人物の魅力を感じることができた。また、主人公の小林一三が元上司・岩下清周との約束を大切にしていたという描き方も、今の時代に刺さるメッセージがあった。このように各局が力を入れながら、放送90年ドラマを制作するというのは良い試みだと思う。次の9月19日(土)の「鬼と呼ばれた男」も、なぜ名古屋局がこの時代にこの人物を取り上げようとしたのかということも含めて、しっかり見たいと思う。いろいろな時代にいろいろな人たちがいた中で、このように1人の人物を取り上げながら、力の入ったドラマができていくということは、見応えがあり良いと思う。8月10日(月)戦後70年「一番電車が走った」(総合 後7:30~8:43)などさまざまなドラマを見たが、この「経世済民の男」のシリーズには次も含めて期待したい。願わくは90年だけで終わらずに、91年目、92年目、93年目があったら見たいと思う。100年までの10年間、もしくは95年からの5年でもいいので、力の入った各局対抗のヒューマンストーリーを見ていきたいと思わせてくれる素晴らしい番組だった。ドラマのNHKとしての迫力にさらに期待したい。

○ 8月23日(日)NHKスペシャル「新島誕生 西之島～大地創成の謎に迫る～」を見た。1月2日(金)放送の「日本列島誕生～大絶景に超低空で肉薄!～」以来興味を持っていた西之島の現状について、さらに大がかりな調査を行ったということで心待ちにしていたが、期待に背かない、大変充実した内容だった。火山・地質・鳥類の第一線の研究者を擁し、空中・水中・海底と極めて広範囲から調査を行い、最新鋭の機器を惜しげもなく多数投入するという贅沢(ぜいたく)なスケール感と冒険心をくすぐる展開には大いに胸が躍った。研究者の説明は、研究の意義、説明用に表示されるアニメなども大変分かりやすく、より一層興味をかき立てられた。ま

た、調査中の研究者の発見に沸く表情や、ドローンを操作する職人氣質のオペレーターの振る舞いなど、新たなことに挑戦する人々のドキュメンタリーとしても大変見応えがある番組だった。

- 8月23日(日)NHKスペシャル「新島誕生 西之島～大地創成の謎に迫る～」を非常におもしろく見た。地質学者の方が大陸がなぜできたのかという研究をされていて、その研究の一部として、西之島における溶岩がどういう構成になっているかという、溶岩の化学的な成分を分析する。簡単にいえば安山岩でできているということで、溶岩がたくさん出てくればこれが大きな島になって、陸になっていく、最後の最後は大陸になるんだというような話である。ひょっとして西之島が日本列島ぐらい大きい島にならないかなと思い、そのようなことを考えながら感心して見ていた。研究者の感動が画面から伝わってきた。そこのところが私としては非常にありがたく感じた番組だった。

- 8月30日(日)サキどり↑「農業で“稼ぐ”女たち」を見た。生産から加工消費まで、つまり土から食卓までを理解している女性ならではの生産があるということをうまく表現していると思った。販売する際は、3人の女性の活躍ぶりが紹介されていて、参考になった。1点申し上げると、女性の活躍ぶりはよく分かったが、彼女たちの苦勞が一切出ていない点が気になった。農業は天候に左右され、収入が不安定であり、加えて、汚れたり、仕事が危険であったり、きつかったりする。裏の部分というと表現が悪いかもしれないが、農業のそのような状況に対して一方で課題提起しながら、彼女たちが活躍している状況を打ち出すと、もっと奥深い番組になったと思う。

- 8月30日(日)NHKスペシャル 老人漂流社会「親子共倒れを防げ」を見た。この番組では親が80代で、子どもが50代半ばで失業したというケースが取り上げられていた。失業したというが、大体60歳で定年になるわけで、みんな同じような条件かと思っていたが、この番組で、親が

長寿であるが故に貯蓄がなくなっていき、それに重ねて子どもの職が不安定な場合は、結果的に収入がほとんどないという状況に陥ってしまうという現実を知り驚いた。解決策は、親子で一緒に生活しているのを分離させ、生活保護を受けるしかないとのこと。これが解決策だということが本当にショックだった。長寿社会で非正規雇用が多い中、今こそ昭和30年代に作られた保険や年金の制度を見直す必要があるのではないかと感じた。

- 9月2日(水)NHKスペシャル 老人漂流社会「親子共倒れを防げ」(再放送 総合 前0:10~0:59)を見た。このような番組は何度もいろいろな形で制作し、日本の行政がそのようなところに大きな力を注げるような社会になっていかないといけないという意味で、非常に目が離せないと思い、しっかりと見た。

- 9月5日(土)のNHKスペシャル 巨大災害 MEGA DISASTER II 日本に迫る脅威 第1集「極端化する気象~海と大気の大変動~」(総合 後7:30~8:43)、12日(土)のNHKスペシャル「緊急報告 列島大水害」(総合 後7:30~8:43)、10日(木)の臨時ニュースについて感想を述べたい。NHKスペシャル 巨大災害 MEGA DISASTER II 日本に迫る脅威 第1集「極端化する気象~海と大気の大変動~」はNHKの得意分野で、番組の作り方も非常に熟度が高いと感じた。災害シーズンにふさわしいと思い、警鐘の意味でも時期も良いと思い見た。その中で、大きな雲の固まりが赤道を一周するというマッデン・ジュリアン振動、これが耳新しくて興味を持ったまま最後まで見る事ができた。番組の底流に、極端な災害は起こり得る、警戒や備えを怠ってはいけないというメッセージが汲み取れた。番組放送の5日後、9月10日(木)に大水害が起きた。このような時に一番大事なのは、何度でも大きな声で視聴者に呼びかけ続けるということで、それでしか予防や備えはできないのではないかと思う。ただ、広島の土砂災害の時にも感じたのだが、その臨時ニュースを見ながら、雨が降っている時に真夜中の避難はまず難しいなか、どのように伝えたら良いか、自治体や報道機関が、被災者ある

いは被災をしようとしている人たちにどうすればタイミングよく的確な情報を伝えることができるのだろうかということ考えた。翌朝に鬼怒川が決壊し、午後もしばやしい現場からの中継があり、東日本大震災以来の災害中継だと思った。一連の報道の中で評価したいのは、9月12日(土)のNHKスペシャル「緊急報告 列島大水害」だ。タイミングが本当にぴったりで、よく短時間であそこまでまとめることができたと思う。そこでは関東や東北で64の河川が氾濫したという話があり、栃木県や茨城県以外の所では今回の水害がどのような形で細かく報道できているのだろうかと思った。県別の放送やインターネットとも連携し、地域に合わせた報道をしているのだろうかと思った。原因となった線状降水帯の解説は分かりやすかった。住民へのインタビューで「ご飯食べようと思ったら、ゴボゴボと音がして、見る見るうちに水が来た」という声があったが、災害というのは全く危機感のないところに来るということだと思う。決壊場所から7キロ離れた女性は、「避難しようとしたときには水が腰まで来て、もう遅かった」ということを言っており、我々は避難避難と呼びかけているが、実際に避難は可能なのか。あるいは、避難することによる危険性はどうかということも含めて、さらに検証して行ってほしいと思った。この1週間、予防と備え、警戒ということを報道できていたし、被災地からのニュース、気象庁や自治体からの情報伝達もそれなりにできていたと思うが、本当に難しいと感じている。被災者以外の人間にとっては、あの1週間の報道で不安感が残る。実際自分は被害を受けていないということが延々と続くと、そのような番組にどれだけ現実感があるのか、自分の危険を減らす行動にどれだけ移れるのかという問題点も出てくる。だから、警戒情報を流す地域、時間、手法、あるいはアナウンサーの話し方まで、これは終わりのない改善を続けて行ってほしいと感じた。

- 9月12日(土)NHKスペシャル「緊急報告 列島大水害」本当にタイムリーな番組だったと思う。利根川と鬼怒川の合流付近でのバックウォーター現象、それから、最近の台風は温暖化の中で、広島の水害でも現れたというアウトバウンド、線状降水帯を作るという内容であったが、学者の

方々はこのようなことがもともと分かっていたと言っており、また、利根川付近の河川は氾濫が多く、さらに鬼怒川は「鬼が怒る川」という名前までできており、氾濫のリスクは歴史的にある地域だということだった。これらに対してソフト面、ハード面の備えは本当に十分だったかと疑問に思った。番組の中では、ハード面は標準のもので全く問題ない、避難のしかたに問題があったという内容だったが、毎年のように災害が報道され、火山噴火、地震に加え、大水害や台風でも被害が拡大している。これは温暖化により事態が変わってきたということだとも思うので、これを契機に、今一度ソフト・ハード面をどう備えるかということ国民に考えさせる番組を制作しても良いのではないかと思った。

- 9月6日(日)サキどり↑「進化する“菌活”最前線」を見た。8000年前にできた白神山地や、その菌の活用方法を、わかりやすく伝えている番組だったと思う。「サキどり↑」は初めて見たが、出演者のバランス、進行役、女性タレント、それから小泉武夫先生という解説する人のバランスが取れていて、分かりやすいものだったと思う。
- 9月9日(水)探検バクモン「技のデパート！超高層マンション」を見た。初めて番組表を見たとき、「探検バカモン」と読んでしまった。番組を見ると爆笑問題の2人が出演しており、この2人が探検していくから「探検バクモン」だと分かった。インパクトがあるタイトルで、番組を見るきっかけにもなっていると思った。最近、気がつくとも高層ビルが建っている。どのような形で高層ビルを建てているのかという疑問が、この番組を見ることによってわかり、大きな収穫だった。ひとつのビルを建てるのに、番組で紹介した超高層マンションに関しては1日600人、延べ20万人で建設するという。600人の人たちがあの空間にいるのかと思うと驚くが、40年前と比較すると大きく変わっているということに驚いた。今は、東京をはじめ超高層ビルだらけになっているが、耐震問題も含めながら、どのような形で、どのような技術をもってできているのかということ、この番組を通じて知ることができ、ふだん建設現場に入ることができない一般

人にとってはよかったと思う。また、爆笑問題の2人の目線が現場の人たちの目線に立っていると強く感じた。当然、台本はあると思うが、この2人がいるからこそ探検というタイトルがついていても納得できるなど思った。

- 9月9日(水) アナザーストーリーズ 運命の分岐点「山口百恵引退覚悟のラストソング」を見た。この番組は、人物や出来事の本当の姿を見せてくれるので楽しみにしている。1980年10月5日の引退コンサートから35年たった今でも、多くの人々の心に残っているであろう山口百恵さんの、デビューから引退されるまでの、百恵さんを支えた人たちのお話を改めて知ることができ、NHKだから話しているのではないかと思う部分もあった。13歳という年齢で百恵さんをスカウトした方の話や、百恵さんの歌を作詞するのはプレッシャーだったという阿木燿子さんの言葉など、強い信頼関係で結ばれていたからこそ言えると思う。本当に素晴らしい番組だった。また、事務所元社長の「ホリプロは友和に負けた」の一言で、どれだけ愛されていたか改めて知ることができた。最後に純白の衣装で白いマイクを舞台に置いて去り、それ以降二度と戻ってこないみごとな女性、山口百恵さんを、懐かしい映像と共に見ることができ、見応えのある番組だった。

- 9月12日(土)SONGS「浜田省吾～旅するソングライター～」を見た。浜田省吾さんは、テレビにほとんど出ず、今回は35年ぶりのテレビ出演だった。30分があっという間だった。コンサートには行くことができないので、浜田省吾さんの歌をリアルに聴けるというのは本当に久しぶりだった。浜田省吾さんの映像が、白髪で、良い年の取り方をしており格好良かった。彼の生き方や思い、どのようにこのCDが出来たのかというのがよく分かり、コンサートに行った気分になり、興奮して見た。歌の内容がドラマ化されており、とてもおもしろい映像になっていたのも、さすがだなと思った。おそらくNHKでないと浜田省吾さんは出演しなかったのではないかと思う。感謝したい。また浜田省吾さんの番組を見たい。

- 9月13日(日) サキどり↑「見つけてつながる!MY農家」を見た。知っている人から買い、生産者も買った人を知っている、この生産者と消費者がつながることを“知産知消”と言うということは、この番組で初めて知った。この中で、マイ漁師のひとりとして、岩手のホタテ漁師の佐々木淳さんが紹介されていた。震災のときにボランティアに来られた方と交流を持ち、直接ホタテを販売することで消費者の方から直接「美味しい」と言ってもらえるのはこの上ない喜びで、震災前よりもやりがいを感じているという話はこちらもうれしくなった。また、マイ農家として紹介されていた秋田の方の、去年雨が続き、機械でイネを刈れないというときに、「一生のお願いです。交通費は出せませんが、収穫したお米でお返しをするので、稲刈りを手伝ってください」と呼びかけ、次々と助けを借りることができ、2週間で無事に刈り終えたという話にも感動した。ゲストの高橋博之さんが、田舎から都会へ出る回路は開かれてはいるが、都会から地方への回路はまだまだ広がっていない。漁村のよさを発信していく必要性を感じた。また、この番組の中でマイ漁師、マイ農家を見つける方法も紹介されており、30分という短い番組だったが、中味の濃い番組だと思った。
- 9月16日(水)探検バクモン「ニッポン労働ブルース 浪花節編」を見た。高度成長を支えた人たちが今、65歳を迎えようとし、釜ヶ崎の中での労働人口の問題などを紹介していた。続編があるということなので、次回も楽しみだ。
- 9月17日(木)の朝、チリ地震があり、それをすぐに伝えていた。まさに安全・安心を伝えるNHKだと感心した。ただ、残念だったのは、いつまでたっても、チリ沖であることは分かるが、具体的にどこなのか、震度はどの程度なのかわからなかった。小さい枠で良いので、どこで起きているか、緊急放送時のように伝えていただけると知りたいことが早く知れて良いと思う。

- ニュース番組については、単にセンセーショナルに報道して、事実を述べていくだけではNHKとしては物足りない。やはり深刻な状態に社会がなっているかどうか、地球がどうなっているかなどいろいろなことを含めて、深く掘り下げてほしい。インターネットにない迫力や民放にない魅力が出てくると思う。先日の阿蘇山の噴火のときも、NHKは延々と伝えていた。注意喚起すると同時に、そのあとに「何だ」ということがひとつあればさらに良いと思った。

NHK名古屋放送局
番組審議会事務局

平成27年7月NHK中部地方放送番組審議会

7月のNHK中部地方放送番組審議会は、16日(木)、NHK名古屋放送局において、10人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、東海北陸スペシャル「高校野球100年 ふるさとの名勝負」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、8月の番組編成について説明が行なわれ会議を終了した。

(出席委員)

委員長	森棟 公夫	(学校法人椋山女学園理事長、椋山女学園大学学長)
副委員長	松本 耕作	(加賀味噌食品工業協業組合理事長)
委員	加藤 勇二	(愛知県農業協同組合中央会常務理事)
	小寺 功子	(三重県漁協女性部連合会会長理事)
	佐野 俊和	(コマツサービスエース(株)代表取締役社長)
	田中 章義	(歌人・作家)
	中村 智景	(四季料亭「助六」女将)
	野田 雄一	(富山ガラス工房館長、富山ガラス造形研究所教授)
	長谷川明子	(日本ビオトープ管理士会中部支部会長)
	真能 秀久	(中日新聞社取締役管理局長)

(主な発言)

<東海北陸スペシャル「高校野球100年 ふるさとの名勝負」

(総合 7月10日(金)) について>

- 高校野球に詳しい人にとっては、松井秀喜さんや石川・星稜高校の山下智茂名誉監督についてはよく知られているので、インタビューではもう少し深く聞いてほしかった。松井さんの敬遠のエピソードは道徳の教科書に

も載っており、一般的にも知られている。対戦相手のピッチャーの話などもあれば、違う視点が盛り込まれよかったのではないかと思う。ただ、高校野球100年間を73分にまとめなくてはいけないというのは大変な作業だったと思う。全体としてはスターに偏らず取り上げられており好感が持てた。静岡のフルスイングのエピソードは、選手が後に消防士になっているというところまで描き番組の最後に持ってきている点に、これから夏の地方大会も始まる中、制作者の温かい目線を感じることができた。また、ゲストの片岡安祐美さんがとてもよかった。元高校球児という側面もあり、視聴者に感情移入させやすかったのではないか。単にタレント的に飾られているだけではなく、番組の中で華やかさもさまざまな場面で活躍してくれていたと思う。家族全員で楽しめる番組だった。

- 高校野球は生まれ育った地の高校に思い入れがあるものだろうと思う。高校球児と同世代でない人が見ると過去の出来事と捉えがちになってしまうかもしれないが、出てきた人物を見ると、松井選手、イチロー選手、工藤公康選手など、現役で活躍している選手もいるが退いている選手もおり、野球人生は短いと思う。松井さんの星稜高校時代の試合も見たことがあるが、気がつけば現役を退いており、高校野球と同時にその人の人生を感じながら見た。常に勝った人たちだけが表に出るのではなく、その背景にあるドラマをかいま見ることができたので、その点はよかった。ゲストに片岡さんを抜てきしていたのもとても良かったと思う。どの段階から片岡さんと決めていたか知りたくなった。本人も野球をやっており、ともに感情移入することができた。20代から30代のスタッフが中心になり作り上げた番組だということだが、最終的にどのようにエピソードを選択したのか、各局から集まった人たちがどのように思ったのか興味を持った。
- 工藤選手のノーヒット・ノーランは記憶に残っている。番組を通じて、野球のスキルや勝負だけではなく、人を思いやる気持ちの大切さ、信頼を得ることの大切さ、いわゆる人間力の大切さを野球というスポーツを通じて訴えているように受け止めた。山下さんのコメントにもあったとおり、

スポーツを通じて人生の金メダルを取ることができる人間を育てているということが、番組の裏側で言いたかったことではないかと思った。松井選手のエピソードについてはゲストの片岡さんが「高校生の言葉じゃない」と言っていたが、「相手のやり方には何も言えない」と天を仰ぎ涙を止めていたシーンが印象的だった。これも指導者の教えのたまものということが伝わり、山下さんの人間性がよく分かる内容だった。ゲストの片岡さんは高校野球をやっていたということもあり、感情豊かでコメントが心に響いた。高校野球はベンチに入れずスタンドで応援する人や、草むしりや掃除をするスタッフなどがおり、そのような周囲の支えがあってこそ選手が活躍できる。山下さんは裏方の彼らの努力もしっかりと見ていたと言っていたが、苦労した青年が社会で活躍しているという場面もあってもよかったのではと思った。高校野球の指導者は凡事徹底と言う人が多いが、社会に出たらそのようなことがしっかりできる人間を育てるのは本当によいことだと思う。学校でもこのような番組を見るとよいのではないかと感じた。

- 監督の目線で野球を見たことがほとんどなかったのも、監督というのはすごい人たちなのだと思えて実感した。富山の新湊高校の、町をあげて応援するというエピソードは、時代もそうだったかもしれないが、もう一度その良さを思い返させてくれるのが若き高校球児とそれを支える周囲の大人なのだと思う。このような積み重ねが社会を成熟させるひとつのきっかけになると感じた。愛知県は中京大中京高校が取り上げられると思っていたが、バンビ君の東邦高校が取り上げられており、なぜこの試合を取り上げたのか気になった。東邦高校が強豪ゆえに常に日本一になることを期待され、準優勝を非難されたが、奮起して次の大会では勝ったというエピソードは、今の社会にはあまりない発想である。怒って育てる社会ではなくなりつつある今、逆にこういうことが人を大きくさせる要因の一つなのだろうと思った。いろいろな年代の試合を通して、王貞治さんやイチローさんが投手であったなど、初めて知ることもあり、おもしろかった。幅広い年代層が見ている中で、さまざまな人を取り上げている点はよいと思った。松井選手の5打席敬遠のエピソードは知っていたが、山下さんが松井選手

にかけた言葉や二人の絆など裏エピソードが聞けたことは見ごたえがあった。四日市高校のOBの方から甲子園に初出場した時の話を聞いたことがあるが、こういうことだったのかとよく理解できた。社会に出たらみんなが主役というところで最後に静岡のフルスイングの話を持ってきている構成はよかった。高校球児は高校野球が終わったあと燃え尽きるのではないか、どのような人生を歩むのかとと思っていたが、高校野球がゴールであり新たなスタートにもなっている、それを伝える番組になっていたと思う。

(NHK側)

この番組を作るに当たり7県全ての名勝負を取り上げること、単なるスポーツ番組にせず、何らかの普遍的なメッセージを入れること、地域とのつながりを大事にしようということを共有し制作した。「高校野球100年 ふるさとの名勝負」というタイトルに合うように、地域の盛り上がりでインパクトの強い新湊のVTRを最初に持ってきた。あえて松井選手のエピソードを短くする決断をしたくらいだ。片岡さんの起用はテレビ慣れもしているが当事者でもあるという点で、最初から揺らがなかった。山下さんも含め適任の2人に出演していただいたと思う。

- 高校野球が100年の人気を保っている一番の理由は地域コミュニティの存在だと思う。富山の新湊旋風を番組冒頭に持ってきた構成はよかったと思う。登場した地域住民がそれをよく象徴していた。番組タイトルには「名勝負」とあったが、チームを応援する地域の人々の姿をもう少し多く取り上げれば、さらに親しみの湧く番組になったと思う。甲子園で頂点に立つチームはただ一つで、あとは全て負けていく。高校野球は「人生の宝」という言葉が出てきたが、たとえ脇役でもその先の人生が生き生きとしたものになるなら、野球をやっていた価値はあり、そのような視点も引き続き取り入れてほしい。個人的には愛知県の名勝負は昭和41年の中京商業春夏連覇が印象に残る。地域の盛り上がりからいっても愛知県の町中から

人通りがなくなっただけの感じを受けている。番組を生放送で放送していた点がすばらしかった。構成についても単に過去の映像を流すだけでなく、この地方出身のスター選手や関係者のインタビューを交え、さらに視聴者から届いたコメントを紹介することで番組が奥行きのあるものになっていた。ゲストの発言をうながしフォローアップするアナウンサーの力量も感じた放送だった。

○ ふだん野球はあまり見ないが、高校野球だけは家族で見ており、いつも感動している。私の時代は、バンビ選手や工藤選手、イチロー選手がすい星のようにあられ、女性ファンが多かったのを覚えている。今回の番組は、進行役もよく、ゲストの山下さんは大物を育てあげた監督で、生放送だったが、よいコメントで番組を引き締めていたと思う。片岡さんは野球が本当に好きなのだと思わせる姿が番組の中で多く見受けられ、さわやかで見ていて好感が持てた。自然なコメントで、この番組にぴったりだった。この2人の出演が大成功だったと思いながら番組を見ていた。「名勝負」ということで、岐阜県は何が出てくるか楽しみにしながら見ていたが、王さんと清沢忠彦さんだったので少しがっかりした。名勝負は世代によって捉え方が全く違うので、もう少し最近の事例を取り上げてほしいと思った。高校野球は、いつの時代でもドラマを生み出しており、野球は9回のツーアウトからと思いながら夏の甲子園を見ている。監督の言葉やVTRを見て、やはり日頃からの練習や努力がドラマを生むのだと思った。名勝負は生まれるべくして生まれているということが、この番組を見てよくわかった。

○ 生放送を視聴した。紹介されたそれぞれの試合、場面に応じて、要所所で黒崎めぐみアナウンサーのナレーションが入り、わかりやすかった。当時の心境を本人から聞いている映像もあり、そのときの感情が伝わってきてよかった。ゲストも、この番組にふさわしい人を選んでいたと思う。高校野球をずっと見てきた山下さんだからこそ知る試合の裏話や監督としてのお話、それから松井さんに贈った言葉など、非常に興味深く見た。ゲ

ストの片岡さんは的確なコメントが気持ちよく、常葉菊川高校の選手に対して言われた言葉は、本当に野球を知り尽くしている片岡さんだからこそ言えるコメントだと思い感心した。番組中にスタジオでボードを使い紹介していた東海北陸の名勝負の中に三重県は60年前の四日市高校1校だけだったのが、寂しかった。去年の夏に準優勝した三重高校に名勝負はなかったのだろうかと思った。ただ、60年前の映像を発掘したのは、NHKだからこそだと思い感動した。

○ 高校野球にはあまり興味がなく、番組中に登場した人物は一部しか知り得なかった。高校野球が人間性を育てるのに特別すばらしい点があるのかは疑問に思う面もあるが、そのような目で見ても、100年を迎えるという歴史と、番組に寄せられた視聴者の声はいずれも、高校野球が郷土愛や地域と深く結びついていることを実感させる内容だった。各県の名勝負を当時の映像や選手の今の姿を通して振り返るという内容は、スポーツにドラマ性を感じる人々や高校野球が思い出につながっている人々などには存分に楽しめる内容だったのではないかと思う。地域との関わり合いが強いスポーツだけに、地域ごとに特集を組むことで思いがっそう高まりよかったのではないかと思う。高校野球に精通しているわけではないので、番組で取り上げた人々や映像、記念品などが、どれほど共感を呼び起こすものなのか意義や価値がわからない点もあったが、ゲストの片岡さんの説明や感想が簡潔明瞭な上に、感情表現も豊かであったため、理解の手助けとなった。なお、松井選手の5打席連続敬遠はよく知られたエピソードだと思うが、高校野球100年を振り返る中では松井選手の視点のみで語られている点は物足りなさを感じた。

○ 番組タイトルからは投手戦や延長戦、逆転劇などをイメージした。実際は、ふるさとのヒーローにスポットを当てたり、当時の関係者から話を聞いたりするなど、勝負の勝ち負けに限らず心に残る試合を取り上げていたと思う。これが番組の意図していた部分だとすると、「名勝負」というタイトルと番組の内容にギャップを感じた。番組タイトルや取り上げた試合

にもう少し工夫があってもよかったと思う。紹介する試合が各県一つずつに限定されると名勝負を選ぶことは難しい。たとえば各放送局で「わたしのふるさとの名勝負」というのを3つずつほどあげ、そこから1つ選ぶという形の進行でもよかったのではないかと思う。番組中で東海北陸地区の甲子園の出来事を年表を使い紹介していた点は、全体像が見えわかりやすくよかった。富山の新湊高校のVTRでは町の応援の力といったものが、過去のフィルムや記録からよく伝わった。膨大な記録の中から映像を探してくるといった点は、さすがNHKだと思った。ゲストの片岡さんはよかったが、感動の仕方が大げさだったように思う。視聴者からのメッセージを流すためにスペースを空けているのだろうが、片岡さんと山下さんの紹介のテロップの位置が普通より高い位置にあったのが気になった。

- 非常に楽しんで見た。金曜日の夜に見るのにふさわしい番組だったと思う。特に三重・四日市高校の試合は興味深く見た。当時は高校野球が人気の時代だった。また、完全なラジオ時代でもあり、みんなラジオを聞いて高校野球を楽しんでいた。番組を見ながら、いろいろと当時のことを思い出すことができた。人間力という言葉が出てきたが、野球を通して人間性を育てているというように番組がまとめられていて、見やすくなっていたと思う。山下さんも技術的なことは指導できないが選手の人間性をどう育てるか、そのようなことを指導していると言っていたが、高校野球の監督はこんなことを言うのかと感心した。また、勝負運だけでない心の持ち方というところが強調されており、10回裏で逆転のヒットを打った愛知・東邦高校の原浩高選手の言葉なども心を打つものがあった。非常に満足した内容だった。このような番組はいくらでも見ていたい。各県ごとに作ってほしいと思った。

(NHK側)

この番組はBS1で放送している「わがふるさとのベストゲーム」という15分番組と連動している。各県1本制作しており、15分の中で、その県の名勝負を2試合取り上げている。今回は

番組全体にメリハリをつけるために、地域との絆を描くパート、師弟あるいは友人との絆を描くパート、伝説的な試合を取り上げるパートといったように分けた。そのパートに適した試合を選んでいる。キャスターの2人は高校野球と関わりがあり、ゲストのよいコメントを引き出すことができていたと思う。また今回の番組は、富山の新湊高校のVTRをはじめNHKの今までの取材の積み重ねがあって、できたと思う。片岡さんは純粋に感動されていた。テロップの下が空いていたのは、下にメールやツイッターで届いた視聴者からのメッセージを紹介するためだった。

- キャスターが高校野球と関わりがあったから引き出せたというのは制作者としては分かるが、これから100年間の名勝負を扱おうという時に、番組冒頭で「私も野球をやっていました」という感じがあるのが、プロフィールの入れ方としては疑問に思った。また、アナウンサーがゲストのコメントを一瞬、遮るようになってしまった場面が気になった。

(NHK側)

見方が分かれる部分だと思う。バックグラウンドを最初にお知らせしておいたほうが、進行役とはいえ発言の内容をより視聴者の皆さんにわかっていただくためには必要だという判断だった。

- 発言を途中で遮った点はよかったと思う。生放送で話がどこまで続くのか心配になった。
- テーマから少々重苦しい堅い歴史番組かと予想したが、「流れ」がくどくなく、後味も快適で気持ちの良い番組だった。ゲストの片岡さんの切れの良い解説・感想には感心した。時折、視聴者からのピリリとする声の紹介も番組の視聴者とNHKの一体感を構成するのに大変効果的だった。番組の冒頭は有名な選手の映像が登場し、特に「甲子園が自分の人生のまさに原点」と述べるくだりは、この番組の先が楽しみになった。数多くの名

勝負の映像、すばらしい編集構成には感動・感嘆した。当時の地元の熱烈な支援は若き人を勇気づけたと思う。現代でもあの熱狂がほしいと強く思った。また、岐阜商の試合など、視聴者が懐かしく思い心に迫る映像も多かったのではないだろうか。十二分に歴史をたどりながら心に響く内容に感動させてもらった。ゲストの人選はすばらしく、司会者がゲストの魅力をひきだしているとも思った。人間としても魅力のある人をゲストにしている点はさすがNHKだと思った。

<放送番組一般について>

- 6月19日(金)ナビゲーション「どこまで広がる？工場野菜」は、地元の野菜工場の姿と現状がよく理解できた。経営を軌道に乗せている企業から新規参入企業・最終消費者まで幅広く、複数の異なる視点からしっかりと取材されており、市場の明期の様子がよく伝わった。リスクや課題についてももう少し触れられていたら、さらに充実したように思う。

- 6月19日(金)の金とく シリーズ現場探訪 ルポルタージュ中部「それでも話してほしかった～いじめ自殺 21年目の対話～」を見た。この事件は、いじめ自殺で最初に大きく取り上げられた例ではなかっただろうか。記憶に残っている。いじめ自殺についての再発防止策は何回も議論が行われているが、忘れた頃に発生するという印象がある。先日は川崎で、また最近では岩手でいじめに関する事件があり本当に心が痛む。番組では遺書の公表に至った経緯や課題、当時の両親の心の動きだけでなく、遺書公表後の両親の活動や同じ悩みを持つ子どもからの手紙、そして最後に函館の女性との交流も交え、この20年間をうまく表現していたと思う。子どもの死を乗り越え今もなお活動しているご両親の気持ちに、頭が下がる思いだ。ご両親は子どもがいじめを打ち明けられない理由など家庭の対応を反省なさっていた。現代は学校などの管理者の責任を追及しがちな報道姿勢が多い中で、子どもたちにどのように接するかという課題が加害者・被害者の親、学校関係者に大きくのしかかっていることを再認識した番組だった。

- 6月26日(金)ナビゲーション「学生に選ばれたい ～どうなる 中小企業の採用活動～」は、都会の大手企業の採用活動の期間短縮が中小企業にどう影響を与えるかというテーマに対し、東京の大手企業と採用人材がかぶりそうもない従業員数十名の自動車販売会社を取り上げている点で強引な印象を受けた。内定を料亭で出し学生が喜ぶシーンは番組趣旨に合わせて解釈させようとする制作者の意図を類推した。その企業価値を知り地元に着している放送局が地元成長企業の価値を落とすような印象を視聴者に与える番組作りには疑問を感じた。

- 6月26日(金)ナビゲーション「学生に選ばれたい ～どうなる 中小企業の採用活動～」は、バブルの再来ではないかと思うような内容だった。採用内定者に対する企業の対応をゲストの方は称賛していたが、疑問が残った。企業から手厚い対応をうけた人たちが組織に入っても社会の厳しさですぐ辞めてしまうのではないかと心配になった。いずれにしても、一番の問題は大企業の選考開始時期が8月にずれているということである。それにより、中小企業の採用活動の期間がさらに伸びてしまい苦勞しているということはわかるが、ニュースなどで取り上げられているオワハラの問題や就職活動にかかる費用の問題などに焦点を当てたほうがよかったと思う。

- 7月3日(金)ナビゲーション「ひとりで悩まないで～動き出した性暴力被害者支援～」を見た。性暴力被害者支援については、平成23年の閣議決定後も遅々として進んでいないことが世間的な課題となっているにも関わらず、今まさに動き出したといった切り口で好意的に取り上げる姿勢に、疑問を感じた。内容も昨年放送された「クローズアップ現代」とほぼ同じで、解説者の専門家も同じでは、オリジナルで制作する甲斐がないように思う。ワンストップ支援センターの課題として単に弁護士や精神科医といった専門家ではなく性暴力に精通した専門家とつながるべきと番組で紹介した直後に、つらい状況が続かないための対処法として、「ネットやLINEで誰かとつながることが大切」と答えたことには違和感を感じた。番

組作りへの真摯（しんし）さやこのテーマに向き合う真剣さが欠けているように思った。

○ NHKスペシャル 戦後70年ニッポンの肖像 ―世界の中で― 6月19日(金)「第1回 信頼回復への道」(総合 後10:00~10:49)、6月20日(土)「第2回 冷戦 日本の選択」(総合 後9:00~9:49)、6月21日(日)「第3回 “平和国家”の試練と模索」(総合 後9:00~9:49)を見た。冒頭のちばてつや氏の年代の変遷による漫画が、戦後の日本の成長を人の成長に合わせ身近に表現しており、番組の導入部分として印象的だった。アナウンサーの進行や語りにも落ち着きがありよかった。また、番組の随所に当時の関係者からの深い証言や後の研究によって明らかになった背景が織り交ぜられているなど、外交交渉の内幕の一端を見たようで驚きがあった。特に、沖縄返還交渉における核兵器と繊維製品対米シーリングのギブアンドテイク、米中接近と秘密交渉の辺りのくだりは現在の尖閣諸島問題や沖縄の基地問題にも深くつながる問題であるように感じた。自衛隊の国際活動がなければ日本が国際社会での立場を確立しえない状況の中で、第3回で取り上げられていた湾岸戦争からPKO法案の流れ、竹内行夫元外務省事務次官の自衛隊派遣のための新法の検討といったことは、今現在国会で大いに議論されている集団的自衛権に関する問題から憲法解釈の限界につながる課題とも言え、国益にも関わる問題だと思った。

○ 6月20日(土)超絶 凄(すご)ワザ!「最強の橋対決~天才学生VS. 匠(たくみ)軍団~」(前編)、6月27日(土)超絶 凄(すご)ワザ!「最強の橋対決~天才学生VS. 匠(たくみ)軍団~」(後編)は、非常におもしろかった。高専生が職人に勝利したことに驚いた。高専生は橋の形を先入観にとらわれず自由に発想していた。また、チームで意見を言い合い、工夫を重ねていた。一方、職人グループは橋の形にこだわり私の主観かもしれないがリーダーが絶対的な存在であった。そんなところに勝敗の要因があったように思う。学生にも見せたい番組だった。

- 6月20日(土) SWITCHインタビュー 達人達(たち) アンコール「井村雅代×広上淳一～育てる力!～」を見て、64歳の井村さんのとても情熱的な部分に励まされた。井村さんが「人より優れているのは排除能力」と言ったことに対し、広上さんが「断捨離するということですね」といったやりとりがとても印象的だった。シンクロから離れている時はシンクロのことは忘れて生活する、スイッチをオン・オフするというとても上手な生き方をされていると思い参考になった。広上さんの指揮も情熱的な教え方で、一流の監督や指揮者にはそれなりのオーラがあり、前に進み続ける情熱というすばらしいものが共通しているということがよくわかった番組だった。

- 6月27日(土) データなび「世界の明日を読む」はタイトルに世界とあるが、番組の冒頭では「データを切り口に日本の今を見る」と紹介していた。日本なのか世界なのかわかりづらかった。内容はおもしろく見やすい番組だった。関連性のないテーマで成り立っていたが、どのようにテーマを決めているか気になった。風の強さを矢印で表現したり、地面に雨水がたまっている量がデータで分かるという事例は興味深かった。天気予報で活用するとよいのではないかと思う。一方、主観的なものではないかと最後まで気になったのが、30代の女性の幸せ度を測っていた点である。ここ数年間のデータでは、30代の女性は幸せ度が下がってきているという解説があったがその根拠がよくわからなかった。育児や家事に加えて仕事まで期待され、重い荷物を背負い人生を生きているという解説だった。現代女性の悩みをかいま見ることにはできた。この番組はわかりやすい番組なので、もう少し頻繁に放送しても良いと思う。

- 6月28日(日)日曜美術館「レオナルド・ダ・ヴィンチ 幻戦争画大作」を見た。レオナルド・ダ・ヴィンチが戦争画にチャレンジしていたというのは、初めて知った。誰もが知るような著名な画家の知られざるモチーフや生涯を懸けようとしていたものを、このように番組の中で取り上げていくのは良いことだと思う。

- 6月28日(日)動物の赤ちゃんミニアルバム「スナメリ～鳥羽水族館(三重県)～」を見た。育児放棄した母親の代わりに、24時間体制でスナメリの人工哺育に取り組む飼育員の姿は本当の母親のようだった。スナメリの人工哺育は世界初とのことだったが、飼育員の深い愛情と努力が十分に伝わり心温まる番組だった。

- 7月4日(土)「AKB48SHOW」を見た。若い世代の流行やファッション、あるいは風俗をどう捉えるかは、メディアにとって大きな、しかも古くて新しい問題で、NHKが今人気のAKB48をどのように捉えているか興味があり視聴した。コント、歌、ダンスなどバラエティーとしてオーソドクスな作りで、ほほえましく軽い気持ちで時間を過ごせる番組だった。ただ、日本の芸能界ではアイドルの低年齢化が進んでおり、特異な印象も受ける。この番組では最年少の出演者は15歳だった。AKB48グループ全体では一番若い人は小学6年生で、2人メンバーに入っている。年少者の労働については、演劇その他の興行には例外規定があると思うが、少年・少女ビジネスは当たり前ではなく、放送番組の制作にあたっては細心の注意を払ってほしい。今年の12月でAKB48が10周年ということなので、民放も含め様々な切り口で記念番組等が放送されると思うが、戦後の芸能史という観点からもAKB48を取り扱ってほしいと思う。

- 7月5日(日)小さな旅「しらす 輝く浜で～静岡県 浜松市～」を見た。もともと好きな番組なのだが、今回は漁師になりたい夢を持つ孫に対する祖父の視線の温かさに心ひかれた。ゆでたシラスをアップにした映像は思わず秒数をカウントしたくなるほどで描き方としておもしろかった。また、シラスのおすそ分けのボリュームのすごさも印象的だった。番組の途中で登場した浜名湖のアサリ漁師の日焼け姿も印象的だった。一方、レポーターの女性は必要だったのか疑問に思った。取材力と素材の魅力があれば、あえて旅人は必要ないように思う。また、「漁師は海の恵みに感謝する日々」というナレーションがあったが、あえて語るべきコメントなのだろうかと感じた。興味や感情移入をそいでしまう可能性もあると思っ

た。

- 7月5日(日)日曜美術館「片岡球子 輝く個性の秘密 スケッチは語る」は、片岡さんの絵が大好きで、彼女自身に興味があったので番組を視聴した。一つの絵を描くために何十冊とスケッチをし、そこから絵を生み出すというすばらしさに感動した。富士山の絵が代表的な絵だと思っていたが、この力強い技法の富士山を描くまでに、いろいろなモチーフを細かにスケッチし、さまざまな技法を学ばれているといった点が印象的だった。ゲストの女性写真家のコメントも大変よかった。番組ではセットとしてスタジオに花が飾ってあり、ホームページにも「今週のお花」として紹介されている。ぜひ番組内でも今週の花のコンセプトや花の名前を紹介してほしい。

- 7月6日(月)プロフェッショナル 仕事の流儀「最先端は、地方でこそ生まれる フレンチシェフ・谷口英司」を見た。地方は情報が偏ったり入ってこないというマイナス面がある。番組を見て、谷口さんが何を考えどのようにしようと思っていたかを知ることができた。「プロフェッショナル 仕事の流儀」は構成が一貫していて、とても見やすく、背景まで丁寧に拾い上げながら番組づくりをしている。スーパーも視覚に訴えることができており良かった。今回は、地元・富山産の食材にこだわる料理人と生産者の出会い、コミュニケーションの中でともに新しいものを作り上げていこうとする人の流れが具体的な形となり、ここにしかないフランス料理を作り上げていた。物をただ単に買うだけでなく、自分たちで作り上げ伝えていくことが今いかに重要か、この番組は毎回人物が違うにせよ、そのようなことを感じさせてくれる番組だと思う。

- 7月6日(月)もういちど、日本 「アラメ漁」は松たか子さんのナレーションが心地よかった。アラメはアワビやサザエの大切な餌で、保護するために海女が海の中で間引きながら大切に収穫している様子や、近年は保護のために収穫を制限していることなどが紹介されていた。アラメを使った「あらめ巻き」は一度食べてほしい海女の味だと思う。

- 7月7日(火)に再放送されたアナザーストーリーズ 運命の分岐点「暴かれた大統領のスキャンダル クリントンと女たちの思惑」を見た。クリントン大統領の話詳しく知らなかったので、なぜあのような事件が起こったか経緯がよくわかり内容に満足できた。盗聴テープを仕掛けることが発端となったのだが、黒幕となる女性、キーパーソンはこの方だということがよく分かり感心した。
- 7月8日(水)東北発☆未来塾 高橋編集長のごちそうさまのチカラ「モノガタリが味を変える!？」では、一次産業を再生させようと奮闘する仙台の高橋博之さんが、自ら創刊する食の情報誌が紹介されていた。高橋さんは農業、漁業の問題は消費者の意識改革からということを書いており、私自身もこれまで魚が売れないと嘆いてばかりで消費者に価値を伝えることができていなかったと反省した。魚を釣るための漁師の苦労も紹介できるようにし、正當に評価してもらえることを発信していきたい。漁業について考えさせられるよい番組だった。
- 7月8日(水)アナザーストーリーズ 運命の分岐点「あさま山荘事件 立てこもり10日間の真相」を見た。「アナザーストーリーズ」はそれぞれが自分たちの立場での状況を、今だから語れる視点で伝えている番組だと思う。あさま山荘事件はNHKが国会中継をしないで当時伝えたということをおとから知ったのだが、当時リアルタイムで十数時間見ていた。今回、山荘に立てこもった犯人が当時の状況をコメントしていたのは驚きだった。番組を通してこれが安保闘争や学生運動が終えんを迎えるきっかけになったのだと再認識した。また、国会中継をしなかったことについて様々な意見があったと記憶しているが、今の国会の状況を思うと、報道の在り方についても考えさせられる番組だと思った。
- 7月9日(木)に再放送されたコズミックフロント☆NEXT「月のミステリー 奇妙な発光現象の正体は？」を見た。民放も含め、宇宙を扱った番組がたくさんある中で、ここまで詳細に取り上げ、丁寧な世界の専門家

の意見を求めている番組は少ないと思う。宇宙をどう見せるかはNHKの役割の一つであり、このような番組は大事にしてほしいと思う。

- 7月10日(金)高校野球100年ものがたり「わがふるさとのベストゲーム」では、栃木編の作新学院と銚子高校の試合を視聴した。江川卓さんの高校時代から堂々としてオーラのある姿に見入ったが、当時はカラーテレビが普及していたはずなのに、映像は白黒のようだったので気になった。
- 7月11日(土)超絶 凄(すご)ワザ!「ミラクル紙飛行機 大決戦!(後編)」は、久しぶりに鳥肌が立った番組だった。直線を10メートル飛ばして、回転させて戻ってくるというコースだったが、コースの発想がおもしろかった。微妙な手の動きで紙飛行機を変えているのを見た時に、理論を教えてほしいと思った。とても楽しかったので、一般からの挑戦者も募集し夏休み紙飛行機大会というような番組も見たい。子どもたちのミラクル紙飛行機大会というようにして興味を引き寄せてもおもしろい番組ができるのではないだろうかと思った。
- 7月11日(土)NHKスペシャル 私たちのこれから「#老後危機 あなたの備えは大丈夫?」を見た。我々の世代にとっては不安ばかりが募る内容だった。老後に備え現役時代に3000万円の蓄えがいるとか、同年代扶養とか暗い話ばかりで、お先真っ暗になった。このような話のときは楽しく生き生きとしていらっしゃる方や若い人たちのお手本となるような老後を過ごしている方を出した方が、明るい老後を夢見ることができ、プラスになると思う。
- 7月12日(日)NHKスペシャル「腰痛・治療革命 ～見えてきた痛みのメカニズム～」を見た。番組では腰痛は脳が異常をきたしていて、本当は痛くないが脳が痛いと言っているだけと伝えていたが、信じる者は救われるということなのかという印象を受け、もう少し正しい知識や情報を伝えてほしいと思った。腰痛を改善するトレーニング方法などの紹介もして

ほしかった。

- 7月12(日)こころの時代～宗教・人生～「日々是好日 生かされて生きる」には、岐阜県美濃加茂市の正眼寺住職・正眼僧堂師家の山川宗玄老師が登場し見ごたえがあった。山川老師は雲水になったころ、平均2時間の睡眠時間で過ごしており、一日の生活がすべて修行だったころの体験を通じて、一日一日の向き合い方を説いている。名僧としての評価はこれから高まっていくだろうと思う。今後もぜひテレビに登場していただきたいし、NHKでも追ってほしいと思う。番組の内容は見ごたえがあったが、聞き手の方はご自身もよく勉強されており知識が豊富すぎて、視聴者には質問が難解だったのではないだろうかと思った。専門家の方には喜ばれるだろうが、一般の日々の悩みをもった人には難しいように感じた。
- 7月15日(水)認知症キャンペーン「認知症介護 家族の悩みにこたえます」については、大変な状況を実態に即し描いていたと思う。さまざまな角度で取り上げ、本当に困っている人たちの事例をそのまま描くことは必要なことだと思う。相談窓口として電話番号の案内を入れていたのは良いが、表示が短かった。せめてアナウンサーが復唱したり、ホームページを見てくださいという導入をしても良かったのではないかと感じた。生放送で家族の問題が描かれるというのは良いと思う。続編に期待したい。
- 7月16日(木)あさイチ「JAPAなび 東海ハイウエー」は、画面に地図を入れてほしかった。特に名古屋城外堀のホテルの話は、一般の人が見た時に行きたいと思っても行き方がわからないと思う。6月18日(木)に岐阜の「ピカピカ☆日本」で取り上げた相撲のぼりがスタジオに登場した。予告していたのでいつ見られるのかと気になっていたが、のぼりの大きさを実感することができた。このような演出は興味をひき良いと思った。
- 「アニメ 英国一家、日本を食べる」は、漫画の映像とリアルな映像がミックスされており共感が持てる。日本人は内にこもりがちなので、外国

目線で日本を見るのは重要なことだと思う。バイリンガルで見られるという構成も良い。もう少し見やすい時間帯に放送すると子どもでも見ることができ良いと思う。

(NHK側)

6月26日(金)のナビゲーション「学生に選ばれたい～どうなる 中小企業の採用活動～」は企業と学生、お互いがどこまでを知り納得した上でマッチングが成り立つかという視点で見た時に考えるきっかけになると思った。オワハラに遭った学生も追加取材し、後日「ニュースウォッチ9」のレポートで展開した。

7月3日(金)のナビゲーション「ひとりで悩まないで ～動き出した性暴力被害者支援～」は、「クローズアップ現代」でも取りあげたテーマであることはご指摘のとおりである。ただ、性暴力被害者の支援に関して、関西は先進地であるが東海北陸地域は遅れていた。今回ようやく動き出したというタイミングで制作し放送した。何度やってもやり足りないテーマだと思う。地域の事情に即して地域放送で取り上げることも必要ではないかと感じている。

NHK名古屋放送局
番組審議会事務局

平成27年6月NHK中部地方放送番組審議会

6月のNHK中部地方放送番組審議会は、18日(木)、NHK名古屋放送局において、11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「クローズアップ現代」報道に関する調査報告を受けた再発防止策について説明があった。続いて、ナビゲーション 中部ジモ女の選択「大卒女子が戻らない～変わり始めた“幸せ”モデル～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、7月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	森棟 公夫	(学校法人椋山女学園理事長、椋山女学園大学学長)
副委員長	松本 耕作	(加賀味噌食品工業協業組合理事長)
委員	大島 宇一郎	(中日新聞社取締役管理局長)
	小澤 正俊	(大同特殊鋼(株)代表取締役会長)
	加藤 勇二	(愛知県農業協同組合中央会常務理事)
	小寺 功子	(三重県漁協女性部連合会会長理事)
	佐野 俊和	(コマツサービスエース(株)代表取締役社長)
	田中 章義	(歌人・作家)
	中村 智景	(四季料亭「助六」女将)
	野田 雄一	(富山ガラス工房館長、富山ガラス造形研究所教授)
	長谷川明子	(日本ビオトープ管理士会中部支部会長)

(主な発言)

<ナビゲーション 中部ジモ女の選択「大卒女子が戻らない

～変わり始めた“幸せ”モデル～> (総合 5月29日(金)について)

○ 福井県は住みやすいところで、3世代同居も多い土地だということは、よく報道で取り上げられているので知っていたが、“福井モデル”とか“北陸モデル”と女性の生き方が表される中、さまざまな問題も抱えている実情を、番組を見て初めて知った。実際に就職活動をしている学生を取材しているのはよいが、その親子のやり取りには、不自然さを感じた。親の世代が思う仕事の意味と、娘が思うやりたい仕事の意味が違っていると感じた。仕事の定義について明確にしなかったのも、そのほかの構成要素もピントがずれてしまった印象を受けた。自動車販売店で働く女性社員の事例は、仕事の捉え方がずれていたように思う。この番組で伝えたい女性の仕事におけるステップアップの例として挙げたのであれば、あまりに物足りない内容。それが福井県の代表例かと誤解されてしまうのではないかと思うと同時に、せっかくだろんな若い女性を取り上げて問題提起をしているのに、もったいないと感じた。ゲストの山崎亮さんのコメントはよかったのだが、最後の“のろし”の話だけは疑問を感じた。女性のパワーで男性も動かし、地域活性化につながったということ伝えたいのだと思うが、男女差別があるようにもとれるエピソードで、もう少しきちんと事の経緯を説明できていれば、誤解を生むこともなく伝わったのではないかと思う。これまで「中部ジモ女の選択」シリーズの番組をいくつか見て感じることは、本当に選択しなければいけないのは、若い女性を囲む社会全体ではないかということ。そういう意味では、今回もいろいろなことを気づかせてくれたと思う。

○ やりがいのある仕事をしたいと言う就職活動中の娘と、仕事だけではない女性としての生き方を論ずる母親のやり取りは、福井県だけでなく多くの地方で同じようにある姿であり、身近な課題だと思う。小中学校の全国学力テストでいつも上位に位置する福井県であれば、当然、高学歴になる子も多い。大学の選択肢も広がり、東京などに出れば、就職しそのまま戻ってこない若者の率も高くなるのは自然の流れだと思う。数字的な根拠も重要だが、もう少し、そこに至る背景が見えてくるデータが示されるとよかった。地元で働く女性の就業率や育児をしながら働く女性の全国順位などが紹介されていたが、10年前と今では進学先も変化していると思う。例えば、最近では理系の女子が増えているというが、どういう大学に行くのか、理系・文系でどのような違いがあるのかなどの分析をすると、もっと説得力が出てくると思う。また、福井の女性管理職比率が11.7%、全国41位だからといって、企業が女性の力を生かしていないとは言えないと思う。各県、各地方で事情が

ある。製造業や中小企業が多いところでは、例えば、夫婦で会社を運営し、女性である妻は活躍しているが、管理職ではないという事業体も多いと思う。比率だけでは、判断できないのではないか。番組後半のキャリア志向の女性のUターンについて取り上げたところは、なるほどと思った。30代くらいになり、結婚や出産に直面した女性が、よりよい環境を求めて地元に戻って来られるようにしていこうという取り組みは重要だと思う。出ていくのはしかたがないが、戻って来たときの受け皿をどうやって作るかというこれからの課題のほうをクローズアップするほうがよかったのではないかと思った。

○ 福井県が日本有数の進学県であり、また、幸福度も高いということはこれまでもメディアで取り上げられている。番組に登場する東京で働いている女性は、いかにもキャリア志向で生き生きと描かれていたが、仕事と家庭と育児をどう成立させていくのか、本当の姿が見たいと思った。育児や家事に加えて仕事をしていくことは本当に大変なことだと思う。時間的に制約される中で女性が精いっぱい仕事をしている現状を、もっと認める雰囲気を作社会に作るべきではないかと思った。キャリア志向もあれば、そうでない考え方もある。それぞれの価値観があると思う。番組で紹介された企業の取り組みは、解決策になるような事例ではなかった。企業の意識改革をどう図っていくか、女性の能力開発をいかに支援していくかなど、他県の取り組みなども事例に加えるともっと説得力があったのではないか。今の世の中、さまざまな情報を得られ、いろいろなことを考え、選択する機会がある。子育てや家事に重きを置くという価値観も男女問わずあるだろう。最終的には個人の価値観ではないだろうか。会社でも、家庭でも、そういったことを理解し合うきっかけとして、このような番組が見られればよいと思う。

○ そもそも狭い日本において、地元にとどまるかとどまらないかということが、それほど大きな問題なのだろうかという気もする。大都市圏でも希望の就職をするのは難しい状況で、ましてや自分のやりたいことを生かせる場所を探すのはとても大変だと思う。働きたくても働く所さえなかった時代もある。選択肢が増えてきたこの時代に、「中部ジモ女の選択」シリーズが、中

部という各県異なる特色を持つ地域で、年間を通してどういう取材をし何を指すのか、少し焦点が甘い気がする。タイトルの「“幸せ”モデル」とは、何を以て“幸せ”モデルと云っているのか疑問に思った。いくつかの事例も、もっと別の視点で捉えたほうが言いたいことが伝わったのではないかと云う。福井から出て東京の大学で学び働いている女性たちの話をもっと引き立たせてもよかつたのではないかと云う。番組の導入のところで紹介したきりで、あとは福井の地元の事例だけだつたのは、しっくりこなかつた。生き生きとして都会で頑張っている彼女たちが本当は今どう思っているのか、どうしたいのかということ、もう少し浮き上がらせると、今後の対策に向けたヒントも見えてくると思うので、導入だけで終わってしまったのはもったいない気がする。県のUターン就職支援センターの取り組みを紹介していたが、例が1人だけでは、本当に県が力を入れてやろうとしているのか、よく見えてこなかつた。都会で活躍する女性たちの意見、今後どうしていくのかという考え方、県の取り組み、それぞれの方向性が結びつくような構成にすることで、これからの「中部ジモ女の選択」の目指すところが見えてくるのではないだろうか。

- 今回のテーマにおいて、これまであまり問題意識を持っていなかった視聴者にとっては、出されていたデータも的確で、分かりやすく25分にまとめていたと思う。平成12年の段階で地元に戻る人が41%だつたのが平成22年で18%になつたとか、地元に戻らない59%が82%になつたとか、求人倍率が全国トップレベルなのに女性管理職の割合は全国41位だとか、全く知らない数値がいろいろと出てきて興味深かつた。ただ、そもそも、このような女性の生き方に焦点をあてたテーマの番組で、スタジオに男性3人だけのトークというのはいかかなものか。どんなによい話でも、男性サイドからの偏つた意見に見えてしまう。せめて、一人でも女性がいたほうが、伝わりやすかつたのではないかと云う。県の就職担当の活動と自動車販売会社の事例については、この程度の取り組みは多くの自治体や企業で行われているのではないかと感じた。別の事例はなかつたのだろうか。特に、自動車販売会社

の部分は、テーマは違うものの、前週の「ナビゲーション」で同じ自動車メーカーの話題が取り上げられていたので、配慮すべき点が見受けられた。今回の番組だけではなく、「ナビゲーション」全体の枠の中でのバランスも考え、特定の企業イメージにならないようにすべきではないか。

(NHK側)

就職活動中の娘と母親の場面は、日常でよくしている会話を取材することができた。編集はしているが、ほぼそのままの内容で番組に出させてもらった。取材した若い女性の多くは、都会への志向があり、番組で取り上げた対策ですべてが解決するとは思っていない。なかなか対策が進まず、試行錯誤しながら取り組んでいるというのが、自治体や企業の現状だと思う。しかし、何もやらないよりは、何か動こうとして、一歩を踏み出している姿を取材させていただいた。スタジオ部分では、そのほかにどのような考え方があるのか対策があるのかを話そうと心がけたが、十分に伝わらなかった部分もあったかもしれない。また、今回はたまたま、スタジオが男性3人になったが、今後、テーマにふさわしい展開になるようスタジオのありようを検討していきたい。

女性の価値観の違いは本当に重要で、プロジェクト全体を通して、きちんと踏まえて取材をしていかなければならないと改めて思った。また、今回、スタジオが男性3人になってしまったが、取材者自身も含め、男性もふだんの生活から仕事や家庭における女性の生き方を尊重し考えていくことが大切であると実感している。

- 地方から有能な女性が流出する、地域に女性のやりたい仕事がないという女性の仕事に対する意識の変化における課題に対して、いわゆる“福井モデル”と呼ばれる環境だけでは限界があることを分かりやすく番組にしていた。

ただ、仕事への意識の変化があるとすれば幸せの意識も変化していくわけで、これを「“幸せ”モデルが変わり始めた」と言い切ってしまうことに対して、疑問を持った。そこに論理のずれが生じている気がした。例えば、地元で自分の好きな仕事はなく給料も安い、温かい家庭を築くことを優先して、そこにある企業に勤めるという選択もあるだろう。あるいは、さまざまな形で親の支援があるとするなら、それも自分の中で優先すべきことになり、選択するに至るかもしれない。変わり始めたのは“幸せモデル”ではなく、“幸せの意識”なのではないか。大卒女子のUターン率が減ったというデータがあったが、幸せモデルが変わるという意味での象徴的な数字の変化とは捉えていなかったように思う。「変わり始めた“幸せ”モデル」とするならば、県民の幸福度や充実度が高いことを何らかの形で番組の中に入れておかないと、タイトルの意味が伝わらないのではないかと思った。

- 3年ほど前から問題視されている課題を取り上げたもので、着眼点やテーマは興味を喚起するものでありながら、取材による事実確認が表層的で甘く、ゲストの話も要領を得ず、結果として結論が釈然としないまま終わってしまうという展開だった。大卒女子が戻らない理由について、科学的背景やデータの分析もなく、個人の事例から帰納的に解決策まで導き出そうとしたように思えた。ゲストの見解や意見は、アイディアの域を出ないものではなかったか。このテーマに対する解決への糸口にはならなかったように思う。コミュニティーデザイナーという肩書も一般的にあまり知られているものではなく、ゲストが、どういう人なのかよくわからなかった。特段、相関も立証されていない中、女性の管理職比率が低いというデータだけで、福井に女子大生の戻らない原因として取り上げ、それを裏付けるために取材をしていたように見えた。また、キャリア創造の実例として自動車販売会社の事務職を取り上げた点は、いかがなものか。事務職の女性が店舗装飾をすることがキャリアなのか、そもそもこの事例が、女性の評価につながる成功例とも実践例とも思えず、論拠実証のために間に合わせの取材をしたようにしか見えなかった。女性のキャリアとはこのようなレベルかという誤った認識を持たれか

ねず、さらに女子大生が地元に戻らなくなるのではないかと感じた。あまりに強引な印象で、女性管理職比率の低さという論拠の立証には適当ではなかったと思う。女性にキャリアパスを設け、女性が性差別なく働いている職場はある。もっと徹底した取材が必要だったのではないか。

○ 今、国も女性登用の取り組みに重きを置いている中で、今回のようなテーマを取り上げることは意味があり、期待して視聴したのだが、正直なところ、あまり伝わってくるものがなかった。6月15日(月)の「NHKニュースおはよう日本」での取り上げ方のほうが、内容が分かりやすかった。福井県の女性の就業率などについては、あまり知らなかったので、地域の特色については興味深かった。福井県が現状に危機感を覚え、いち早く行政と企業が取り組んでいるというのは、すごくよいことだと思った。しかし、キャリアを積んだ女性のニーズが企業のニーズと合うのかというのは本当に難しい。現実的には、Uターン支援センターの取り組みが実を結ぶことは、待遇面などを考えても難しいのではないかと思った。ただ、子育てをしながら働きやすいと言われる福井のよさをアピールして、一人でも多くの女性に残ってもらえるようにしたいという行政の思いは伝わってきた。番組の最後に紹介された“のろし”の話は、的を射てないように感じ、全体としてもったいない気がした。

○ たびたびメディアで取り上げられる福井モデルは、羨ましい環境だと思っていた。女性の働き方をどうしていくのかは、多くの企業にとっても大きな課題だろう。福井モデルのような環境で親の支援が受けられれば、仕事が続けられるという人もいると思う。環境を整えば、キャリア志向の若者にとって、最終的には、求める仕事があるのかどうかどうかが問題になってくる。家庭と仕事が両立できるような業務としくみを持っている会社がどれだけあるのか、あるいはないのか、取材をした結果が番組の中でうまく伝わればよかったのではないかと思う。日本には、中小企業や商店などがたくさんあり、それらの経営を強化すれば日本経済を活性化できる、もっと経営に

影響を与えられる仕事があれば地元に戻りたいという人の話を聞いたことがある。福井にもそういう事例があるのではないだろうか。そこを示すと番組構成に一本筋が通って、シリーズを通してメッセージも伝わりやすくなるのではないかと思う。

- 今回のテーマについて、放送のタイミングや問題の捉え方は、NHKらしくてよかったと思う。若者たちの人生設計という観点では、現代が抱えるテーマの深刻さの核心を突くもので、たまたま福井モデルを取り上げたのだと思うが、女性だけでなく若者全体が地方から離れていくという問題がよく分かる番組に仕上がっていた。番組のポイントは、問題の提起と、その解決にあると思う。問題の提起は、核心を突いている。スマートフォンなどIT技術が進歩し、地方においてもコミュニケーションにおいて時間的に非常に速くなった現代に、なぜ若者が地方から出ていくのかというところの深刻さを、もう少し厳しく追求するとよかったのではないかと思う。問題の多面的な解析や分析がないまま、一つの事例からいきなり解決に飛躍した印象だ。視聴者に対してこの問題を考えてほしいという流れが作られておらず中途半端な感じがした。福井県だけではなく他の地域でも同じような問題がある。ぜひシリーズを通して、問題解決につながる提案をしてほしい。若い人に番組の感想を聞いたところ、問題の深刻さもさることながら、男性が女性に仕事を与えてあげようというような視点が見受けられる、女性ならではの視点ということに重きを置き過ぎてはいないかという声があった。一昔前とは、女性の個性の発信の意味や捉え方も変化している。もう少し成熟した目線で、番組を制作してほしい。今後の展開に期待している。

- 非常におもしろい内容だった。データがいろいろ示されていたが、このテーマにおいては、視聴者は、数字を見るときに男女の差に興味があると思う。そのあたりを意識するともっと伝わりやすかったのではないか。学生のUターンに関して行政が支援したり、企業がさまざまな取り組みをすることは重要だとは思いますが、社会の全体的な流れは変わらない。結局は、就業機会と選

択肢なのだと思う。自分が勉強してきたことが役に立つか仕事に生かせるかが選択の決め手。なんのために東京に行って勉強しているのかを考えれば、やりたい仕事は地元で見つからなければ、戻らないという選択になるだろう。今の時代、女性の意識は変化している。そういう流れも覚悟しつつ、地元は地元で努力するという2つの面をきちんと見ておかないといけない。女性の就業率が上がり、高学歴化してきた時代。福井県は、行政や企業の取り組みがスタートしているということでも、一歩進んでいるのかもしれない。他の地方でも同じような状況だと思う。そんな中でも、地元での受け入れの努力は必要であると改めて確認するのに有用な番組だったと思う。

(NHK側)

大卒女子が地元に戻らないという全体的な流れを変えるのは非常に難しく、大学も少なく男性女性に関わらず、要望にかなうような企業が少ないのが現状だ。そんな中でも受け入れの努力をしていく行政の取り組みを取材した。少しでも地元にも活躍できるチャンスがあるということを伝える意味でもその取り組みは重要だと思う。これからも福井県でのさまざまな取り組みを取材し、伝えていきたいと考えている。地元には、女性が活躍する企業も多くあると思うが、今回の自動車販売会社は、変わり始めたという意味で、その取り組みを取材させてもらった。男性社会というイメージのある自動車販売会社で、女性のパワーを活用していこうという変化を表現したかった。

福井の特に大手企業では、すでに女性が活躍する会社も多かったが、今、変わり始めたという会社を探し、自動車販売会社が取材をさせてくれた。ほかにも、過渡期にある会社は多くあるというのが取材をしての実感だった。さまざまな事例を丁寧に取材しながら、今後のシリーズにつなげていきたい。

<放送番組一般について>

- 5月22日(金)ナビゲーション「“究極のエコ“水素社会 実現のカギは」を見た。世界初の水素を使った飛行機のフライトの映像から始まった。ついに時代はここまできたかと思った。今年1月からは、日本で唯一の水素バスも運行しているとのことだ。水素の可能性は日本国内だけでなく世界的にも有益だと思うので、テーマとして取り上げることはよいと思う。水素ステーションは全国にはどれくらい普及しているのか、世界的な動きはどのようなのかなども知りたいと思わせてくれる番組で、ぜひ続編に期待したい。
- 5月22日(金)ナビゲーション「“究極のエコ”水素社会実現のカギは」は、なぜ今、水素なのかについて、適切なコメンテーターを招き、分かりやすく効果的に訴えていた。取り上げた水素バスや愛媛大の実験、名古屋工大等の事例は、いずれもテーマにふさわしい内容で、視聴者に一層の理解を図ることができたと思う。また、事例から課題形成、最後のまとめまでがスムーズだった。今回、番組の質を向上させていたのは、分かりやすく熱意を持って質問に簡潔に答える愛媛大学大学院の野村信福教授だったように思う。「ナビゲーション」は、招くゲストコメンテーターによって番組の質が左右される番組だと思う。中部地方との関わりにこだわらず、その分野への専門性はもちろん、テレビに合った適任者を選ぶべきだと思う。また、前半、永井伸一アナウンサーの滑舌が悪かったのが気になった。再放送もあると思うので、明らかな間違いでなくても、聞きづらい内容は撮り直したりできないのだろうかと思った。
- 6月12日(金)ナビゲーション 中部ジモ女の選択「地方で生きるシングルマザー」を見て、シングルマザーに対する偏見等がよく分かった。日本の貧困問題にも関わってくる問題で対策の必要性を感じた。島根県の例は、職業として農業を選択した女性を取り上げていたが、こういう自治体の取り組みが今後広まってほしいと感じるとともに、職業の選択肢の幅を広げていかねばならないと思った。さらに、例えば、障害者雇用については、企

業に一定の義務があり、社会の中で認識されているが、シングルマザーも同様に、雇用に対する規定を作る必要があると思う。今のまま放っておいたら、偏見を改善することはできるかもしれないが、日本の貧困問題としては非常に重篤な問題であると番組を見て考えさせられた。

- 5月29日(金)金とく「麦の穂にのって 中部 パンをめぐる旅」は、なぜ中部とパン作りが結び付くのかと関心を持って見た。パンと伊豆との関わりや愛知にかつてドイツ人の捕虜収容所がありドイツ人からパン作りの技術が伝わったことなど、パンと中部地方の深いつながりが分かる内容だった。小麦は外国産というイメージが強かったが、国産小麦を使っているところもあるとのこと。生産者の気持ちをくんで食べなければいけないと最後に瀬戸カトリーヌさんが言っていたが、そう思う人が増えると生産者もやりがいを持って小麦作りができるのではないかと思った。
- 6月12日(金)金とく シリーズ 現場探訪 ルポルタージュ中部「魚道～長良川河口堰 運用開始20年～」は、大変よい番組だった。河口堰（ぜき）がどんなもので、どのような経緯で建設されたのか、特に若い世代は知らないと思う。番組を通して知ってもらう意味は大きい。ただ、環境保護か開発かの論点ばかりがクローズアップされてしまう。必要性があったからこそ作ったのだろうが、現状を踏まえたうえで、どう利活用していくのかがあまり見えてこない。今後どのように使っていくならより豊かになるのかや、河口堰をなくするという議論では、本当に利点はないのかという問題提起が分かりやすくなされるとよかった。河口堰が良いとか悪いとかではなく、今そこに存在するものに対して、どう対処し未来に向かって行けばよいかまで、追究できるとさらによりよい番組になったのではないかと思う。ぜひ今後もこのような番組を発信して行ってほしい。
- 6月12日(金)金とく シリーズ現場探訪 ルポルタージュ中部「魚道～長良川河口堰 運用開始20年～」は、運用してから20年の長良川河口

堰を取り上げ、人と自然の関係、当時の反対運動、堰の影響、公共事業のあり方について視聴者に問いかける内容になっていた。ただ、堰の影響に関しては、魚道を遡（そ）上する魚や市場に出ているアユの大きさ、従来の漁法にこだわって漁をする老兄弟の映像など、昔はこうだったという証言ばかりで、数字できっちりと説明できていなかったように思う。漁獲量の変化の因果関係などをきちんと数値化したり分かりやすく明示できれば、中途半端な感じにはならなかったような気がする。公共事業のあり方に関しては、堰の事業とそれに付随する周辺市町村の環境整備事業などの構図が見えてきたが、特筆すべき内容ではなかった。ルポルタージュとして過去を振り返るとともに、人と自然の共生をテーマに、新しい提案のようなものがなされるとよかったのではないかと思う。

○ 6月12日(金)金とく シリーズ現場探訪 ルポルタージュ中部「魚道～長良川河口堰 運用開始20年～」について、今、この時期に公共事業の在り方を振り返るのは意味があると思う。番組全体を通して、一貫性のある構成で分かりやすかった。川漁師の兄弟の話は聞きごたえがあった。貴重な映像から、アユの生活環境が大きく変わってことが分かった。建設に関わった元官僚たちの証言もインパクトのあるものだった。本当に河口堰が役に立っているのか、これからの公共事業を考える上で有用な指摘が多かった。ただ、いきなり総事業費1,500億円といっても、視聴者にその規模が理解できるかどうか疑問だ。例えば小学校の体育館いくつ分などというようにイメージしやすい例を挙げるなどの工夫があれば、伝わりやすかったのではないか。長良川河口堰は、昔から論点が変わっていない。河口堰自体をどうするかについて、もう少し深く追究してもよかったのではないかと思う。全体を通して興味深く見ることができた。

○ 6月12日(金)金とく シリーズ現場探訪 ルポルタージュ中部「魚道～長良川河口堰 運用開始20年～」について、あまり河口堰について知らなかったので、大変勉強になる内容だった。1,500億円という事業費がかかったそうだ。実際に、輪中の農業道路はすばらしい。なぜこんなにすばらしい

のかということ、関連公共事業によって、周辺住民を納得させたのだということが理解できる。河口堰の問題は、原子力発電所と同じで、日本がこれからも抱えていかなければならない問題なのだと思う。報道していくことがなんらかの解決の糸口につながればと思う。

○ 6月3日(水)の「おはよう東海」と「あさいチ」で、岐阜県大垣市の話題を取り上げていた。まず、「おはよう東海」は、短時間ではあるが、大垣名物の水まんじゅうのおいしさと、店主のこだわりがよく伝わってきた。次に「あさいチ」でも紹介したのだが、同じような内容かと思いきや全く違うもので、水まんじゅうの作り方や工場の中を見せるなど、同じ話題でも、切り口が工夫されていて、大変関心が深かった。欲を言えば、地元の人だけが知る特徴や食べ方なども入れ込めるとよかった。NHKで地方の話題が紹介されると大きな反響がある。観光につながることもあるだろう。ぜひ地方の話題を全国放送で積極的に取り上げてほしいと思う。

○ 5月27日(水)、28日(木)あさいチ「もっと沖縄を知りたい!～アッキー・沖縄旅～」は、2日間にわたり、篠山輝信さんが沖縄を旅するというもの。篠山さんは、幼少時代に祖母の住む沖縄をよく訪れたそうで、思い出を重ねながら伝えていた。2日目に視聴者からのおたよりを紹介する時間を長く取っていた。1日目の内容を受けて、多くの意見が寄せられたのだと思うが、過剰に反応しすぎなくてもよいのではないかと思った。それよりは、篠山さんのことばや制作者の思いを丁寧に描いてほしかった。基地の現状もありのままに描き、出演者の感性を尊重するという旅番組もあってよいのではないかと感じた。

○ 6月15日(月)のあさいチでは、「つながらない生き方」と題し、周囲とのつながりに悩む人が増えてきている中、どのようにしていったらよいかということを議論していた。まず、つながり疲れの人に向けた本が人気を集めていることに驚いた。SNSなどでのママ友付き合いが疲れると悩む女性の

声に、司会者の有働由美子アナウンサーやゲストが真剣に議論をしていて、本当に共感できる内容だった。有働さんが、切られることが不安で、時間とお金を犠牲にしてまでつながってきたと言ったことには納得できた。つながらない生き方や嫌われたくない生き方の難しさを痛感した。紹介されていた“脱スマホ・ツアー”は大変興味深かった。スマートフォンなしで、地図がない場所に集合するという課題を与えられ苦戦するも、参加者が、五感を使うことができたとか、スマホとつながらなくても人とつながりを見つけられたとっていたのが印象的だった。身近に起こっているリアルな問題を取り上げて発信する「あさいチ」には、今後も期待している。

- 全国放送はもちろん地域放送でも、NHKが地方を取り上げるということは、本当に影響力がある。「あさいチ」はじめ「ひるブラ」などでも、地方の話題を伝えているが、NHKで放送することの信用度も高いと思う。
- 5月24日(日) NHKアーカイブス「放送90年 長寿番組 おかあさんといっしょの半世紀」を見た。子どもだけでなく、3世代で楽しめる番組になっていた。「おかあさんといっしょ」では数多くの歌が歌われているが、同じ作詞・作曲者が多いことが気になる。音楽の利権問題は大きい。同じ人たちの曲ばかりを使用し続けることについては、考えたほうがいいのではないかと思う。今の時代の、親世代のミュージシャンによる新しい曲を作ってほしい。また、「おかあさんといっしょ」のコンサートでは、実際には席に座れない1歳からチケットが必要だが、その点についてもこれでいいのか検討してほしいと思う。
- 5月29日(金)ファミリーヒストリー「濱口優（よゐこ）～“はまゆう”の花のように、強く～」は、民放のバラエティー番組で、豪快な素潜りを見せる濱口さんのルーツをひもとく内容。彼の祖母は三重県志摩市の波切という所で海女をしていたそうだが、本人も知らなかったようで驚いていた。祖父の時代に波切を追われるように出て、その後、大阪で成功したということ

だが、その支えになっていたのがふるさとへの思いとハマユウの花だったということが十分に伝わってきた。今ある濱口さんの大阪の実家の喫茶店は、その名も「はまゆう」。その店の前には、祖父が波切から持ってきたハマユウの花があり、今でも夏になるときれいに花を咲かせるという。皆に愛される濱口さんの原点が分かる心温まる内容だった。

- 6月1日(月)プロフェッショナル 仕事の流儀「心を込めて、当たり前を ビル清掃・新津春子」は珍しい業種の人を取り上げるのだという第一印象だった。昨今、清掃技術はとても発達している。実際に現場でどんなテクニックが使われているのか知りたくて視聴したのだが、よい意味で裏切られ、番組は、新津さんの人間ドラマであった。中国残留孤児の子として苦勞したが、熱血指導の上司にめぐり合い、いまや清掃グループを指導する立場。その人間ドラマをじっくり見せていた。新津さんがすばらしい仕事をしているところも十分表現されていた。くすんだステンレスの冷水器がきれいになったり、現場の人たちがお手上げになったトイレの汚れを落とすところは圧巻であった。ただ、使われていた洗剤や機材などにモザイクがかかっている、何を使っているか分からない。棚から選んで作業するところも紹介しているのに、何を使っているのか隠されているので、伝わってこない。せめて製品の違いくらいは説明できる構成にしたほうがいいのではないかと感じた。NHKなので特定の商品を出すには限界があるとは思いますが、プロフェッショナルの技を見せるため、もうひと工夫してほしいと思った。
- 6月4日(木)「L I F E ! ～人生に捧げるコント～」を見たが、全く意味が分からず笑えなかった。NHKが夜10時に放送する番組としてふさわしいのだろうか。よい番組の再放送のほうがまだよい。NHKとしてどのような番組を提供していくのか、あらためて考えてほしい。
- 6月4日(木)「L I F E ! ～人生に捧げるコント～」は、全く理解できず、おもしろさが分からない。なぜこのような番組をこの時間帯に放送している

のか、疑問に感じながら見ていた。

- 6月7日(日)NHKスペシャル 生命大躍進 第2集「こうして“母の愛”が生まれた」を見た。胎盤を作るPEG10という遺伝子がウイルスによってできたことなど、見えない世界を映像で分かりやすくしていた。あまり注目されていない考古学だが、その必要性を感じさせる内容だった。映像が効果的に使われていて非常にリアルな感じがした。最終的に人類とは何か、未来とは何かを問いかけるもので、よい番組だった。ただ、新垣結衣さんは、一人二役をもう少しうまくできるとよかった。
- 6月14日(日)NHKスペシャル「沖縄戦 全記録」は、どこの地域でどれだけの犠牲が出たかを日によってグラフィックで表現していて、非常に新鮮で分かりやすく優れた内容だったと思う。民間人の生々しい証言や軍関係者の陣中日記などの裏付けとともに、沖縄での戦争の全記録と銘打っているだけあって、正確に振り返っていたと思う。目を覆いたくなるような画像もあった。もっと早く戦争を終わらせる決断ができなかったのかということだが非常に重く感じられた。年代や地域によってどのように見られたのか、特に沖縄の若者の視聴者の反応がどのようなものだったのか興味がある。夏に向け、戦後の外交に関する番組がこれからも予定されている。このような番組は手間もコストもかかると思うが、悲惨な戦争、敗戦から復興への努力、国のあり方に対しての再認識をするよい機会だと思う。
- 6月14日(日)NHKスペシャル「沖縄戦 全記録」は、冒頭から、見るに堪えない映像、陰鬱なナレーション、生き残った沖縄県民の声など、戦争への恐怖感に見舞われてしまう衝撃的な内容だった。けうな映像やこれまで開示されなかった戦争被害者の死亡データを集計し見えるようにしたことは、かつてない戦争ドキュメンタリーだったと思うが、戦争が起きると人命がいかに軽んじられるかを訴えるにとどまっていて、“全記録”と言い切るのはいかがなものかと思った。うごめく虫や馬の目の映像は必要だったのか。シ

ョッキングな映像で視聴者の心を揺さぶり、元米軍兵や被害者の穏やかだった生活に波紋を投げかけるような内容に、誰も作ったことのない映像作品を作ることが目的になっていないかという疑念が拭えなかった。戦争について、論理的に考えさせるのではなく感情でしか捉えられなくなるような内容を、安全保障問題を真剣に考えなければならないときに放送することは適切とは思えなかった。

○ 6月14日(日)NHKスペシャル「沖縄戦 全記録」を見た。沖縄県の戦没者記録をまとめたことは意義深い。戦争時の状況が非常にリアルに伝わってきた。女性も竹やり隊を作り突撃をしたという話など、かつて聞いたであろうが忘れかけていた沖縄戦の現実が理解でき、非常によい番組だったと思う。沖縄県民の声を記録した1,000本のテープが存在するというが、そのようなテープもきちんとデジタル化して残しておく必要があるのではないかと思った。戦闘神経症をおこし異常をきたしていたアメリカ兵もいたというが、イラク戦争しかり、そこに同じ問題があったということが分かった。充実した内容だったと思う。ただ、沖縄県の態度がよく分からなかった。個人情報保護法があるので死亡者の名前も出せないというが戦争で亡くなられた方々の名前を出すことがなぜ困るのか。しゃくし定規の個人情報保護法の適用ではないかと感じた。

○ 6月13日(土)プラタモリ「函館の夜景」は、函館の夜景がなぜそんなに美しいのかをテーマにしていた。函館には、何度も訪れたことがあり、関心があったので視聴した。函館の夜景が美しい理由は、「火事」と「火山」と「戦争」の3つの要素にあるとのことだ。火事の延焼を避けるために道を広くし、真っすぐにしたことで、夜景がきれいな線になって現われるという。火山によってできた函館山のくびれの部分に町が出来たというその独特の地形も夜景が美しい理由。そして、明治の頃、旧日本軍がつくった要塞は、ロシア艦隊を見張る重要な拠点となっていて、海や街が一望できるようになったとのこと。そのような話をすごく分かりやすく説明していた。こういうこ

とを意識してその土地に行ってみたいと思う視聴者もいるだろう。タモリさんはなぜこんなにといいくらい専門用語をよく知っているのととても感心した。道すがら出会う人への対応も彼の人柄がよくあらわれていてよかった。

- 5月30日(土) ETV特集「墨に導かれ 墨に惑わされ～美術家・篠田桃紅 102歳～」は、作品を通してしか見ることのできなかった篠田さんの102歳の今を見られるだけでも価値があった。彼女の生い立ちや転機となった出来事を作品とともに紹介する展開は見応えがあった。テレビを通して見ても、1本の線ですらその存在をすさまじく伝える作品に見入ってしまった。しかし、取材するスタッフの受け答えは、敬意も配慮も見られないものだった。また、作品を所有する人々のインタビューも、篠田さんやその作品への理解を深めるものではなかった。さらに、芸術性を意識したカメラワークも、本物の芸術を前にしては、必要なかったと思う。篠田さんの発する妖気と作品の力は伝わっていたが、残念ながら番組の出来栄としてはよくなかったので、再構成されたものを見てみたいと強く思った。
- 6月5日(金) 課外授業 ようこそ先輩「野鳥が喜ぶ町をつくろう～生物学者 池田清彦～」(再)を見た。最近、スズメを街で見かけなくなったのはなぜなのかを子どもたちに問う内容で、丁寧に生き物の生態を見つめようとしていた。タレントばかりでなく、生物学者というゲストの選択もよかったのではないか。
- 6月10日(水) アナザーストーリーズ 運命の分岐点「ビートルズ旋風 初来日 熱狂の103時間」は、オリンピックや万博が開催され、高度経済成長にあった時代の日本について、知らなかったことを教えてくれるおもしろい番組だった。いくつかの違う立場の人々の視点からその時代を振り返って検証するという取り組みがおもしろい。NHKに残る貴重な映像も利用し、さまざまなテーマを取り上げていく趣旨が大変興味深い。なぜビートルズが日本に来ることになったのかという経緯がよく分かった。70年安保の時代

になぜあれほど整然とコンサートが行えたのか、当時の警備の力に驚いた。また、写真家の浅井慎平さんは当時、密着カメラマンとして、その様子を撮影していたとのこと。そのことが今も人生の中で大きく影響していて、分岐点となったという。ジョン・レノンは、東洋の宗教や日本の神道の本を読んで、イギリスとは全く違う日本に行きたかったそうだ。そのうち世界中が何から何まで同じになってしまうだろうという暗示のような表現があったが、現に今、そうになっている。6月17日(水)の「ダイアナ妃事故死“最後の恋”の駆け引き」(再)も視聴した。今後も続けて見たいと思う番組である。

- 旅番組にもいろいろあるが、6月17日(水)一本の道「イギリス コーンウォール“地の果て”をゆく」は、NHKの松村正代アナウンサーが1週間かけて、イギリスの南西部を歩くというもの。歴史や背景を知りながら、徐々に変化していく表情がよく分かり、本人が歩かないと分からないことを伝えていたのがおもしろかった。旅を終えた彼女は、その後の仕事に何か旅で得たものが影響しているのだろうかと思になった。
- 6月5日(金)に来年のサミットの開催が三重県の伊勢志摩に決まり、それ以後、毎日のようにニュースなどで取り上げられている。大きな経済効果も言われており、地元は動き出し、関心を示す観光客も増えてきているように思う。NHKが発信することで、さらに地域の活性化につながっていくと思う。
- 口永良部島噴火の報道について、ニュース速報の対応はすばらしかった。ただ、ニュースを通して見ても、離れたところで起きていることに対して、実感がわからないのが現実。公共放送として、実際に起きている災害に対して、我々に何ができるのか考えるきっかけを与えてもらえるとありがたい。また、このようなニュースの際には、ぜひ地図を常に出しておいてほしい。口永良部島がどこにあるのか知らない視聴者も多いのではないかと。地図が常にあるとより意識をして見てもらえると思う。

- 日頃は、ニュース番組を中心にテレビを見ている。インターネットが普及した現在、情報の入手は多様化した。インターネットは、見る、聞く、動く、調査もできる、対話もできる。そのような時代において、テレビの魅力は何かを考えていく必要があると思う。一般の視聴者に対して一番の役割は、事実だけでなく先を読んだ情報をいかに提供するかだと思う。先をどう読むか、そのためにどう深く読むかの工夫がないと、なかなかテレビまでたどりつかない時代になってきているように感じる。テレビを見ていると情報に流され、何となく知ったような気になる。番組情報の提供なども適切に行い、視聴者に問題を提起し、考えさせる情報提供をテレビが実現できるとよいと思う。公共放送としての役割を果たしてほしい。

NHK名古屋放送局
番組審議会事務局

平成27年5月NHK中部地方放送番組審議会

5月のNHK中部地方放送番組審議会は、21日(木)、NHK名古屋放送局において、11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「クローズアップ現代」報道に関する調査報告について説明があった。続いて、超絶 凄(すご)ワザ!「金属板を貫け!究極の針対決」について、説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、「平成26年度中部地方向け放送番組の種別ごとの放送時間」についての報告と6月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	森棟 公夫	(学校法人椋山女学園理事長、椋山女学園大学学長)
副委員長	松本 耕作	(加賀味噌食品工業協業組合理事長)
委員	大島 宇一郎	(中日新聞社取締役管理局長)
	加藤 勇二	(愛知県農業協同組合中央会常務理事)
	小寺 功子	(三重県漁協女性部連合会会長理事)
	佐野 俊和	(コマツサービスエース(株)代表取締役社長)
	立花 貞司	(トヨタホーム(株)取締役会長)
	田中 章義	(歌人・作家)
	中村 智景	(四季料亭「助六」女将)
	野田 雄一	(富山ガラス工房館長、富山ガラス造形研究所教授)
	長谷川明子	(日本ビオトープ管理士会中部支部会長)

(主な発言)

<超絶 凄(すご)ワザ!「金属板を貫け!究極の針対決」(前編・後編)

(総合 5月2日(土)、9日(土))について >

- 針の細さと抵抗力の対決は、まさしく日本のモノ作りの技の結集というべきすばらしい対決だった。アルミ板に針が通るなどとても想像がつかなかったが、困難な課題を実現した2組に感心するとともに、できそうにないことをやり遂げる日本人の“凄(すご)さ”を感じた。ハイテク技術で挑む長野のオルガン針社の「信州ウルトラニードルズ」は、挑戦者である30代の部下を上司が応援、指導しながら取り組んでい

て、本当によい会社なのだということが伝わってきた。一方、手作業の職人技で挑む東京大田区のインパクトという町工場の「微細加工の夫婦針チーム」は、夫婦のほのぼのとした関係が見えてきた。両者のよいところが出ていた。針の形をどうしたらよいかを話し合う様子は、視聴者も一緒に考えながら見ることができ、専門的なことが分からない人でも、何となくワクワクした気分になり楽しめたと思う。オルガン針の挑戦者は、実は、一家で勤務しているという点はおもしろかった。やれないことはないという親の姿勢が子どもに引き継がれていくということも伝わってきた。対する町工場の夫婦針チームは、妻が、足音で夫の様子が分かると言っていたことなど、夫婦仲のよさが伝わってきた。結果をすぐに見たいという視聴者もいると思うが、前後編だと、どうしても後半の冒頭に前編の説明が入ってしまい、同じことを見ることになる。2回に分けるのではなく、1回にまとめてもよいのではないかと思った。宇宙服が縫える針が出来るという話があったが、この針の成功が何に役立つのかということについて、出演していた大学教授が、専門家の立場からコメントするとよかったのではないか。すばらしい日本の技術力を知ることができた。

- 針で金属を貫くなど、本当にそんなことができるのかという関心を抱いて見始めたら、前編ですでに両者貫通に成功してしまい、後半は一体どう展開するのだろうかと思った。モノ作りに携わっていなければ接しない“貫通抵抗”が勝敗の基準だと、イメージがつかみにくく、勝負の機微のような部分が分かりにくかった。“貫通”のほうが分かりやすく、そこに至るまでの苦労など見ていて気持ちが高ぶった。最後は結果勝負だが、どうしても設備が整ったグループより手作業をしているほうの勝利を願って見てしまう。手仕事で挑んだ夫婦針チームの針が2回続けて折れたときはどうなるのかと思ったが、きっと最後の1本で大逆転があるはずだと想像しながら見ていた。モノ作りの技術を主体にするのか、そこにあるドラマ性に重きをおくのか、また、それらをどういうふうに調和していくのか、難しい課題だと思った。これまでの対決テーマも、比較的、ハイテクと手作業という組み合わせが多かったように思うが、全く違う分野のものを組み合わせるほうが視聴者の関心を高めることもあると思うので、別次元のものによる対決もおもしろいのではないかと感じた。これからさまざまな展開を考えてほしい。

- 昨年、この番組がスタートしたときのセットは、粗削りな印象だったが、今回のセットは、整然としている感じがした。毎回、テーマ設定には、すごく苦労するだろうと思う。テーマを決めてもそれに応えてくれる挑戦者を探さなければならない。ハイテクと職人技という組み合わせが多い印象だが、対戦相手をどのように決めていくのか興味深い。全国から、自薦他薦あるだろう。アイデアも寄せられてきているので

はないかと思う。こういう番組を放送することで、日本のモノづくりの奥深さや知らなかった世界が見えてくる。とても大切な所に視点を置いている番組だと思う。今回の針対決では、針が0.5ミリ以下、アルミ板の厚みが5ミリという設定だが、貫通できるぎりぎりを想定してのことなのかなど基準をどのように決めたのかに関心を持った。また、番組を前後編2回に分けるなら、ただ貫通するだけではない、さまざまな針の用途について、もっと伝えたらよいのではないかと思った。紹介した宇宙服に関しては、実際にはどのように研究開発がされているのかも詳しく知りたかった。勝ち負けもおもしろいが、「針」という分野の新しい可能性を探り、対決を通して得た成果が、どう社会で役立っていくのかということも見たい気がする。改めて、ハイテクから職人技まで、日本のいろいろな技術のすばらしさが見られる番組だと感じた。

- とても楽しく見ることができた。前後編ともにおもしろい内容で、家族そろって楽しめるものだった。今回は、対戦者にも恵まれたのではないかと思う。対決では、夫婦針チームは2回失敗したあと、3回目に成功する。そのときに思わず対戦相手のほうも拍手をしていた場面がさりげなく映っていたが、その姿に胸が熱くなった。連帯感のようなものが対戦者同士で生まれているのだろうと感じた。このテーマに挑んでくれる会社が決まるまで、何社にも断られ苦労したと思うが、そういうエピソードを入れてもよかったのではないか。今回のテーマで、出演依頼を断った会社が多くあったということから、専門家からみても、難題だったのだということが伝わると思う。対戦者選びもドキュメントとしておもしろい。いくつか気になる点もあった。千原ジュニアさんが、自らを「MC」と言うが、「MC」という言い方は、民放でも使われ、メディアに携わっている人には違和感はないと思うが、NHKで土曜日の20時台に幅広い視聴者に向けて放送する番組としては、「番組進行役」とか「司会」という表現のほうがよいのではないか。また、千原さんが肘をつく場面がある。セットによっては、手を置いたほうがよいものもあると思うが、今回の番組では、肘をつく様子は、印象があまりよくないように映る可能性があると思う。カメラの撮り方の工夫をするなど配慮があってもいい。ナレーションの過剰さも気になる。賛否あるとは思いますが、勝負がおもしろかっただけに、ナレーションであおり過ぎると、かえって視聴者の気持ち引いてしまうような気がする。よい番組だからこそ、より細部にこだわってけるとさらによいと思う。

- 番組スタート時には、民放の対決番組と同じような構成ではないかという意見もあったと思うが、与えられた課題に対して技術を競うという興味深い内容で、だんだんと定着してきているのではないかと思う。今回の“針対決”では、特に針の細さを強調していたように感じたが、細さや強さだけでなく、曲げて先を加工する技術も重

要だと思う。金属を貫く針という課題においては、誤解を与えることはないのか気になった。むしろ、紹介されていた宇宙服の気密性の比較実験などのほうが、分かりやすかったのではないかと思った。最新技術と手仕事の対決だったが、使用する針の原料は両者とも超硬合金になってしまった。比較対象が針の形状と加工技術に限られてきてしまう。競い合う要素が多い課題を選択したほうが番組に広がりが出るのではないかという印象を持った。前編で、オルガン針社は、理論的に工夫を重ね、貫通につながった様子がよく分かった。一方、町工場インパクトは、試行錯誤の過程やアイデアを得た技術交流会などが紹介されていたが、話がとっぴな感じがした。限られた時間だとは思いますが、貫通に至る過程をもう少し丁寧に表現できたらよかったと思う。後編は、番組開始から、全体の5分の1ほどが前編の振り返りだった。後編だけ見る人にはよいかもかもしれないが、前編から見ている人にとっては、長すぎる印象だ。その分、試行錯誤の過程を見せられたのではないかと思う。時間が足りないのであれば、前編のダイジェストを削るか、後編の内容を少し前編に持っていくような構成のしかたもあると思う。また、貫通抵抗を測る機械が両者に利用できるようにしたほうが公正な対決になったのではないかと感じた。前週の「真球頂上決戦 日本対 v s ドイツ 完結編」に比べ、全体的に物足りない気がした。

(NHK側)

前編・後編という構成ではなく1回にまとめられないかという意見は多い。しかし、毎回、新製品を開発するくらいの大きな挑戦を1回にまとめることは、課題のレベルを下げることにならないか、感動は生まれてくるのか課題もある。今後、テーマによっては1週で放送する回も検討していきたいと考えている。紹介された技術がどのようなことに活用できるのかについては、我々も注目している。番組をきっかけとした新製品開発の動きもある。番組がスタートした去年は、午後10時台からの放送で、主に男性50代を対象にした内容であることが番組の特徴だった。今年度、土曜の午後8時台に移設したことで、女性の方にどうぞ覧いただけるかが課題となっているので、いろいろと工夫をしていきたい。これまでも、ハイテク対手仕事という対決はあったが、ハイテクが有利とは限らない。毎回、結果がどうなるか本当に分からず、今回も、結果が出るまで、どう番組を組み立てればよいのか、さまざまに思いをめぐらせた。対決の組み合わせについては、同じ方向性で別次元の組み合わせは難しいとは思いますが、番組の可能性を広げるためにも、

いろいろと考えていきたいと思う。各回のテーマ設定は非常に難しく時間も要するのが実情。各方面に相談、提案しながら情報を集めつつ、試行錯誤を続けている。対決テーマのアイデアは、募集をしており、番組化も予定している。今回の対決で、対戦相手が拍手した場面には、我々も感動した。挑戦者に恵まれ、本当にありがたいと思う。進行役の千原さんについては、対決に熱が入ってきたときの様子を見ていただいている方にどういう印象を与えるかを考慮していきたいと思う。ナレーションについても、より効果的になるようさまざまな方向性を探していきたい。超硬合金という同じ素材での対決になってしまったが、課題の困難さを考えると、やむを得なかったと思う。後編が、前編の振り返りが多いという意見について、実は、後編だけ見ている方が意外に多いという調査結果もあり、後編から見た人にも分かりやすいようにということもある。前後編ともに見ていただけるような内容にしていかなければと思う。貫通抵抗を測る機械は、両者に使用してもらったつもりだったが、ご本人の考えもあり、違う形になった。

○ 会社組織における技術開発と町の工場の職人の対決という設定はなかなかおもしろい。とにかくやり遂げるまでやるという挑戦者の姿勢にひたすら感心した。ハイテク技術を駆使する若い技術者も、手仕事を追求する職人技も、どちらも、まさに日本のモノづくりの強さだと思う。特に、東京大田区の町工場のところは、中小企業の強味がうまく表現されていると感じた。コンピューターを使った高度なハイテク技術対町の職人さんの技術という構図をもっと効果的に描くとさらに職人の手仕事のすごさが分かったのではないかと感じた。番組によって生み出された技術を、何に使うのかということについては、テレビを見ている側が、こういう技術だったらうちのこれに使えるという発見をしていくこともあるだろうと思う。企業の異業種間交流の場などでは、例えば、自動車で使った技術が建設に使えるというような新たな発見がある。そういう意味では、番組を通しての異業種交流というのはあるような気がする。そこに新しい可能性を見出していくことも大切だと思う。

○ 番組開始当初は、民放番組の二番煎じにも見えたが、今回の内容は見応えがあり大変楽しめた。不可能と思えるテーマに挑戦し、それを実現、改善を加え、当初の想定を超えた成果を生み出すという、モノ作りの基本であるPDCAのプロセスが番組の構成によく反映されている。高い水準を誇る日本のモノ作りを訴求するという番組趣

旨が視聴者に十分に伝わる出来栄えだった。特に、番組前半で針が貫通してしまうという展開は、予想を超えていたためドラマ性に富んで、後半に向けての期待感が高まった。技術者や職人の挑む内容や工夫の技術的な背景が、針の形状の改善とその効果であったため、専門知識がなくても視覚的に理解できるものであったこともよかったと思う。加えて、登場したメーカーの方たちや微細加工者の夫婦も、彼らを取り巻く人々も皆、人間味にあふれ、いずれも応援したくなる人となりが上手に描き出されていたことで共感性を高め、充実感をもたらしていたように思う。全体的によく出来ていたが、いくつか改善したほうがよいと思う点もあった。まず、ナレーションが大仰すぎたり、実験装置に奇妙な名を付けたり、テロップの書体がギラギラしたりと、バラエティー感を高めるための演出が、モノ作りのすごさイコール品質というものを演出する方向性とは違うような気がした。また、メーカー社員の一家全員が同じ会社の針一族というエピソードは、紹介したい部分だったと思うが、大企業VS町工場、師弟愛VS夫婦愛という分かりやすい対立軸で見せている中では蛇足であったような気がする。このシーンを入れたことで、両チームのカラーの違いが薄れてしまった。メーカー製の針の3番目のみに凄ワザマークが入り、その針の形状が伏せられていたが、そのような一方にのみ偏った演出はその時点で結末を予感させてしまうので、しないほうが一層楽しめたのではないかと思う。解説者を全く番組に生かしていなかったことも気になった。

- この課題では対決は成り立たないのではないかと思いながら、興味深く視聴した。長野の企業の若い技術者は、よい上司や仲間を支えられ、ハイテク技術を持つての挑戦で、初めから有利なのではないかと思ったが、本人の技術力のすばらしさには感心した。対して町工場のほうは、「できると言うてから作り方を考える」ということばが印象的だった。ひとりで考え、手作業で加工する。それを支える奥さんの頑張りも十分に伝わってきて、共感できた。ときどき、指先の感覚だけで削る様子が映され、ちょっと汚れた手が映ったところがあるのだが、そこは本当に職人技だと感じた。貫通抵抗を測るくんだりでは町工場のほうが不利ではないかと思っていた。町工場の人がこれほど番組の対決に頑張っているとなると、その間、通常の仕事はどうなっているのだろうか、そのときの奥さんの心境はどうかと心配しながら見ていた。最後の針対決では、2本目まで失敗して、3本目のときは祈るような気持ちで見ていた。結果は、ハイテク技術を駆使したほうが勝ったが、両者貫通したので、勝敗よりも双方の技術のすばらしさを見られてよかったと思う。
- 今回の対決は、針の素材を選んだときに同じ素材だったという時点で、競争の差が出なくなった。あとは、できるだけ抵抗が少なくなることを目指していくことになり、

そこが勝負の分かれ目だったのだろうと思う。結局は、“貫通”することより針の形をどう工夫するかというところが主になっていた。金属板に細い針で穴を開けるといふ、すごい対決で期待して見ていたが、前編で貫通してしまった。後編はどういう展開になるのかと期待した。対決では、町工場のチームが、2回失敗したところで、このあとどうなるのか、3回目も失敗したら、どうやって番組をまとめるのかドキドキしながら見ていた。3回目には見事貫通したのでよかったとは思ったが、持ってきた針は事前に試したりしなかったのかと疑問も感じた。単なる貫通でなくて抵抗力も10分の1以下になるような工夫がされたということは、さすがだと思った。“人間の力でも貫通可能な力で世界が変わる値だ”ということだが、それなら、本当に人間の手で何らかの工夫で貫通するという場面があったら、コメントが生きたのではないかなと思った。すばらしい挑戦が見られる番組で、引き続き、頑張っておもしろい番組を制作して行ってほしいと思う。

- 町工場の夫婦の背景がまさに昭和の日本を感じさせるものだった。そういう人たちがいて日本が支えられているという部分にもっとスポットを当ててもよかったのではないかなと思う。このような番組を通して生き方の多様性を見せるということもいろいろな人たちへの励ましにもなり意味のあることだと思った。貫通抵抗を事前に測るくんだり、不公平ではないかと感じた視聴者もあったと思うが、それが職人のポリシーだったということもうまく表現できると、対決に負けたことに違う意味が見いだせたのではないかなと思った。挑戦していく過程で、何本か試作の針を作っていると思うので、対決とは違う視点で、ほかの素材で実験するとどうなのかなども見せるとおもしろかったのではないかな。後編で、3本目の針に凄ワザマークを付けたところは気になった。そこで、結果が分かったような気がしてしまう。制作側は、違う意図でそういう演出をしたのだと思うが、視聴者にとっては、最後までワクワクした気持ちで対決を見たいと思う。視聴者の視点というのも考えながら、細部の演出をさらによいものにしてほしい。
- 視聴者にとって分かりにくかったのではないかなと思う点があった。まず、超硬合金という素材が何なのか、おそらく多くの視聴者にはよく分からなかったと思う。どれくらい硬いのか粘りがあるのかなど素材についての解説があればよかったと思う。また、町工場の挑戦で、最初の2本が折れてしまったが、事前に実験をしていなかったのだろうかという疑問に思った人もいたのではないかな。対決の場に来て失敗してしまった理由について番組の中で説明があるとよかった。“貫通抵抗”の意味も、番組の中では、機器で測定しているだけなので、具体的に、説明があればよかったのではないかなと思う。番組は全体を通しておもしろかった。ドキドキしながら手に汗を握るという

意味では、前週の“真球対決”のほうがおもしろかったが、今回も、とても楽しめる内容だった。

(NHK側)

28分に収めるため、残念ながら落とさざるをえないシーンもあった。挑戦してくれた人たちが本当に素晴らしい人たちで、制作者として、何を生かし何を残すか大変難しかった。視聴者からの、人間味にあふれ応援したくなったという声は本当にうれしい。今までにない挑戦ということは、逆にいえば、一般的にはなじみのないテーマである場合も多い。いかに興味を持ってもらい社会に役立つ技術であることを知ってもらうかは、番組の重要な点だと思っている。3本目の針に「凄ワザ」マークを入れたことで結果を想像させてしまったことは、意図するところと違い、もっと工夫できればよかったと思う。対決に向け、夫婦針チームは、ぎりぎりまで改善を重ね作業をしていたそうで、結局、本番一発勝負となった。そんな人柄やそこに至る経緯も表せたらよかったと思う。

<放送番組一般について>

- 「ニュース富山人」では、本年度から、「Live あなたのまちで とやまにあっ！」という新しい取り組みをしている。5月20日の内容は、新幹線が開通したことによって、富山の駅前、及び周辺の市街地域が大きく取り壊されて、新しいものが出来上がろうとしている様子をレポートしていた。駅のすぐ近くにある富山シネマ街は昭和の雰囲気が残っている所で、今月いっぱい取り壊されるとのこと。取り壊された後は、味気ない、地域らしさとは全く関係ないものになるのではないかと思う。レポートではそれを前面に言っているわけではないが、古き良き町の情緒とさまざまな記憶が失われてしまうとはどういうことなのか考えさせられるとともに、新しくできるものに対する不安と期待も感じた。こういう視点で地元を取り上げるコーナーは、意味があると思う。ぜひ応援したいと思った。
- 4月17日(金)金とく「あっぱれ家康 クイズ合戦」は、内容はおもしろかったが、問題が難しすぎたというのが、端的な評価だと思う。視聴者参加型で、3チームあって、視聴者は全部まとめて1チーム。結局は第1問目が正解2チーム、第2問目が正

解1チーム、第3問目は正解0、第4問目も正解0、第5問目は正解1。たとえば第3問目は、福井の城に関して、家康がどういう手紙を送ったかという問題だが、城の設計に関することを知っている人など誰もおらず。第4問目は、家康が持っていた時計の形に関してで、答えはクマの形というが、知っている人は0。知恵を働かせて正解が出るような内容でもないのに、あまりに難しすぎた。第5問目では、家康が好きな囲碁でインチキをしていたというが、あまり問題にできるような話ではないと思った。問題の内容をいろいろ検討しないといけない。日本史の問題のようなもので、2人に1人は正解できるくらいの難易度でよいのではないかと思った。

○ 4月24日(金)ナビゲーション「衰えを乗り越えろ～“レジェンド”からのメッセージ～」は、山本昌投手がどういう関節を柔らかくするトレーニングをしているかという話などがいろいろとあった。筋力よりも身体の調整能力の方が大事だという専門家の話もあり大変参考になった。レジェンドたちと同時に、普通の人も水の入ったペットボトルを持って腕を振る体操をするなど少し負荷がある運動をしたらよいということ言っていたが、平均的な運動好きの人たちがどういうトレーニングをしたらよいかをもっと知りたいと思った。

○ 4月24日(金)ナビゲーション「衰えを乗り越えろ～“レジェンド”からのメッセージ～」は、レジェンドたちも確かにすばらしいが、レジェンドを支えている人たちの活動がすごいなと思った。トレーナーさんたちはじめ、主役を支えていく、すばらしい脇役の人生にも視聴者に感じさせるいろいろなヒントがあると思うので、こういう番組は、ぜひ、また見てみたいと思う。

○ 5月1日(金)ナビゲーション「若者の移住は地域を救うか？」で取り上げていたのは地域おこし協力隊というもの。国の補助で若者を過疎の自治体に派遣する制度のことだが、あまりなじみがなく大変興味深く見た。制度の概要も、手当の支給であるとか住宅の用意など、番組の中でコンパクトに、かつ分かりやすく説明されていた。補助制度もただ物を作って受け入れるというよりは、人に対する投資的な意味合いで、ハードから人へ軸足を移しているという指摘には、時代の変化を読み取ることができた。地域に定着した若者、定着せずに都会に戻った若者それぞれの意見や、定着率が高い自治体の取り組み等、多角的に非常にバランスよく取り上げられており、分かりやすい内容だった。世話役を用意して地域との密着度を高めることが定着率の高い自治体の取り組みのポイントではないかと指摘していた。最後に識者のコメントで、人はいるので掘り起こすことが大事だとまとめていたが、ここで筋がずれた感じがした。もしもこのようにまとめるのであれば、冒頭から協力隊員不足を問題視しているよう

な指摘がどこかにあってしかるべきだと思う。あまり筋が違わないように構成できるとよかった。

- 5月15日(金)ナビゲーション「なぜ起きる不正請求～検証 介護保険制度～」は、ケアマネジャーが介護サービス会社と組んで不正をしているという内容。ほとんどの介護サービスの会社はしていないと思うが、こういう問題が番組になると不正のほうばかり強調されてしまう。公正に仕事をしている会社についても伝えてほしかった。ケアマネジャーが独立して、会社から離れて仕事をするのがひとつの解決法と言っていたが、実際の介護保険の運用の中で、どれくらい広まりうるかも、今後の問題としてあるのだろうと思う。
- 5月9日(土)NHKスペシャル「総理秘書官が見た沖縄返還～発掘資料が語る内幕～」は、佐藤内閣のときの総理秘書官だった楠田實さんが残した、沖縄返還に関する膨大な資料を精査した内容だった。沖縄返還から、1995年の少女暴行事件に端を発しての橋本内閣での普天間基地移設決定などの経緯がまとめられている。楠田さんは2003年に亡くなっているのに、中味の信ぴょう性は検証のしようがないが、沖縄での1995年の事件のあと楠田さんは、元国土事務次官や政治学者を集めて沖縄のあり方について提言をまとめようとしたが、沖縄サイドに立った意見を言う人はおらず、むしろ日本の国防という観点から沖縄が必要だという意見しか出なかったということだった。楠田さんは、手記に、「復帰後、日本政府は沖縄に巨額の公共投資をして、街並みも近代化したけど、それでも沖縄県民の魂の飢餓を満たすものではない、沖縄県民に対する感謝の気持ちというものが国民感情にどの程度存在するのか定かではない。今こそ日米で知恵を出し合って沖縄の未来像を描くべき時ではないのか」と記している。日本全体の国防という観点からやむを得ないのではないかと考えがちだが、今まで沖縄の人たちが苦しんできた歴史を振り返ったうえで、それが本当に正しい答えかどうかを考え直さなければならないと思った。大変勉強になった。
- 5月9日(土)NHKスペシャル「総理秘書官が見た沖縄返還～発掘資料が語る内幕～」を見た。時系列で明確な形で記録されている点に非常に驚いた。秘書官が極秘資料を持っていたというが、機密漏えいと学術的研究資料の境界はなかなか不透明なので、テロップを入れるなどして、分かりやすくしておくとうよかったのではないかと思った。番組は、資料内容の紹介で終わっていたけど、さらに精査し、あいまいに決着させていた部分や背景にある日米両国の思惑、当時からの軍事技術や国際情勢の変化などをまとめて、何らかの形で今後も番組化してほしいと思った。

- 5月9日(土)NHKスペシャル「総理秘書官が見た沖縄返還～発掘資料が語る内幕～」を視聴した。膨大な資料が出てきて、いかにも発掘されたということが感じられた。当時の佐藤栄作総理が沖縄に初めて行ったときの演説草稿がアメリカの意向を反映して書き加えられたことや、ニクソン大統領に近いハリー・カーンという人物との会談時の資料などが、リアルにかつ細かく描き出されていたので、沖縄返還交渉の経緯を克明に振り返ることができた。今、普天間で揺れているときなので、沖縄というものを見直す大きなきっかけになったということでは非常に意義深かったと思う。重要な資料が発掘されると、ことさらにあおってしまう傾向がメディアにはあるが、番組は、抑制気味に淡々と事実を振り返る構成で、時系列にきっちり順を追っていく姿も非常に好感を持てた。非核三原則堅持をきっちり守って対米交渉に臨んで、日本が最終的に主張を通す、引き換えに有事の際は本土の基地を使うという交渉の様子を出したうえで、最後にナレーションで、「40年余り変わらぬ沖縄の問題を問う」と結んでいたが、そこにあるメッセージは何なのだろうかと考えさせられた。どう問われているのか、最後の問いはもう少し、論点を伝わりやすくしてもよかったのではないかと思った。

(NHK側)

NHKスペシャル「総理秘書官が見た沖縄返還」について、番組で出した資料は、現在施行されている特定秘密保護法の対象ではなく、さまざまな判断のうえで出した。ご意見のとおり、まさにこの番組は、この時期にこそやる意義があるということで提案したが、この時期だからこそ客観性、公平性には神経を使って制作した。最後のナレーションは、楠田さんの手記にあった沖縄に対する本土の無関心を指して、40年余り変わらない沖縄の問題という表現になった。視聴者の方自身にいろいろな解釈をしていただければと思う。今後の展開について、膨大な資料があり、今回の50分番組では収まりきらなかった部分もあるので、6月の下旬にBS1で1時間サイズの特集番組を2本作ることで今、制作に入っている。

- 5月7日(木)につぼん紀行「おばあちゃんのひな祭り～三重 松阪市宇気郷～」を見た。毎年3月から4月にかけて、人口180人の宇気郷村で8年前から行われている「おばあちゃんのひな祭り」が紹介されていた。小さいときには貧しくて買ってもらえなかったお雛(ひな)様を、この年になって家にやって来たとうれしそうに話すお

ばあちゃんたちはとても輝いていて、よい企画だと思った。毎年、1,500人以上も訪れるというお客さんを楽しくもてなしていたが、自分たちのお雛様をぜひ見てもらいたいと楽しんでいる気持ちが伝わってきた。番組の中では紹介されていなかったが、各自の家にお雛様を飾り、それを片づけるという苦労も読み取ることができた。宇気郷村という所は何もない所だが、景色とか空気、住んでいる人たちが支え合い生活をしているという、それがこの村の宝なのだということが見える番組だった。宇気郷村のこのような取り組みは、あまり知られていないのではないかと思う。これからも地元に着した取材を続け、さまざまな知られざる文化を見つけて発信してほしい。

- 5月6日(水)につぼん紀行「クロにいの船～徳島 美波町伊座利～」を見た。若い家族が次々と移り住む漁師町を取り上げた内容で、国の過疎化に対する対策などが注目されているときに、タイムリーなテーマだった。行政などがいろいろな取り組みをしていたと思うが、どうしてこの美波町がそういう状況になっているのかというのを考えさせられた。一人の漁師が、若者たちを受け入れている。見る限り台所事情は厳しそうだが、そんな中でも、若者たちがそこに移住してきて生活をしている。食堂を自分たちで経営していて、その食堂で働きながら、取った魚を提供するという。一人の人間の動きで多くの地域を変えていくという取り組みを、素直に、分かりやすく取り上げていた。「につぼん紀行」がこれからどんな地域のどんなところにスポットを当てていくのか、楽しみにしている。
- 明治神宮の森が100年前に計画された人工の森であり、それが定期的に調査されるという事実に大変興味を持ち、5月2日(土)NHKスペシャル「明治神宮 不思議の森～100年の大実験～」を視聴した。オープニングの様式美あふれる宮司たちの門を開く姿、縦横無尽に動くカメラによる、通常ではあり得ない視線での映像、タヌキやオオタカなど想像もしなかった動物たちの姿、CGでのリアルな森の再現など、最新技術や装置を用いて組み立てられた美しい映像と、物語仕立てになった100年にわたる人工森林造成プロジェクトの模様と、リアルな調査団の調査風景が、大変バランスよく構成され、充実した見応えのある内容だった。周囲が100年前の想像を超えて発展する一方で、森は100年前の想像を超えて古代化を進めるという事実が何を示すのかについての言及はなかったが、自然の森すら生み出す人間の英知、あるいは100年で自然を取り戻す力のすさまじさなど、視聴後にもいろいろな思索をもたらす、余韻の残る番組だった。
- 5月2日(土)NHKスペシャル「明治神宮 不思議の森～100年の大実験～」には、感動した。今、日本全国各地でいろいろな森づくりをしていて、その技術も向上して

いる。各地で森づくりを行っているので、そういう活動もぜひ発信して欲しい。

- 5月3日(日)NHKスペシャル「見えず 聞こえずとも ～夫婦ふたりの里山暮らし～」は、ある老夫婦の幸せ探しをテーマにしたものだった。奥さんは目と耳に障害を持つ。夫婦の会話は“触手話”で、手を握り合って会話をする。畑仕事に出かける夫のために弁当を作り、風呂掃除をし、パソコンで夫にメールを送る奥さんの様子などが紹介されていた。ものすごい努力をされたのだろうと思う。以前に旦那さんがくれたクマのぬいぐるみを見つけたときの奥さんの笑い声を上げて喜ぶ姿が印象的だった。現代社会に生きていくと、経済的に裕福で社会的な地位を持つことが幸せだと思いがちだが、夫婦が互いを理解し信じ合い、毎日無事に暮らせるということが本当の意味での幸せなのだと思います。よくここまで取材できたと感じる内容だった。
- 4月23日(木)所さん！大変ですよ「“ぐるぐる”病院の謎」は、すでに昨年、新聞でも取り上げられ、総務省や厚生労働省が実態調査を行うに至っていることを、あたかも独自のスクープのような形で取り上げる姿勢はよくない。さほど多くない事例や金額にもかかわらず、タイトルを含めことさらセンセーショナルに表現する傾向も、バラエティー色が強い番組とはいえ、真摯（しんし）さに欠けるように思う。
- 4月30日(木)所さん！大変ですよ「文房具“爆買い”騒動の謎」は、羽衣チョークという愛知県の会社を取り上げていた。次の世代がいらないので廃業することになったが、実は、そのチョークは外国でも使われており、スタンフォード大学の数学の先生も黒板で書くのにすごくよいという。材料のカキの粉末がよいとのことで、生物の重要性を改めて感じた。ぜひ、その技術をもっと見せてもらいたかった。
- 5月14日(木)所さん！大変ですよ「世にも不思議な“えんぴつ物語”」を見た。文房具店で鉛筆を買おうと思ったらHBの鉛筆が見当たらないという。調査を始めると、90年代半ばから、2BとBが主流になっていて、小学校の「入学のしおり」にも指定されているとのこと。スマートフォンやゲーム機などで指先だけしか使っていないので、腕全体を使えないことが筆圧の低下につながっているそう。また、体力の基盤となる足腰などの運動機能にも問題が起こっていて、このままでは親が子どもを介護しなければいけない時代が来るという話には、とても驚いた。8年前から調査していると紹介されていたが、どのような対策を取っているのか知りたいと思った。
- 4月24日(金)ドキュメント72時間「中古車から始まる人生は」を見た。新車か

ら始まる人生はいろいろな所で新しい展開をもたらすかもしれないが、4月の新年度の始まるという時期に、あえて中古車に絞って、追いかけるというのもおもしろく、たくさんのドラマが詰まっています、よい番組だった。

- 4月25日(土)データなび 第1回「消費増税から1年！データで“物価のナゾ”に挑む」は、すごくよく出来た番組だと思った。放送のタイミングが大型連休の前ということもあり、話題のひとつとして北陸新幹線が開通したことに伴って、金沢のほうに足を運ぶ客が日本のどこからが多いのかということを取り上げていた。日本地図を用いて、新幹線が出来る前と出来たあとではどう変わっているのか、その人数を線の太さで分かりやすく表示していた。連休中の車の渋滞や宿泊場所の空き具合なども目で見て分かりやすかった。いろいろな要素を組み合わせて分析し、視聴者が知りたい内容に加工して番組が出来ていたので、大変おもしろかった。ぜひ、隔週くらいのペースで放送してほしいと思う。番組の中で、データの根拠として携帯電話の検索内容、活用の状況などを使用して分析しているところがあったが、個人情報の管理はどうなっているのか気になった。我々が使っているものは丸裸になっているのではと心配になった。個人情報の管理や機密情報の扱いは慎重にやらないといけないと改めて思った。

- 4月25日(土)、5月2日(土)の「ブラタモリ」第3回、第4回の金沢の回を見た。前編は、地元の間でもあまり知らない事実を、史実に忠実に伝えていたと感じた。古い地図やグラフィック、フリップなどを使っての説明が分かりやすかった。もっとマニアックな部分も番組で紹介できるとよかったのではないかなと思う。後編は、石垣と金沢を中心に関組が展開していた。石垣というのはなかなか控え目で目立たないが、趣があるもの。近年、お城の方も時間をかけて少しずつ再建しているが、一気に作ってしまうような形のものではなくて、史実に基づいて作られていることが分かる。そういった意味では、地元として誇りを持つ。また、間にブラタモふるさとコレクションとして金沢の方言などを入れていたのも、番組に対する親近感を増幅させてよかったのではないかなと思う。

- 4月27日(月)「超体感！古代モンスター復活ミュージアム」(総合 後 7:30～8:43)は、古代の生物、恐竜たちを見せる内容。とてもうまく骨標本を使っていて、生命の多様性を感じることができるよい番組だったと思う。恐竜の顎の力は600キロだという。ライオンでも200キロくらいなのに、なぜそんなに顎の力が必要だったのだろうと思ったら、その答えをすぐあとに言っていて、分かりやすかった。よい作りの番組だったと思う。

- 4月29日(水)「長嶋茂雄×王貞治～“ON”として生きる～」(総合 前 10:05～10:54)を見た。「天才長嶋、努力の王」と言われるが、一晩中バットを振っていたなど、長嶋さんも大変努力したのだということが分かった。聞き手の星野仙一さんが、お互いのことをどう見ていたかと聞くと、二人とも、お互いが特別な存在なので、ライバルという目では見ていなかったというが、本心はそうではないだろうと感じた。やはり相手に負けたくないという気持ちがあったから、お互い切磋琢磨(せっさたくま)し活躍できたのだと思う。
- 5月5日(火)「はに丸ジャーナル」(総合 後 6:10～6:43)は、タイトルどおり、埴輪のはに丸をジャーナリスト兼メインMCとしたニュース番組風の番組だった。そもそも埴輪が主役という段階で、この世界観を受容し、楽しめる人しか見ないと思うが、数々の疑問に埴輪ならでの視点で切り込みますというわりには、独自の視点や感性を感じなかった。特に、“ゆるキャラ”乱立の総括として現状を問題視することは、どの報道番組が取り上げたところで同じ切り口になる内容で、むしろ、元祖ゆるキャラとしての視点で肯定的に総括すべきであったと思う。自分も一ゆるキャラとしてNHKの偉い人に、リストラしないでくれと直談判する様子は、視点の履き違えだと思った。このようなはに丸のNHKの偉い人への物言いや、田原総一朗さんに危ない番組を作れと言わせるなどの箇所は、作り手側の楽屋落ち感が強く、しらけてしまった。埴輪を進行役にするなら、今後は子供の視点からの切り口やはに丸の匿名性を有効活用して、本質を見失った出来事や建前に対し、人間社会のしがらみから逸脱した視点での切り口を見せ、独自の主張を展開してほしいと思う。
- 5月6日(水)歴史秘話ヒストリア「幻の巨大潜水艦 伊400 ～日本海軍極秘プロジェクトの真実～」を見た。子どもの頃、プラモデルを作った記憶があって、興味深かった。当時、アメリカ本土を攻撃するために飛行機を潜水艦の中に入れたもので、結局、特攻に行くことはなく、帰還したあと、最終的には捕され、ハワイ沖で爆破されてしまったものが、去年、海底から発見された。技術上の問題をグラフィックを使ってうまく説明していた。特攻だとか、終戦を迎えた際の揺れ動いた乗組員の心情を、うまく表現していた。当時の状況を知ることが少なくなってきた中で、それぞれの戦後や、生き残った証人としての務めとおっしゃっていた元乗組員の証言、90歳前後でのお元気な姿に、ものすごく敬服した。戦後70年の節目に見られてよかった。後世に残しておかなければいけないドキュメンタリーだと思う。
- 5月14日(木)のクローズアップ現代「愛し 書き 祈る～瀬戸内寂聴 93歳

の青春～」を見た。寂聴さんは、一時は寝たきりとなったそうだが、執筆を再開し、ますます元気になられている姿を見られて、これからも頑張っしてほしいと思った。

- 5月15日(金)ファミリーヒストリー「黒木瞳～女優の原点 故郷の名を背負って～」は、女性の憧れの存在であり宝塚の大スターだった黒木瞳さんが、どんなルーツの人なのか大変興味深く見た。まず、彼女の芸名が出身地の福岡県の黒木町から取ったものだと知り驚いた。彼女の生き方は、すべて両親から学んだもので、そのルーツにつながっていたということで、本人も驚いていたが、大変印象的だった。家系図が、前半は左上に出ているが、後半も出してもらえると分かりやすかった。後半のお父様と黒木さんの話は、子を思う親の気持ちは誰しも同じだと思って感動した。「黒木です 瞳が見てます そのマナー」という標語が町の入口に立っているのを紹介していた。黒木さんは、なんとなく近寄り難いイメージだったが、ふるさと黒木町に誇りを持っていて、町に貢献している様子に、一層ファンになった。難関を突破し合格したものの、宝塚音楽学校入学を親に反対されていたこと、その後のスターへの道も興味深かった。
- NHKニュース おはよう日本の「まちかど情報室」が好きで見ている。世間で話題の商品を知ることができ、どこで売っているのかといつも楽しみにしている。商品の詳細が視聴者に分かるよう、ホームページへの誘導を分かりやすくしたり、問い合わせに答えられるよう工夫してほしいと思うことがある。
- 外国人タレントの起用に関して、「花子とアン」と「マッサン」が週刊誌などで話題になっているが、今後もドラマなどで外国人を起用することがあると思うので、ぜひ、視聴者の期待に応えていけるよう、さまざまな面で気を配ってほしい。
- 木曜時代劇「かぶき者慶次」を見ている。今までに見たことのないようなシンプルなオープニングが気に入っている。歴史に詳しくない人が見ても、すごく分かりやすい内容。また、基本的に時代劇ではないような分かりやすいことばが使われているので、内容が理解しやすい。石田三成の子どもを必死に守る前田慶次の役を、藤竜也さんがちょっととぼけた感じで演じているのも、堅苦しくなく楽に見られる理由だと思う。5月14日(木)第6回「家族の絆」は、慶次が妻に、育てている新九郎を石田三成の子であると告げた場面がとてもよく、家族の絆とか夫婦の絆を見ることができ感動した。また、火野正平さんや田畑智子さんの演技がすばらしく、なくてはならない存在になっている。特に、田畑智子さんの語りはドラマにとっても合っていてよい。これから新九郎がどのようにっていくのか楽しみにしている。

- 土曜ドラマ「64 (ロクヨン)」にすっぴりのめり込んでしまった。原作のスピード感を非常によくぞって、改めておもしろいと思った。キャリアとノンキャリアという話は、関心がある人が見れば分かると思うが、一般的な視聴者にはドラマの構図が伝わりにくかったような気もした。

- 4月からの新番組、「アニメ 英国一家、日本を食べる」を見ている。イギリス人フードライターのマイケル・ブースさんが家族と一緒に100日かけて日本の食を食べ尽くすという内容のアニメ。最初に見たときには、その描写に驚き、アニメとしてふさわしいのかどうか、日本人をばかにしているのかなどと考えさせられたが、回を重ねるごとによくなってきたと思う。焼きそば、焼き鳥、天ぷら、ちゃんこ、うま味などが取り上げられている。最近、和食がブームになっているが、我々自身はそのよさをもっと知るためにもよい情報が多く盛り込まれていると思う。一昨年、和食がユネスコの無形文化遺産に登録された。今年は「食」をテーマとしたミラノ万博が開催され、とてもよい放送のタイミングだと思う。この番組が世界に発信され、それぞれの言語で翻訳され和食により関心を持ってもらえると思う。日本が観光立国として“和食”を武器にたくさんの人を呼び込むきっかけになればよいと思った。毎回、なぜ、そのテーマになったのか、これからどのように続いていくのか気になっている。深夜番組ではあるが、再放送などの案内も随時あり、力を入れている番組なのだと思う。今後に期待している。

- 4月17日(金)「Eダンスアカデミー シーズン3」は、EXILEのUSAさんたちが、3か月で「c h o o c h o o T R A I N」が踊れるようにと子どもたちにレッスンをする内容。今回は、外国の子どもたちが多く参加していてその子たちの日本での生活を映し出して興味深かった。

- 4月18日(土)ヨーコさんの“言葉”・選 第4回「貧乏人の品性」(総合 前11:10~11:15 中部ブロック)を見た。語りの上村典子さんは、話し方のテンポがよく、すんなり内容が入ってくる。ハッと身につまされることばもあり、ほのぼのとする印象に残るおもしろい絵で、よい番組だと思う。

- 「なわとびかっとなわとび王選手権」をPRするミニ番組を4月 18日(土)と5月2日(土)に見た。昨年の優勝校、静岡県富士市原田小学校の子どもたちが縄跳びをみんなで跳んでいくというものだが、子どもたちの絆をたった5分で映像化して、一所懸命さを数分で表現していた。たった5分なのだが、心にグッと来た。

- 4月22日(水)スーパープレゼンテーション「ペンキ塗りで町は変わるの？」は、オランダ人が、銃声が響くブラジルの町でペンキを塗るという内容。そうして町を変えていこうという試みをしたアーティストの思いが語られている。異国の人たちを巻き込んでいく2人の男性のチャレンジには教わるが多かった。
- 5月11日(月)～21日(木)のまる得マガジン「めざせ！10歳若返り 簡単ヘアアレンジ」を見た。女性にとって、関心の高い話題だと思う。野沢道生さんというヘアデザイナーがとても好感の持てる人で、シャンプーやブラッシングの方法を5分で教えてくれる。しかし、5分を8日間続けて見るというのはなかなか難しいことで、録画して見ることになる。例えば、再放送は複数回をまとめたかたちにして、2回程程度の番組として放送できると、忙しい世代にも見やすいのではないか。
- 5月16日(土)ETV特集「孔子がくれた夢～中国・格差に挑む山里の記録～」は、中国の一人の青年を、4年間にもわたって取り上げたヒューマンドラマ。外国の一人の青年を、4年間にわたって日本の公共放送が取り上げているということに驚いた。主人公は「石ころにいちちゃん」と呼ばれていて、学生時代に弁護士の資格を取ったが、弁護士にならずに、貧困地域の子どもたちに教えていくという道を選んだ。いかにすばらしい市井の人を見出して描くのかは、公共放送の使命のひとつだと思う。青年は、5年間行ってきたNGOの活動をやめるという。孔子の儒教の言葉を活用し、青年の思いを表していたが、その決断というのは、国境を越えて心を打つものなのだと感じさせてくれた。
- 5月12日(火)「アフリカの夜～あるゾウ家族の物語～」(BSプレミアム 後9:02～10:27)は、4Kで撮影されたとてもきれいな映像の番組だった。輪郭がシャープに出ていて、星空がすごくきれいに映されていた。同じ星空が名古屋の上でも輝いているのかと思うと、もっときれいにしていかなければと感じた。アフリカゾウという動物の紹介ではなく、人間との関わりや問題性も示していた。単なる生き物の話ではなく、私たちがどう未来に責任ある行動をするのかを考えさせる、NHKらしいよい番組だった。

平成27年4月NHK中部地方放送番組審議会

4月のNHK中部地方放送番組審議会は、16日(木)、NHK名古屋放送局において、9人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「クローズアップ現代」報道に関する中間報告について説明があったあと、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、5月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	森棟 公夫	(学校法人椋山女学園理事長、椋山女学園大学学長)
委員	大島 宇一郎	(中日新聞社取締役管理局長)
	加藤 勇二	(愛知県農業協同組合中央会常務理事)
	小寺 功子	(三重県漁協女性部連合会会長理事)
	佐野 俊和	(コマツサービスエース(株)代表取締役社長)
	立花 貞司	(トヨタホーム(株)取締役会長)
	田中 章義	(歌人・作家)
	野田 雄一	(富山ガラス工房館長、富山ガラス造形研究所教授)
	長谷川明子	(日本ビオトップ管理士会中部支部会長)

(主な発言)

<放送番組一般について>

- ぎふスペシャル「笑う岐阜に福来たる～第12回全日本学生落語選手権～」(総合後8:00～8:43 岐阜県域)を見た。岐阜は落語の祖と言われる安楽庵策伝の生まれ故郷で、それにちなみ12年前から岐阜市とNHK岐阜放送局との共催で全日本学生落語選手権「策伝大賞」を開催している。学生とは思えない実力者ぞろいで、大いに笑い楽しませてもらった。番組は「花子とアン」に出演していた俳優・中島歩さんがナビゲーターを務めていた。中島さんは大学時代に落研に入っていたようで、過去に、この大会の予選会に出たことがあるそうだ。決勝には進めなかったということだが、当時の思い出話や大会の舞台裏が分かり興味深かった。決勝に残った学生の落語はすばらしかった。舞台の上でのななし家の顔と舞台裏の学生らしい素顔が全く違ってい

て驚いた。舞台での落語の楽しさと学生が落語にかける情熱を見ることができた。日本伝統文化を若者が受け継ぐすばらしい大会で、ぜひ、全国の人にも見てほしい内容だった。

- 3月27日(金)「北陸スペシャル まれが恋した能登～連続テレビ小説“まれ”放送直前SP」(総合 後 8:00～8:43 石川・富山県域 ※3月31日(火)前 1:26～2:09 全国放送)をはじめ、連続テレビ小説「まれ」を盛り上げる企画、直接的な番組宣伝などが比較的多いような気がする。3月14日(土)には、金沢での北陸新幹線出発式に主演の土屋太鳳さんが出発の合図をしたり、「鶴瓶の家族に乾杯」では、母親役の常盤貴子さんが輪島市を訪ねている。地元での土曜スタジオパークの公開収録など、とにかく「まれ」PRが多い。NHKとしての力の入れようを感じると同時に、過剰な番組宣伝については疑問を感じる。やり過ぎて嫌味を感じないよううまく取り組んでほしい。

- 3月27日(金)ナビゲーション「2度戦った公害患者たち～負の歴史と向き合う四日市～」は、3月21日に完成した「四日市公害と環境未来館」の設立に人生を懸けた闘いを続けてきた澤井余志郎さんと公害患者の野田之一さんの奮闘が紹介されていた。2人が歴史と教訓を後世に残すために患者の体験を伝える語り部としての活動を30年も前から続けてこられたこと、市民団体を立ち上げての長きにわたる活動が資料館の設立に至ったということを知った。四日市公害はもう終わったと思っている社会に対して、根気強く訴えてきた2人の話は胸を打つものがあった。43年前の裁判で勝訴したときに「本当の青空が戻るまで、ありがとうは言わない」と言った野田さんが、資料館ができ、「これで帳消し。心の底からありがとう」と言われたことばは、本当に心に響いた。2人が語り続けてこられたことが、若い世代に環境を見直す場として受け継がれていっている様子が番組を見て分かった。とてもよい内容だった。

- 4月10日(金)ナビゲーション「中部ジモ女の選択 好きだけど、生きにくい？」は、タイトルの略語のような造語が気になるが、“中部ジモ女の選択”という新しい取り組みで、いかに地元の人々に寄り添う目線で取材し、未来へのヒントを提示していくのか、関心を持って見た。地方から大都市圏へ女性が流出しているとのこと。高度経済成長の頃は、中学校を卒業した若者は「金の卵」といわれ、集団就職で地方から大都市へ行った。高度成長の頃と比較し、今、地方から大都市に行くということの違いはどこにあるのか、番組を見ながら考えていけるとよいと思う。時代背景を検証し、当時との違いを見据え取材をしてほしい。今回、取り上げた3人の女性は、比較

的恵まれた環境にあって成功している事例だった気がする。これから前に歩み出そうとしている女性にとっては励みになったとは思いますが、「寄り添う目線」での番組作りとしては不十分だったように思う。さまざまな立場と状況の女性があり、中部地方の中だけでもそれぞれの地域性や歴史などがある。簡単にひとくくりにはできないだろう。たとえば女性管理職の割合を増やせというような、男性社会を前提にして、だから女性がなかなか表舞台に立てないというところが見え隠れしていて気になった。自分の生きがいや存在意義、必要とされている社会が地域の中に本当にないのか。大都市に行くことによって、経済活動に結び付くキャリアを積むことが幸せだと感じる人もいるだろうが、一方で、家庭や地域の中にも生きがいがあるはず。今後、番組を通して、新たな一步を踏み出す女性が一人でも増えればよいと思う。私の周りにもさまざまな立場で頑張っている女性がいる。自らのキャリアを高めながら結婚や子育てなどと向きあう中で、それぞれの悩みを抱えている。今回の番組は、番組の構成がまずあって、それに当てはまる取材対象を取材したという感じがした。女性がよりよく生きていく環境整備や状況を刻々と捉えていく番組は必要だと思う。今の社会の問題を浮かび上がらせるような番組作りをしてほしい。

○ 4月10日(金)ナビゲーション「中部ジモ女の選択 好きだけど、生きにくい？」は、プロジェクトの第1弾ということもあり、いろいろな立場の人を登場させたことは、これからのイントロのような意味合いとしてよかったと思う。25分という尺の中では、一人一人に深く踏み込んでいく余裕はなかったと思う。今回の内容だけで完結するということは厳しいと思うが、シリーズを続けて見てみようと思える内容だった。ただ、登場した三人はそれぞれ恵まれた環境にある印象で、今後は、人選に注意しながら展開したほうがいいのではないかと思った。番組の最後で、視聴者アンケートから「女性は20代で結婚して仕事を辞めるのが当たり前」という内容のものがあつた。現代社会、会社でこのような発言をしたら、セクハラと言われるのは間違いない。女性が置かれている立場を、生の声として紹介することで、問題提起したかっただと思うが、ゲストもそういう発言は女性の可能性をつぶすと言っていたように、番組を見ている女性がそのような意見を聞いて、どう考えるのか、その反響を知りたいと思った。

○ 4月10日(金)ナビゲーション「中部ジモ女の選択 好きだけど、生きにくい？」を見た。最初に各県の女性の人口の増減数などのデータを円グラフで出していたが、男性との比較が分からなかった。もしかしたら、就業機会の実情によって、男性または女性、あるいは両方ともその県から就業機会の多い県に動いていくだけではないかという気もした。就業機会を増やすには、保育園がしっかりしていて、働きながら子

育てできる環境の整備が大切で、そうすれば、地域における「生きにくさ」も変わってくる。昔に比べて女性の生きにくさはだいぶ改善されていると思うが、今でも、地域によって差があるのが実態だろう。その差異は就業機会等の状況によるのではないかと考える。3人の女性の活躍がよく分かり、番組全体としておもしろく見ることができた。これからもこのシリーズを見ていきたい。

(NHK側)

「ナビゲーション」の「中部ジモ女の選択」は、以前「ほっとイブニング」で紹介した方などを、今回の番組化にあたり再構成したもの。25分という時間は、伝えたいことすべてを語り尽くすには短い。今回登場した人たちは比較的恵まれた環境にあるが、シリーズスタートとしての位置づけで、前に向いて進んでいる人としてこの3人の女性を取り上げた。視聴者にどうアピールしていくかが、今後の課題であると認識している。さまざまな視点からそれぞれの問題に向きあう女性に注目し伝えていきたい。いろいろな意見があるテーマで、どのような番組構成や演出で伝えたらよいか、議論し改良しながら進めていきたい。

- 3月27日(金)金とく 中部ファッション紀行「尾州&福井発 パリコレ行き！」は、番組の軸をデザイナーの森永邦彦さんに置いて構成されていたが、彼の素材を探求する熱意と産地との関わりを大切にす姿勢はよく伝わってきた半面、産地自体は単に素材の供給元としてしか映らなかったのは残念だった。一宮の生産元が、生き残ってそれで一瞬潤うことはあっても永久的に潤うことはない、生産地は今後どうなるのかと言っていたが、番組の体裁も、もの作りの技が地方に生きているという前向きなものから、ものは作れてもその価値を創造できずにいるという後ろ向きなものになってしまったように思った。多くのデザイナーやニーズに対応して、さまざまな素材や表現を新たに生み出し続けているという企業側の競争優位性や技能の高さといった視点から構成したほうが、「金とく」としての内容にふさわしかったように思う。
- 4月10日(金)金とく「心ときめく“和紙”の旅 ～美濃・越前 奥深き世界～」は、和紙がユネスコの無形文化遺産に選ばれたこともきっかけで提案されたと思う。今回は、美濃と越前を取り上げたが、この地域には、富山県・五箇山などいろいろなところで和紙が作られているのでもう少し広く取り上げてほしかった。取り上げられたのは、限られた人たちだけだが、実際には、ユネスコの無形文化遺産になるのは、その背景に、多くの人たちの活動があったらと思うので、そのあたりも丁寧に取り

上げてほしかった。未来に残すべき和紙という日本の文化を視聴者に知ってもらえるようぜひまた機会を捉えて取り上げてほしいテーマである。

(NHK側)

「金とく」の和紙の旅は、もともと福井局から越前和紙の提案が出てきたことから制作に至った。ユネスコの無形文化遺産登録というタイミングもあり、本美濃紙も入れた形で構成した。限られた時間の中で、いかに職人さんの魅力を表現していけるかという問題もあり、幅広く取り上げることは難しかったが、もう少し工夫の余地もあったかと思う。和紙については、世界に発信できるテーマであり、今後も番組の枠組みを変えてもう少し取材対象を広げてさまざまな形で取り上げていけないか検討している。

- 4月11日(土)超絶 凄(すご)ワザ!「真球頂上決戦～日本VSドイツ～」(前編)は、前にも題材になった“真球”対決だが、今回はドイツの企業が登場し、大変興味深く見た。イントロについては、ビリヤードの球だけではなく、たとえばパチンコ玉などほかの球を転がしたらどうなるかも見たかった。真球に近ければ近いほどエネルギー効率がよくなるということは何となく分かるが、どういうふうに効率がよくなるのか、もっと具体的に知りたかった。今回は前編だったが、ドイツのハイテク大量生産と、日本の手仕事の職人技との比較は、とてもおもしろく、後編も期待している。
- 連続テレビ小説「まれ」について、第1週は、まれの少女時代を子役の松本来夢さんが演じていたが、彼女が大変うまい。また、方言の使い方も大人より子役の方がずっと上手な気がした。桶作文役の田中裕子さんは、方言もうまく、よい味を出している。地元の視聴者が番組に親しみが持てるのは、ロケ地などを知っていることもあるが、番組冒頭のシーンに地元の人たちが大勢出演しているなど、地元の人々が番組に協力している様子が目に見えて理解できるからであろうか。まれが能登を離れたら、地元の人々はどのように感じるのか、楽しみでもある。「花子とアン」「マッサン」「カーネーション」と、最近では、実在の人物を取り上げた朝ドラが多かったが、主人公の一生から番組の流れが何となく推測できるようにも感じていた。そういう意味では、今回は推測ができないので、これからの脚本、ドラマの展開に期待している。
- 連続テレビ小説「まれ」を毎日楽しく見ている。主人公の「人生、地道にコツコツ」を自分に言い聞かせて過ごすようになっていく。夢を見てばかりの父親との対比で地

道に生きるよさがドラマの中に出ている。話のテンポも速くてよい。田舎の素朴なよさもよそ者を嫌う欠点もよく分かる。また、田中裕子さんをはじめ、キャスティングがとてもよいと思う。これからの展開を楽しみにしている。塩田が出てくるが、今の時代にとっても新鮮で、ぜひ残してほしい製法だと思った。

- 連続テレビ小説「まれ」がスタートした。主人公や父親のキャラクターは、通常ではありえないような設定ながら、主人公が今後どう成長していくのか楽しみに見ている。脇役の存在がさまざまな形で演出を支えているのは理解できるが、一方で豪華すぎて演出過剰だと思う場面がある。たとえば、4月16日(木)の放送では、ロールケーキコンテストの司会者は福澤朗さんでなくてもいい。また、アンガールズ田中卓志さんの使い方で、主人公の気持ちに感情移入がしづらかった。よく言えば、視聴者を意識したサービス精神なのかもしれないが、田中裕子さんや田中泯さん、中村敦夫さんなどの存在感があれば十分で、ゲスト出演者を多く登場させずともよいのではないかと感じた。人形のナレーションというアイディアはおもしろいが、放送開始から2週間以上たってもあまりなじめない。シンプルなナレーションで主人公の成長物語を見せていくほうが、幅広い層に受け入れられるのではないか。70代以上の視聴者にとっては、毎朝だとうるさく感じるという声も聞かれる。ナレーションは、ドラマにとって大事な要素だと思うので、よりふさわしい演出を考えてほしい。

(NHK側)

連続テレビ小説「まれ」について、キャスティングというのは実はとても難しい。特に、半年間放送する“朝ドラ”は、いちばん大事なのはハーモニーだと思う。主人公が若手の俳優さんである場合が多いので、脇は芝居がうまい人で固めるほうが安定感はあるが、そこに調和があることが大切なのだと考えている。「まれ」は始まったなばかりなので、出演者も探り探り演じている部分もあると思う。また、ドラマの配役では、サービス精神や遊び心が感じられることもある。ナレーションについては、以前の“朝ドラ”でも、はじめは不評だったが、途中から好評を頂くことがあった。これからはなじんできると思うので、見守っていただきたい。

- 4月12日(日)の「花燃ゆ」は、午後7時15分からの開始でよかった。前回の選挙のときは、「軍師官兵衛」の最終回が1週延びて批判があったかと思う。予定の日に見られてありがたい。

- 大河ドラマ「花燃ゆ」の視聴率が苦戦しているとの報道があるが、とてもよい作品だと思う。この時代に、吉田松陰や松下村塾の人たちを描くことは意義がある。数字に一喜一憂せず、また、周りの意見を聞き過ぎずに、当初描きたかったものを最後まで描ききってほしい。大切なテーマをしっかりと見ている視聴者もいると伝えたい。

- 3月21日(土)放送90年ドラマ「紅白が生まれた日」(総合 後21:00~22:13)を見た。「紅白歌合戦」が、昭和20年、敗戦の年からあったことを初めて知った。NHKのディレクターが国民に勇気と希望を与える目的で作ったとのこと。当時は、番組には、GHQの組織の一つだったCIE(民間情報教育局)の検閲が必要で、そこが検閲した台本どおりの放送でなければならなかった。「紅白歌合戦」の合戦というのは戦争を連想するからだめだということで、最初は「紅白音楽試合」としてスタートしたとのことだった。国民的番組と言われた「紅白歌合戦」も、今では、だんだん年配者からは遠ざかっていくようで、出てくる歌手の3分の2くらいは知らない。ドラマを見て原点を知り、ずっと維持していくことは難しいだろうが、国民に勇気と希望を与えるということを目的に作られた番組だということを、ときどきは振り返って、「紅白」の在り方を改めて考えてほしいと思った。

- 3月21日(土)放送記念日特集「放送90年 歴史を見つめ未来を開く」(総合後11:00~11:59)は、ゲストに田原総一朗さんやテリー伊藤さんを迎え、いつものNHKのイメージとは少し違う雰囲気、興味深く見た。二人ともテレビ業界をよくしていかなければならないという姿勢でコメントしていた。コンプライアンスに対する自己防衛が番組をおもしろくなくさせているという意見には、特に共感し、また、考えさせられた。例えば、番組の視聴率が低いから、クレームが多いから内容を変えようというのではなく、評価がどうあれよいものはよい。後に評価されることもある。NHKには、信念を持って番組を制作してほしい。また、ニュース番組について、NHKワールドやCNNなどをネットで見ると、福島県原発のニュースでは、地上波で見ないような映像が流れていることもある。今はネット社会なので、見たい人が選択して見ているのだが、それが逆に報道に対する不信感につながる可能性もあるのではないかという気がする。外国の友人からはNHKのニュースを高く評価する声を聞く。事情はあると思うが、マイナスの情報も含めて、確実な報道をしてほしいと思った。一方で、やはりテレビは楽しいものであってほしい。放送記念日特集は、そのあとラジオに引き継がれるのだが、出演者は肩の力が抜けたように、急に本音で話し出した。テレビで本音は話せないというゲストのコメントには、「では、テレビは一体何なのか?」と問いたくなった。その点は、少しもったいなかったと思う。

- 3月28日(土)「桜満開！星は満天！記憶に残る“宇宙絶景”」(総合 後 7:30～8:43)を見た。満開のサクラ、初公開の宇宙映像、ハワイの流れ星のライブ映像に、ゲストに関ジャニ∞の横山裕さん、今をときめく松岡茉優さん、宇宙飛行士の古川聡さん、天文学者の渡部潤一さんを迎え、加えて墨絵アーティストによるパフォーマンスを交えるなど、いずれも質の高い素材をふんだんに入れ豪華な内容になったものの、かえってまとまりのない番組になっていた。4Kカメラできれいなものをいろいろと撮りたかったのだろうが、サクラと宇宙を一緒にというのは強引すぎる気がした。八嶋智人さんの進行はおちゃらけた感じになってしまい、美しい映像にそぐわなかった。宇宙飛行士や天文学者も活躍の場がなくもったいなかった。しかしながら、各地のサクラや4Kで撮った宇宙からの日本の夜景、超高感度カメラによる満天の星空などは、一見の価値ある見事な映像で、近年テレビで見た中でも屈指の充実した映像だった。良質なコンテンツにあふれた番組であるがゆえ、番組作りに素材を大切に使い切っていないことが非常に残念でならない。

- 今年度からスタートした「ニュース シブ5時」は、編成上、どういう位置づけなのか疑問を感じた。内容のよしあしではない。午後5時台、7時台、9時台と報道番組を連ねる必要性や、民放各局が力を入れている夕方の時間帯にあって、この番組の特色、趣旨、意味合いが非常に分かりづらい。また、「シブ5時」というタイトルは、中途半端に若い層にこびようとしたように見える。NHKのよさは、「クローズアップ現代」「NHKニュース おはよう日本」など、多少やぼったさはあっても焦点が分かりやすいタイトルにあると思う。公共放送の夕方の全国放送となれば、若者ことばのような略語ではないタイトルがふさわしいと思った。

- 3月30日(月)プロフェッショナル 仕事の流儀「就職活動応援スペシャル 仕事とは何か 就活とは何か」を見た。各界の達人をずらりと並べてメッセージを送る、いかにも「プロフェッショナル」らしい作りだったように思う。冒頭に、人材採用支援のプロの森本千賀子さんが登場し模擬面接をするというのは、オーソドックスな演出だと感じた。番組を見ていくと、だんだんと、制作者は就職活動をどう捉えているのか疑問に思えてきた。「求める人物像」は就職活動の学生からよく聞かれるテーマであり、就活本や新聞・雑誌の特集でも、よく取り上げられている。しかし、メッセージが「人とは違う仕事をやりたい人」「自分の失敗をさらけ出せる人」「仕事にワクワクしながら挑める人」と抽象的だったのはいかがなものかと思った。就職活動応援とうたい、学生たちをターゲットにしていると思うが、彼らが番組を見てこのメッセージをどう受け止めるのか。“大学新入生応援スペシャル”なら分かるが、次に続く「学生時代にやっておいたほうがいいこと」というテーマと比べても、どこをターゲ

ット層として狙った番組なのかがぼやけていた気がする。次に「苦しい日々を乗り切る心構え」として登場したのが中日ドラゴンズの山本昌投手やすし職人の小野二郎さん。下積み時代の話はおもしろく、“新入社員応援スペシャル”だったら聞き応えのある内容だったが、どうやったら内定が取れるだろうと悩んでいる就活生たちにとって、いわゆる就職活動をしていない人たちの体験談が果たして響くのだろうかと疑問に思った。「就職活動応援スペシャル」というタイトルが就活のハウツーを伝えるような印象を与えただけに、もう少し、テーマを整理してもよかったのではないかと感じた。番組全体としては、非常にメッセージ性の高いもので、就活生だけでなく学生や新入社員に幅広く見て感じ取ってほしいと思える内容だった。

- 3月31日(火)NEXTスペシャル「名誉殺人の闇の中で」を見た。親が決めた相手との結婚を拒み一家の名誉を汚したとして、父親が娘を殺害するという恐ろしいことが世界で現実に行っているという。映像で見ることで、より強い衝撃を受けた。父親に銃で撃たれた傷跡が顔に残っている女性、女には権利など何もないと言ってカメラに向かって叫んでいる男性など驚くべき光景が続き、食い入るように見た。女性の権利と教育の大切さを訴えるマララ・ユスフザイさんのノーベル平和賞受賞をきっかけに、この問題がクローズアップされるようになったが、改めて問題の大きさと根深さを感じた。今後もこのような腰を据えた取材を続け、未来に向かって解決すべき問題を世界に発信して行ってほしい。
- 3月31日(火)NEXTスペシャル「名誉殺人の闇の中で」を視聴した。「閉塞感とか行き詰まりとか言われる。でもそんな中に未来を開く動きや意思、希望や熱意が実はある。それを私たちはNEXTと呼ぶことにした」に期待感を持って見たが、今回のタイトルからは全く内容を計り知ることができず、終了間際まで、このテーマを番組で取り上げた意図がよく分からなかった。最後まで見てやっと、マララ・ユスフザイさんによるNEXTが芽吹き出したと分かり、納得がいった。冒頭でNEXTに込められた意図やテーマをきちんと説明したほうが、より視聴意欲が湧いたように思う。特に、今回は、死の宣告や名誉殺人といったセンセーショナルなことばが使われているうえに、暴力を受けた女性のショッキングな映像が数々映し出されていたため、希望となるマララさんに到るまでに視聴を放棄する人もいたと思う。ドラマチックに見せるのもよいかもしれないが、“NEXT”に意義を置くのであれば、番組冒頭やタイトルに、今回の“NEXT”はどのような未来を開くのかを明示したほうがよいと思った。
- 「所さん！大変ですよ」を見た。4月2日(木)「なぜ自宅から？相次ぐ謎の“拳銃”

押収事件」は、昔の兵隊さんの拳銃が各家庭に残っていて、それがたくさん出てくるという話題。1年間に170丁もの拳銃が見つかったそうで、非常に興味の湧く話だった。4月9日(木)「売れすぎてビックリ!? 謎の中古マンション」は、湯沢温泉のリゾート地で中古のマンションが5年間で1,000戸も売れているという話題。なかなかおもしろい話だったが、もともとの地元の住民の方がどう思っているか、行政の本音はどうかのかが伝わってこなかった。行政は住民が増えてうれしいと言うが、果たして本当だろうか。952人も増えているそうで、皆が投票権を持っていたら小さな町では選挙で何でもできるようになってしまうだろう。実情はどうか、不思議に思った。バラエティー豊かなコメンテーターがいて、話の内容が広がって、おもしろい内容だったと思う。

- 4月3日(金)ファミリーヒストリー「萩本欽一～父のカメラと、母が出さなかった手紙～」を見た。父親がカメラの製造販売をしていたが事業に失敗したこと、その後、一家を母親が支えてきたこと、萩本さんが東八郎の弟子になりコント55号でデビューし成功したものの母はコメディアンを認めていなかったことなどが紹介されていた。今回の取材で、母親が、萩本さんのテレビでの活躍に対して表面的には批判していたものの、実は、息子を応援していて、心配もしていたと分かった。萩本さんに宛てて何通もの手紙を書いていたが、出すことはなかったその手紙が出てきた。そこには、テレビを見ていることや活躍を喜んでいること、体に気をつけてほしいといったことが書かれていて、大変感動した。子どもを食べさせるために自分は食べないで我慢していたとか、子どもが出世してもその世話にならないで、陰ながら子どもの体を心配していたといった話から、昔の母親像というものはこうであったと改めて認識した。本人も今回初めて母の手紙の存在を知ったようだが、そこまで交流が少なかったのはなぜか疑問に思った。また、萩本家が“一家解散”したとはどういうことか、意味がよく分からなかった。明らかにしないほうがよいこともあると思う。内容的に合点がいかなかった点もあったが、全体を通してよい番組だったと思う。

- 4月4日(土)助けて!きわめびと「やる気スイッチはどこ?」を見た。初回のゲストは、話題の本『学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶應大学に現役合格した話』の著者、塾講師の坪田信貴さん。やる気のスイッチはポイントがあって、人はやる気があるから出来るのではない、出来るようになったからやる気が出るのだという。大変分かりやすく、納得できる話だった。番組の中で紹介された、大学受験にやる気を出さない娘に、母親が練習問題を自分で作って娘にやらせたエピソードには、母親が娘のやる気スイッチをオフにしているのではないかという指摘がされていた。どんなことでもいいので出来ることをさせて褒め、それを繰り返すこ

とが大事で、出来そうもないことをいくら押し付けても本人はやる気にならないとのことだ。親として何ができるのかを考えさせられるとともに、職場でも当てはまることがあるのではないかと感じる内容だった。

- 4月4日(土)助けて！きわめびと「やる気スイッチはどこ？」は、今評判の塾講師の指摘や指導内容にはなるほどと思えるものがあった。しかし、「よみがえりマイスター」のように壊れた物を直すという万人が理解でき共感を持てる依頼ではないだけに、内容によっては視聴意欲が大きく左右される気がする。次回は「夜泣き解決」とのことだが、全く興味が無くなってしまう視聴者もいるだろう。これまでは、きわめびとの極めた技能を紹介するとともに、本人の人生哲学のようなものに触れるヒューマンドキュメンタリーの色合いが強かったように思うが、今回は、課題解決を専門家に頼むという「ためしてガッテン」とあまり変わらない印象を持った。
- 4月5日(日)サキどり↑「さよなら、失敗するワタシ～失敗学最新事情～」は、そのタイトルからぜひ見たいと思った。さすがNHKと思える分かりやすい内容だった。失敗を繰り返さないポイントを3つ紹介していた。原因をきちんと把握する、ほったらかしにしない、客観的に振り返るといふ、言ってみれば当たり前のことだが、アメリカ陸軍が開発した失敗検証メソッドは、とても参考になった。失敗を踏み台にして成功に導く一つの事例として大失敗賞ということを実践している会社を紹介していたが、表彰する部分がクローズアップされ、その後の人一倍チャレンジする部分が隠れてしまっていた。表彰することがすばらしいことだと勘違いするような構成になっていたもので、そこは少し疑問を感じた。
- 4月5日(日)「これでわかった！世界のいま」を見た。学校を模したセット、坂下千里子さんを進行役にした軽いノリのニュース番組で、今回はゲストが八嶋智人さんということもあって一層の軽い感じがしたが、小道具や図表を使ったニュースの解説は大変分かりやすく、簡潔にうまくまとめられていた。一方で、セットやグラフィックにカジュアルテイストを織り込んでいるため、紛争や事故など痛々しいニュースを伝えるには大きな違和感を覚えた。今回取り上げたケニア大学襲撃、イラク紛争での爆弾処理、ドイツ旅客機墜落事故追悼集会もカジュアルテイストに合う内容ではなかった。内容はよかったが、全体のテイストを見直してはどうかと思う。
- 4月5日(日)「これでわかった！世界のいま」を見た。昨年度までこの枠で放送していた「NHK海外ネットワーク」は、毎週見ようというものではなかったが、今回の番組はとてもおもしろい。以前、池上彰さんが出演していた「週刊こどもニュース」

を彷彿（ほうふつ）とさせるもので、A I I Bについて、中国対アメリカの構図、イギリス参加表明のインパクト、日本の立ち位置の難しさなどが分かりやすく解説されていた。改善してほしいと思った点もある。まず、番組中の「Mr. シップ」というキャラクターは、疑問な点は解説をするというのだが、分からないことは曖昧なまま消えてしまう。「彼は自由人だから」というが、中途半端な印象が拭えない。また、時間割という設定の中でそれぞれのニュースを取り上げる構成だが、2時限目と3時限目の間に「世界ニュース」が挟まれていてその位置づけが分かりにくい。ニュースならニュースとして最初に持ってきて、そのあとに解説の部分を設定したほうが、伝わりやすいのではないかと思った。解説者として出てくる奥谷隆太デスクは、板書しながら解説を進めるのだが、あとから見ると板書されたものがばらばらで何を説明していたのか分かりにくかった。工夫の余地があるのではないか。12日(日)は、アメリカのキューバへの歴史的訪問を取り上げていた。今の世界の政治経済がよく分かる内容だった。

- 日曜夕方放送の「めざせ！2020年のオリンピック」は、再放送だがとてもよい時間帯に編成されていると思う。4月12日(日)「体操の新星を金メダリスト塚原が本気指導」は、司会のゆずの北川悠仁さんとテニスプレーヤーの杉山愛さんが、さすがプロというべき的確な視点で話をしていて、今後ますます楽しみな番組である。
- 4月12日(日)サキどり↑「“見えないニーズ”を丸見えに！？」では、企業が消費者のニーズをつかむために奮闘する様子が紹介されていた。あるコンビニでは、ポイントカードから、いつ何を買ったかというデータが細かく分析され、商品開発につながっているという。自分の記録が丸見えになっているのではないかと不安を覚えた。ゲストの森三中の村上知子さんは自分のポイントカードの記録が分析されていると思うと恥ずかしいと言っていた。個人情報切り離していると言明はあったが、先にテロップで流すなどの配慮があればもっと安心して見られたのではないかと思う。
- 趣味D○楽「レンズで見つける！わたしの京都 女子のカメラ&ライフ・レッスン」を、2月3日(火)から3月24日(火)まで全編を見た。カメラ好きとしてどんな番組なのか興味深かった。シャッターを押せば簡単に写せる今どきのカメラでは、写真技術の向上は難しい。押せば写るが、なかなかプロが撮ったようにきれいには撮れない。番組ではシーンに合わせたデジタルカメラの設定方法やレンズワーク、被写体への光の当て方、構図の基本などを分かりやすく説明していて、本を読むよりテレビで見たほうが理解が進むのだと実感した。ためになる内容で楽しく見ることができた。しかし、内容はよかったが、番組導入部分が長すぎる。1回目はしかたがないが、2

回目からはもう少し簡略化して、その分、授業に当てると、より充実した講座になったのではないかと思った。

- 3月21日(土)アニメ「ベイブーステップ」は、テニスのアニメで、内容がしっかりしていてとてもよい。錦織圭選手の活躍によるブームもあるが、テニスをやりたいという子どもが増えるのではないかと思う。かつてNHKで放送していた「未来少年コナン」は、今の私の原点と言えるほど大きな影響があった。テレビは小さい子どもにとって、夢や目標のきっかけになる。ぜひ、多くの子どもたちに見てほしい。
- 3月21日(土)ETV特集「激突！東西の天才 将棋名人 羽生善治／伝説のチャンピオン ガルリ・カスパロフ」を見た。天才肌の2人の発言は奥が深く、大変おもしろい対談だった。単に棋士としてだけではない、羽生善治という人の感性の豊かさやすばらしさを、以前より感じていたので、たとえば「プロファイラー」のような番組で、羽生さん自身がさまざまな勝負師を語っていくという番組なども見てみたいと思った。羽生善治という人を将棋の名人としてだけしか見ていないのはもったいないと改めて思わせてくれる内容だった。広報誌などでもほとんど扱いがなかったが、もっと、NHKとして推してもよい番組だったのではないかと思った。
- 3月22日(日)モーガン・フリーマン 時空を超えて「第1回 宇宙人との遭遇 そのとき人類は」は海外番組で、宇宙との交信の方法など日本の番組ではなかなか見られない視点で作られていておもしろかった。
- 3月23日(月)スーパープレゼンテーション「わが娘マララへ 父と娘の物語」(再)を見た。ノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイさんの父親が娘への思いを話した。女性差別があると同時に、男の子は面目を保つために一生懸命働かなければならないという側面を知ることができた。子育ての観点からも参考になる、すばらしい内容だった。
- 3月28日(土)第44回日本農業賞「新しい農業を切りひらく！」(Eテレ 後4:00~4:45)を見た。いずれの農家の取り組みも受賞にふさわしい内容で大きな感銘を受けた。農協改革が叫ばれるものの国民の関心は高まらない中で、食べるためにとかもうけるためではなく、好きなことをやりながら出来る、食べた人の喜ぶ顔が見たい、人から頼まれることに生きがいを感じるなど、産業としての農業ではなく、働きがいのある仕事としての農業に焦点が当てられていたことに共感を覚えた。農業振

興のみならず、自分の働き方や生きがい、やりがいを考えている人々向けにも大変よい番組であるように思えたので、タイトルを変えて多くの人の目に触れる機会を設けてはどうかと思った。

- 4月10日(金)ニューヨーク白熱教室 最先端物理学が語る驚異の未来「第2回“万物の理論”の驚くべき予言」は、タイトルは難しいが楽しめる番組だった。未来とどう交信するのかなど、ミチオ・カクさんの話はとても興味を引く。宇宙人から見た私たちは、私たちから見るあり塚のアリのような位置づけとのこと。アリはアリなりに一生懸命生きているので、おもしろい社会を構築したいなど改めて思った。宇宙との関係性についての番組は、あまり見ることがないが、今回のような取り上げ方はとてもおもしろいと感じた。
- 4月14日(火)ハートネットTV「ずっと“えがお”でいたい～三重県四日市市 高花平団地～」を見た。高花平団地は、住民の3人に1人が70歳以上という高齢者の団地になっているそうだ。お年寄りたちを見守り続けてきた堀尾栄さんをはじめとする人たちが、「えがお」というレストランを開設したことが紹介されていた。「えがお」に来て地域とつながってほしいという願いを込めて、一人一人に温かく声をかけている姿に、堀尾さんの人柄を見ることができた。設立から3年、次々と輪が広がって、その住民の中で「ちょっと手を貸して運動」というのが生まれたり、民生委員が地域のことは地域でしなければならないと言っていたのが印象に残った。ただ、そこに至るまでの苦労やほかの地域の方たちとの関わりなどは見えてこなかったもので、そのところも知りたいと思った。高齢化社会、地域がどう乗り越えていけばよいのかというヒントが見えるよい番組だったと思う。
- 4月14日(火)「おとなの基礎英語」を見た。その後、民放で「大人のKISS英語」という番組を放送していた。内容は全く違うが、タイトルは明らかにNHKの番組を意識的にパロディー化したものだ。“まねられる”ということは、それだけ元の番組がしっかりしているということ。「おとなの基礎英語」があるからこそ「大人のKISS英語」が受けるわけで、逆に、民放を見た人が「おとなの基礎英語」などNHKの語学番組に興味を持つこともあるだろうと思った。
- 火野正平さんが自転車で各地をめぐる「にっぽん縦断 ころろ旅」は、いつも楽しみにしている番組だが、せっかくこの地方に来ても見逃してしまいがちなので、ぜひ、次に来るときには、事前のPRを積極的にしてほしい。

- 火野正平さんが自転車で各地を回る「にっぽん縦断 ころろ旅」が三重県に来るといふことで、とても楽しみしていた。放送を見ると、火野さんのハアハアという息遣いが聞こえてくるばかりで、結局最後がずっと見られず、おかしいと思い確認をしたら、夜に後編があるということにようやく気づいた。同じように最後がいつも見られないと思っている視聴者は他にもいるのではないか。火野正平さんの後ろ姿だけを見たような印象だった。
- 4月1日(水)アナザーストーリーズ 運命の分岐点「ダイアナ妃事故死“最後の恋”の駆け引き」を見た。ダイアナ妃は、1997年にパリで恋人のドディ・アルファイド氏とともにパパラッチに追いかけて、トンネルの中で事故死した。ドディ・アルファイド氏はダイアナ妃の恋人だと認識していたが、この番組によると、実は本当の恋人はほかにいたようだ。ダイアナ妃とドディ・アルファイド氏のスクープ写真がサンデーミラー紙に掲載されて、それからパパラッチが一獲千金を夢見て追いかけて回したという。スクープ写真を撮ったジェイソン・フレーザーさんやダイアナ妃の執事だったバレルさんらから事の真相を聞いた結果、フレーザーさんに写真を撮るように仕向けたのはダイアナさん自身だといふことだ。本当の恋人からふられそうになり、彼の注目を引くために意図的に撮らせたといふのが真相らしい。多くの関係者にインタビューしてよく調べたと思ふが、ある週刊誌に、2002年にすでに英国のBBCでフレーザーさんが出て同じ趣旨のことを語っていたといふことが書いてあった。今回は、改めてフレーザーさんだけではなくいろいろな方の話を聞いたこと自体に意義があったと思ふ。ただ、なぜこの時期に新たに番組にしたのかは、疑問に思った。語り手の真木よう子さんは、抑揚のない感じだが、それがかえって説得力があった。
- 4月1日(水)アナザーストーリーズ 運命の分岐点「ダイアナ妃事故死“最後の恋”の駆け引き」を見た。ゴシップ関係の話題はあまり知らなかったので、初めて聞く話だった。ダイアナ妃自身がフレーザーさんに情報を流して、スクープ写真を撮らせていたといふことに驚いた。
- 4月8日(水)アナザーストーリーズ「ベルリンの壁崩壊 激動を生き抜いた者たち」は、1989年11月9日に崩壊したベルリンの壁を取り上げたものだが、その背景がきちんと番組構成に反映されていなかったように思ふ。番組では、政府の報道官が旅券法に関して重ねて間違った発表をし、その報道からベルリンの壁崩壊に至ったといふことを言っていた。しかし、実は、そこに至るまでに、ロシアのペレストロイカやハンガリーとオーストリアの国境線の問題などさまざまな要素があつて、ベルリンの壁はいつ崩れるかといふ状況だった。その部分を伝えていないので、あたかもベル

リンの壁が政府報道官の報道から突然、崩壊したような印象を受けた視聴者もいるのではないか。関係者の話は大変おもしろかった。秘密警察の女性が今になってインタビューに応じていろいろと話していたが、25年もたっているのに、昔はよかった、昔は正しかったという。今では考えられないようなことも、国家として当然だったというが、なぜ、そんなに自由に発言できるのかと疑問に思った。昔の東ドイツでは発言できないようなことを、今、彼女は、自由に発言している。それが許されるのは国が変わったからだろうと思うが、その点を深く追求してほしかった。

- 「仮説コレクターZ」について、4月2日(木)「父親の香り／右手と記憶」4月9日(木)「食べ物の写真を大量に見ると食欲が抑えられる／薬指が長い男性はモテる」を見た。2日(木)は、女性は父親と同じ香りの男性に引かれるという仮説は明らかにならず、手を握れば記憶力がアップするという仮説も手を握らないほうが記憶力がアップするという結果で、疑問が残る結論だった。9日(木)の食べ物の写真を大量に見ると食欲が抑えられるという仮説しかり、薬指の長い男性がたまたまかっこよくてセンスがよかったからもてたという結果も、これまた納得いかずであった。どの仮説も大がかりでユニークな実験を行っていたが、ここまでする必要があるのかと思いつながら見ていた。司会の劇団ひとりさんと中村アンさんの進行はとてもうまいと思った。特に、劇団ひとりがゲストの魅力を十分に引き出していて、和やかな雰囲気、共感できる話も多くとてもおもしろく見ることができた。1回目の終わりに「一刻も早く成功させたい」と言ったが、いつ成功するのか、これからも楽しみにしている。

- 「ニッポンの里山 ふるさとの絶景に出会う旅」は見ていて落ち着く番組である。4月7日(火)「チョウが舞う恵みの草むら 岐阜県 揖斐川町」、4月14日(火)「清流魚と暮らすまちの湧き水 秋田県 美郷町」を見た。10分の番組でのどかな気持ちになった。これぞカメラマンの力であろう。長く時間をかけて何度も取材し撮影を試み、その魅力を自身が感じて映像化されているのが分かる。おそらく、20年、30年後にはこの風景は無くなるのだろうと少し寂しい思いをしながらも、里山に生きる自然、日本の景色の美しさを心地よく見させてもらった。今後も継続して見ていきたい。

NHK名古屋放送局
番組審議会事務局